



文化財堂  
シンボルマーク

# 芝原遺跡



土器「出雲家」

1989年3月

松江市教育委員会

## 凡 例

1. 本書は、松江市教育委員会が昭和59年度から昭和63年度までの5カ年度にわたって実施した松江市福原町所在の「芝原遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、団体宮福田地区ほ場整備事業の実施中半に本遺跡が発見されたことに端を発し、文化庁所管の補助事業と松江市土地改良区からの受託事業の二本立てで総事業費33,000千円により実施した。
3. 調査の実施にあたっては福原町のほ場整備委員長 福田敬、工事委員長 松田正紀、換地委員長 福田嘉秀の三氏、小谷修一氏他多数の地元の方々の大なる協力を得た。ここに記して感謝の意を表する次第である。
4. 調査の組織は次のとおりである。

|         |   |   |
|---------|---|---|
| 委 託 者   | 松江市土地改良区理事長   | 佐川 吾慶   |
| 受 託 者   | 松江市 代表者   | 松江市長 中村芳二郎  |
| 主 体 者   | 松江市教育委員会教育長   | 内田 榮  |
| 事 務 局   | 社会教育課長  | 野津 久夫   |
|         | 同課文化係長  | 岡崎雄二郎   |
| 調査担当者   | 59, 60 年度   | 岡崎雄二郎, 中尾秀信 (文化係主事)   |
|         | 61～63 年度  | 吾郷 雄二 (文化係主事)   |
| 調 査 員   | 59年度  | 錦織慶樹 (囑託員), 稲田 奨 (補助員)<br>昌子寛光 (女子高教諭)                                  |
|         | 60年度  | 吾郷雄二, 今岡 三 (囑託員), 萩 雅人 (囑託員),<br>錦織慶樹, 佐々木稔 (囑託員), 瀬古諒子 (囑託員),<br>昌子寛光  |
|         | 61年度  | 吾郷雄二, 昌子寛光, 錦織慶樹, 稲田 奨 (補助員)  |
|         | 62年度  | 青木 博 (囑託員)  |
|         | 63年度  | 青木 博, 錦織慶樹, 稲田 奨, 佐々木稔, 瀬古諒子,<br>飯塚康行 (主事), 寺本 康 (主事), 岡崎雄二郎 (文<br>化係長) |
| 調 査 指 導 | 佐久間信 (文化庁記念物課), 山中敏史 (奈良国立文化財研究所),<br>宮本長二郎 (奈良国立文化財研究所), 町田 章 (奈良国立文化財<br>研究所), 山本 清 (島根大学名誉教授), 渡辺貞幸 (島根大学助 |   |

教授)、池田満雄(鳥根県立松江商業高校教諭)、勝部 昭(県文化課長補佐)、蓮岡法暉(県文化課長補佐)、永塚太郎(県文化課埋蔵1係長)、宮沢明久(県文化課埋蔵1係長)、松本若雄(県文化主事)、西尾克己(県文化課主事)、烏谷芳雄(県文化課主事)、三宅博士(鳥根県教育文化財団学芸主事)、内田律雄(県文化課主事)、石井 悠(県文化課埋蔵2係長)、柳浦俊一(鳥根県教育文化財団文化財主事)

5. 本書の遺構関係図版に使用した方位はTN(真北)をそれ以外の図版ではN(磁北)を用いた。又SBは掘立柱建物、SIは堅穴住居、SEは井戸、SKは土壌、SDは溝状遺構、SXは不明遺構を表わしている。
6. 本書の編集は吾郷、錦織、青木、寺本、岡崎が協議して行った。
7. 出雲国風土記からの考察については鳥根大学名誉教授 山本清氏 から原稿を賜った。記して感謝の意を表する次第である。
8. 製塩土器についての考察は県教育委員会文化課主事の内田律雄氏に依頼した。
9. 本書で使用した図面の浄書は、青木、岡崎、寺本、飯塚、稲田、錦織が行い、遺物写真は吾郷、飯塚が撮影した。
10. 発掘調査事業費等については下記のとおりである。

| 年度  | 国庫補助事業費  | 農林受託事業費  | 合 計      | 調 査 面 積 |
|-----|----------|----------|----------|---------|
| 59  | 2,000千円  | 0千円      | 2,000千円  | 376㎡    |
| 60  | 6,500千円  | 4,500千円  | 11,000千円 | 11,300㎡ |
| 61  | 1,130千円  | 3,370千円  | 4,500千円  | 2,200㎡  |
| 62  | 2,000千円  | 6,000千円  | 8,000千円  | 3,700㎡  |
| 63  | 1,875千円  | 5,625千円  | 7,500千円  | 3,200㎡  |
| 合 計 | 13,505千円 | 19,495千円 | 33,000千円 | 20,776㎡ |

#### 文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会(現文化庁)が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である「鳥居」すなわち「榑」と「榑」の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくとういうものです。



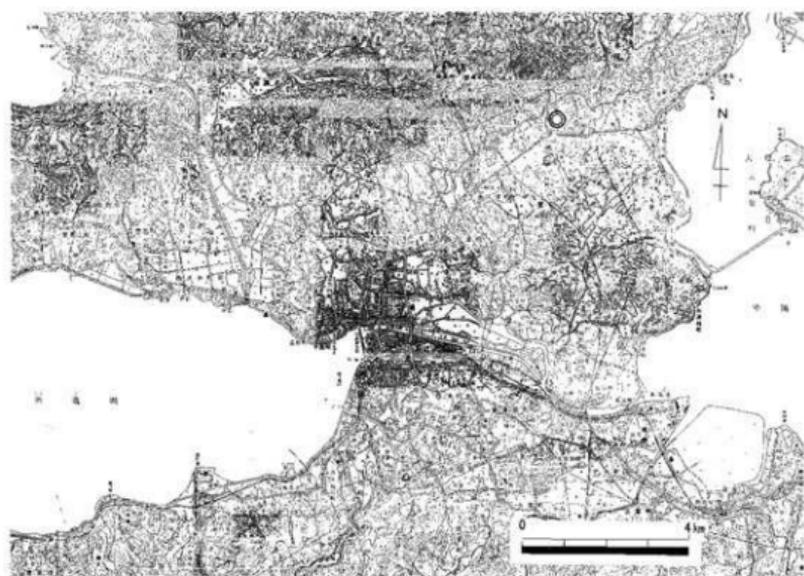
文化財愛護  
シンボルマーク

# 目 次

|      |                    |         |     |
|------|--------------------|---------|-----|
| I    | 調査に至るいきさつ          | (吾郷 雄二) | 1   |
| II   | 周辺の歴史的環境           | (寺本 康)  | 2   |
| III  | 調査の方法と経過           | (吾郷 雄二) | 5   |
| IV   | 調査の概要              |         | 6   |
|      | 1. 昭和60年度(1985)の調査 | (岡崎雄二郎) | 6   |
|      | 2. 昭和61年度(1986)の調査 | (吾郷 雄二) | 24  |
|      | 3. 昭和62年度(1987)の調査 | (青木 博)  | 37  |
|      | 4. 昭和63年度(1988)の調査 | (錦織 慶樹) | 47  |
| V    | 遺構の検討              | (岡崎雄二郎) | 99  |
| VI   | 遺物の検討              |         | 105 |
|      | 1. 須恵器の形態分類について    | (青木 博)  | 105 |
|      | 2. 墨書土器について        | ( # )   | 108 |
|      | 3. 丹塗土師器について       | (岡崎雄二郎) | 115 |
|      | 4. 製塩土器について        | (内田 律雄) | 117 |
|      | 5. 木器について          | (錦織 慶樹) | 120 |
|      | 6. 遺物の分布状況について     | (青木 博)  | 126 |
| VII  | 鳥根郡家所在地の問題         | (山本 清)  | 128 |
| VIII | 総 括                | (岡崎雄二郎) | 133 |
| IX   | 遺物観察表              | (青木 博)  | 136 |
|      | 写真図版               |         | 153 |



第1圖 位置圖



第2圖 芝原遺跡位置圖

## I 調査に至るいきさつ

本遺跡の所在する水田地帯については、昭和58年度から同61年度までの予定で団体営ほ場整備事業が実施中であった。周知の遺跡については、谷間周辺の丘陵において小規模の古墳がわずかに点在するのみで水田地では確認されていなかった。ところが、奈良時代に勧造された「出雲国風土記」（以下「風土記」という。）によれば持田から本庄地区に至るいずれかの地に「島根郡家」が所在していたことが知られ、その所在地をめぐるこれまでの研究史の中で、2人の研究者がこの福原町の谷間水田の一面に郡家跡を推定されている。

このことに基づき、松江市教育委員会では、ほ場整備事業との調整を図る上から、事業区域内において遺跡の有無を確認するための分布調査（試掘調査）を昭和59年度から実施してきた。一方、遺跡周辺のは場整備工事は昭和59年11月から開始された。ところが工事開始直後の12月2日に水田の耕作土のみ除去した段階で耕作土下の地山と思われる黄褐色粘性土上から円形の掘立柱と思われるピットが直線上に計6穴発見され、何らかの建物跡のあることが明らかとなった。そこで、さらに周辺一帯を精査したところ、周辺部に20個の柱穴のあることが判明したので本遺跡を土地の字名から「芝原遺跡」と名付けた。

このことについて、農林事務所、土地改良区、県文化課と協議を重ねた結果、59年度の分布調査は、芝原遺跡を除いた南部と東部の低地水田地帯について試掘して、可能な限りほ場整備事業が変更して実施出来るようにすることで合意し、芝原遺跡の所在する西部高台の水田地帯については60年度において分布調査を実施し、遺跡の範囲と性格を究明することになった。

60年度の分布調査は、総事業費2,000千円より昭和60年4月から同年6月にかけて芝原遺跡以南の台地上を調査した。その結果、最南端の水田地を除く台地全域から柱穴等の遺構が確認されたので、再び農林事務所等との協議会を開催し、芝原遺跡以南のすでに耕作土が除去された台地一帯の水田については早期に結論を出す上から60年度において農林側と文化財側双方の負担において発掘調査を実施することになった。又、芝原遺跡以北の事業予定地についても広範囲に分布調査を実施し遺構の有無を確認することになった。

その結果から、北側については多数の柱穴が確認された区域について発掘調査を実施することとなり、ほ場整備事業との調整の結果、61年度から63年度にかけて切土部分のみ発掘調査を実施することとなった。

## II 周辺の歴史的環境

本遺跡の周辺には、弥生時代を初めとして古墳時代、奈良・平安時代、近世に至るまで数多くの遺跡が分布している。

坂本中遺跡(11)<sup>①</sup>は、弥生時代後期から古墳時代までの大規模な集落遺跡である。

古墳時代前期には的場遺跡(70)や道仙古墳群(17)<sup>②</sup>などが出現する。的場遺跡は出雲地方では類例の少ない甕型土器を出土している。道仙古墳群は1辺10m、高さ1mほどの方墳が4基あり、木棺直葬の宇体部や古式土師器の壺等が検出されている。

中期の遺跡としては、方墳2基、円墳2基からなる細曾古墳群(22)<sup>③</sup>がある。そのうち昭和62年に調査された1号墳では、木棺から勾玉、管玉、刀子、土師器等が発見された。

後期になると古墳の築造が盛んになり、本遺跡周辺でも、横穴式石室を伴う古墳や横穴が普及していった。長さ50mの前方後方墳の薄井原古墳(49)<sup>④</sup>がその代表的なものであり、後方部には片袖型横穴式石室2基が造られ、一つの石室には家形石棺、他の石室には特色ある箱形石棺が置かれていた。その他に、石棺式石室を持つ西宗寺古墳(38)<sup>④</sup>、大田古墳群(56)などがある。

奈良時代に入ると出雲地方にも律令制が普及し始めた。本庄川流域条里制遺跡がその例である。この時代の集落跡である鏡谷遺跡(16)<sup>①</sup>では、炊飯用のカマド片や祭祀に使用された土馬が出土している。さらに、この時期に編纂された「山雲国風土記」に記載の布自积美高山<sup>①</sup>に比定されている上東川津町の高山山頂からは、8世紀後半の須恵器片が採集されており、條に関係したものと考えられる。

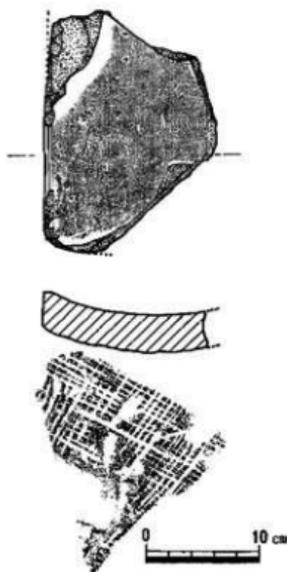
平安時代に新たに建立されたと思われる寺院として坊床庵寺(97)<sup>③</sup>、往生院庵寺(98)がある。往生院庵寺周辺からは土師質土器と布目瓦が採集されている。(第3図)

註 ① 鳥根県教育委員会「西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ」1987

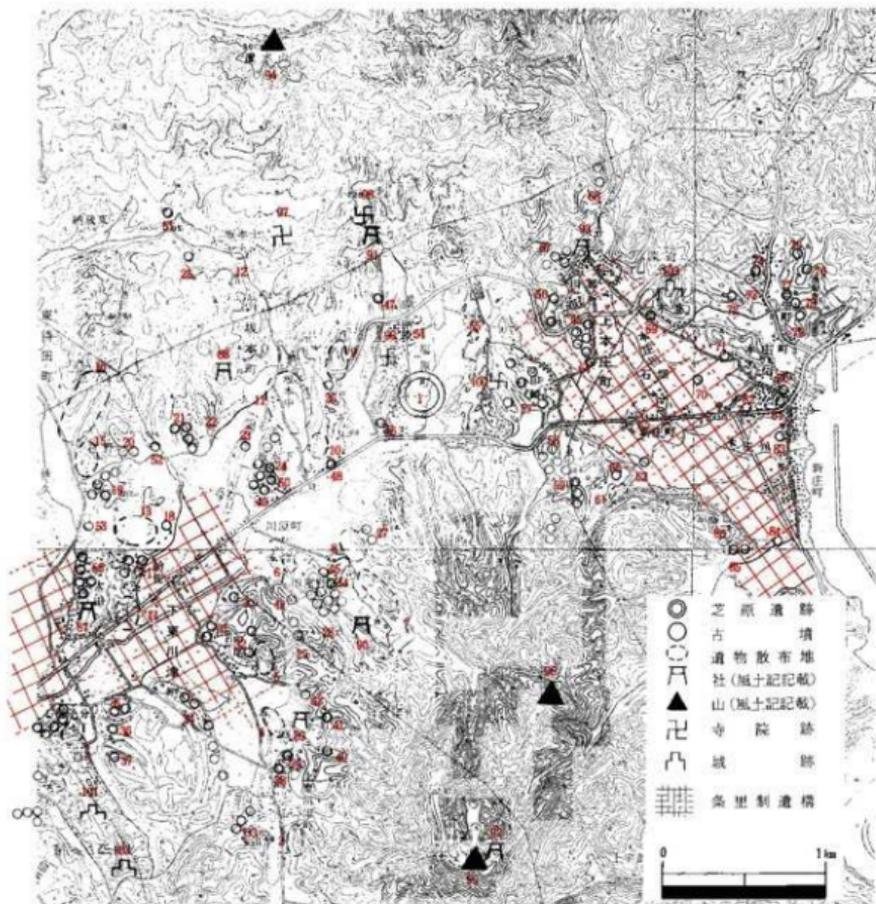
② 鳥根県教育委員会「鳥根県埋蔵文化財調査報告書X」1983

③ 松江市教育委員会「細曾1号墳」1987

④ 山本清「川津郷土誌」第二編歴史 第三章古代



第3図 往生院庵寺出土瓦



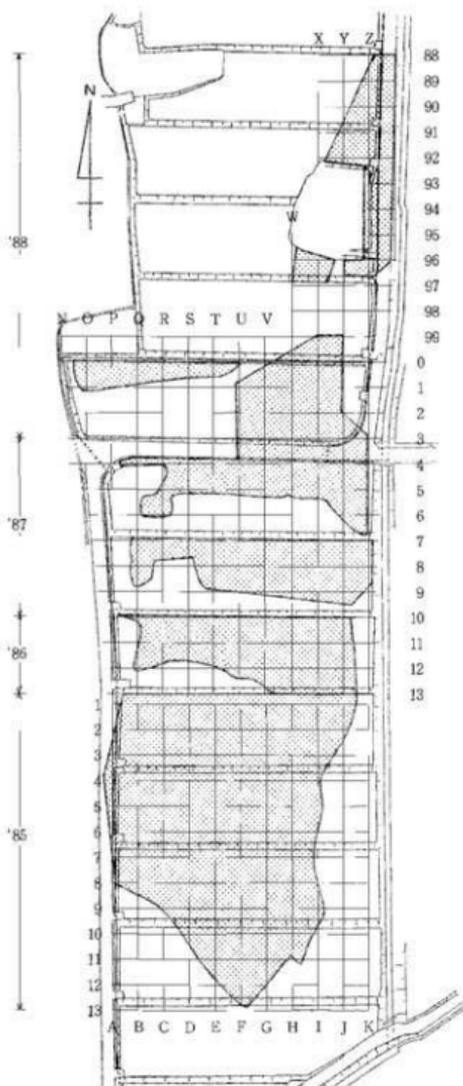
第4図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名    | 所在    | 遺構・遺物                           | 番号 | 遺跡名   | 所在    | 遺構・遺物    |
|----|--------|-------|---------------------------------|----|-------|-------|----------|
| 1  | 芝原遺跡   | 福原町   | 鳥居跡家指定地、須恵器、靱立付建物跡、溝状遺構、弥生土器、石斧 | 7  | (散布地) | 川原町   | 須恵器、土師器  |
| 2  | 貝谷日遺跡  | 上東川津町 |                                 | 8  | ( )   |       |          |
| 3  | 富山麓A遺跡 |       | 須恵器                             | 9  | ( )   | 福原町   |          |
| 4  | 富山麓B遺跡 |       |                                 | 10 | ( )   | 坂本町   | 靱立付建物跡   |
| 5  | 日輪造遺跡  | 下東川津町 |                                 | 11 | 坂本中遺跡 |       | 土師器、弥生土器 |
| 6  | (散布地)  | 川原町   | 土師器                             | 12 | 崩所遺跡  | 坂本町別所 | 土師器      |
|    |        |       |                                 | 13 | 駒佐池遺跡 | 持田町   | 須恵器      |

| 番号 | 遺跡名        | 所在     | 遺構・遺物            | 番号  | 遺跡名      | 所在      | 遺構・遺物                        |
|----|------------|--------|------------------|-----|----------|---------|------------------------------|
| 14 | 納佐遺跡       | 神田町    | 須臾器              | 59  | 美船古墳群    | 上本庄町美船  | 円墳2, 方墳5                     |
| 15 | (散布地)      | 東持田町   |                  | 60  | 松音寺古墳    | 新庄町松音寺  | 方墳                           |
| 16 | 鎌谷遺跡       | "      | 土師器, 土馬          | 61  | 松音寺古墳群   | "       | 古墳群                          |
| 17 | 道仙古墳群      | "      | 方墳4, 土師器         | 62  | 前川遺跡     | "       | 須臾器                          |
| 18 | 原ノ空古墳      | "      | 円墳(径25m)         | 63  | 原ノ後遺跡    | "       | 弥生土器, 土師器, 須臾器               |
| 19 | 石野古墳群      | 石野     | 方墳5              | 64  | 荒神古墳群    | 上本庄町    | 2基(地形不明)                     |
| 20 | (古墳群)      | "      | 方墳2              | 65  | 中西古墳群    | 本庄町川部中西 | 3基                           |
| 21 | ( )        | "      | 方墳4              | 66  | 小馬枝古墳群   | 上本庄町    | 方墳1, 石室1                     |
| 22 | 網曾古墳群      | "      | 方墳4              | 67  | 金比羅古墳群   | "       | 方墳2, 石室2                     |
| 23 | 中久跡古墳      | 坂本町    | 方墳               | 68  | 鎌ヶ谷根根古墳群 | 鎌ヶ谷根根   | 方墳1, 石室1                     |
| 24 | 小林古墳群      | "      | 方墳6              | 69  | 深道古墳     | 深道      | 方墳                           |
| 25 | 小川澤之跡(山古墳) | 別所     | 方墳               | 70  | 埴遺跡      | 本庄町     | 竪穴住居跡                        |
| 26 | (古墳)       | 坂本中    | 方墳               | 71  | 尊場古墳     | 上本庄町尊場  | 方墳                           |
| 27 | (古墳群)      | 川原町    | 方墳2              | 72  | 新古墳群     | 邑生町     | 方墳6                          |
| 28 | 後谷古墳群      | "      | 方墳9              | 73  | 月光寺遺跡    | 月光寺     | 須臾器                          |
| 29 | 小松谷古墳群     | "      | 方墳2              | 74  | 上松古塚     | 上松      |                              |
| 30 | (古墳)       | 下東川津町  | 方墳               | 75  | 家庄遺跡     | 家庄      | 須臾器                          |
| 31 | 中風古墳群      | "      | 方墳, 箱式石室         | 76  | 浜ヶ谷古墳群   | 浜ヶ谷     | 方墳3                          |
| 32 | (古墳群)      | "      | 方墳2              | 77  | 蓋平遺跡     | "       | 須臾器                          |
| 33 | ( )        | 上東川津町  | 方墳3              | 78  | 遊行遺跡     | 遊行      | "                            |
| 34 | 川津古墳群      | "      | 方墳6              | 79  | 客山古墳     | 客山      | 方墳                           |
| 35 | (古墳群)      | 下東川津町  | 方墳2              | 80  | 天神山遺跡    | 本庄町松音寺  | 土師器, 果礫石                     |
| 36 | (古墳)       | "      | 方墳               | 81  | 天神山古墳    | 本庄      | 方墳, 土師器                      |
| 37 | ( )        | "      |                  | 82  | 塚根古墳     | 本庄      | 方墳, 須臾器                      |
| 38 | 西京寺古墳      | 上東川津町  | 横穴式石室            | 83  | 大塚古墳     | 大塚      | 墳形不明                         |
| 39 | 重佐馬古墳      | "      |                  | 84  | 松崎遺跡     | 新庄町松崎   | 縄文土器, 石鏡, 果礫石                |
| 40 | 山根横穴群      | 門戸谷    |                  | 85  | 客山古墳群    | "       | 2基                           |
| 41 | 向屋敷横穴群     | "      |                  | 86  | 坂山横穴群    | "       | 約10穴, 須臾器                    |
| 42 | 仁工ヶ谷横穴群    | "      |                  | 87  | 加佐奈子神社   | 東持田町    | 加佐奈子社, 不在神社宮(風土記), 本殿裏に横穴式石室 |
| 43 | 小松谷古墳      | 川原町    | 前方後円墳, 横穴式石室     | 88  | 比加夜神社    | 坂本町     | 比加夜社, 不在神社宮(風土記)             |
| 44 | 荒神古墳       | "      | 横穴式石室            | 89  | 門江神社跡    | 上東川津町   | 門江社, 在神社宮(風土記)               |
| 45 | 庄の上横穴群     | "      | 須臾器              | 90  | 川原神社     | 川原町     | 川原社, 不在神社宮(風土記)              |
| 46 | 山根古墳       | 福原町    | 横穴式石室, 円墳        | 91  | 虫野神社     | 福原町     | 虫野社, 不在神社宮(風土記)              |
| 47 | 上の堂横穴群     | "      |                  | 92  | 布自供茶神社   | 上東川津町   | 布自供茶社, 在神社宮(風土記)             |
| 48 | 流田横穴群      | 永井田    | 須臾器              | 93  | 川上神社     | 本庄町     | 川上社, 在神社宮(風土記)               |
| 49 | 薄井原古墳      | 坂本町    | 前方後方墳(長さ50m), 馬具 | 94  | 滝水山      | 福原町     | 志志山                          |
| 50 | 香々廻古墳群     | "      | 横穴式石室2, 須臾器      | 95  | 高野山      | 上東川津町   | 布自供高野山, 須臾器, 土師器             |
| 51 | 古妙見古墳      | 別所     | 横穴式石室            | 96  | 女岳       | 伊原町     | 女岳山                          |
| 52 | 常熊古墳       | 東持田町   | "                | 97  | 坊床栗寺     | 坂本町別所   | 寺跡跡, 古瓦, 鉄片器, 須臾器, 延喜書遺文     |
| 53 | 立花横穴群      | "      |                  | 98  | 往生院庵寺    | 福原町伴生庵  | 春日瓦, 土師片土器                   |
| 54 | 夏目遺跡       | 福原町    | 須臾器              | 99  | 澄水寺跡     | 寸次      | 礎石                           |
| 55 | 石湖遺跡       | "      | 土師器              | 100 | 玉野寺跡     | 上本庄町    |                              |
|    |            |        | 加美古墳 横穴式石室       | 101 | (城跡)     | 西川津町    | 城跡                           |
|    |            |        | 加佐奈子古墳 "         | 102 | 川津城跡     | "       |                              |
| 56 | 大山古墳群      | 東持田町   | 依々木残布巾古墳 "       | 103 | 城山城跡     | 本庄町城山   |                              |
|    |            |        | 依々木尻塚古墳 "        |     |          |         |                              |
|    |            |        | 野津真宅前古墳 "        |     |          |         |                              |
| 57 | 平田古墳群      | 上本庄町平田 | 円墳2, 方墳6         |     |          |         |                              |
| 58 | 美船遺跡       | 美船     | 縄文土器             |     |          |         |                              |

### Ⅲ 調査の方法と経過



第5図 調査区設定図

#### 1. 調査の方法

'85年度は全面調査としたが、'86～'88年度はは場整備事業と調整をはかった結果、切土部分のみ調査を実施した。

#### 2. 調査区の設定

'85年度は工事中に発見された区域より南側を10m間隔で、東西にA～K区、南北に1～12区とした。翌年度より北側を調査することになり、工事区域にあわせて新たに、東西N～Z区、南北0～13区とした。調査が進むにつれ、更に北側に遺構が続くと考えられたため、工事立会をし、遺構が確認された区域の調査を行った。東西N～Z区、南北88～99区とした。

<'85年度>

A, B……Kの1, 2……12区

<'86年度>

P, Q……Yの10, 11, 12区

<'87年度>

P, Q……Yの3, 4……9区

<'88年度>

N, O……Zの0, 1, 2区と

88, 89……99区

アミ部分が発掘調査地。

## IV 調査の概要

1985年度(昭和60年度)

### 1. 北部の分布調査

芝原遺跡の範囲と性格を究明するため、北部の水田に当初一辺10mグリッドを16箇所設定し、北側からN1区、N2区…とした。N1～N4区まではさしたる遺構は確認出来なかったため南側に重点を置いてN14、N15区の調査を開始したところ、多数の堀立柱群(以下ビット群という)が検出され、県教委、文化庁の指導に基づき予定していた残りのグリッドの調査を取り止め、幅3m×長さ60mの細長いトレンチ方式に改めこれをT1、T2、T3区として引き続き試掘調査した。(第6図)

一方、南部の芝原遺跡の調査で検出されたSD01(南北大溝)の範囲を確認するためにトレンチ6本(南からT4区～T9区)を設定し調査した。

**N1区(第7図)** 通称横道通りの北側水田に設定した一辺10mのグリッドである。水田耕作土層は約25cmで以下約30cmで基盤層へ続く。壁に沿ってさらに深く掘り下げたところ、この基盤は砂礫層で厚み50cm以上あり人頭大の転石から拳大の礫まで多数含まれていた。砂礫層上面は北から南へ低く傾斜している。遺構、遺物ともに皆無であった。

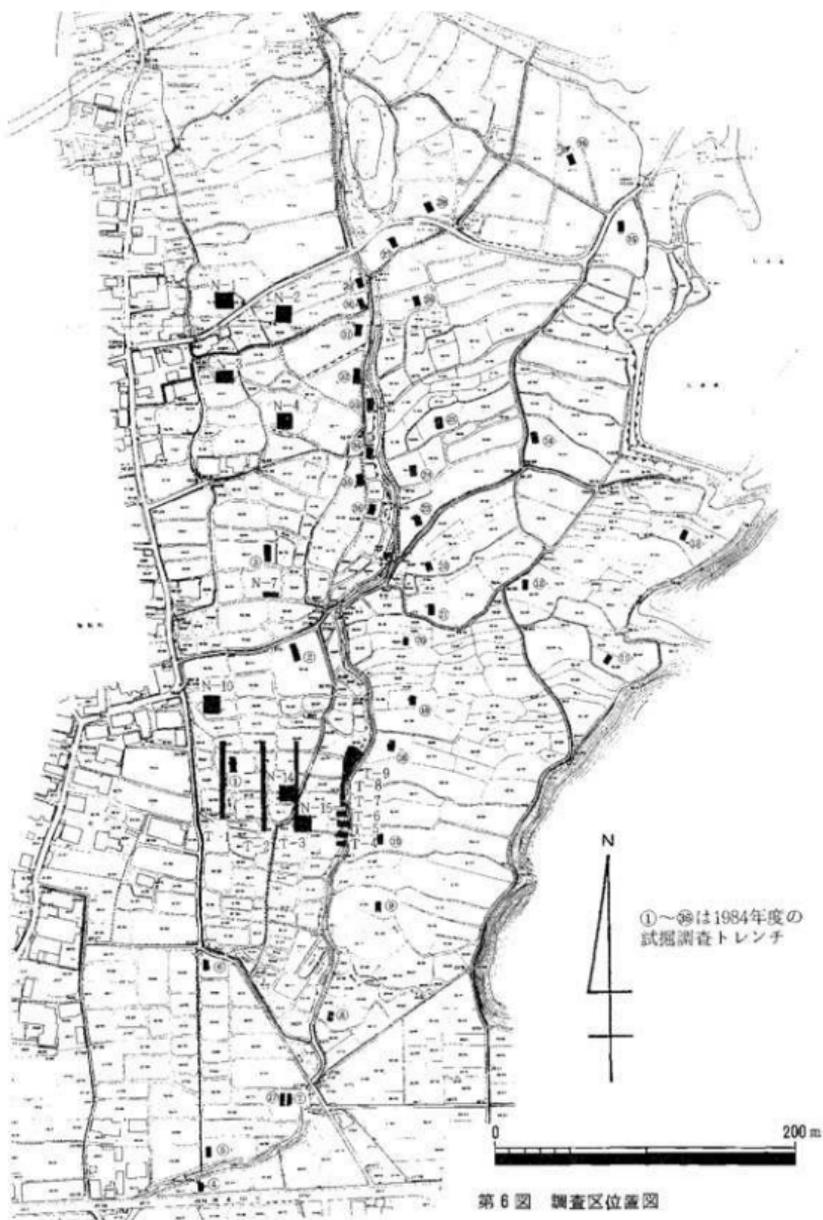
**N2区(第7図)** 通称横道通りの南側水田に設定した一辺10mのグリッドである。水田耕作土層は二層に分かれるが合わせて厚み約30cmでその下にすぐN1区と同じ砂礫層があり、これが基盤層であろうと思われる。この層の厚みは1.5m以上ある。上面は転石や大礫のため非常に凹凸が激しく遺構は全く認められなかった。

出土遺物は耕作土層の下面から須恵器の壺、甕、高環及び輪状つまみの付く蓋の小片、備前焼系統の摺鉢又は壺の底部から体部下半部にかけての破片が発見された。この内、図に示したものは備前焼系統の破片で体部の厚み1.3cm、底部の厚み1.5cmを計り内面は横方向の指ナデ、外面は底部付近をヘラによる横ナデ、上部をタテ方向のヘラナデ調整を施すものである。(第12図-1)

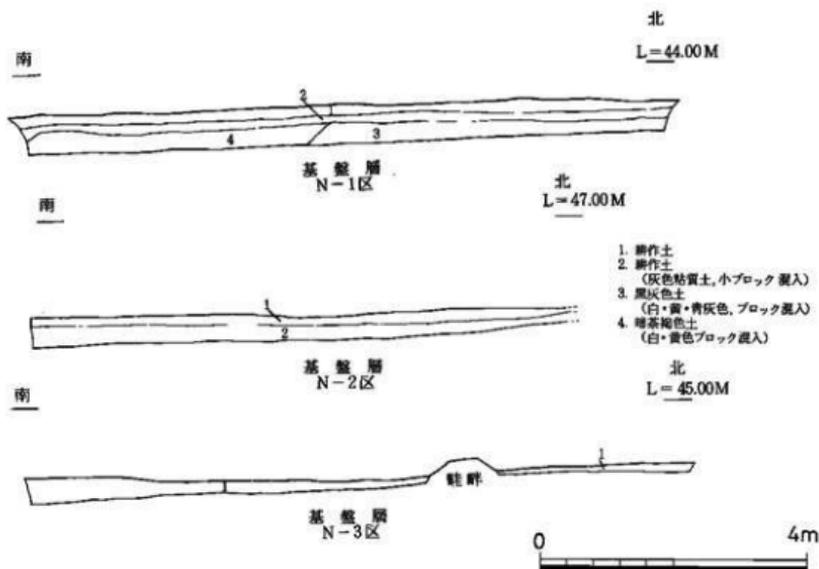
**N3区(第7図)** N2区の西南方向に位置する。耕作土層は上下2層より厚みは計15cm、その下にすぐ地山が検出された。この地山はグリッドの中ほどからN1、N2区でみられた砂礫層がありこの部分から東方へ急傾斜して下がっている。遺構は全く認められなかった。

遺物は耕作土下層より江戸以後の染付陶器の小片が1片発見されただけであった。

**N4区** N2区の南方の水田中に設定した。耕作土層は上下2層で厚み30cm。以下50cm



第6図 調査区位置図



第7図 N-1～N3区西壁断面図

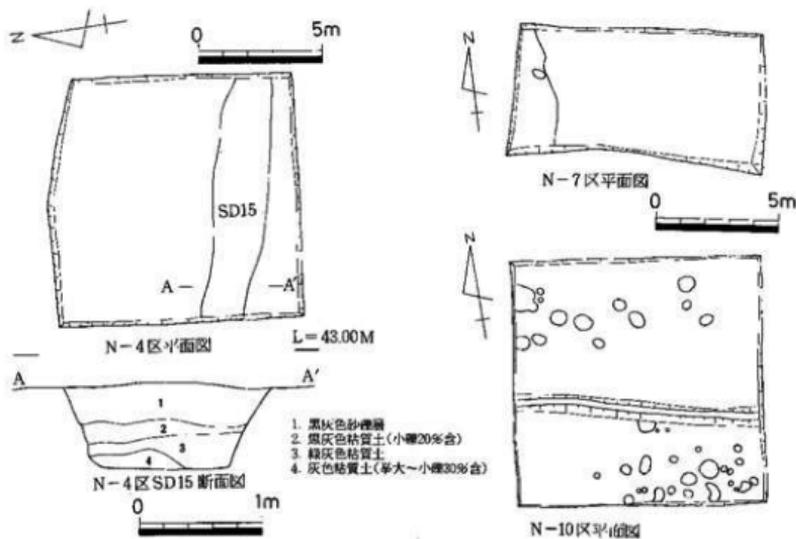
で地山に至る。耕作土層下の灰褐色土層の上から掘り込まれ東西に延びる溝が確認された。この溝は上端幅2.5m、基底部幅1.1m、深さ1mの断面台形を呈するもので内部には粘質土が堆積していた。溝内は一部しか掘り下げなかったが遺物は含まれていなかった。しかし、第2層の礎層中からは備前焼の摺鉢の口縁部付近の破片が1片出土している。口縁はほぼ垂直に立ち上がるもので端部を欠く。体部は斜めに内傾していく。厚みは9ミリ前後。口縁外面は灰色、体部は内外面共に明褐色を呈する。内外面共に横ナデ調整を施す。内面の一部に最低6条の沈線をタテ方向に施す。(第12図-2)

**N7区** 福原の集落の道路寄りに設定したグリッド。東西10m、南北5mの調査区である。耕作土は厚み40cm、以下淡赤茶色土層、暗茶色土層と続く。地山面は東側が褐色土で西側が礫を含む褐色土であり、西側の礫を含む地山面にピットが1穴掘られていた。

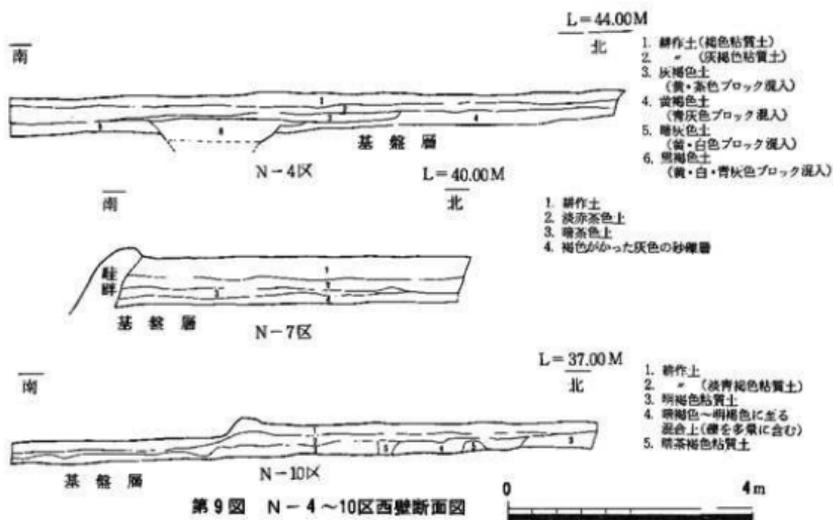
出土遺物はなかった。

**N10区** N7区の南西に設定したグリッドで水田の小字名は「蔵の前」と呼ばれる。

水田耕作土層は厚み20cm、以下30cmで地山へと続く。地山面は明褐色土で部分的に明褐色～暗褐色のブロックを含む礫層が混在している。この地山面に多数のピットが掘られているが建物になるものは確認出来なかった。遺物は耕作土層より須恵器小片が出土してい



第8図 N-4区~10区平面図及び土層断面図



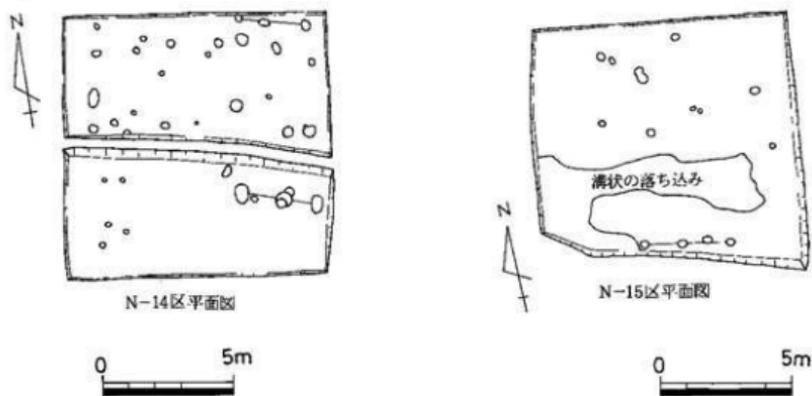
第9図 N-4~10区西壁断面図

るが磨滅が著しい為、詳細不明。

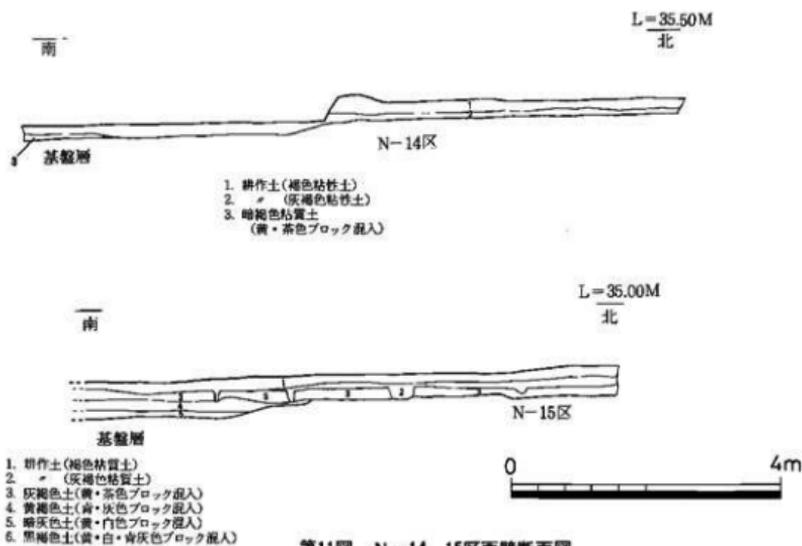
N14区 芝原遺跡の北側約30mに設定したグリッド。水田耕作土層20cm, この下に地山面がある。地山は褐色土でこの面にビットが多数掘られているが建物として建つ柱列は2

列でありその規模は不明である。出土遺物は須恵器、土師器の小片が少量出土しているが実測可能なものはなかった。

**N15区** N14区の南東側に設定したグリッドで芝原遺跡が南に隣接する。水田耕作土層は厚目20~30cmで以下30~40cmで地山へと続く。地山面は褐色土層でこの面に掘立柱の掘



第10図 N-14, 15区平面図



第11図 N-14, 15区西壁断面図

り形及び性格は不明であるが暗褐色土層の溝状の落ち込みが検出されている。

建物の柱穴としてグリッド内の南側に位置するところで4穴、東西方向に並ぶ柱列が確認出来た。その他11穴検出しているが建物として建つものはなかった。遺物は、須恵器、土師器片、瓦器片(第12図-3)がある。

**T 1区** 幅3m、長さ60mのトレンチで芝原遺跡の北西隅から北へ向って設定した。

耕作土層から地山面までの深さは南から北へいくほど深くなっている。T 2、T 3区も同様である。地山は明褐色土で北側に行くほど褐色になる。柱穴は多数検出したが明瞭に建物になるものは認められなかった。出土遺物は須恵器、土師器の小片少量である。

**T 2区** T 1区の東側に設定した。地山は褐色土でこの面に遺構が掘られている。ピット群はT 1区と同様に多数検出したが建物になるものは認められずトレンチの北側の所に黒色土層の溝状の遺構を2ヶ所検出したがその性格は不明である。又、この溝状遺構の間に拳大から人頭大の礫を含む層がありN 1、N 2区などにみられた礫層と同じものとみられる。出土遺物は須恵器片が少量出土したが実測出来るものはなかった。

**T 3区** T 2区の東側に設定したトレンチである。地山は褐色土でピット群はN 14区に隣接する部分とトレンチの北半部に集中している。N 14区と隣接するピット群で柱穴が1列に並ぶものもあるが建物になるものは無い。出土遺物は少量あるが実測可能なものはなかった。

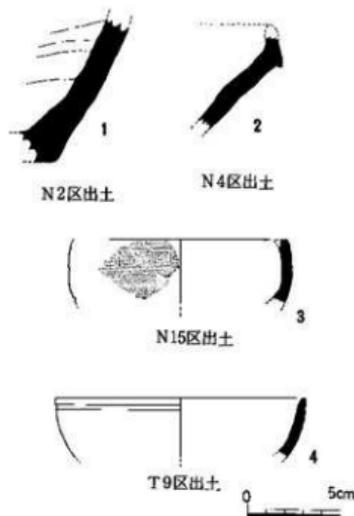
**T 4区** S D 0 1の北方へ続くルートを究明するために設定したトレンチである。トレンチの西部では耕作土層(厚み20cm)の下は地山であったが東部では黒色土の堆積したS D 0 1の一部を確認した。

**T 5区** T 4区と同様の結果であった。

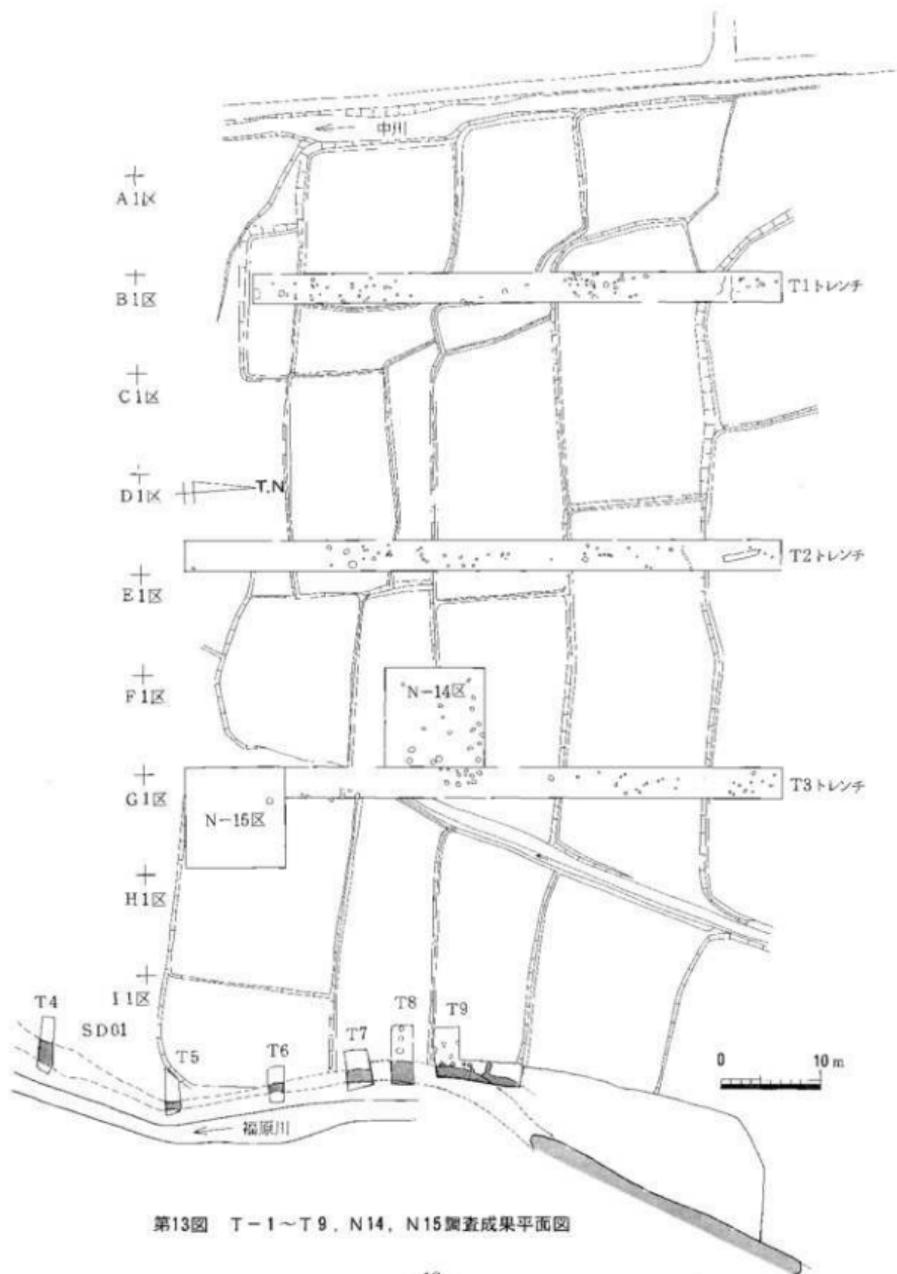
**T 6区** 同上。

**T 7区** 同上。

**T 8区** トレンチの東側にS D 0 1を確認。その西側地山面に径40cmのピットが3穴一



第12図 出土遺物実測図



第13図 T-1~T9, N14, N15調査成果平面図

列に並んでいるのを検出したがこのビットとSD01内の堆積土が違うので時期は別々であったと思われる。

**T9区** トレンチの東端にSD01の西壁が確認出来たが東壁は川によって削られていて残存しなかった。このトレンチの北側でSD01は川に削られて消滅しているものと想われたのでトレンチの東側から北側に向けてトレンチを拡張したところ、トレンチのほぼどで川によってSD01が削られて消滅していることを確認した。

しかし、重機による掘削でこのトレンチの北側にSD01が延びていることを確認したため調査したところ、約30mの長さまでSD01があることが確認出来た。溝の東壁は削られていて残っており底も溝の北側でしか確認出来なかったが深さ約90cm、底部幅約1.5～1.8mであった。遺物は須恵器片があった。(第12図-4)

#### 小 結

広大な範囲にグリッド7ヶ所及びトレンチ3本しか設定出来なかった為に確実な遺構や遺物はみられなかった。

N1～N4区では厚さ1m以上の砂礫層があり遺構を確認することは出来なかった。この範囲まで官衙のようなしっかりとした建物が及んでいるとは思われない。芝原遺跡に關係する遺構はN10区付近までの範囲にあると推定される。

## 2. 南部の発掘調査

検出した遺構は、掘立柱建物9棟(SB01～SB09)、柵列2条(SA01, SA02)溝6条(SD01～SD06)、土壇3基(SK01～SK03)の他掘立柱約270本である。

この内、建物跡は主として台地の東半部に集中し、西半部には明確な建物跡は認められなかった。さらに、これらの建物はだまかに2箇所に分れて集中していることが分った。つまりSD01(南北大溝)のすぐ西側に計5棟の建物が隣接しているが、この一群の建物群を東群とし、この東群の建物群から一定の間隔をおいて台地中央部に所在する4棟の建物を西群と呼称する。

東群の建物は、全て通常の掘立柱の建物であり、柵列2条を伴なう。

それに対して西群の建物は殆んど総柱の建物であって倉のような性格をもつものと思われる。もう少し細かく見るとSB06は内側に側柱の掘り形に比べ直径が約50cmと小さいビットをもつもので、これは床束の柱であったような感じを受ける。

又、SB07は東側に廂をもつものである。さらにSB07は柱根が20cm前後の角柱であったことが確認されており奈良期に通有な隅丸方形の掘り方に円柱というスタイルとは

全く逆である。こうした技法は奈良期（8世紀前半）よりやや古いか又は、やや新しい段階のように思える。

次に建物の規模は柱間2間×3間のものから最大で4間×7間のものまであり、ばらつきが認められるがこれは時期の異なるものがあることによるものではないだろうか。

SD01は、屈曲するも総延長160m以上あり、断面が台形を呈することから排水機能より建物を区画する機能の方が強いと考えられるものである。

SK01～SK03は、SB06の東部にあり、SK02からは中世の土師質土器が出土しており、建物周辺の耕作土下からも中近世の陶磁器類が出土している。

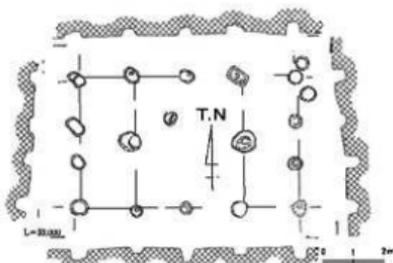
**東群の建物 SB01, 02, 03, 08, 09**の計5棟の掘立柱建物と3条の柵SA01～03から成る。SB01, SA03の東には南北大溝SD01が走る。

**SB01** 桁行4間(7.2m)、梁行3間(4.2m)の東西棟掘立柱建物である。柱間寸法は桁行西から6尺(1.8m)+6.3尺(1.9m)+5.16尺(1.95m)、梁行は西側柱の北から5.3尺(1.6m)+3.8尺(1.15m)+4.83尺(1.45m)である。これに対して東側柱は北から4.6尺(1.4m)の等間である。西側柱から1間目と3間目の梁間中央にそれぞれ棟持柱になると思われる掘り方を設ける。

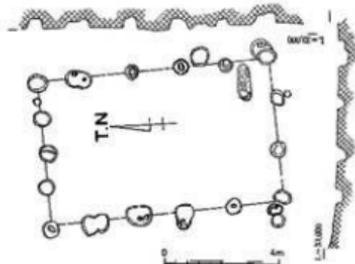
柱掘り方は円形で、上端径35～60cm、下端径32～43cm、深さ17～55cmを計る。

**SB02** SB01の西側に1m隔てて、南の柱通りを揃えてつくられた桁行5間(8.2m)梁行3間(5.1m)の南北棟建物である。柱間寸法は桁行7尺(2.1m)等間、梁行7尺(2.1m)である。柱掘り方は円形で上端径47～82cm、下端径18～61cm、深さ15～36cmを計る。

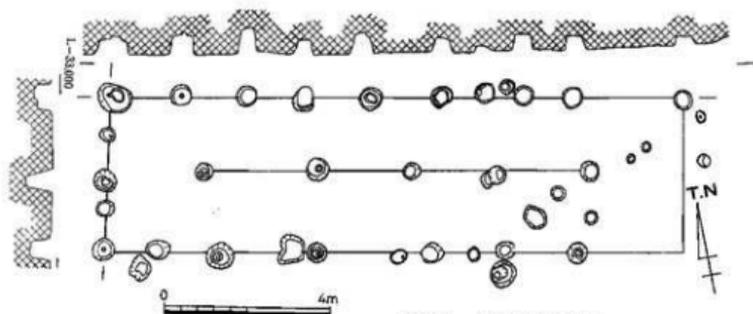
**SB03** SB02の南側約3.5mを隔ててあり、やや東に傾いた東西棟の細長い建物である。桁行7間(13.8m)、梁行4間(3.75m)である。柱間寸法は桁行5尺(平均1.5m)、梁行3尺(平均0.9m)である。柱掘り方は円形で上端径47～82cm、下端径34～62cm、



第14図 SB01平面図



第15図 SB02平面図



第16図 SB 03 平面図

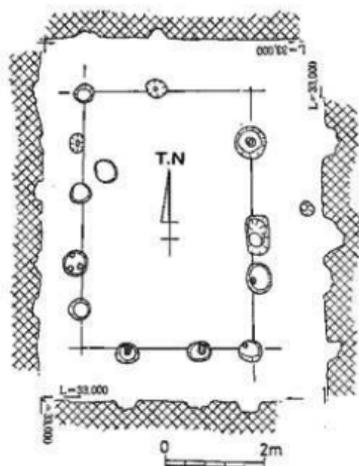
深さ38~65cmを計る。建物内部には、棟持柱を設けたと思われる掘り方が東西に5穴並んでいる。

SB 08 SB 01から北へ3.6m離れて、SB 01の西側の柱通りをほぼ揃えてつくられたもの。柱穴が3個未確認であるが桁行4間(5.2m)梁行3間(3.6m)の南北棟建物である。柱間寸法は桁行3尺(0.9m)から6尺(1.8m)、梁行3尺(0.9m)から5尺(1.5m)までと不等間である。

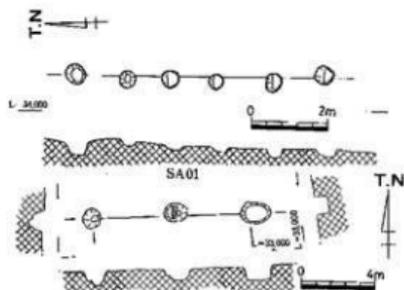
柱掘り方は円形で上端径40~50cm、下端径31~43cm、深さ13~40cmを計る。

SA 01 SB 02の北3.5m隔てて南北方向に続く櫓列。柱穴は6本あり柱掘り方は円形で上端径39~53cm、下端径17~43cm、深さ10~40cmを計る。柱間寸法は南端から2本目と3本目の柱間が1.4mとやや広いが他は4尺(1.2m)である。

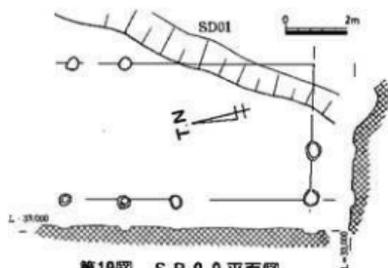
SA 02 SB 02とSB 03の間にSB 02と平行に並ぶ櫓列で柱穴は3本である。柱掘り方は円形で柱間寸法は東から2.0m + 2.2mである。上端径15~60cm、深さ30~



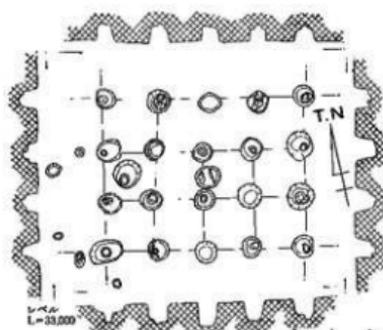
第17図 SB 08 平面図



第18図 SA 01, 02 平面図



第19図 SB09 平面図



第20図 SB04 平面図

35cmを計る。

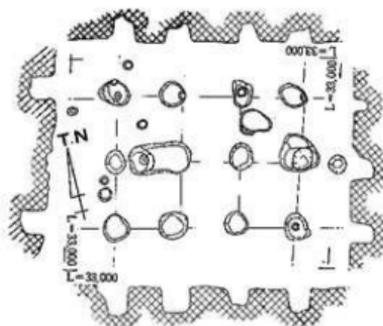
**SB09** SB08の東側11.5m隔ててあり桁行4間以上、梁行3間の南北に細長い獨立柱建物である。東南部の柱穴は、SD01によって切られている。棟の方向は、SB01などと比べ東へかなりふれている。柱間寸法は桁行南から1.7m+2.8m+1.8m+1.8m、南の梁行は西から1間目が1.8mを計る。

柱掘り方は円形で上端径38~45cm、下端径14~28cm、深さ6~14cmを計る。柱間寸法は、北から1.75m+1.7m。

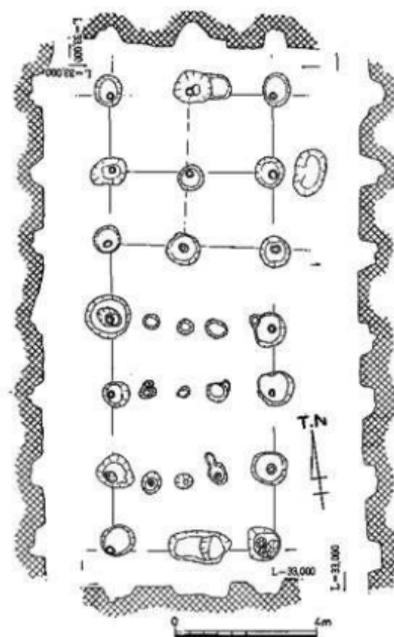
**SD01** 台地の東端を福原川に平行するような形でかなり左右に屈曲しながら続き、その北端部は現在の福原川河川敷によって削られ、南端部も水田の段によって消失しており原状の姿は不明だが確認した総延長は160m以上である。溝の断面は台形を呈し、上端

幅2m前後、基底部幅1.3m、深さ平均0.6mを計り溝底や堆積土層からは7~9世紀にかけての須恵器類、土師器類、土製支脚などが出土している。溝内堆積土は中層の黒褐色土層が砂質である以外、特に最下層は、明黄褐色土層で砂や礫を殆んど含んでいないことから、水の流れた形跡はなく、排水施設というより建物施設を区画するための溝と考えた方がよい。この溝の外か内側に平行して土盛がめぐっていたかどうかは土層では確認出来なかった。溝内及びその周辺に無数のピットが認められたがあるいは柵列のような施設がめぐっていたのかも知れない。

**西群の建物** SB04、SB05、SB06、SB07の計4棟の獨立柱建物が南北方向にはほぼ西側柱の柱通りを同じくして隣接する。又、SB06、SB07の東に1本の板塼を設けたと思われる溝があり、SB07とその溝の間には3基の隅丸方形の土壘(SK01~03)がある。SB04の北側にも柱穴が多数集中しているが建物プランは確認出来ない。SB06とSB07の間は、柱穴が少なく不規則であるのでここにも建物はなかったと思われる。東群の掘立柱建物群との間は、柱穴が少なく建物のない空間地であったと思われる。両者の建物群の間隔はおよそ18mを計る。



第21図 SB05平面図



第22図 SB06平面図

ある。東西は2間(北列4.55m, 中央列4.5m, 南列4.7m), 南北6間(西列4.1m, 中央列4.4m, 東列4.25m)。柱間寸法は, 東西が北列西から2.2m+2.35m, 中央列西から2.15m+2.35m, 南列西から2.1m+2.6m。南北が西列2.05mの等間。中央列北

SB04 西群最北端に位置する総柱の獨立柱建物である。桁行4間(6m), 梁行3間(4.5m)あり柱間寸法は桁行が5尺(1.5m)であるが, 北西の側柱P01とP02の柱間は6尺(1.8m)と長い。桁行も5尺(1.5m)等間である。

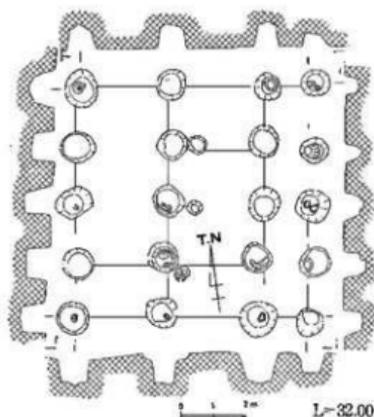
柱掘り方は, 上端径60~100cm, 下端径50~75cm, 深さ40~70cmを計る。この内2段掘り込みを有するものはP03, P14, P18を除く全ての柱穴にみられ柱の基底部はおおむね円形を呈しその径は15~30cmを計る。このことから, 柱は直径20cmほどの円柱と思われる。

SB05 SB04の南方1.8m隔てSB04の西の側柱の柱通りを揃えてつくられた総柱の東西棟獨立柱建物である。桁行3間(4.5m), 梁間2間(3.2m)。柱間寸法は桁行5尺(1.5m)等間, 桁行は5.3尺(1.6m)等間である。

柱掘り方は, 上端径0.5~1m, 下端径0.3~0.5m, 深さ0.3~0.7mを計る。2段掘り込みはP01~P04, P08, P12に認められ, 柱の基底部は隅丸方形を示すものが多く, その径は20cmを計る。

抜き取り痕跡はP01, P05, P08に認められる。

SB06 SB05の南1.5mを隔てSB05よりやや西にふれる総柱の獨立柱建物で



第23図 SB07平面図

から2.2 m + 2.1 m, 東列が2.1 mの等間である。全て2段掘り込みで柱の基底部は円形, P02に抜き取り痕が認められる。柱は, おおよそ径20cmの円柱のようである。柱掘り方は, 上端径0.7~1 m, 下端径0.5~0.7 m, 深さ0.2~0.7 mを計る。この建物は北部が2×2間の総柱造りで倉庫的性格を有し, 南部が2×4間の広間となっている。内部には東西方向に3本ずつの小規模の柱穴が並ぶが南北側柱と直線上に並ばないので床束とはならず別の目的のピットと考えた方がよいだろう。

**SB07** SB06の南側5.5 m隔て, SB06の西側柱と柱通りをそろえて建てた総柱造りの独立柱建物で梁間2間(5.75 m), 柱間寸法西から2.8 m + 3.0 m, 桁行4間(7.0 m), 柱間寸法北から1.8 m + 1.8 m + 1.7 m + 1.7 mを計る。東側に幅2 mの扉を設ける。

**SD06** SB07の東に位置する。長さ4.7 m, 上端幅36cm前後, 下端径約20cm, 深さ40cmを計る。

**SK01** SB07の東南に位置する。長径96cm, 短径55cm, 深さ10cmの隅丸長方形を呈する。

**SK02** SK01の東南に位置する。長径1.1 m, 短径58cm, 深さ20cmの小判形を呈する。壙内から中世の土師質土器いわゆるかわらけが1個体分出した。

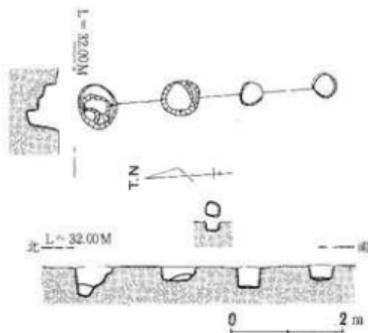
**SK03** SK02の南に位置する。長径1.08 m, 短径67cm, 深さ26~30 cmの小判形を呈する。

#### その他の遺構

**SA03** SB07の南南東約8 m隔てて南北方向に続く柵列。柱穴は4本あり, 柱掘り形は円形で上端径40~70cm, 下端径36~44cm, 深さ25~50cmを計る。

柱間寸法は南から1.3 + 1.3 + 1.4 mである。

**SB12** SB07の南南東約37 m隔ててある総柱造り, 東西棟の細長い建物である。桁行4間(9.2 m), 梁行2間(2 m)あり, 柱間寸法は桁行が2.3 m, 梁行が南から0.8 m + 1.2 mである。柱掘り形は円形で上端径25~46cm, 下端径12~36cm, 深さ20~30cmを

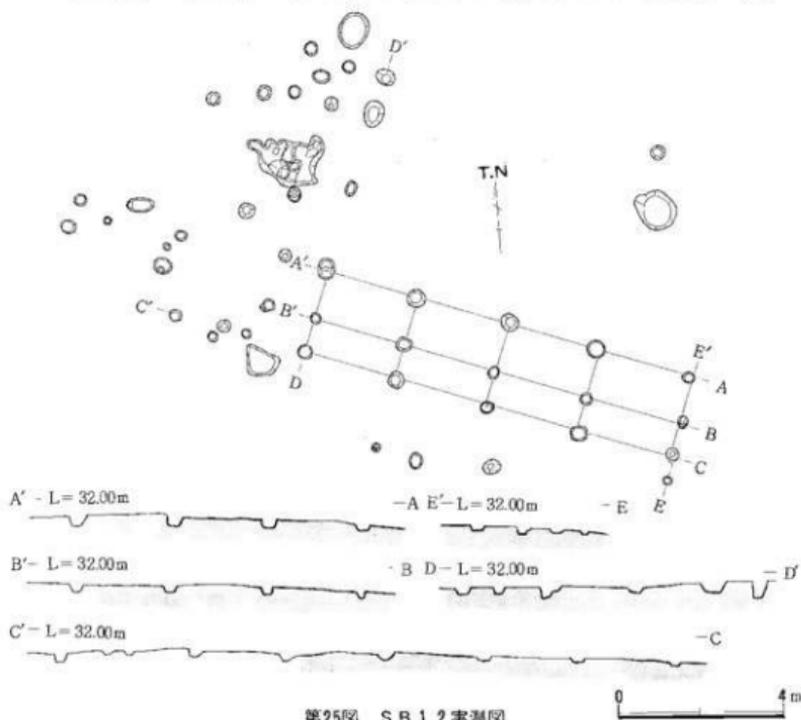


第24図 SA03実測図

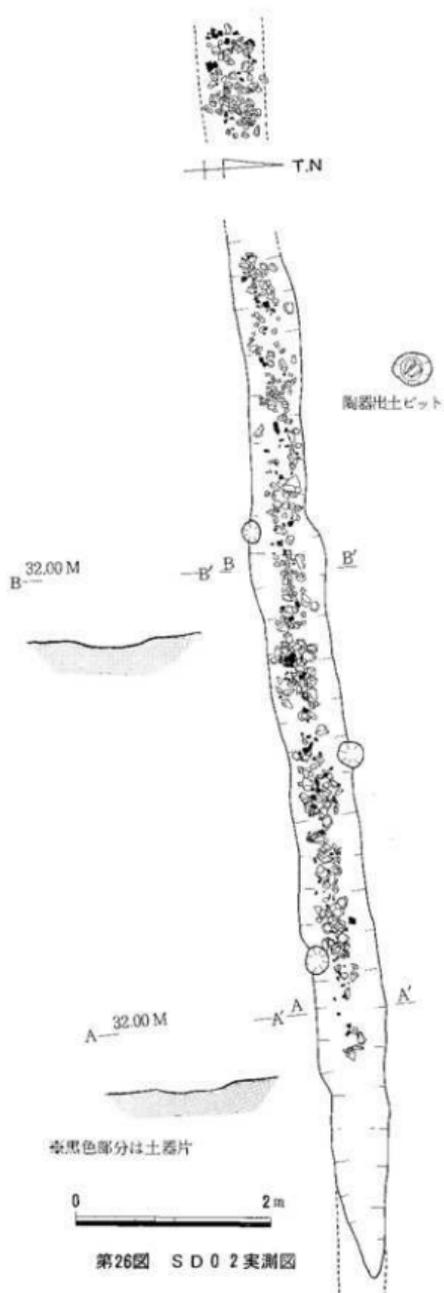
SD03 SD02の西部において南北に横断する形でSD03がある。総延長は不明だが、残存長10m、上端幅50cm、下端幅10cm、深さ10cmを計る。SD02より新しい時期

計る。北西部にもピットが多数あるが関連するものかどうか不明である。

SD02 SB07の南部15m隔てた地点から西南西の方向へ約20m余続く溝で幅50cm、深さ12cm、殆んど丸味を帯びた断面を呈し、多量の礫と須恵器をはじめとする土器類を混入する。土器の中には、古式土師器の破片もありかなり年代幅のあるものも含まれているが、概して7世紀代の古墳時代終末期の須恵器が多い。



第25図 SB12実測図



第26図 S D 0 2実測図

のもの。

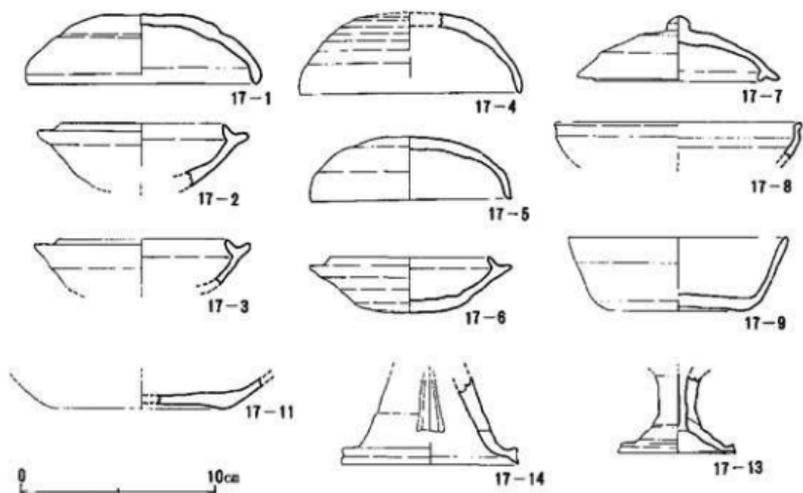
S D 0 4 長さ15m余り、上端幅46cm、下端幅28cm、深さ10.7cmを計る直線状の溝。

S D 0 5 南北方向の北部から西部に屈曲する鍵の手状の溝。東北方向7.8 m、東西方向8.5 m、上端幅65cm、下端幅15cm、深さ15cmを計る。

### 3. 遺物について

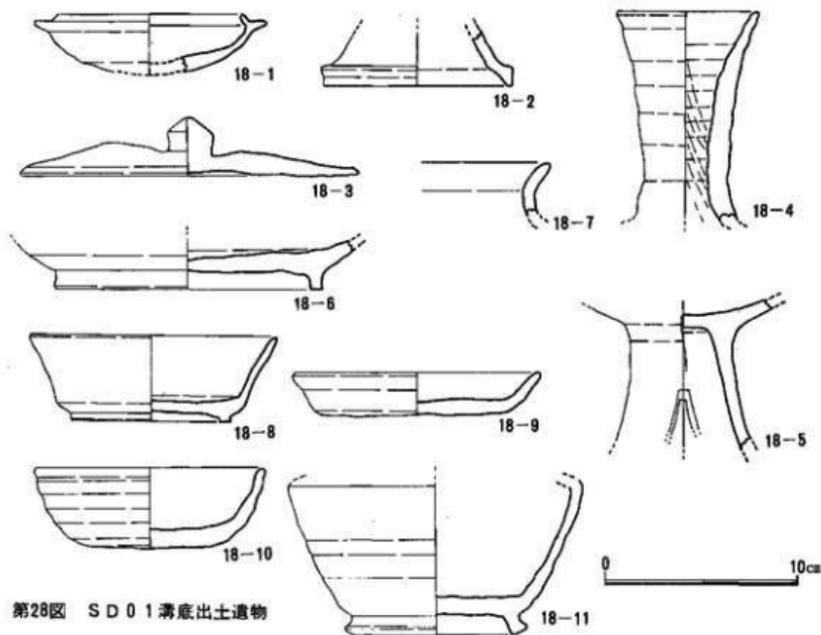
1. S D 0 1内上層～中層出土の遺物(第27図) 1, 4, 5は、山陰IV期の蓋である。天井部はいずれもナデて調整している。2, 3, 6は、坏身で立ち上がりか低く内傾が著しいもので、山陰IV期である。7は、乳頭状のつまみを有する蓋である。柳浦編年の1式に該当する。8は、口縁部を外方へひねるもの。9は、底外面に回転糸切り痕を残す坏。13は、ミニチュアの高坏で三方に幅1ミリ弱の切り込みを加えるもの。14は、三角形のすかし孔を入れるもの。15も高坏の脚端部である。

2. S D 0 1内最下層及び溝底出土の遺物(第28図) 1は、山陰IV期の坏身である。4は、長頸壺の口縁部である。口径7.2cm、残存高11cmを計る。11は、長頸壺の肩部から底部にかけての破片で最大径15.2cm、残存高8cmを計る。底部は高台を付け、底外面は、回転糸切り痕を残す。



第27図 SD01上層～中層出土遺物

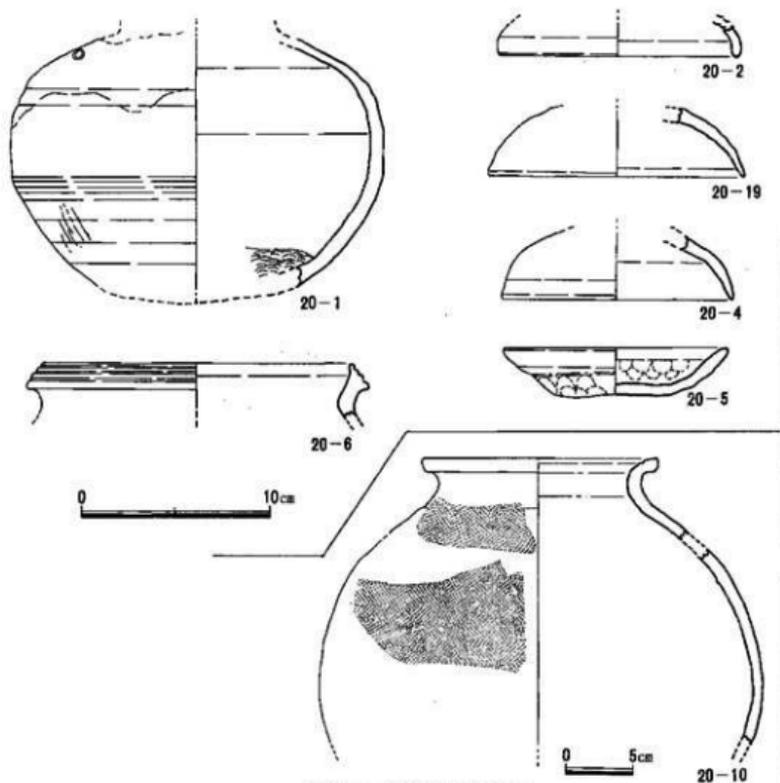
(欠番の実測図は、昭和61年3月  
刊行の「芝原遺跡」を参照。)



第28図 SD01溝底出土遺物

2は、高環の脚端部で底径9.8cm。5は高環で二方透しのもの。環部と脚部の接合部の径6.2cmを計る。7は、土師器の甕の口縁部である。9は、口径12.8cm、底径9cm、器高2.2cmの高さの低い環で、底外面は回転糸切り痕を残す。柳浦編年の5式に属す。3は、宝珠つまみを有する蓋で口縁端部の反りが簡略化されて消失したものの。柳浦編年の4式の後半であろう。6は、高台外径約14cmの環で底外面は、ナデ調整を施すもの。柳浦編年の3式になるものと思われる。8は、口径12.8cm、高台外径8.3cm、器高4.5cmを計る。口縁は、外方へ直線的に傾き、底外面は回転糸切り痕を残すもの。柳浦編年の4式に属す。10は、無高台の環で底外面に回転糸切り痕を残す。

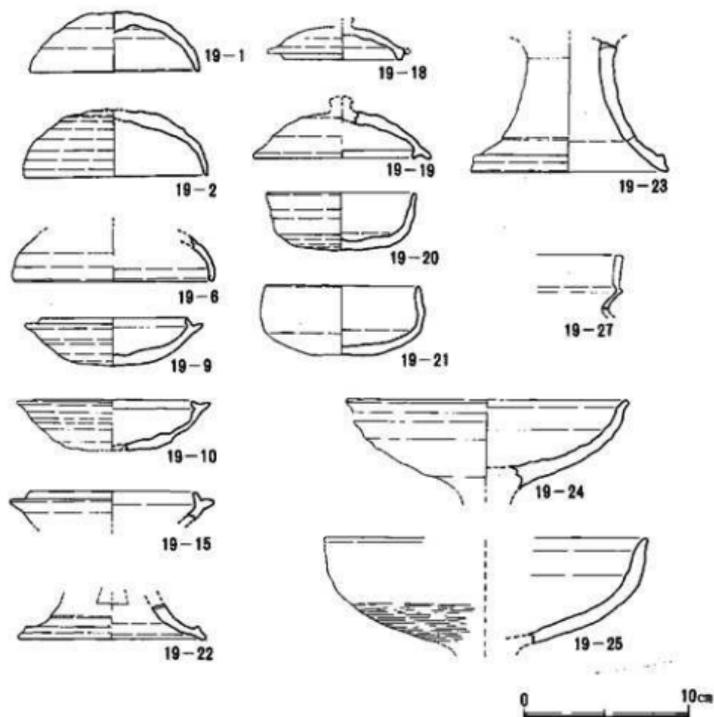
3. 建物群周辺 (第29図) 4は、B7区の耕作土層から出土したもので口径12cmの山



第29図 建物周辺出土遺物

陰IV期の蓋である。1は、壺となるもので、体部最大径19.4cm、体部推定高14cmを計る。下半部はカキ目調整を施す。口部には直径6.5mmの竹管文を1個付ける。2は、蓋の口縁端部で口径12.2cm。6は、F8区の直径25cmの円型ピット内から出土した弥生後期前半の甕形土器の口縁部である。口径16cmを計り、3条の凹線文を付ける。5は、SK02の壁ぎわで底からやや浮いた状態で出土。中世の上師質土器である。口径11.6cm、底径5cm、器高2.5cmを計る。上半部内外面は横ナデ調整、下半部内外面は指ナデ調整を施す。

4. SD02 (第30図) 1~2は坏蓋で山陰IV期のもの。6は、坏身で山陰IV期のもの。9は、口径9.2cm、底径5.8cm、器高3.6cmの坏で底外面をへら削りするもの。10は、口径9.4cm、底径4.2cm、器高4.3cmの坏。口縁は内傾する。22~25はいずれも高坏である。27は古式土師器の高縁部である。



第30図 SD02 出土遺物

## 1986年度(昭和61年度)

調査区域は、第31図のQ～Yの10～12区までである。Q～Tの10～12区については天候条件が悪く遺構の検出ができなかったため、翌年一部再調査をして1987年度調査として報告している。検出した遺構は、掘立柱建物8棟(SB10, SB12～SB18)総柱造りの建物1棟(SB19)、欄列1条(SA04～05)、溝4条(SD01, SD07～09)、井戸(SE01)、土塼7基(SK05～11)の他、掘立柱約100本である。

この内、建物跡は、台地の東半部に集中し西半部には明確な建物跡は認められなかった。又、総柱造りの建物は建物群の南西部にやや離れて所在し、前年度調査のSB04～SB07の北方延長線上にはほぼ方向を同一にして当たるがSB04との間隔は18mもある。

建物の規模は、柱間3間×2間から3間×7間のものまでであるが、概して3間～4間のものが多い。

柱の掘り方は全て略円形で上端直径40cm前後から65cmを計り、深さ16～58cm、柱径は約10～18cmを計る。以下、各遺構の概要を記す。

**SB10(第32図)** 桁行3間(4.25m)、梁行4間(5.6m)の南北棟の建物である。柱間寸法は桁行1.25～1.50m、梁行1.30～1.50mの不等間である。

**SB11(第33図)** 桁行4間(0.7m)、梁行4間(5.4m)の東西棟の建物である。柱間寸法は桁行1.6～1.8m、梁行1.2～1.5mの不等間である。

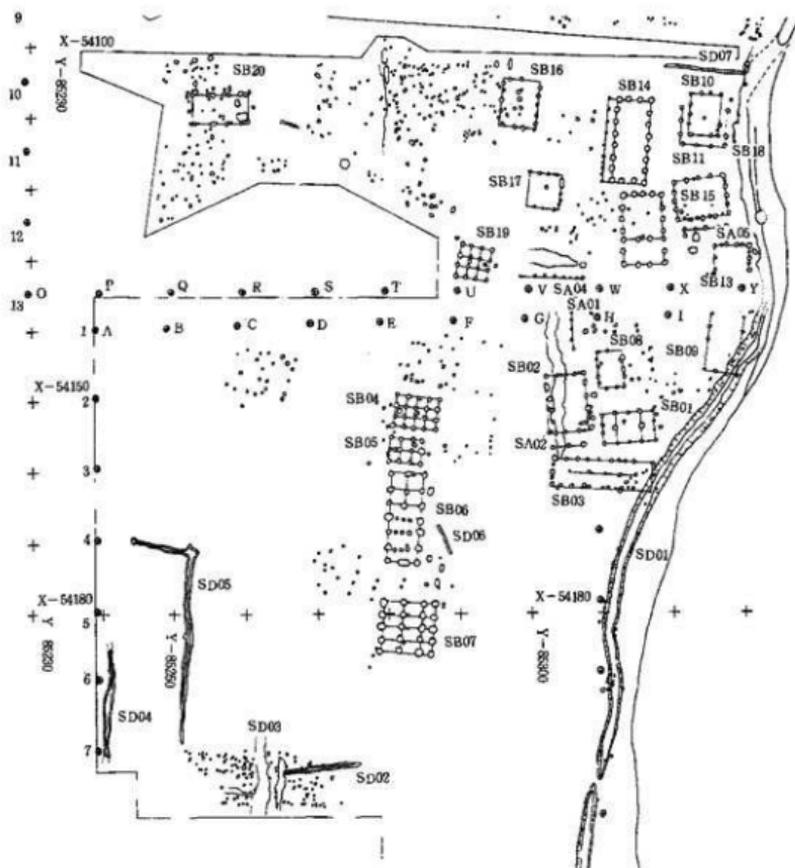
**SB13(第34図)** 桁行2間以上(3.6m)、梁行3間(4.8m)の南北棟の建物と思われる。柱間寸法は桁行1.8m、梁行1.5～1.6mを計る。

**SB14(第35図)** 桁行7間(11.4m)、梁行3間(4.6m)の南北棟の建物で西側の桁行から1.2～1.4m離れて、計10個の小ピットが南北方向に平行し、縁であろうと思われる。この小ピットは上端直径20～40cm、深さ30～50cmを計り、柱間寸法は0.7～1.5mを計る。

**SB15(第36図)** 桁行6間(9.4m)、梁行は北辺で4間(5.6m)、南辺で3間(5.6m)の南北棟の建物で、桁行南から3個目のピットの部分に東北方向に3間の間仕切りがある。又、そのすぐ北側のピットと間仕切りのピットの間隔は1.0～1.2mと狭くなっている。当初、南側に3間、2間の東西棟の建物があり、それに北の部分が付加増築され、当初の北辺は、間仕切りに変わったのではないと思われる。

**SB16(第37図)** 桁行6間、梁行4間とされるが、隅部のピットが南東のものを除く他は確認出来ず、柱通りも不揃いで建物の平面形態は不詳。

**SB17(第38図)** 桁行5間、梁行5間と思われるが、SB16同様、隅部のピット



S = 1 : 80

第31図 南部遺構平面図 (X-, Y-の数字は同土座標)

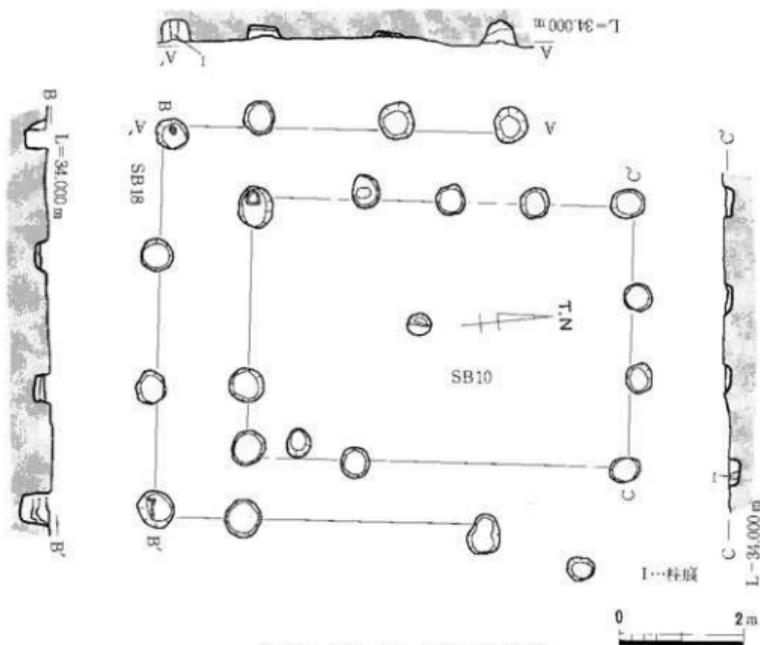
が見当たらず、柱間寸法も不揃いで建物の平面形態は不詳。

**SB19 (第39図)** 東西方向3間(4.5 m)、南北方向3間(4.5 m)の正方形の総柱造りの建物で倉庫と思われる。柱間寸法は1.5 m前後のほぼ5尺等間である。柱の掘り方は上端径50cm前後、深さは最大50cmを計る。柱痕は直径12~16cmを計る。

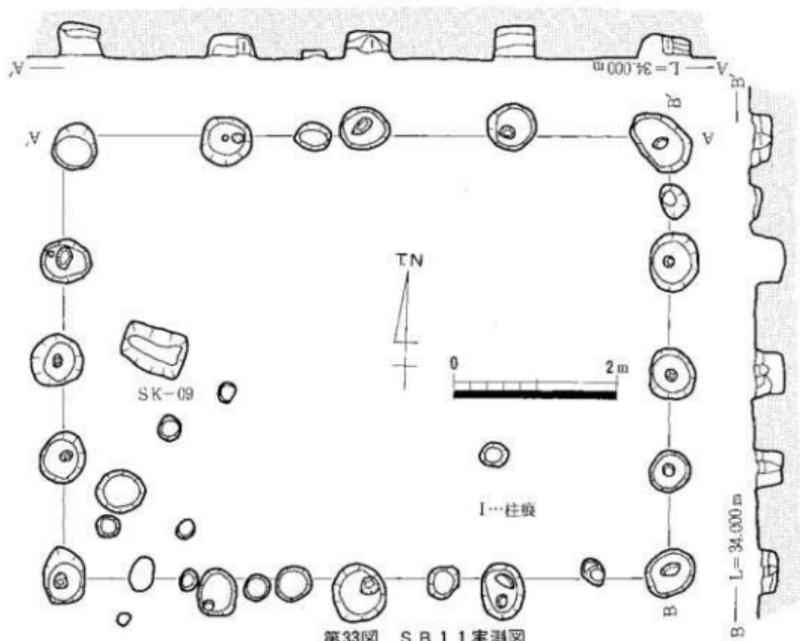
**SB18 (第32図)** SB10の外周に建てられた建物で、東西3間(6.0 m)、南北3間(5.3 m)を計るが確認出来なかったピットが多くある。あるいは、SB10の廂とも考えられるが柱の掘り方がSB10と同じくらいの大きさがあることと、SB10の柱と対応しないことからここでは建物跡として扱った。

**SA04 (第40図)** 東西方向に走る柵列で総延長8.6 mを計るが、柱間距離が0.7、0.9、1.4 mと不等間で、柱痕は直径10~14cm、深さ最大38cmを計る。

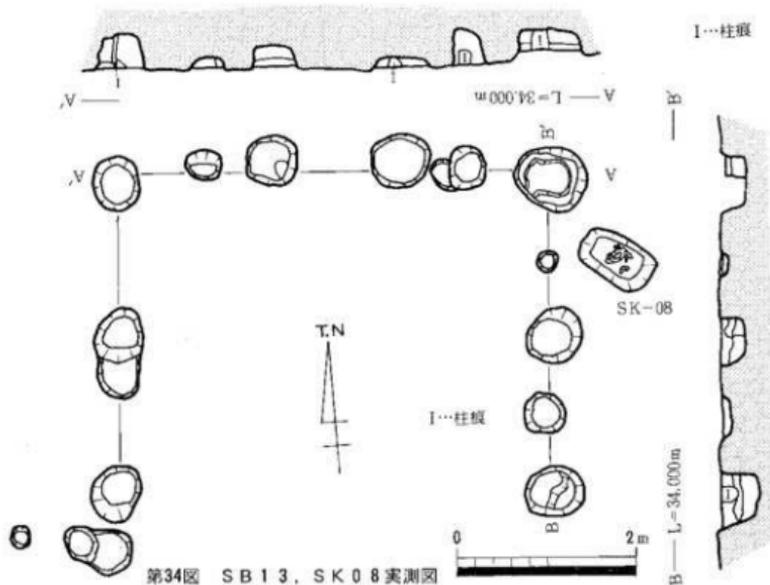
**SA05 (第41図)** 桁行4間以上(5.9 m)、桁行1間以上(1.0 m)の建物と推定されるが、梁間は1 mと極端に短いので、あるいは、東西方向の柵列とした方がよいかも知れない。



第32図 SB10、SB18実測図



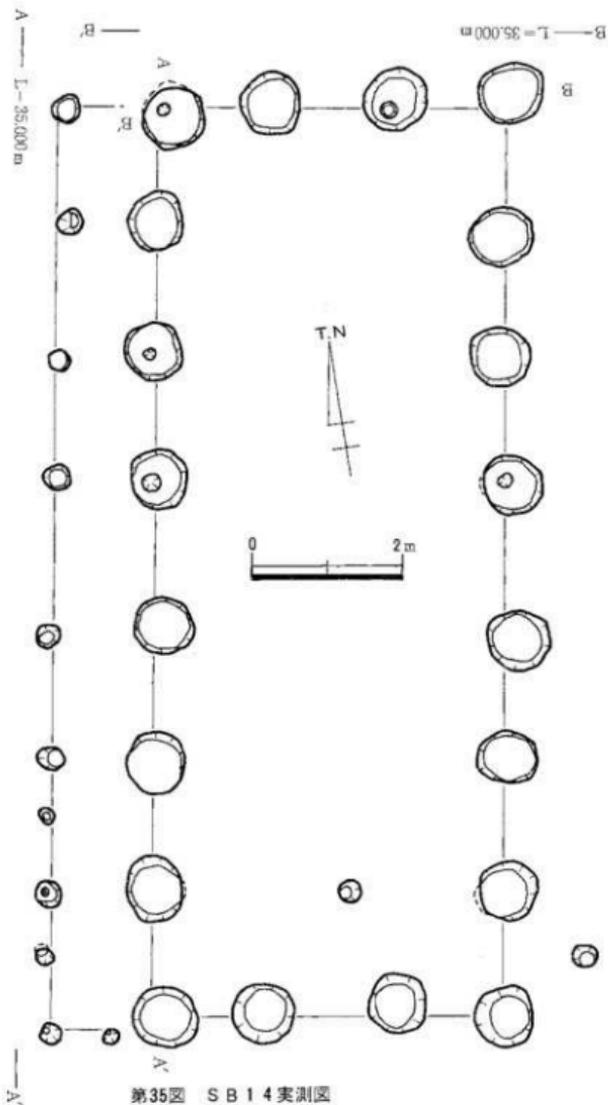
第33图 SB11实测图



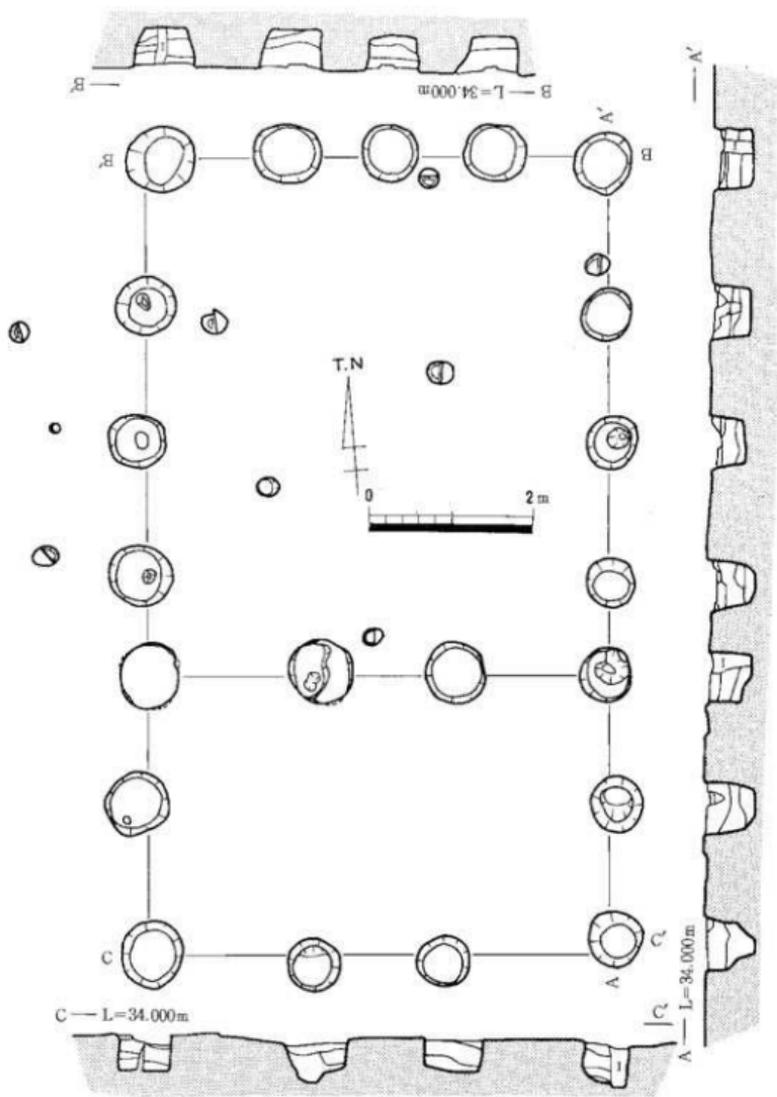
第34图 SB13, SK08实测图

I...柱痕

1. 暗褐色土
2. 灰褐色土



第35图 SB14实测图



第36図 SB15実測図

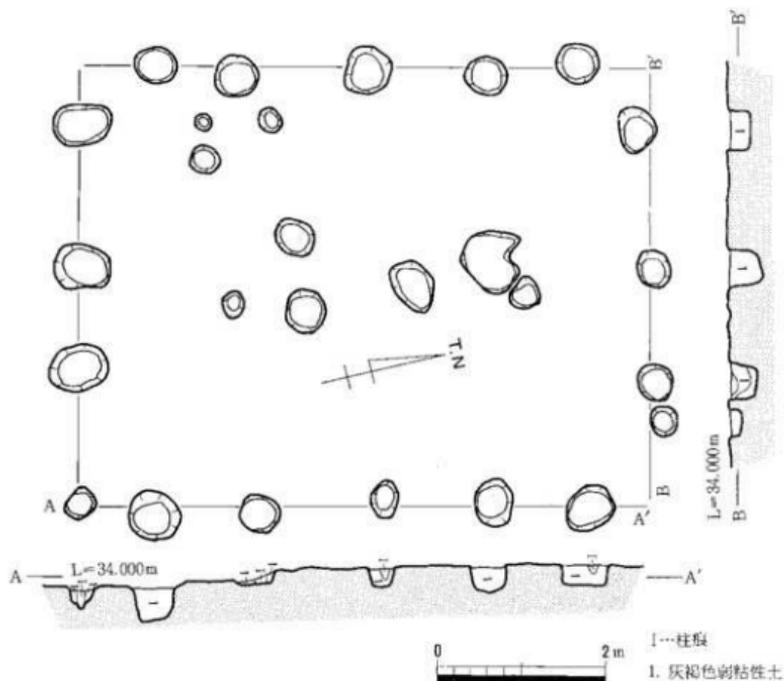
SD01 (第31図) 台地南部から南北方向に屈曲する大溝で、上端幅1.2~2.0 m、深さ平均50cm、長さ30 mを計る。

SD07 (第31図) SD01の北端部から西方へ延びる端で、長さ11.3 m、幅40 cm、深さ5 cmを計る。SD01との前後関係は不明である。

SD08 (第42図) 長さ6 m、幅は最大2.4 mで西方へ延びるが、現水田の段差があり消失していた。

SD09 (第31図) 長さ10.5 m、深さ10 cmを計るが、現水田の段差のある部分のため幅は不明。

SE01 (第43図) 直径1.8 m、深さ約1 mを計る隅丸方形で、東側3分の1が現福原川の河川敷にかかり、消失している。底部には、直径8~20cmの並機が敷きつめてあった。最下層が地山の黄色ブロックを混えたシルト層が堆積していた。SE01よりSD01が古い。



第37図 SB16実測図

SK05 (第41図) SB13の西部地山面に所在し、110cm×90cmの楕円形を呈し深さは15cm。

SK06 (第41図) SA05の内部にあたり、120×80cmの隅丸長方形を呈する。深さ40cmを計る。境内には、90cm×64cmの範囲に厚み2cm前後の板囲いがあり、内部底面から漆器の碗が出土した他、板囲いと土塊掘り方の間から浮いた状態で土師質土器(かわらけ)の破片が出土した。この板囲いの底部は、墳底との間に厚み4～5cmの腐食土層が認められ、中ほどに直径4cm、長さ60cm余りの丸い棒が2本通してあった。中世の古墓と思われる。

SK07 (第42図) SD08の東側に近接する。90×70cmの平面形、長方形を呈し、

深さは30cm。

SK08 (第34図)

SB13とSD01

の中間に所在し、82×45cm、深さ25cmを計る。長方形を呈する。

SK09 (第33図)

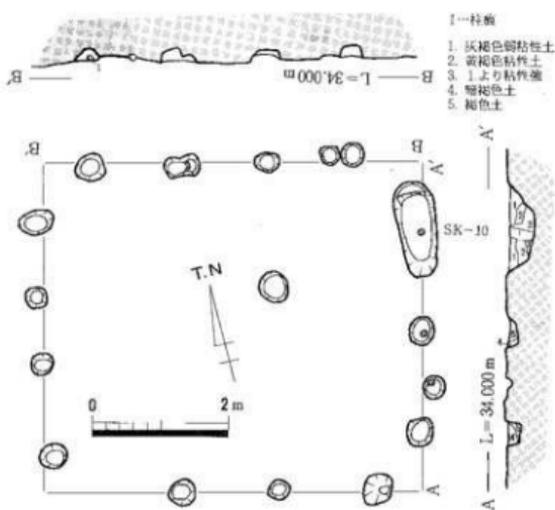
SB11の内側に所在する。平面形は長方形で75cm×50cm余り。東側がやや幅が大きい。深さは51cm。

SK10 (第38図)

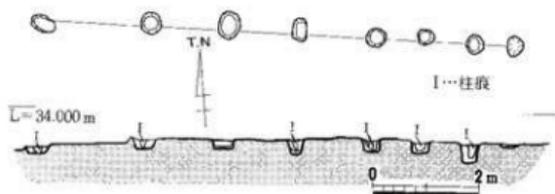
SB17の東辺の柱穴と重なる。長さ1.38m、幅52cm、平面形は方形。深さ40cmを計り、北部は一段と浅くなり、上端は丸味をもつ。

SK11 (第44図)

SD01の東側面に所在し、70×45cmの隅



第38図 SB17実測図



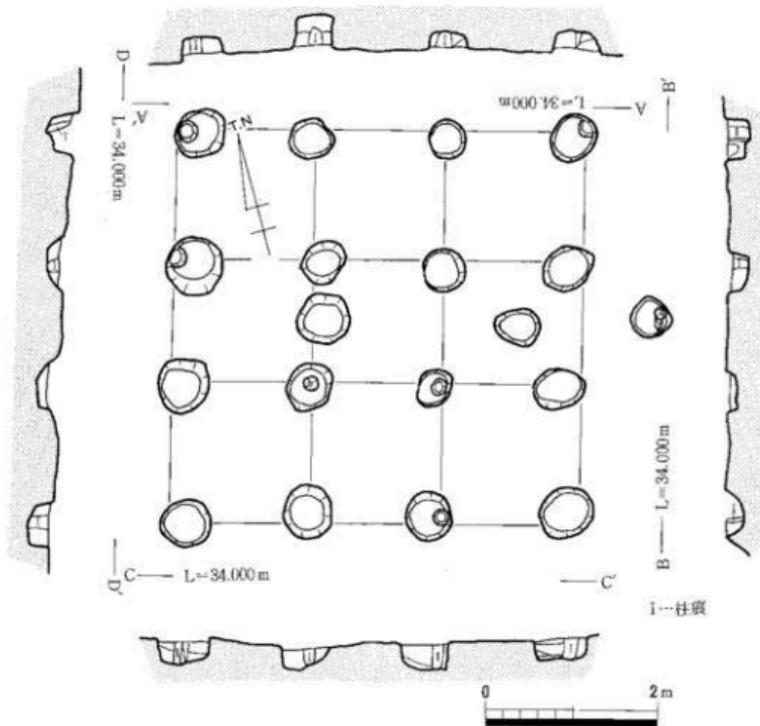
第39図 SA04実測図

丸長方形を呈し、深さ50cm。内部から土師質土器（かわらけ）が出土。

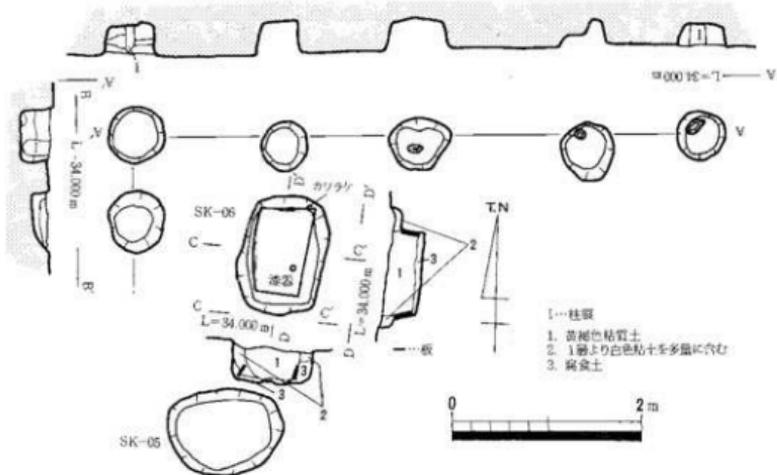
#### 出土遺物

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、磁器、古銭などが出土した。遺構にともなう出土遺物として、SD01からは、第45図-1、2、3、4が出土し、SB11のビット中からは第45図-5が、SK06からは第46図-1が出土した。

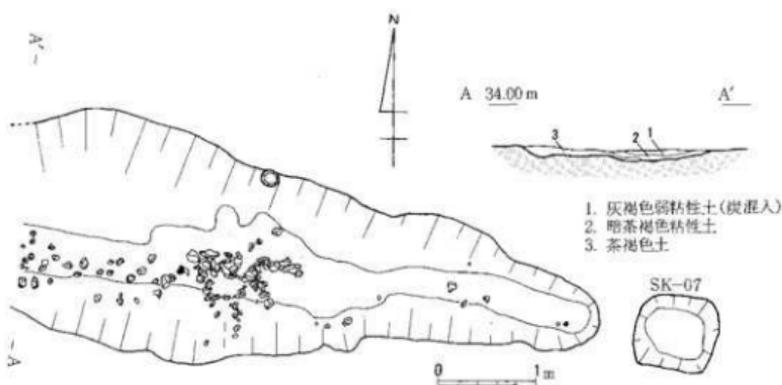
第45-1は、須恵器の坏である。底径8.4cmを計る。平らな底部よりやや外傾して開く体部をもつが、口縁部は不明。調整は全面が摩滅しているため、不明である。形態からみて、柳浦編年の4式であろう。第45図-2は須恵器の高坏の破片である。時期は不明。第45図-3は須恵器の蓋で、口縁部内側にかえりをもつものである。つまみは不明。時期は



第40図 SB19実測図

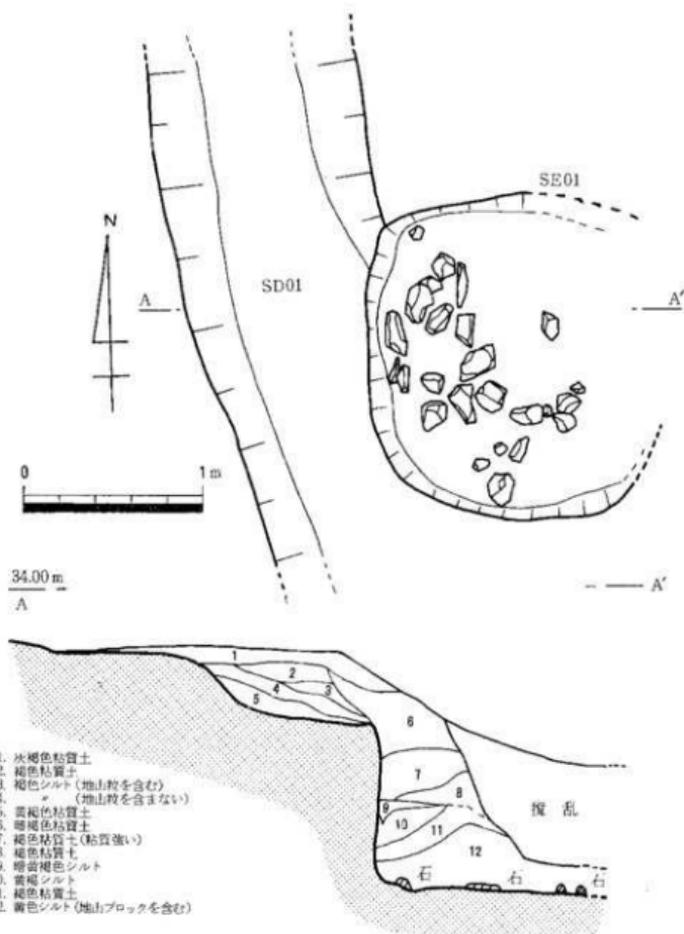


第41図 SA05, SK05, SK06実測図



第42図 SD08実測図

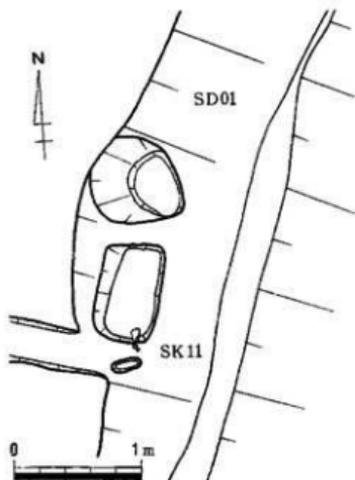
不明。第45図-4は土師質土器の皿である。口径12cm、器高2.5cmを計る。体部は大きく外傾して開き、口縁端部は外にさらに開く。時期は不明。第45図-5は弥生土器の底部で、底径6.5cmを計る。しっかりした底部から外反気味に立ち上がる。底部中央に径1.4cmの穴がうがたれている。第46図-1は土師質土器の皿である。底径9.2cmを計る。板囲いのあるSK06の掘り方と板囲いの間から浮いた状態で出土した。この土師質土器は体部が短



第43図 SE01実測図

く外傾して開くものである。調整は不明である。時期は不明。

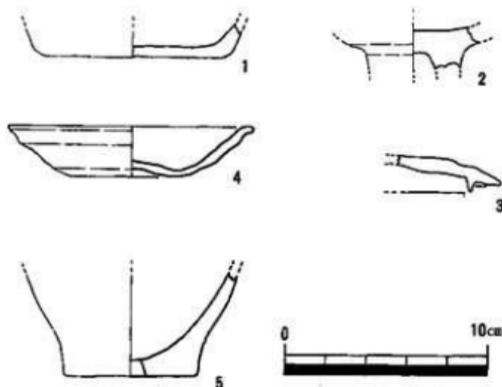
その他遺構にもなわなないが、様々な時期の遺物が出土した(第46図2~15)。第46図-2は七藤質の高台付碗である。第46図-3はこしきの把手である。第46図-4, 5, 6, 7は蓋環である。4, 5は環身で立ち上がりは短く内傾するもので、ヘラ切り後全面ナデ調整を施す。4, 5とも口径は10cm以上である。6, 7は環蓋である。口径部内側にアクセントをもつ。いずれも山本編年のIV期である。第46図-8は口径部内側にかえりをもつ



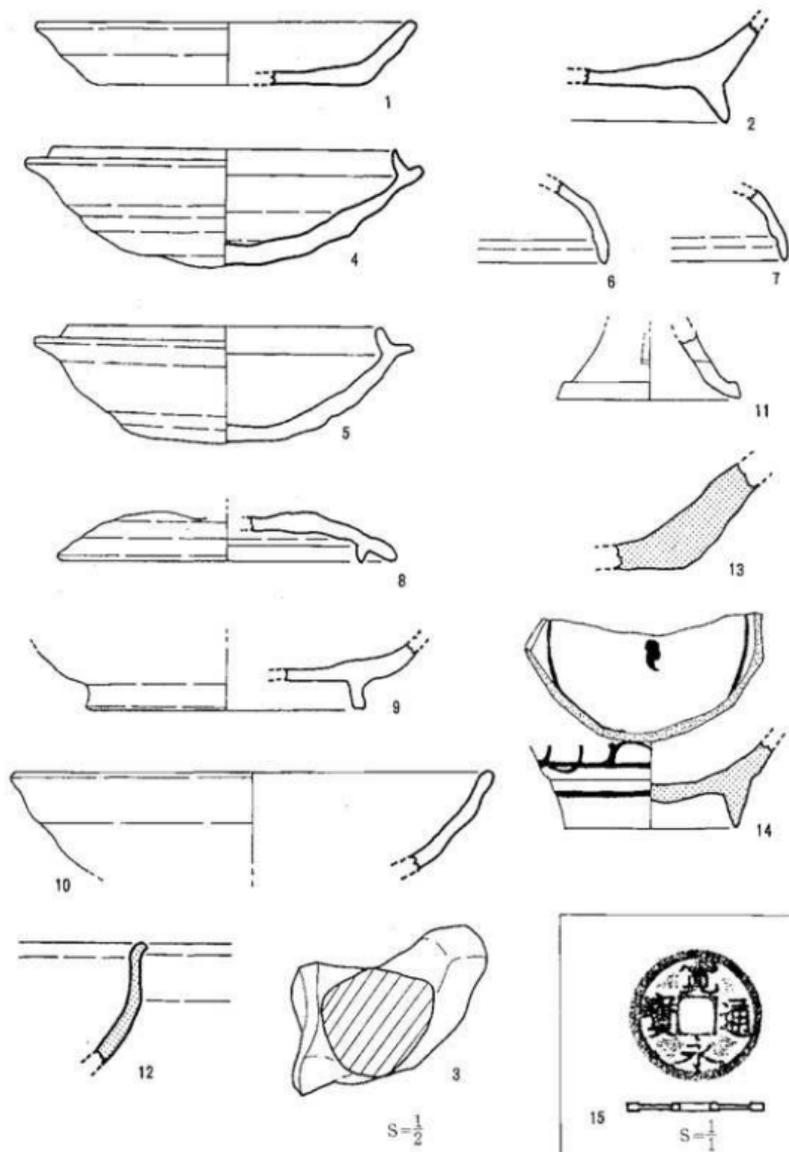
第44図 SK11実測図

第46図-14は磁器の染め付けの碗である。第46図-15は「夏水通宝」の古銭である。

蓋である。口径9.2cmを計る小形品である。つまりは不明だが擬宝珠状つまみの可能性が高い。柳浦編年の1式である。第46図-9は須恵器の高台付坏である。体部は内湾気味に開いて立ち上がるものであろう。切り離しは静止糸切りで、ナデ調整を施すものである。柳浦編年の3式であろう。第46図-10, 11は須恵器の高坏の破片である。第46図-10は高坏の坏部と思われる。体部は内湾気味に大きく開き、口縁部に至る。端部は丸い。時期は不明である。第46図-11は脚部である。形の不明な透しが入る。時期は不明である。第46図-12, 13は陶器である。第46図-12は碗の破片で、第46図-13はすり鉢の底部である。7条の条線が単位となっている。



第45図 SD01内・SD01内ビット・SB11内ビット内出土遺物



第46図 その他の調査区出土遺物

### 1987年度(昭和62年度)

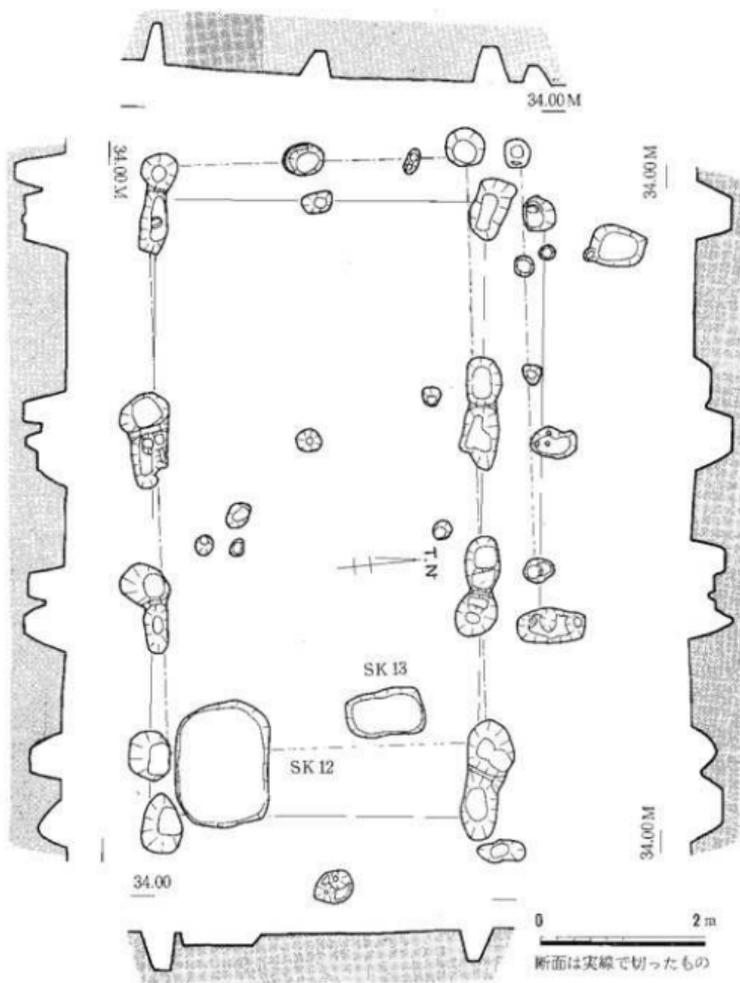
87年度の調査の結果、検出できた遺構は、掘立柱建物1棟(SB20)、土壇4基(SK12~15)、土壇状のもの4基、溝状遺構5条、その他ピット約850本である。そのピットは、大きいもので径70cmのものから径12cmのものまで様々であり、調査区のほぼ全域にわたっていた。X-7区の径26cmのピット上からは、第57図-5の須恵質の礫の底部が出土している。最も多いピットは径20~30cmのものであった。おそらくこのピットのほとんどが掘立柱の柱穴であつたろうと思われるが、立ち並ぶものを発見できなかった。何回も建て替えたであろう建物を残念ながら発見できなかったが、今後、このピット群から建物として立つものを発見し、87年度の調査の性格をさらに検討していきたいと思う。以下各遺構の概要を記す。

**SB20(第47図)** Q-10区に所在する。東辺の柱穴を検出していないが、桁行3間(7.45m)、梁行2間(4.0m)の東西棟の掘立柱建物(TN4°E)と推定される。柱間寸法は桁行約2.5m、梁行2mを測る。柱穴の掘り方は東西隅と南東隅及び西辺中間の柱穴は楕円形で単一のものであるが、他の柱穴は東西に細長く2本の柱穴がつながったものである。単一のものが長径0.35~0.75m、深さ0.32~0.47mを測り、連続式のものが最大長1.0~1.4m、深さ0.2~0.58mを測る。ほぼ東西方向でやや南下りに建て替えが行われたと思われるが、前後関係は不明である。また北辺に平行して長径40cm~80cm、短径約40cmの柱穴3穴と径30cm~40cmの小さい柱穴3穴がやや南下りに並んでいる。SB20にそれぞれ附属していたものと思われる。

**SK12(第47図)** SB20の内部の東南隅に所在する。平面形は上端で東西辺1.5m、南北辺1.1m、隅丸長方形をしており、現存する深さは約0.12mを測る。遺物は出土しなかった。SB20の東南隅の柱穴と切り合いをせず、しかも建物とはほぼ平行しているが、SB20と関係のある土壇であるかは不明である。また性格も時期もわからない。

**SK13(第47図)** SK12と同様にSB20の内部にあり、SK12のほぼ北1mの所に所在する。平面形は上端で南北辺0.96m、東西辺0.55mのややいびつな隅丸長方形をしており、現存する深さは約0.33mを測る。SK12と同様に遺物は出土しなかった。このSK13も建て替えの建物の南北辺にはほぼ平行しているが、SB20と関係のある土壇であるかは不明である。また性格・時期もわからない。

**SK14(第48図)** S-6区~S-7区内に所在する。東西方向に約3m、幅1.4mにわたって径0.2~0.6mほどの石が置かれていて、その石組みの下ほどから土壇を検出した。平面形は、上端で長辺2.7m、短辺1.4mのやや南隅の突出した隅丸長方形をして



第47図 SB 20実測図

おり、その中にさらに長径1.4 m、短径0.8 mのゆがんだ楕円形の土壇が掘られている。深さは、最大で0.5 mを測る。出土遺物は埋土中より須恵質の鉢と思われる破片(第57区-6) 1片が出た。性格はこれだけで判断しかねるが、SK 15のように土壇上に石を置いた土壇墓を検出しているようにSK 14も土壇墓の可能性が考えられる。ただ床面からは遺物は出土していない。

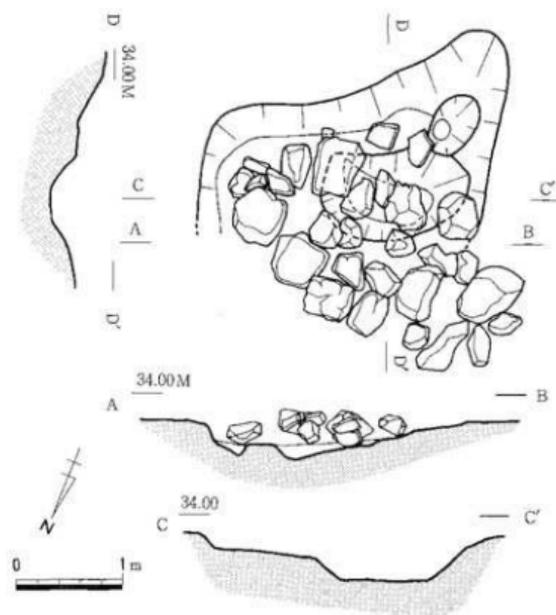
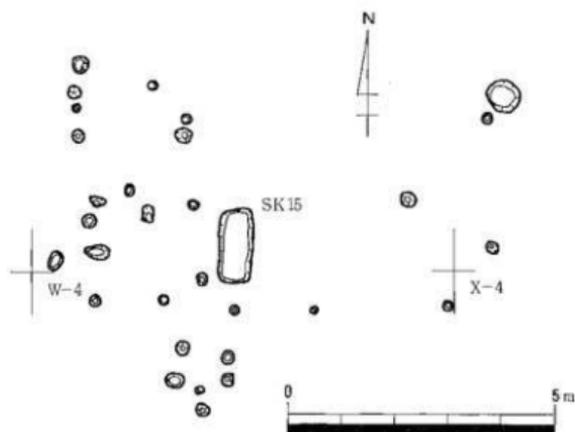


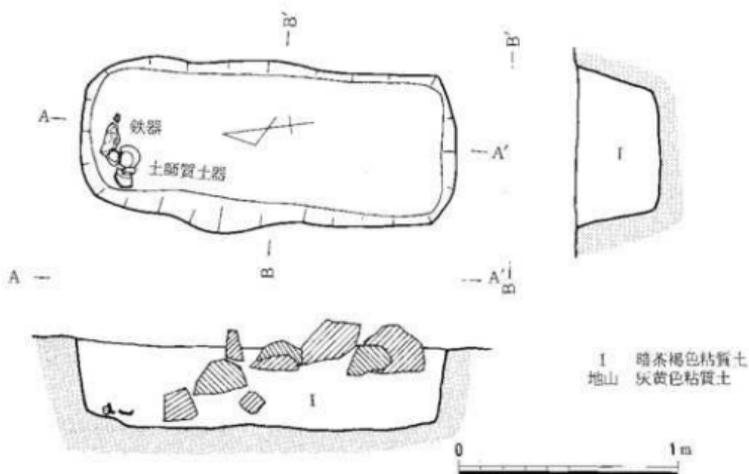
図48 SK 14 実測図



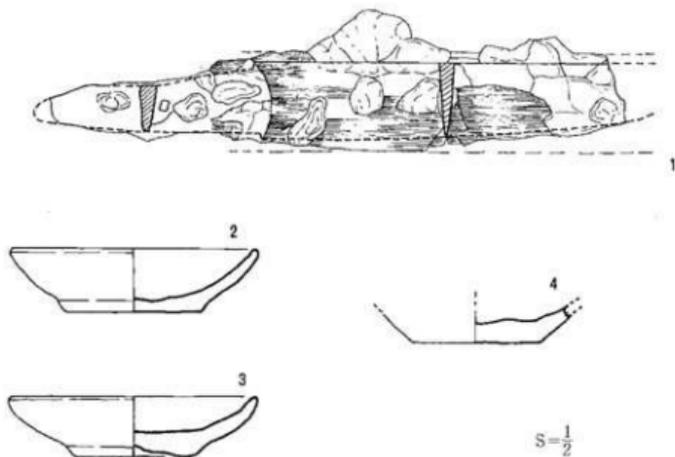
第49図 SK 15 周辺平面図

SK 15 (第49図) W-3区とW-4区との境に所在する。平面形は上端で南北辺1.45m, 東西辺0.65mの長方形をしており深さは0.4mを測る。断面は逆台形をしており上端の床面はほぼ平らであるが、北辺に段がある。その北側壁直下の段が築かれた床面の中央より北西隅の地点から鉄器(短刀)(第51図-1)が1振と土師質土器の小皿(第51図の2~4)が3点出土した。SK 15は木棺直葬の土塚墓である。また土塚上面から内部にかけて大きさ0.1~0.3mほどの石が入り込んでいた。断面図より判断すると木棺の蓋のおさえに使用されていた石が蓋の腐朽によって土塚内部へ流れ込んだと考えられる。また木棺は土塚の広さいっばいに安置されたのでなく、北側は段をついた床面より南側に置かれ、そのすき間に短刀と土師質土器が副葬されたと考えられる。

SK 15から出土した短刀は残存長20cmで基部7cm・



第50図 SK 15 実測図



第51図 SK 15 出土遺物

刀身13cmを測る。基部の中ほどに目釘がつく。刃部はゆるくカーブを描く。木質部の残存の仕方から呑口式と考えられる。2、3の土師質土器は口径8.5cm、底径4.7cm、器高2cmを測り、体部は内弯気味に開くものである。4は、体部から大きく開くもので、2～4

とも底部外面に回転糸切りを残す。以上、出土遺物からも中世の墓と考えられる。

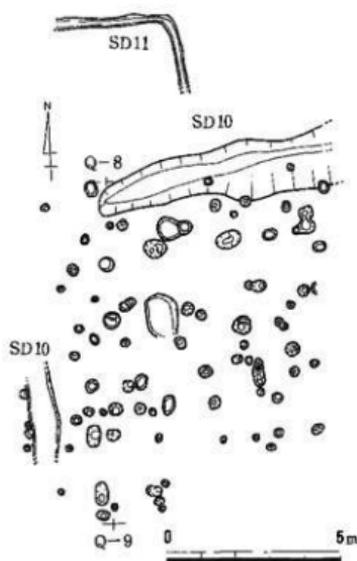
**SD10 (第52図)** R-8区から北へ2.4 m伸びQ-8杭よりほぼ東へ約7 m伸びる。幅は南北に伸びる部分が0.8~0.9 m、東西に伸びる部分が1.2~1.8 mで現存する深さはいずれも浅い。南北に伸びる溝では溝の上端をビット群が切っていることから周辺のビット群より古い時期のものだろう。

**SD11 (第52図)** 東西に伸びるSD10の北にある。西から東へ3.7 m伸び、ほぼ直角に折れ曲り南へ2.2 m伸びて水田の段差によって消失している。幅は0.8~0.32 mで現存する深さは0.12~0.17 m、現存する深さ0.5~0.14 mと浅い。時期は不明である。

**SD12 (第53図)** S-4杭地点からは南へ走る。両端はまだ伸びていく。現存長1.27 m、幅0.7~1.3 m、現存する深さは0.5~0.14 mと浅い。時期は不明である。

**SD13 (第53図)** SD12の東約11 m地点にあり、北から南へ6.9 m伸び、さらに南へ続くと思われる。幅は南へ伸びるに従って広くなり、1.0~1.5 mを測る。現存する深さは0.2~0.14 mと浅い。時期は不明である。

**SD14 (第53図)** SD13の北東約3 mの所にある。北から南へ4.8 m伸びる。最大幅は1.7 mで南へ伸びるに従って狭くなり消滅している。現存する深さは0.5~0.17 mと浅い。北へはまだ続いていると思われる。時期は不明である。



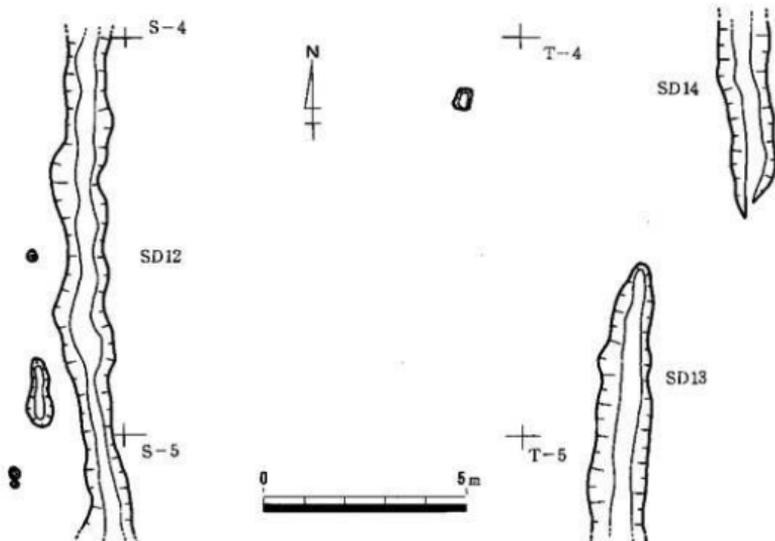
第52図 SD10・SD11平面図

#### 出土遺物

SK15以外で出土した遺物は、u-3区~X-3区の客土中からのものとその他の調査区からのものとに大別できる。

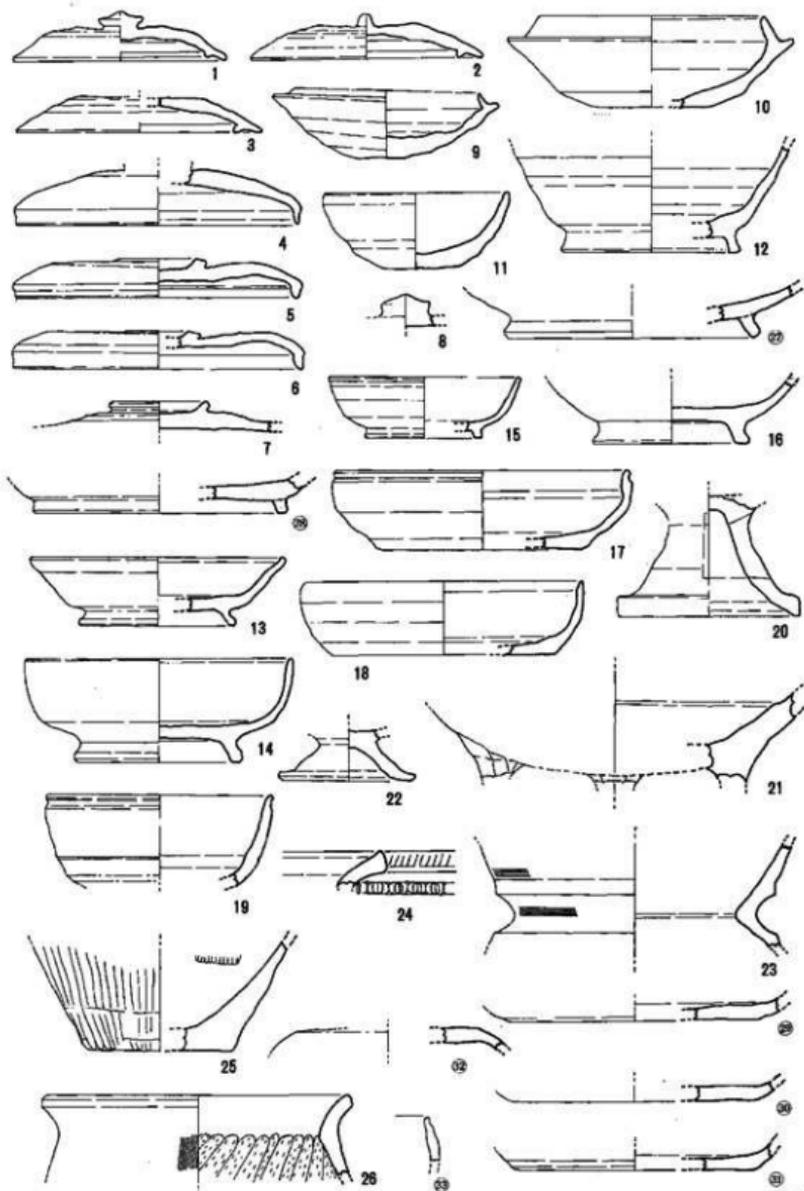
まず客土中からの出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石器の他、墨書土器3点、たぐ1点、丹塗土師器7点である。(54図1~33, 55図1~12, 56図1~4)

54図1~3は須恵器の蓋で口縁部内側にかえりのつくものである。いずれも口径11.0~12.8 cmと比較的小型である(柳浦編年1式)、4~7も蓋で口縁部内側にかえりがつかず、端部が直立するものですべて輪状つまみがつく(柳浦3~4式)。4は器高が高いが他は犬井部中央がくぼむものである。9

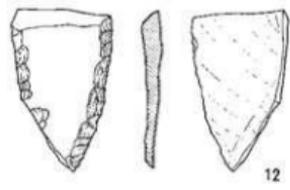
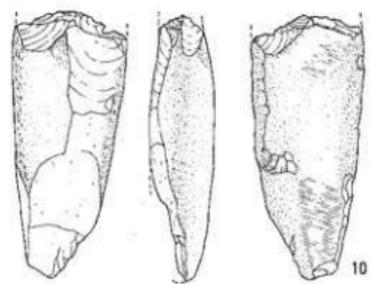
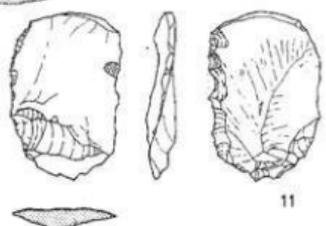
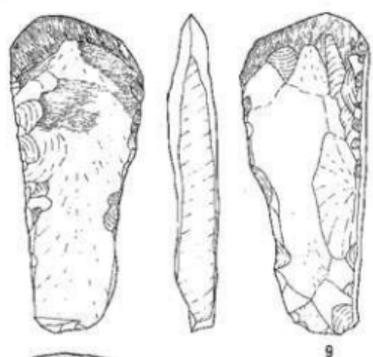
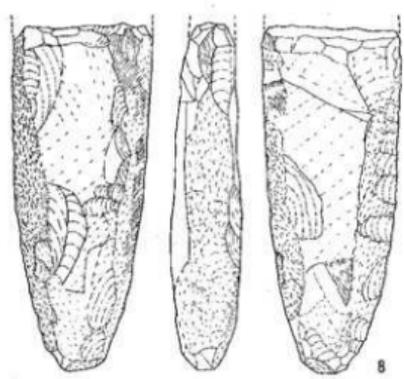
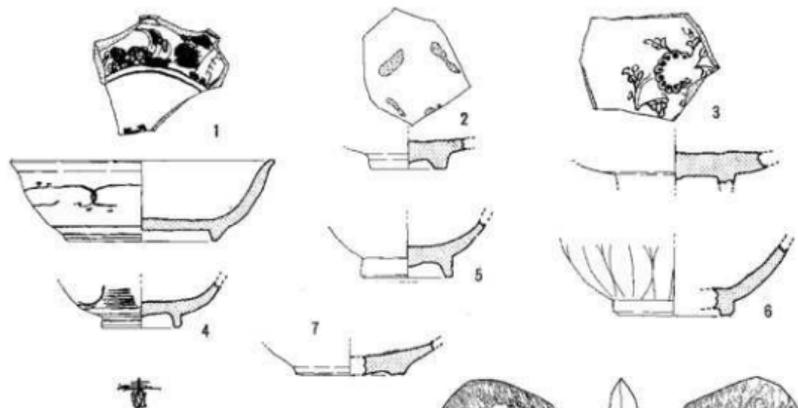


第53図 S D 12, 13, 14 平面図

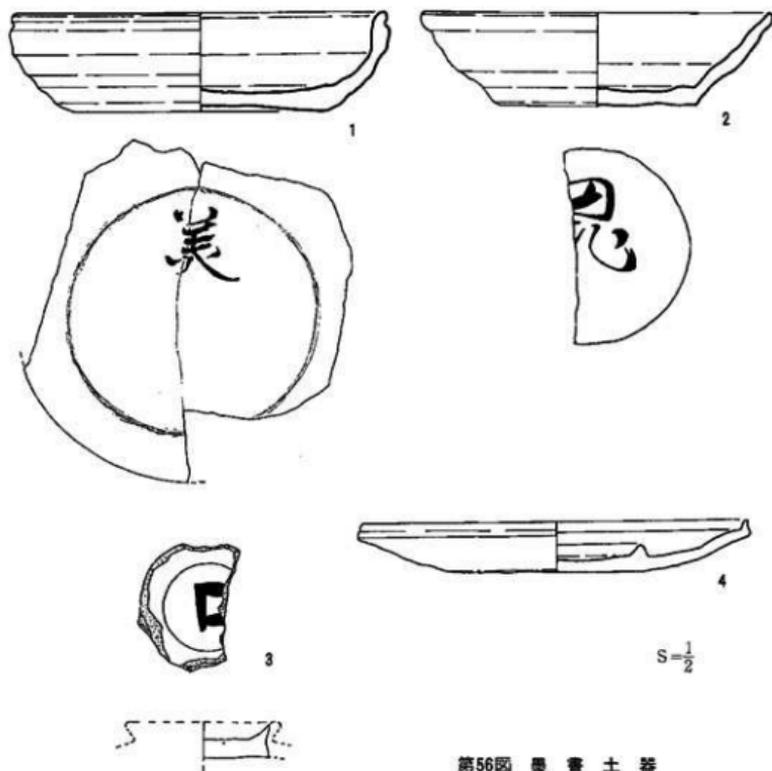
~11は坏身である。9は口径9.5cmと小形品(山本編年IV期ないし柳浦編年1式)だが、10は口径11.6cmで体部外面にヘラ削りが残り、立ち上がりは、9より長く内傾する。山本編年III期の新しいものだろうか。11は坏蓋で小形である。坏の可能性もあるがここではすべて坏蓋としてあつかうことにする。山本編年IV期ないし柳浦編年1式である。12は高台付の壺である。13~16は高台付坏で13は体部が大きく外傾して開き口縁部内側に段をつくる。14~16は体部が内弯して立ち上がるもので14の切り離しは静止糸切りである。17~19は無高台坏である。17は口縁部下でくびれて端部がわずかに外反する。18は口縁部内側に稜をつくる。19は口縁部下にくびれをつくる。17は回転糸切りそのまま、18は静止糸切りである。20は高坏の脚部、21は足付の壺だろう。22は低脚の坏、23は鼓形器台の筒部である。24、25は弥生土器で、24が頸部に指圧文状の突帯がネクタイ状にめぐる壺で弥生中期後葉のものである。26は土師器の壺である。27~33は丹塗土師器である。27・28は高台付坏、29~31は無高台坏で暗文のはいらないもの、32は壺で、33は、口縁が内傾し外面に幅4mm、深さ1mmの沈線を施すものである。55図1、3~6が磁器、2、7が陶器である。1、4は伊万里系の染め付けで1の内面には鶴のような鳥が描かれている。4の内面の底部には寿の文様化したものが描かれている。3、6は、ともに中国製で3の内面には菊の花と葉



第54図 u-3~X-3区, 客土中出土遺物(番号を○で囲むものは丹塗土師器) S=1/3



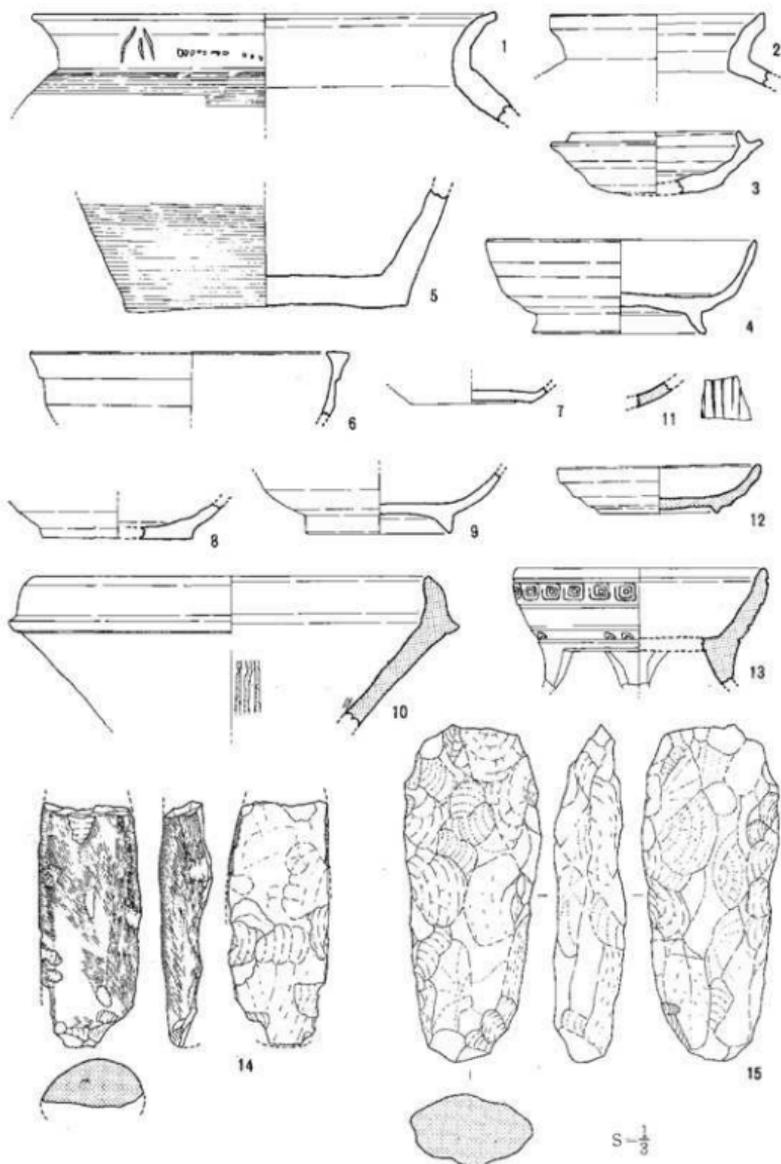
第55图 u-3~X-3区客土中出土遗物 S=1/3



第56図 墨書土器

がスタンプ状に圧されている。6は碗の体部外面が蓮弁文状につくられている。2, 7の陶器はいずれも内面に重ね焼き痕を残す。8～12は石器である。8は上面下面は粗く、両側面は比較的細かく仕上げている。一部磨きがある。9は、全体に粗く仕上げているが刃部は両面から丁寧に磨き上げている。背面に自然面を残す。10は、全面丁寧に仕上げている。所々に磨き痕が認められる。11は、下槌製のスクレーパーである。12もスクレーパーだが、片面より打壊して刃部をつくる。

56図1～3は墨書土器である。1は、口縁部下がくびれて口縁端部が短く外反する。切り離しは回転糸切りのままである。底外面に「美」と書かれている。2は、体部が大きく外傾して開くもので切り離しは回転糸切りのままである。底部内面に「毘」と読める字が書かれている。3は輪状つまみの中に「口」と書かれている。4は、須恵器のたぐである。



第57図 その他の調査区出土遺物

底部はやや丸味をもち体部は大きく外傾して開き、口縁端部で短く立ち上がる。底部内側に径3cmほどの断面三角形の突帯がめぐる。底部・体部外面は丁寧なヘラ削り調整で、内面は横ナデである。

その他の調査区から出土した遺物は、須恵器、須恵質土器、陶器、磁器、瓦質土器、石器である。(57図1～15)

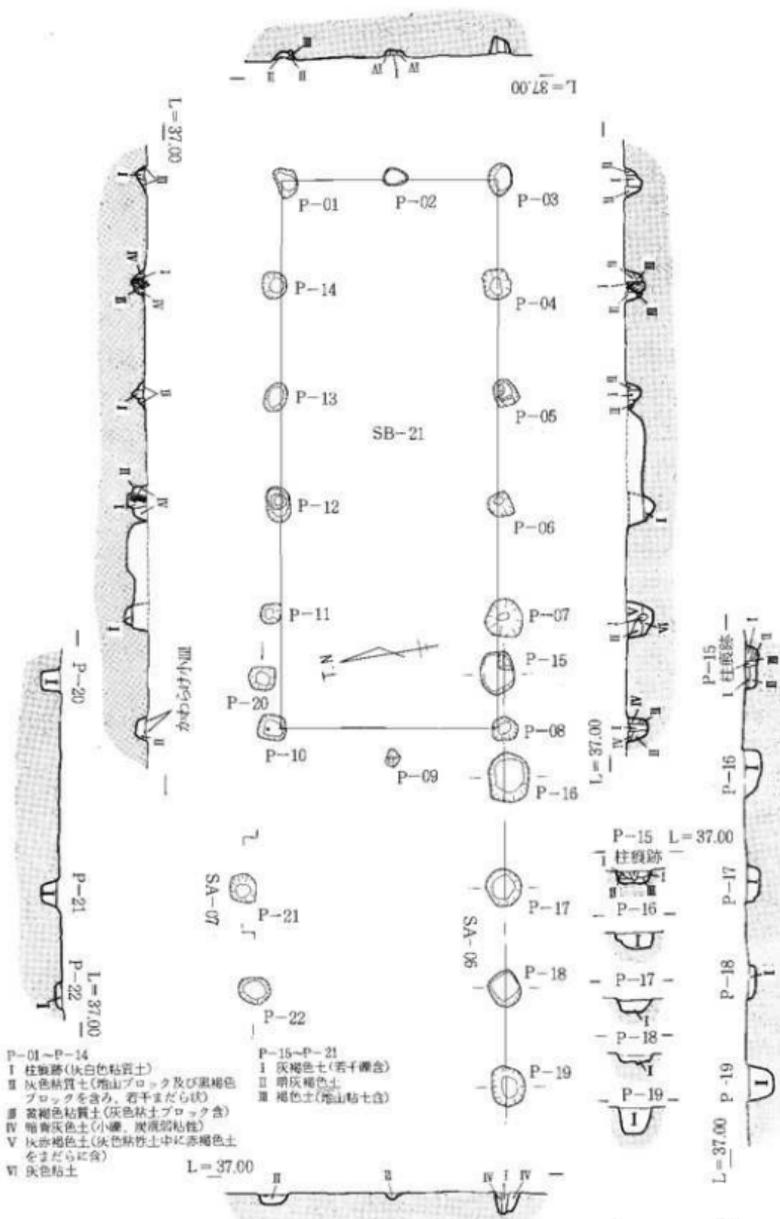
1, 2は須恵器の壺で、1は頭部にヘラ記号がある。体部外面はハケ目とタタキ目、内面あて長痕がある。2は体部内面にあて長痕がある。3は坏身で山本編年IV期。4は高台付坏で体部が内穹気味に立ち上がるもので、体底部外面横ナデである。(柳浦編年3式)

5は須恵質の壺底部である。体部外面にはカキ目めぐる。10世紀以降のものであろう。6は、須恵質の鉢か？口縁上端部は平坦面をつくる。7, 9は土師質の皿と碗である。10は、備前焼のすり鉢で外傾して開く体部から肥厚して立ち上がる口縁部をもつ。南北朝～室町時代後半のものである。11は、青磁の碗の破片で外面に蓮弁文様の刻みが入る。中国製。12は、陶器の小片で透明感のある淡緑色の釉を施す。瀬戸系と思われる。13は、瓦質の香炉で、体部はやや内穹して開く。3足の足がつく。4重の四角の文様が入る。14, 15は石器である。14は、乳棒状石斧の破片である。全面磨きが入る。15は、上面下面とも粗く仕上げられ側面も粗い。刃部も磨きが入らないものである。

#### 1988年度(昭和63年度)

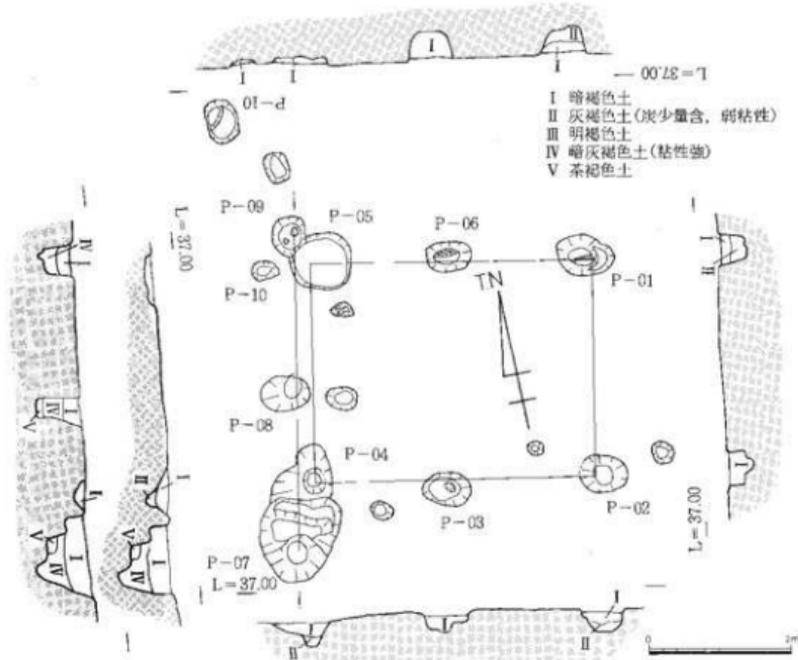
本調査対象区は、字「芝原」の北側から字「東ノ岡」にまたがる3,000㎡である。<sup>註1</sup>主な検出遺構は、掘立柱建物6棟(SB21～26)、河川状遺構1(SX-01)、同一と思われる溝状遺構2(SD-01)、竪穴住居址1(SI-01)、土壌17(SK-16～32)、楕円状遺構3(SA-06～08)であるが、その他にSX-01中にSX-02, 03と呼称する板を組合わせ区画したものと右列状遺構がある。(第77図)

SB-21(第58図) 桁行5間(10.16m)、梁行2間(4.0m)の東西棟掘立柱建物である。柱間寸法は、桁行はほぼ2.0m等間、梁行も2m等間である。建物方向はTN10°E。西側梁は2間のように思えるが、中間の柱穴が柱筋から離れており1間の可能性もある。柱穴掘り方は、円形或いは不整形円で、上端幅48cm～64cm、下端幅16cm～44cm、深さ最小14cm、最大52cmを計る。これらの14本の主柱穴のうち、柱根の残存するものが4穴ある。又、P-10からは、第78図15の回転系切底のかわらけ小皿が一枚、ほぼ完形で出土しており、その出土状況から判断すると、この遺物は流れ込みとは考え難く、この建物群の存立<sup>註2</sup>時期にほぼ近いものと思われる。また、83年度の試掘調査時にSP-11から遺物が出土して



- P-01-P-14  
 I 柱線跡(灰白色粘質土)  
 II 灰色粘質土(堆山ブロック及び黒褐色ブロックを含み、若干まだらけ)  
 III 高褐色粘質土(灰色粘土ブロック含)  
 IV 暗黄灰色土(小礫、炭屑混粘性)  
 V 灰赤褐色土(灰色粘質土中に赤褐色土をまじらに含)  
 VI 灰色粘土
- P-15-P-21  
 I 灰褐色土(若干礫含)  
 II 暗灰褐色土  
 III 褐色土(堆山粘土含)

第58図 SB-21, SA-06, 07実測図

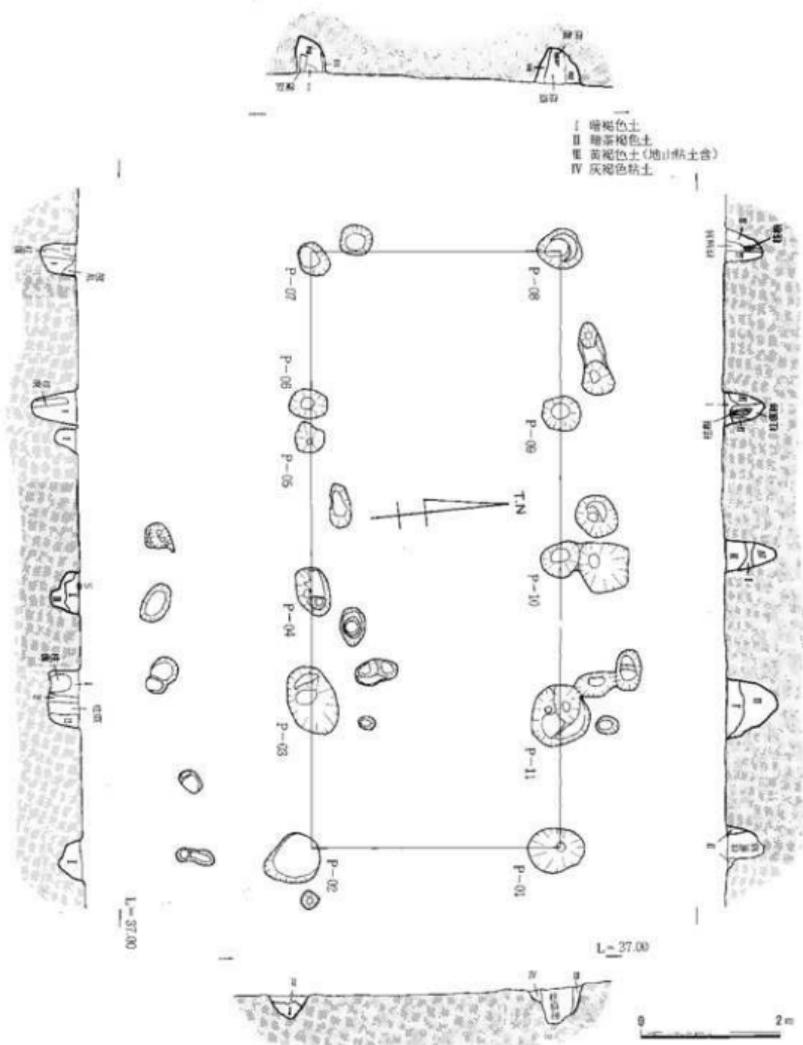


第59図 SB-22, SA-08実測図

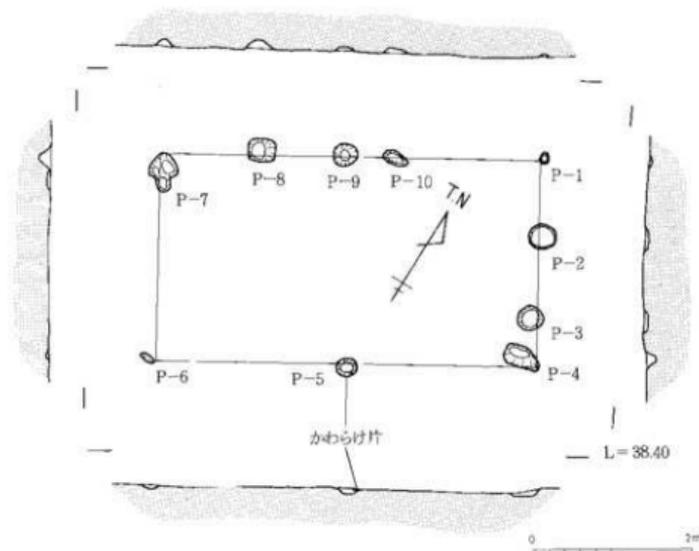
おり、それらの遺物から判断してSB-21の時期は、室町～江戸期と思われる。

**SB-22 (第59図)** SB-21より西に7.6mを隔てている。桁行2間(4.0m)、梁行1間(3.10m)を計る。柱間寸法は、P-01～P-02が3.1m、P-02～03が2.18m、P-03～04が1.78mを計り、P-04～P-01は、対辺に対応し同一の柱間を計る。建物方向は、TN10°42'で、SB-21と近い方向を示す。柱掘方は、径66cm～88cmと不均等な不整形で、深さも12cm～40cmとばらつきがある。またP-04～05の梁間に平行してP-07～09があるが、これらの柱穴の性格については、SB-22の建替、或いは、柵列状遺構の両面の可能性を考慮することができ、明瞭に断定することはできない。このSB-22からは、出土遺物はないが、建物方向や建物間隔、棟方向から判断すると、SB-21と近い時期の遺構と考えられる。

**SB-23 (第60図)** SB-22より南へ8mを隔てる。桁行4間(8.74m)、梁行1間(3.6m)を計るが柱間寸法は、梁間が3.6m(P-01～02)、桁行のうち南面はP-02～03、P-04～06、P-06～07がそれぞれ2.10m、1.6m、2.90m、2.14mを計る。桁行の



第60图 SB-23实测图

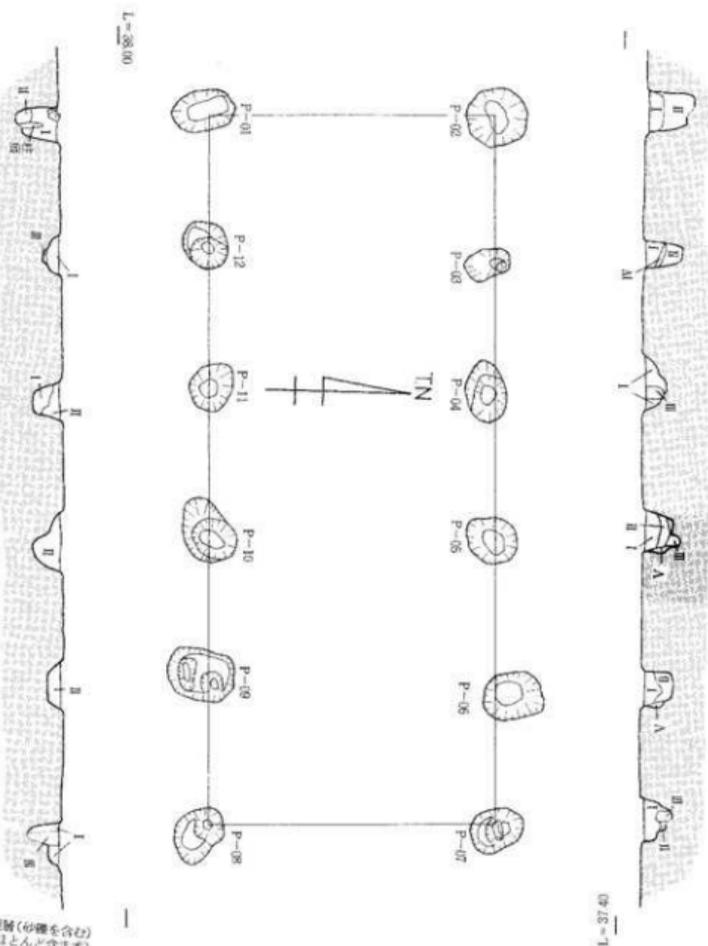


第61図 SB-24実測図

うち北面は、P-08～09、P-09～10、P-10～11、P-11～01がそれぞれ2.43m、2.07m、2.12m、2.12mを計る。11本の柱穴のなかで6本に柱痕跡を検出し、ビット中の精査で、その内の2本に柱根を見出すことができた。(第95図63) 柱掘方は、不整形凹形や楕円形で企画性に乏しく、上端径、最大96cm、最小58cm、下端径も同様に64cm～14cm、深さは72cm～36cmとまちまちである。又、P-03は、2本の柱痕跡を有していることや、P-04～06間に掘方の規模の小さなP-05が存在することは、このSB-23の建替或いは、改築の可能性を考えることができる。

出土物は、P-11の埋土中より唐津系の陶器底部一片が出土している。(第78図、8) 出土層位は第2層の暗茶褐色土中で、高台部を下に底部内面を上にして出土した。底部内面には重ね焼痕を有し灰釉を施す。外面には、残存部の一部に灰釉を観察することができる。高台は削り出しで作りは荒く、調整は削りのちナデによる。色調は赤褐色を呈し、胎土は密である。この遺物にみるSB-23の時期は、江戸期と思われる。

SB-24(第61図) Y-96、Z-96両区にまたがって検出した掘立柱建物である。SB-21の北東48mを隔て、梁行2間(2.6m)、桁行4間(4.72m)の規模を持つ。柱間寸法は、東の梁間P-1～2が96m、P-2～P-4が1.64m、南の桁行は2間でP-4～P-5が2.36m、P-5～P-6が2.36m、西の梁間は1間で2.6m、北の桁行は4間



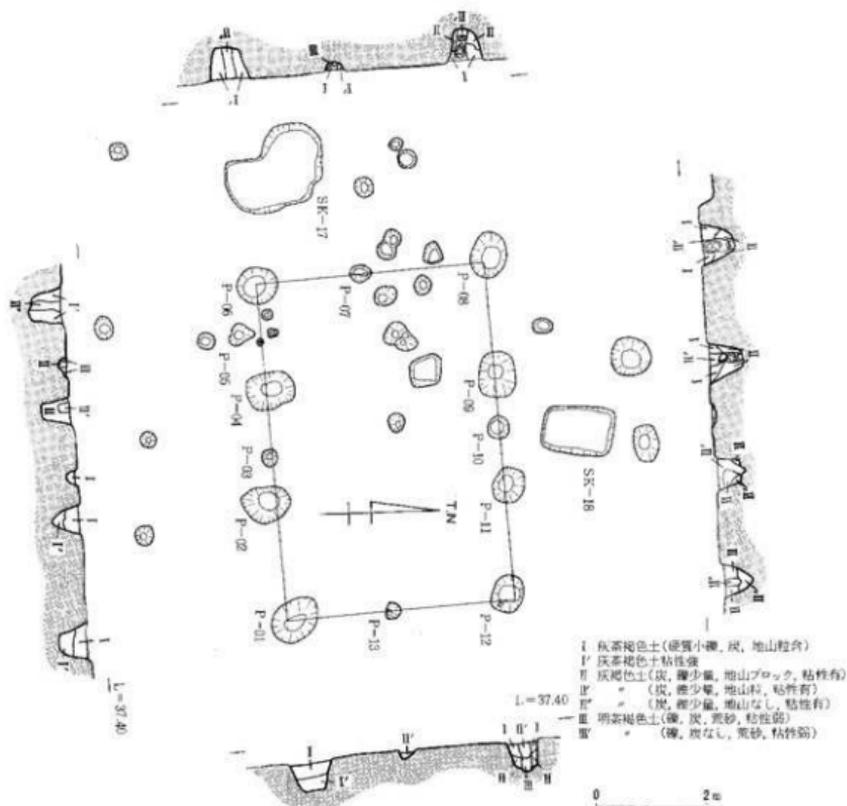
- I 黄褐色と灰褐色の混層(砂礫を含む)
  - II 灰褐色粘土(砂礫をほとんど含まず)と黄褐色土の混層
  - III 灰褐色粘土(柱層)
  - IV 明黄褐色砂礫層
  - V 黄褐色土
- \*地山は明黄褐色土で表面5~10cm位までは砂礫を多く含んでいる。

第62図 SB-25 実測図



でP-7~P-8は1.24m, P-8~P-9は1.05m, P-9~P-10は0.6m, P-10~P-1は1.8mを計る。検出された柱穴の平面形は全て不整形円で、上端径は23cm~16cmを計り、深さは5cm~12cmを計る。柱穴の検出された面は、畑の耕作土直下で、畝状の起伏によって攪乱を受けている。全ての柱穴の掘方が小さく浅いのは、長年の耕作で表面が削られ遺構面が低下した為と考えられる。このSB-24は、SB-21~23の立地する面からは1.4m程高所に位置するが、P-5よりかわらけ小片が1片出土しており、その遺物から判断すると中世以降の建物と考えられる。建物方向はTN 31°6'Wである。

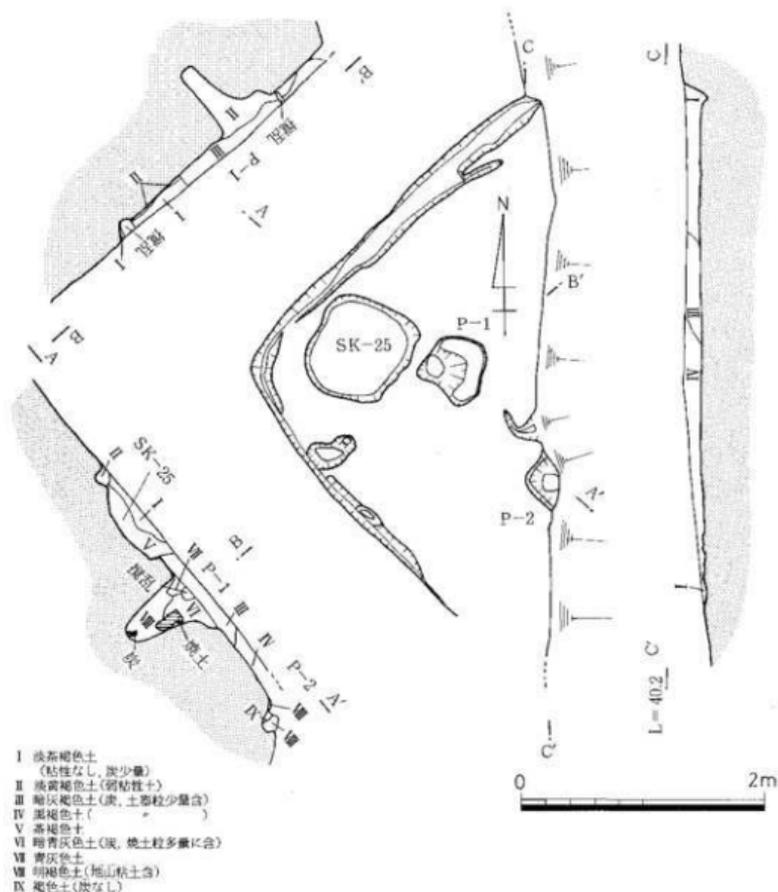
SB-25 (第62図) R-0~S-0区にまたがって検出された掘立柱建物である。SB-21の西側23mを隔て、梁行1間(4.0m)、桁行5間(10.02m)の規模をもつ。柱



第63図 SB-26 実測図

間寸法は、東西の梁間が4.0 m等間で、桁行もそれぞれ2 m等間である。柱穴の掘り方は、平面形はほぼ円形或いは楕円形で、40cm～80cmを計る。深さは24cm～64cmであるが、柱穴土層断面で柱痕跡を確認できるものが多数ある。建物方向はTN 1°30'Wで主軸はSB-21～23の群とは方向を異にしている。ピット中からの出土遺物が皆無なので、時期を判断することは困難であるが、SB-21～23の群とは、その方向性から判断すると若干の時間的差があると考えられる。

SB-26 (第63図) O-0～P-0区にかけて検出された梁行2間(4.0 m)、桁行

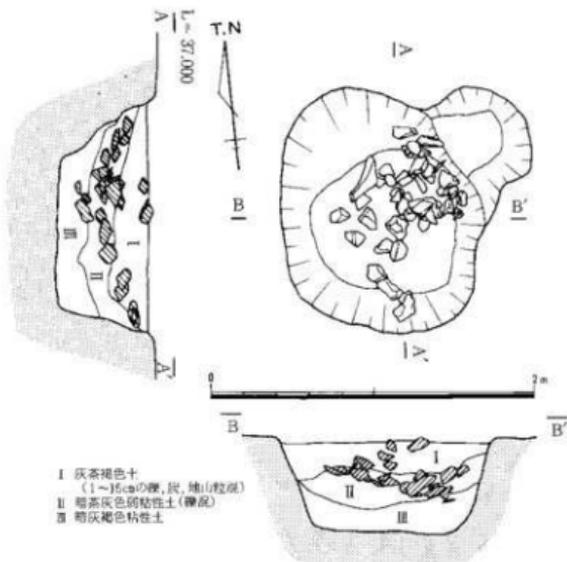


第64図 S I - 01 実測図

4間（5.96m）の掘立柱建物である。S B-25から西に22mを隔てているが建物主軸は、 $TN 1^{\circ}18'W$ でS B-25と方向が近い。柱間寸法は、南面の桁行P-01～02が2.12m、P-02～03が0.76m、P-03～04が1.2m、P-04～06が1.88m、西面の梁行P-06～07が1.8m、P-07～08が2.2m、北面の桁行P-08～09が1.92m、P-09～10が1.0m、P-10～11が1.0m、P-11～12が2.04mを計り、東面の梁行は西面の梁行と同一の計測距離を示す。掘方寸法は、略円形で上端径32cm～76cm、下端径10cm～40cm、深さ20cm～60cmを計る。また桁行の中央P-03とP-10、梁行の中央P-07とP-13は全て小型のピットで浅い。これは、他の全てのピットと比べて大きく深いことから、削平による偶然的所産とは考えられず、意識してこのような柱の配置と建て方をしたものであろう。

S 1-01（第64図） 調査区の北側、現在の墓地となっている地区の西側より検出された竪穴住居址である。調査以前は休耕畑だったところで、表土約25cmを取り除くと、明黄褐色の地山平面の一面に、三角形に暗灰褐色の炭と土器粒を含んだ土層を検出した。その中に土層観察用の銚を十文字に残し、精査を開始した。その結果、住居内壁沿いに幅最大19.2cm、深さ最大5cmを計る、U字溝の巡る竪穴住居であることが判明した。住居の東側は、農業水路の工事の為、削除されており、全景を窺い知ることはできない。しかし残存する遺構から判断すると、平面形は一辺3.25m以上の隅丸方形を呈すと思われる。柱穴は、2本（P-1、2）を検出した。P-1は、上端径最大56cm、下端径17cm、深さ65cmを計る。P-2は上端径48cm、下端径14cm、深さ20cmが残存していた。U字溝は北西内壁沿いに、長さ2.69m、幅28cm、深さ5.6cm残存するが、南西内壁沿いには、部分的にわずかにV字状に残るのみで、南東隅で内壁と共に消滅する。また内壁高も最大17cmと低いので、後世の擾乱によって遺構面が削平されたものと思われる。主柱穴は2本検出されているが、P-1は埋土中に多量の焼土粒、炭、長さ22cmの焼土塊を含んでおり、主柱穴と断定し難い。P-2は半分が削除されており、その状態での判断しか出来ないが、非常に浅いので主柱穴ではない可能性もある。以上のことから、このS 1-01の規模は、一辺3.25m以上の隅丸方形竪穴住居で、内壁沿いに小溝を付帯するもので、主柱穴が何本かは不明であると言わざるを得ない。また、その他の関連遺構として、何の施設等については、残存部には検出できなかった。

出土遺物は、第78図、1・2がある。1は南隅の床面付近より出土した弥生式土器の壺口縁部～肩の破片である。磨滅の為調整は不明であるが、口縁部は内傾し端部は鋭く、三条の沈線を施すものである。弥生後期に属すと思われる。2も1と同位置の床面付近から出土している。口縁部～体部にかけて残存するが、端部は欠損している。口縁部径は10cm

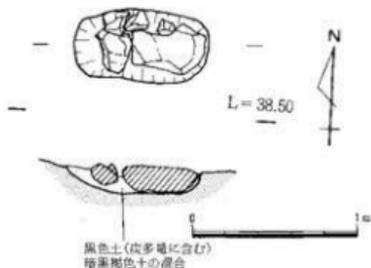


第65図 O-0区SK-16実測図

註3  
では、堤廻遺跡<sup>註3</sup>や本庄町の的場遺跡がある。

SK-16 (第65図) O-0区より検出された墓墳である。一部他のピットによって切り取られているが、平面形は不整形を呈し、底部も円形を呈す。上端径は1.34m、下端径0.92m、深さ0.6mを計る。検出面から底部まで3層に分かれ、最上層と中層には多量の転石が検出された。また最上層は炭も含んでいた。遺物は2個体出土している(第78図9, 11)。9は唐津系の高台付皿で、内外面共に灰茶色の釉が施されている。また内面には、重ね焼痕を残している。11も唐津系高台環皿で、口縁部内面にアクセントをもつ。内外面共に淡緑色の釉を施し、高台は削り出しによる。この遺物にみるこの土壌の時期は16

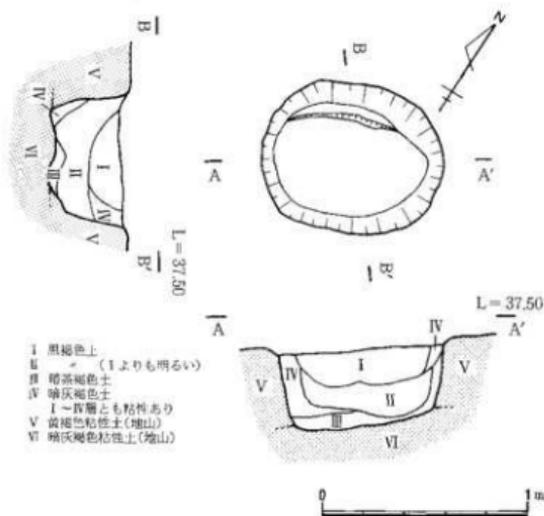
世紀頃と考えられる。



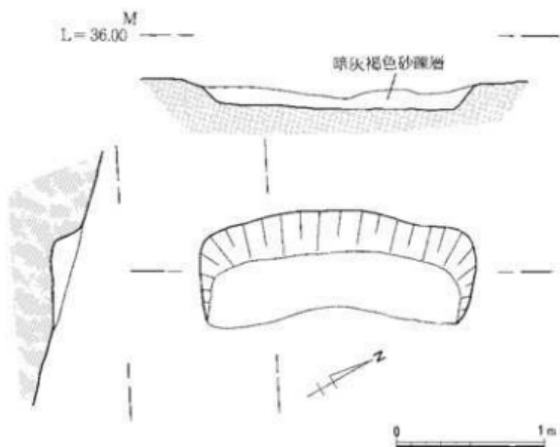
第66図 Q-0区SK-19実測図

SK-17, 18 (第77図) SK-17はO-0区より検出された土壌で、SB-26の西側より1mを隔てている。2つの土壌の切合いがあると思われるが、深さ10cmと浅く、遺物も皆無であったので、性格等については不明である。SK-18は、P-0区より検出された土壌で、SB-26の北側より40cmを隔てる。この土壌もSK-17同様な性格

前後になると思われる。形態的には、小型丸底甕的な様相に似ているが、複合口縁をもっている。複合口縁部の稜もやや鋭いものである。これも磨滅の為調整は不明である。この遺物の時期は、小谷式に若干先行する時期と思われる。従って遺物にみるこのS I-01の時期は、小谷式に若干先行する時期としておきたい。この堅穴住居址と時期的に比較的近い遺構とし



第67図 X-1区SK-21実測図



第68図 SX-01内SK-23実測図

土壌である。掘方はSK-21と類似している。掘方規模のうち、上端長辺は1m、短辺は80cm、深さ80cmを計る。遺物その他の出土はなかった。SK-23は、SX-01の埋土上より検出された隅丸方形土壌である。長辺1.86m、短辺74cm以上、深さ最大20cmを計る。切合関係からSX-01より新しい時期の遺物と考えられる。

不明である。

#### SK-19 (第66図)

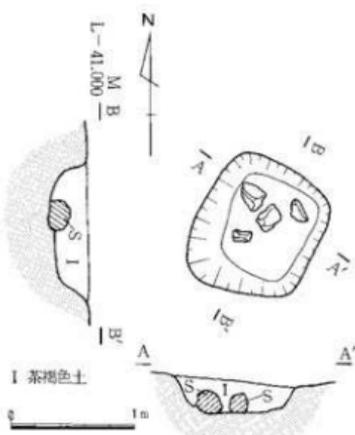
Q-0区より出土した隅丸長方形土壌である。長辺82cm、短辺44cm、深さ24cmを計る。埋土は炭を多量に含む黒色土と暗黒褐色土の混層で、長さ44cmの大型の転石や15cm前後の角礫を含んでいる。遺物の出土がないので、時期や性格を確定することはできないが、炉のようなものの可能性がある。SB-25と4mを隔てているので、関連の施設かも知れない。

#### SK-21 (第67図)

X-1区より検出された楕円形土壌である。平面形は、長辺88cm、短辺74cm、深さ42cmを計る。遺物の出土は無かった。

#### SK-22, 23 (第77図, 68図)

SK-22はX-1区のSD-01とSX-01間で検出された楕円形

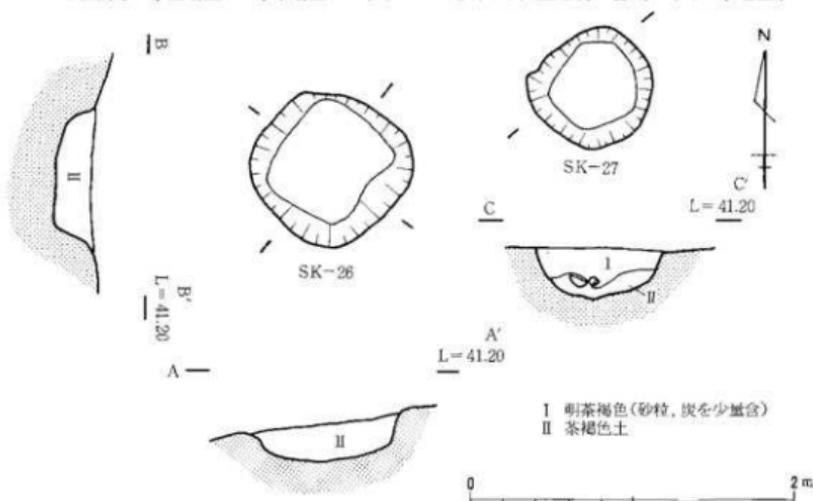


第69図 SK-24 実測図

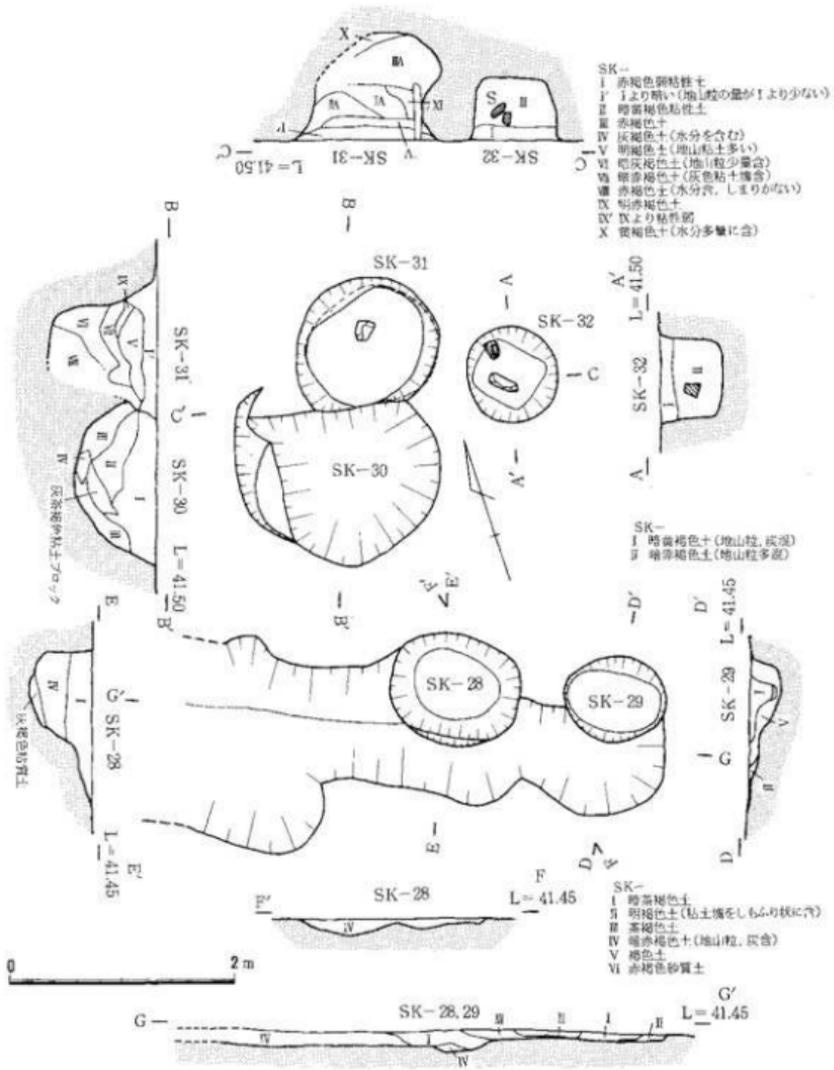
SK-24, 25 (第69図, 64図) SK-24はZ-94区, S I 01の西2.4mを隔て検出された隅丸方形土壌である。上端は一辺96cm, 下端は一辺70cm, 深さ14.14cmを計る。埋土は、茶褐色土一層で、底に4個の17cm前後の礫が密着していた。SK-25はS I 01検出面から確認され、切合関係から明らかにS I-01より新しい土壌である。この土壌も、上端一辺85cm, 下端一辺68cmの隅丸方形土壌で、SK-24と埋土も一致することから、同時期に存在したものと考えられる。また出土遺物については、SK-24中から、灯明皿と思われる回転糸切底のかわらけ片(第78図, 3)が一片出土している。

これらの土壌については、現在の墓地の東という立地条件を加味して考えると、中世以降の土壌基と考えることができる。

SK-26, 27 (第70図) X-92区, 現在の墓地の北から検出された。SK-26は、上端一辺90cm, 下端一辺60cm, 深さ14.14cmを計る隅丸方形土壌である。SK-27は、平面形は不整形円で、上端径71cm, 下端径54cm, 深さ31cmを計る。出土遺物は皆無であるが、埋土、



第70図 SK-26, 27 (X-92区) 実測図



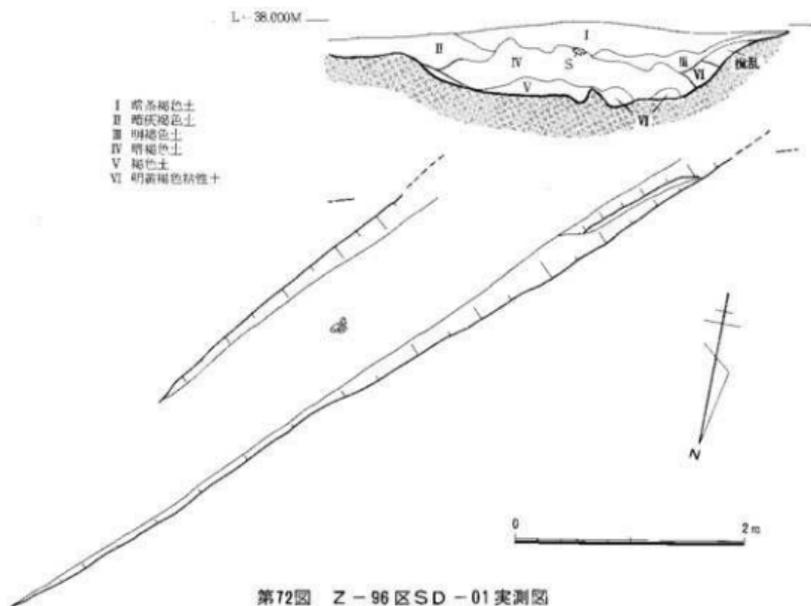
第71図 SK-28～32実測図

掘方、立地条件等から考えると、SK-24, 25と同様に中世以降の土壌墓と考えられる。

**SK-28～32 (第71図)** Z-88区, SK-28, 29は、平面楕円を呈し、上端径はそれぞれ1.16m～1.0m, 1.0m～0.76m, 下端径0.78～0.6m, 0.82～0.51m, 深さ0.56m, 0.28mを図る。SK-30, 32は平面円形を呈し、上端径はそれぞれ1.41m, 1.27m, 0.79mを計り、下端径はSK-30は丸底の為測定不能だが、SK-31, 32がそれぞれ1.01m, 0.48mを計る。深さは、0.74m, 0.96m, 0.57mを計る。これらの土壌群についての性格は、不明と言わざるを得ないが、SK-28, 29とSK-30～32とは、埋土や掘方等から考えて、時期を異にすると思われ、またSK-30と31も切合関係から31が新しいと考えられる。

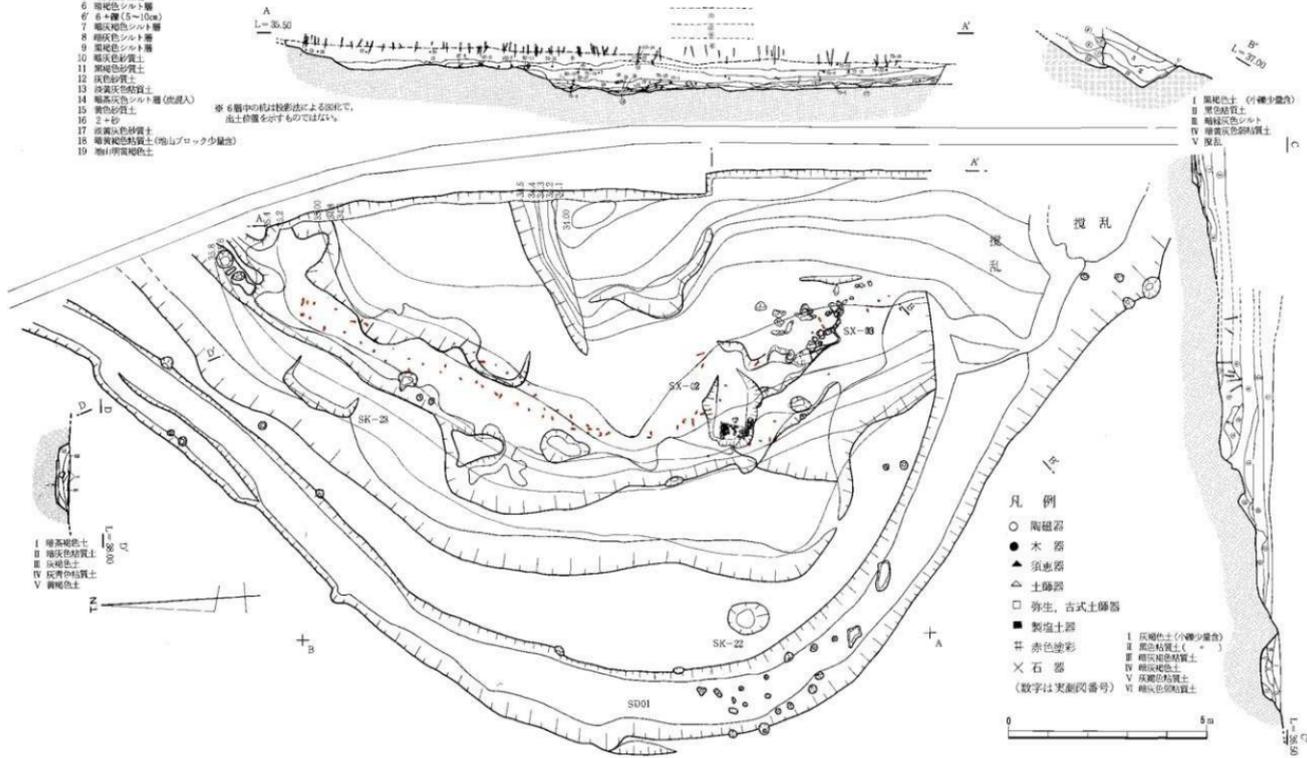
**SD-01 (第72図)** Z-96区, SB-24の東約2mを隔て検出された。上端幅1.2m, 下端幅0.9m, 深さ0.7mを計る。掘方はU字状で、南のSX-01を巡る大溝や、更に南方の、台地の縁辺に沿って走る大溝SD-01と同様の性格をもつ溝と思われる。

**OPQ-3, 4区検出のピット, 土壌群 (第77図)** 78個のピット, 16穴の土壌が検出され、多数が切合していたが、建物となるものはなかった。しかしSP-01底より備前帯鉢口縁部2片(第78図12)が出土しており、それによるとこのピットの存在時期は南北朝頃と思われる。

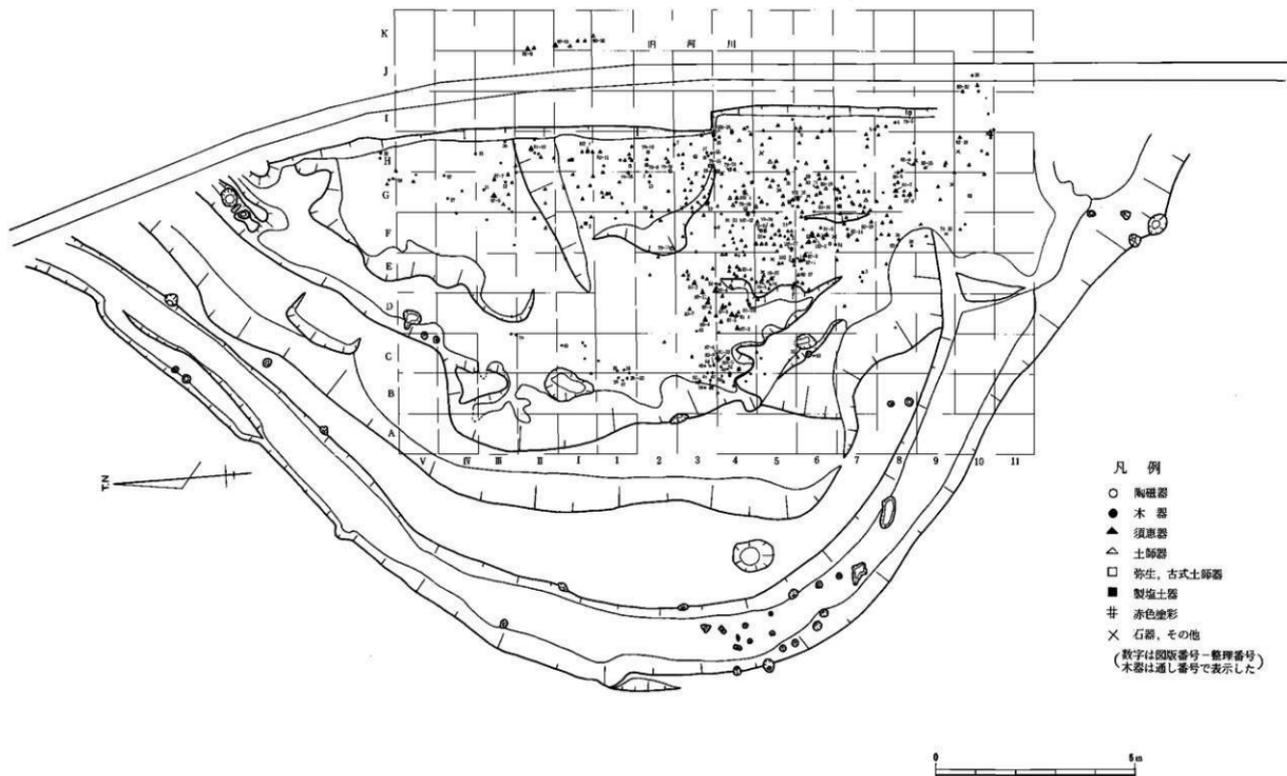


- 1 薄褐色土 粘粒強(小礫、皮肉)
- 2 淡黄灰色土 粘粒はより強(砂混入、転石有り直径5-20cm)
- 3 黄灰色土 粘粒強(砂混入)
- 4 黄灰色粘粒強(転石有り)
- 5 暗灰色粘粒強
- 6 暗褐色シルト層
- 7 暗褐色シルト層(5-10cm)
- 8 暗褐色シルト層
- 9 暗褐色シルト層
- 10 暗褐色砂質土
- 11 黄褐色砂質土
- 12 灰褐色土
- 13 淡黄灰色粘質土
- 14 暗褐色シルト層(砂混入)
- 15 黄褐色粘土
- 16 2+砂
- 17 黄褐色粘粒強土(地山ブロック少量)
- 18 暗褐色粘粒強土(地山ブロック少量)
- 19 黄褐色粘粒強土

※ 6層中の粘粒は粘影法による図化にて、  
粘土含量を示すものではない。



第73図 SX-01実測図



第74図 SX-01主要遺物分布図

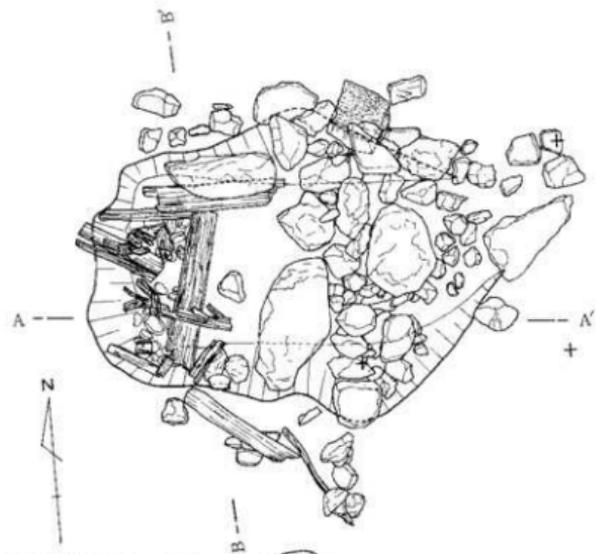
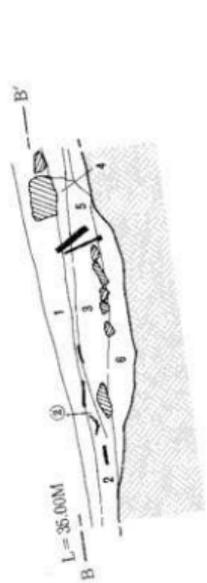
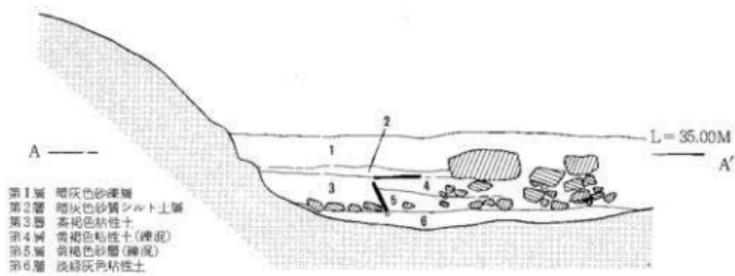
S X-01 (第73図) SB-21の東13.4 mを隔て、X-99~1区、Y-99~1区にわたって検出された河川状遺構である。南北長最大21.5 m、東西長最大9.25 m、深さ最大2.15 mを計り、総面積は134㎡にわたる。平面形は半円状を呈すが、断面でみると3~4段の段差があり、徐々に東方へ傾斜していく。この段は整ったものではなく、最上段を除けば、かなり複雑に入り組んでいる。

堆積土は、基本的に13層に分けることができる。1層~3層までは、赤褐色粘性土~黄灰色砂礫層で、標高35.4~36.2 mまでの層で、直径5~25 cmまでの転石を多量に含んでいた。遺物はなかった。第4~5層は暗灰、又は灰色の砂礫層で、標高35.4~36.7 cmまでの層である。転石は含まれない。ここから出土した遺物に、播鉢、皿、鉄刀、(第78図27, 29, 30)がある。(第74図)27は、E-6区から出土した備前焼播鉢で、出土レベルは34.785、おろし目は7本施条されるが、底部片のみで時期は不明である。29は、F-7区から出土した青磁片で、国内産になるか否かは不明である。出土レベルは34.785である。30は、F-10区から出土した両関式の短刀で、出土レベルは、34.780だった。28は、青磁皿片で、出土地区と層位、レベルは不明だった。これらの遺物で判断すると、第4~5層の時期は中世~近世までの間と考えられる。

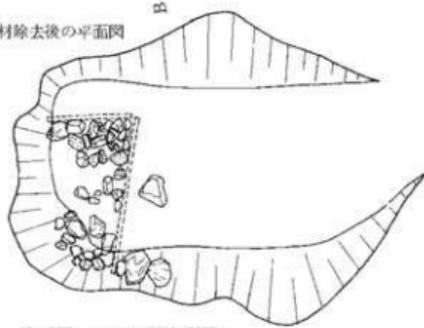
第6層~第9層は、暗褐色シルト~黒褐色シルト層で、標高34.25~35.40 mまでの層である。転石等は含まれないが、多量の須恵器、土師器、木器を出土した。第2表(3)をみると、ほとんどの須恵器が、第6~9層間に含まれていることがわかる。しかし、第9層以外は層序の関係が、同時に時代差を表わしているとは言えず、第6~8層間には、柳<sup>註4</sup>浦1式から4式までの須恵器が混在している。ただ第9層は概ね山陰Ⅲ~Ⅳ期の遺物が出土しており、上層と時期的隔りがある。この第6~9層中からは、赤色塗彩の土師器(第102図16、第7層中)も出土しており、時期的には8C代に比定される。更に製塩土器、墨書土器、木器等の出土もあり、特に製塩、墨書土器については、全てがこの6~8層中出土である。

第10層~13層は、暗灰色砂質土~淡黄灰色粘性土で、標高34.4~34.0 mまでの層である。これらの層から出土した主な遺物は、第10層~11層中からの山陰Ⅱ期の須恵環蓋1(第2表(3)80-1)が最も新しく、それ以外は古式土師、弥生式土器、石器である。第2表の79-1~9は弥生中期のもの、10~18は古式土師器である。又、石器は最下層或いは、底付近より13個体出土している。

以上のようにS X-01を土層によって立体的に捉えると、S X-01の存在時期中に3つの画期があったと思われる。それは、中世の遺物を包含する第4~5層の時期と、最も



転石、板材除去後の平面図



第75図 SX-02実測図

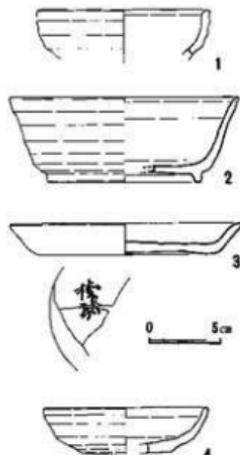


出土遺物が多く、山陰Ⅲ期～柳浦4式までを包含する第6～9層までの時期、それに山陰Ⅱ期の坏身や古式七師、弥生土器、石器、木器を出土する第10～13層までの時期である。

次に、土層を平面図(第73図)と対照してみると、SX-01の中央部には、急に深くなる落ち込みがあり、それが、第10～13層に対応している。上端と下端で40cm位の高低差があり、この箇所が、山陰Ⅱ期以前の水際だったと考えられる。またこの10層は標高が34.4m位の高さで、この同レベルを追うと、落ち込みの中で屈曲し、南へと流れていったと考えられる。第6層～第9層の時期には、なんらかの条件の為、水際は後返し標高35.3～35.4mのラインまで広がっていたと思われる。ただ、これらの土層中には砂粒が少なくシルト層になっているので、「よどみ」のような状態をとどめていたと思われる。4層～5層の時期は、土層から考えると若干の流水があったと思われるが、遺物量が少ないことから、その時期は長くはないと思われる。第1～第3層は直径5～20cmの転石を多量に含ん

でいて、遺物をほとんど出土していない。従って、中世以降に河川の流路を変更するか、田地を増やす、という目的で、人為的に埋めたものと思われる。

SX-02(第73～75図) B～Cの4～5区より検出された遺構である。第4層の黄褐色粘性土を掘り込み、四角い箱状の囲い板にして、第6層の淡緑灰色粘性土上に設置したものである。内部には平らに直径5cm位の円礫を敷き詰め、囲い板の周囲には、大石を配して、踏み石としている。出土遺物は、囲い板の中からは箱板の破損したものや、曲物の側板、底板などが出土している。また囲い板の板内の堆積土である第2層からは、回転糸切の高台付環(左図2)が出土し、第4層からは、同じく回転糸切で「校尉」と墨書のある皿(左図3)が出土している。第5層からは、底外面へラ切り調整する環(左図4)が出土している。



SX-02出土須恵器実測図

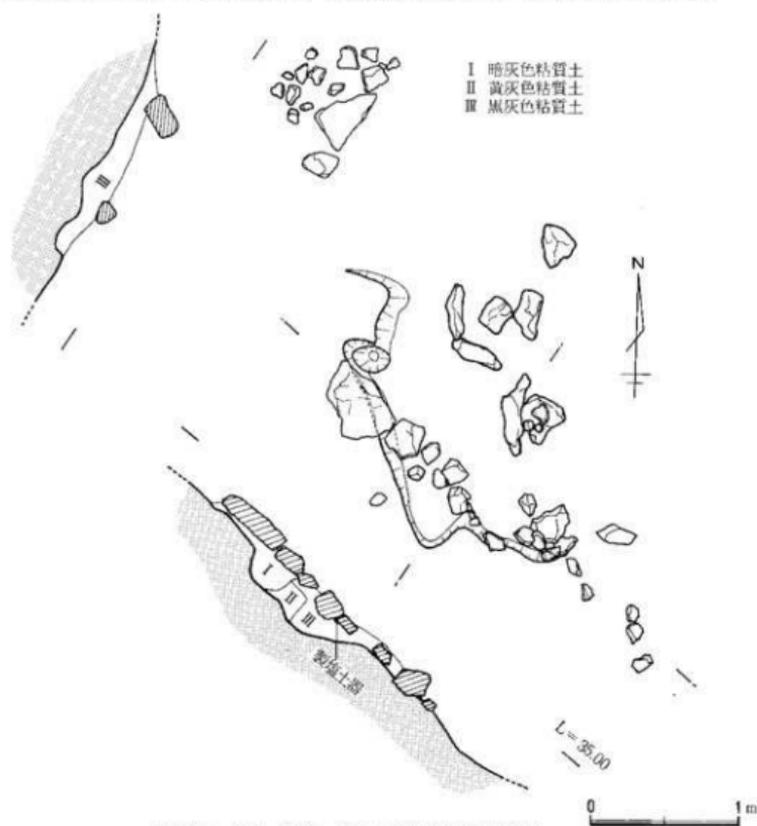
これらの遺物から、SX-02の存在した時期を考察すると、囲い板を設置する為に掘り込んだ第4層中の出土遺物の時期が、柳浦4式と考えられ、またSX-02が廃絶した後には堆積した第2層中の遺物も柳浦4式に比定されるので、このSX-02は、柳浦4式の頃に造られ、川の氾濫或いは、使用目的の消滅によって同じ4式頃に廃絶したと考えられる。

また、このSX-01の使用目的については、正確にはつかめないが、水を溜める施設で、物を洗うとか、水を汲むなどの用途に供したのではないかと考えられる。なお、囲い板に

については、底辺に釘痕跡を有しているので、この目的の為に特別に製作したのではなく、底板のある箱の転用品であると考えられる。

**SX-03 (第73図, 76図)** SX-02の南東、D～Eの9～10区から検出された石列遺構である。関連して出土した遺物で、凶化できるものはなかったが、層的にみて、SX-02と同時期の遺構か、SX-02より若干古く、水際が後退する以前のSX-02の性格の遺構であるとも考えられる。

**杭列 (第73図)** SX-01の下端に沿って、ほぼ2列で打たれた杭列である。これらの杭列は先端が、SX-01の底に到達したものが一部あるが、他は底から少し浮いた状態で検出されている。また、この杭列はSX-02を取り囲むように打ってあることから、SX



第76図 SX-01内、SX-03石列遺構実測図



-02の機能した時期に近い杭列であると思われる。これらの杭は、みかん割材の先端を鋭利に削って使用したものや、樹皮のついた心持材をそのまま使用したものがあるが、後者が圧倒的に多い。

第2表 SX-10出土土器一覧表

(1) 弥生式土器及び土師器

| 挿図番号 | 器形    | 出土地区 | 出土層位                      | 出土レベル    | 備考         |
|------|-------|------|---------------------------|----------|------------|
| 79-1 | 壺     | C-6区 | SX-01 底付近                 | 不明       | 弥生中期       |
| 2    | 高坏or鉢 | G-8  |                           | 不明       | 弥生中期       |
| 3    | 壺     | H-4  | 暗灰色砂質土                    | 不明       |            |
| 4    | 壺     | E-6  | SX-01 底付近                 | L=34.61  | 弥生中期       |
| 5    | 壺     | I-9  | 最下層 淡黄灰色粘性土               | L=34.36  | 弥生中期       |
| 6    | 壺     | H-4  | 第11層 黒褐色砂質土               | L=34.153 | 弥生中期       |
| 7    | 壺     | E-4  | 最下層 淡黄灰色粘性土               |          | 中期?        |
| 8    | 壺     | H-3  | 暗灰褐色粘質土、淡黄灰色粘性土界面         | L=34.285 |            |
| 9    | 壺     | F-6  |                           | L=34.417 |            |
| 10   | 壺     | H-3  | 第10層 暗灰色砂質土               | L=34.31  | 古式土師       |
| 11   | 鉢型器台  | F-3  | 最下層                       | L=34.335 | 古式土師       |
| 12   | 鉢型器台  | G-3  |                           |          | 古式土師       |
| 13   | 壺     |      |                           |          | 古式土師       |
| 14   | 壺     |      |                           |          | 小谷併行期      |
| 15   | 壺     |      |                           |          | 古式土師       |
| 16   | 低脚付坏  | E-5  | 最下層                       |          | 古式土師、赤色塗彩? |
| 17   | 低脚付坏  |      |                           |          | 古式土師、高台が高い |
| 18   | 壺     | G-5  | 最下層                       | L=34.234 | 古式土師、小谷~大東 |
| 19   | 壺、甕   | II-3 | 第7~8層界面 暗灰褐色シルト<br>暗灰色シルト | L=34.614 | 土師器        |
| 20   | 壺、甕   | G-8  | 黒灰色粘性土                    |          | 土師器        |
| 21   | 壺、甕   | G-9  | 第10層 暗灰色砂質土               |          | 弥生?        |
| 22   |       | G-4  | 第10層 暗灰色砂質土               |          | 弥生、底部のみ    |
| 23   |       | H-5  | 第11層 黒褐色砂質土               | L=34.30  | 底部のみ       |
| 24   |       | F-6  |                           | L=34.417 | 底部のみ       |
| 25   | 高坏    | G-3  | 第10層 暗灰色砂質土               |          | 弥生or土師     |
| 26   | 土製支脚  | II-2 | 第7層 暗灰褐色シルト               | L=34.66  | 土師器        |

(2) 陶磁器その他

| 挿図番号 | 器形 | 出土地区 | 出土層位    | 出土レベル    | 備考      |
|------|----|------|---------|----------|---------|
| 27   | 磨鉢 | E-6  | 第5層 砂礫層 | L=34.785 | 備前      |
| 28   | 皿? |      |         |          | 青磁      |
| 29   | 皿? | F-7  | 第5層 砂礫層 | L=34.785 | 青磁?     |
| 30   | 鉄剣 | F-10 | 第5層 砂礫層 | L=34.780 | 両面式、目釘穴 |

## (3) SX-01出土主要須恵器

| 通図番号  | 器形   | 出土地区   | 出土層位                      | 出土レベル    | 備考           |
|-------|------|--------|---------------------------|----------|--------------|
| 80区-1 | 坏身   | G-5区   | 第10~11層 暗灰色砂質土<br>黒褐色砂質土界 | L=34.305 | 山陰Ⅱ期         |
| -2    | 坏蓋   | G-8区   | 第9層 暗褐色シルト層               | —        | 山陰Ⅲ期         |
| -9    | 坏身   | G・H-9区 | 第7層 暗灰褐色シルト層              | L=34.598 | 山陰Ⅳ期         |
| -19   | 坏蓋   | G-7,8  | 第9層 黒褐色シルト層               | L=34.477 | 山陰Ⅳ期         |
| -27   | 坏蓋   | I-3    | 第8層 暗灰色シルト層               | L=34.59  | 柳浦3~4式       |
| -32   | 高台坏  | I・J-11 | 第7層 暗灰褐色シルト層              | L=34.64  | 柳浦2式         |
| -36   | 高台坏  | K-1,2  | 第6層 暗褐色シルト層               | L=34.74  | 柳浦3~4式       |
| -37   | 高台付甕 | E-7    | 第7層 暗灰褐色シルト層              | L=34.736 | 柳浦4式         |
| 81区-4 | 高台坏  | D-5    | 第6層より上層 暗灰色砂礫層            | L=34.869 | 柳浦4式前半,ヘラ記号有 |
| -16   | 高台坏  | G-7    | 第6層 暗褐色シルト層               | L=34.665 | 柳浦1式         |
| -27   | 無高台坏 | E-7    | —                         | —        | 柳浦4式         |
| -29   | 無高台坏 | D-5    | 第6層orより上層                 | L=34.766 | 柳浦4式後半       |
| -31   | 無高台坏 | F-5    | —                         | —        | 柳浦4式         |
| -32   | 甕    | C-5    | 第6層 暗灰砂質シルト               | L=34.85  | 柳浦4式         |
| -42   | 不明   | E-5    | 暗褐色砂礫層                    | L=34.848 | 不明           |
| 82区-4 | 壺    | E-5    | 暗灰褐色シルト層                  | L=34.90  | 不明           |
| -8    | 坏蓋   | K-V    | —                         | —        | 山陰Ⅲ期         |
| -9    | 壺, 甕 | H-9    | 第6層 暗褐色シルト                | L=34.754 |              |
| -11   | 壺, 甕 | H-2    | 第8層 暗灰色シルト                | L=34.657 |              |
| -14   | 壺    | F-8    | 第8~10層界<br>暗灰色シルト~暗灰色砂質土  | L=34.77  |              |
| -15   | 短頸壺  | H-10   | 第7層 暗灰褐色シルト               | L=34.59  |              |
| -16   | 長頸壺  | F-8    | 第8層 暗灰色シルト                | L=34.745 |              |
| -18   | 横瓶   | H-11   | 第6層 暗褐色シルト                | L=34.706 |              |
| 83区-1 | 平瓶   | C-5    | SX-02 石列下                 | —        |              |
| -5    | 壺    | C-4,5  | SX-02 石列下                 | —        |              |
| -4    | 甕    | E-5    | 第7層 暗灰褐色シルト層              | L=34.85  |              |
| -7    | 甕    | D-4    | 第18層 暗黄褐色粘質土              | L=34.88  |              |
| -8    | 甕    | C-4    | 第5層 暗灰色砂礫層                | L=34.95  |              |
| -11   | 高台付壺 | G-7    | 第6層 暗褐色シルト                | L=34.73  |              |

## (4) 製塩土器出土状況

| 整理番号 | 土器番号      | 出土位置     | 層位          | レベル     | 時期     | 器種   |
|------|-----------|----------|-------------|---------|--------|------|
| 1    |           | H-5      | 第8層 暗灰色シルト層 | 不明      | 8C前半?  | 鹿蔵山式 |
| 2    | X-150     | D~H-V~2区 | 第8層 暗灰色砂層   | L=34.82 | 8C後半以降 | 小屋谷式 |
| 3    | D-4       | 石列遺構下    | 第8層 暗灰色砂層   | 不明      | 8C後半以降 | 小屋谷式 |
| 4    | X-84      | E-6, 7区  | 第8層 暗灰色シルト  | 不明      | 8C後半以降 | 小屋谷式 |
| 5    | K-112木器群外 | B-4      | 不明          |         | 8C後半以降 | 小屋谷式 |
| 6    |           | H-4      | 暗灰色砂質シルト    |         | 8C後半以降 | 小屋谷式 |
| 7    | X-224     | H-1      | 第7層 暗灰褐色シルト |         |        |      |

## (5) SX-01 他墨書土器一覧

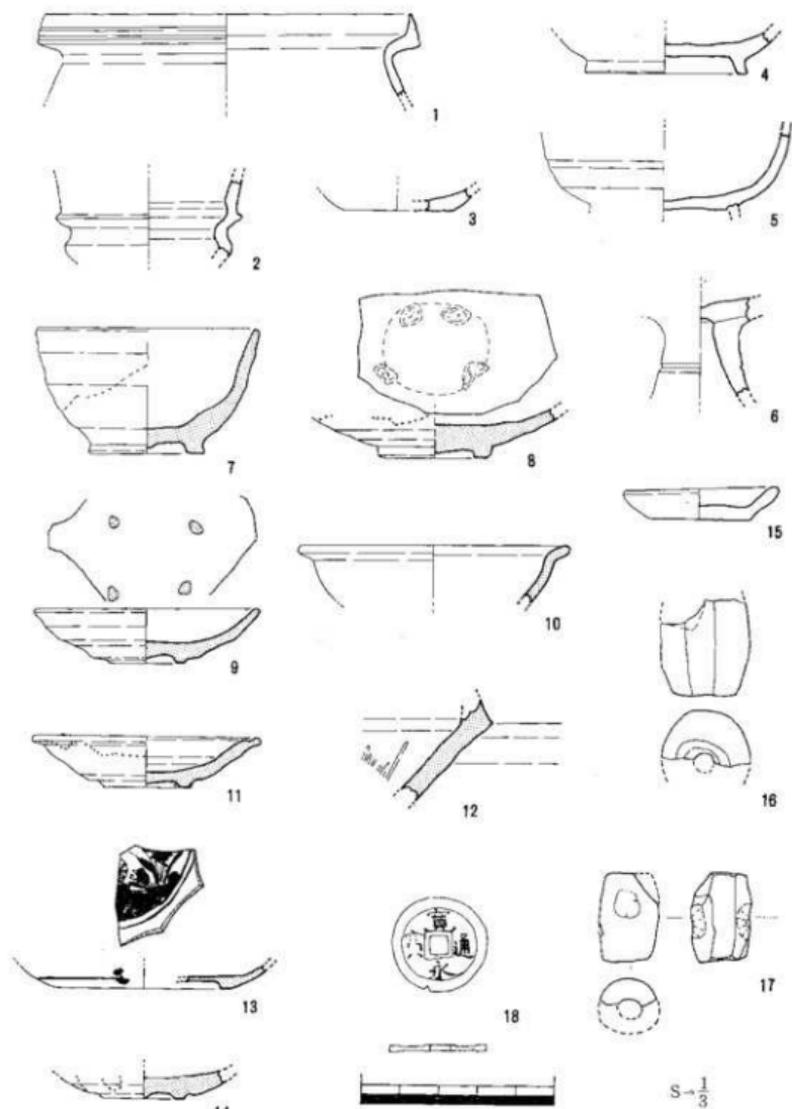
| 番号   | 地区    | 土層           | 標高      | 字名    | 器種   | 部位             | 時期      |
|------|-------|--------------|---------|-------|------|----------------|---------|
| 87-1 | F7杭周辺 |              | —       | 「出雲」  | 無高台杯 | 底外面            | 柳浦4式    |
| -2   | F7杭周辺 |              | —       | 「出雲家」 | 無高台杯 | 底外面            | 柳浦4式    |
| -2   | F7区   | 第7層          | 34.79m  |       |      |                |         |
| -3   | D4区   |              | —       | 「校尉」  | 無高台杯 | 底外面            | 柳浦4式    |
| -3   | D5区   |              | 34.98m  |       |      |                |         |
| -4   | D5区   | 第18層 暗黄褐色粘質土 | 34.96m  | 「校尉」  | 無高台杯 | 底外面            | 柳浦4式    |
| -4   | E5区   | 第18層 暗黄褐色粘質土 | 34.91m  |       |      |                |         |
| -4   | E4区   | 第18層 暗黄褐色粘質土 | 34.895m |       |      |                |         |
| -4   | D4区   | 第18層 暗黄褐色粘質土 | 34.825m |       |      |                |         |
| -4   | E-4区  | 第18層 暗黄褐色粘質土 |         |       |      |                |         |
| -5   | D4区   | —            | 34.863m | 「校尉」  | 無高台杯 | 底外面            | 柳浦4式    |
| -5   | D4区   |              |         |       |      |                |         |
| -5   | C5区   | 暗灰砂質シルト      |         |       |      |                |         |
| -6   |       |              |         | 「莢」   | 無高台杯 | 底外面            | 柳浦4式    |
| -7   | G9区   | 第6層 暗褐色シルト   | 34.765m | 「莢」   | 無高台杯 | 底外面            | 柳浦4式    |
| -7   | G9区   | 底付近          | 34.705m |       |      |                |         |
| -8   | G4区   | 暗褐色砂質シルト     | —       | 「莢」   | 無高台杯 | 底外面            | 柳浦3式    |
| -8   | F2区   | 第6層 暗褐色シルト   |         |       |      |                |         |
| -9   | GIV区  | —            | —       | 「莢」   | 無高台杯 | 底外面            | 柳浦4式    |
| -9   | HV区   | 底付近          | 34.686m |       |      |                |         |
| -10  | K1区   | 底付近          | 34.74m  | 「口」か  | 高台杯  | 底外面            | 柳浦3又は4式 |
| -11  |       |              |         | 「口」   | 蓋    | 蓋外面<br>輪状つまみ内側 |         |
| -12  |       |              |         | 「鹿」   | 無高台杯 | 底内面            | 柳浦5式    |
| -12  | KV区   |              |         |       |      |                |         |
| -12  | F7区   | 第8層 暗灰色シルト層  | 34.82m  |       |      |                |         |
| -13  |       |              |         | 不明    | 無高台杯 | 底外面            | 柳浦4式    |
| -14  | D4区   |              |         | 不明    | 無高台杯 | 底外面            | 柳浦4式    |

## 出土遺物

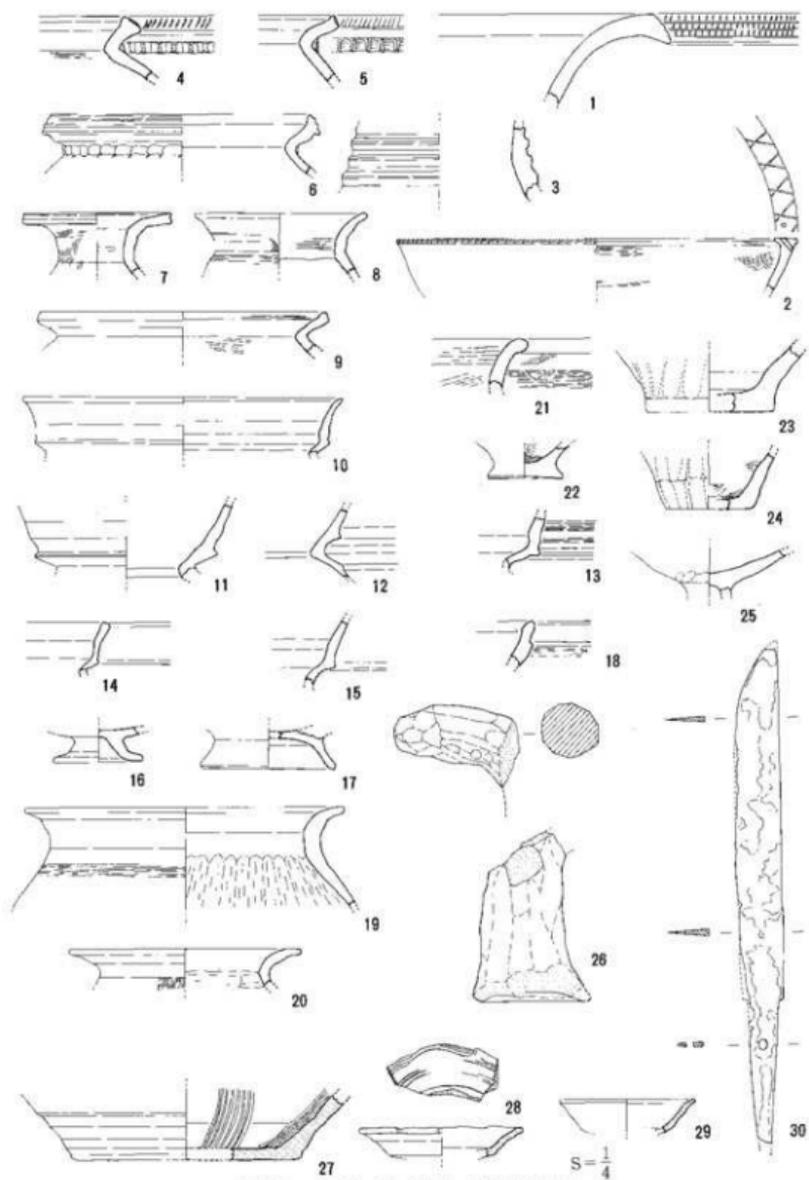
88年度の出土遺物は、SX01内出土遺物（第79図～87図）とその他の遺構に伴う出土遺物（第78図）に分かれる。SX01以外の遺構に伴う出土遺物は、遺構の概要で述べたのでここではSX01内出土遺物について述べることにする。

### （土器及び石器について）

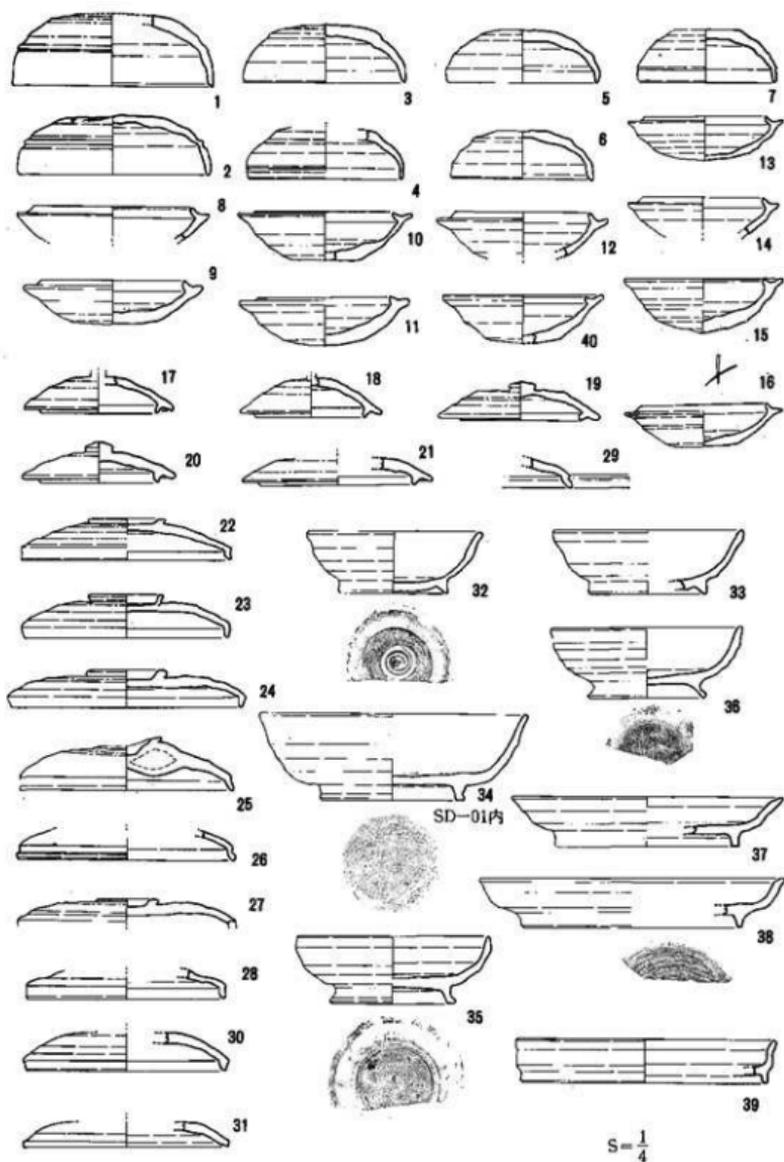
SX01内出土遺物には弥生土器、古式土師器、須恵器、陶器、磁器、石器、木器、漆器、鉄刀があり、中でも丹塗土師器、墨書土器、木器、漆器と、遺構の性格を決定する上で貴重な資料を含む。第79図1～9、21～24までは弥生土器である。1は朝顔形に開く壺、2は口縁上端部を平坦に文様を施す鉢形である。1～3は中期中葉であろう。4、5、6は頸部に突帯をネクタイ状にめぐらすもので中期後葉である。9も頸部が「く」の字状に屈曲するもので中期後葉か。7は口縁がやや急角度で外反するもので後期前半のものか。22～23は底部である。10～20は土師器である。10、12、14、15、18は複合口縁部である。10は口縁端部が細いもので藤田編年のⅣ期か。14は口縁端部が平坦になるもので藤田編年のⅤ期か。18は複合口縁が退化したものである。16は低胸杯、19、20は内面にへら削りをもつ甕である。26は土裂支脚である。27は、備前焼の大きく外傾する体部のすり鉢である。28、29は磁器の皿である。28はうぐいす色の釉を施す。口縁部は波うつものである。29は灰緑色釉を施す。30は鉄刀である。現存長34.6cm、幅3cmを測る。刃部24.6cmのものである。第80図は、すべて須恵器である。1～16、40は蓋環で1～7が坏蓋、8～16、40が坏身である。1は、へら削り調整によって丁寧に仕上げられている。山本編年Ⅱ期。2は上下削りによって突帯を表わす山本編年Ⅲ期新。他は小形である。山本編年Ⅳ期新＝柳浦編年Ⅰ式か。坏身も小形で同様である。17～31は蓋である。17～21は口縁部内側にかえりがつくものでつまみは擬宝珠状と乳頭状のものがある。いずれも小形である。22～29は口縁端部が直立するものでつまみは輪状つまみである。25、26、29の口縁端部はやや外方に開いている。30も蓋だが口縁端部が断面三角形になるもの、31は、天井部から単純に口縁端部に至るものである。32～36は高台付坏で体部が内湾気味に立ち上がるもので、32、33はへら切りであり、他は静止糸切りを残す。37～39は高台付皿である。37、38は体部が大きく開くもの、39は、口縁部がやや外反するものである。第81図1～9は、高台付坏で体部が外傾してやや開くものである。いずれも高台は低い。回転糸切りのままである（2～5、8）。10、11は無高台坏で体部が内湾気味に立ち上がるもので体部外面下方にへら削り調整が入る。小形である。12～15は無高台坏で、いずれも内湾して立ち上がるものである。12は静止糸切りのちへら削り調整を施す。口縁端部は丸い。16～18



第78図 S X 0 1 以外での出土遺物

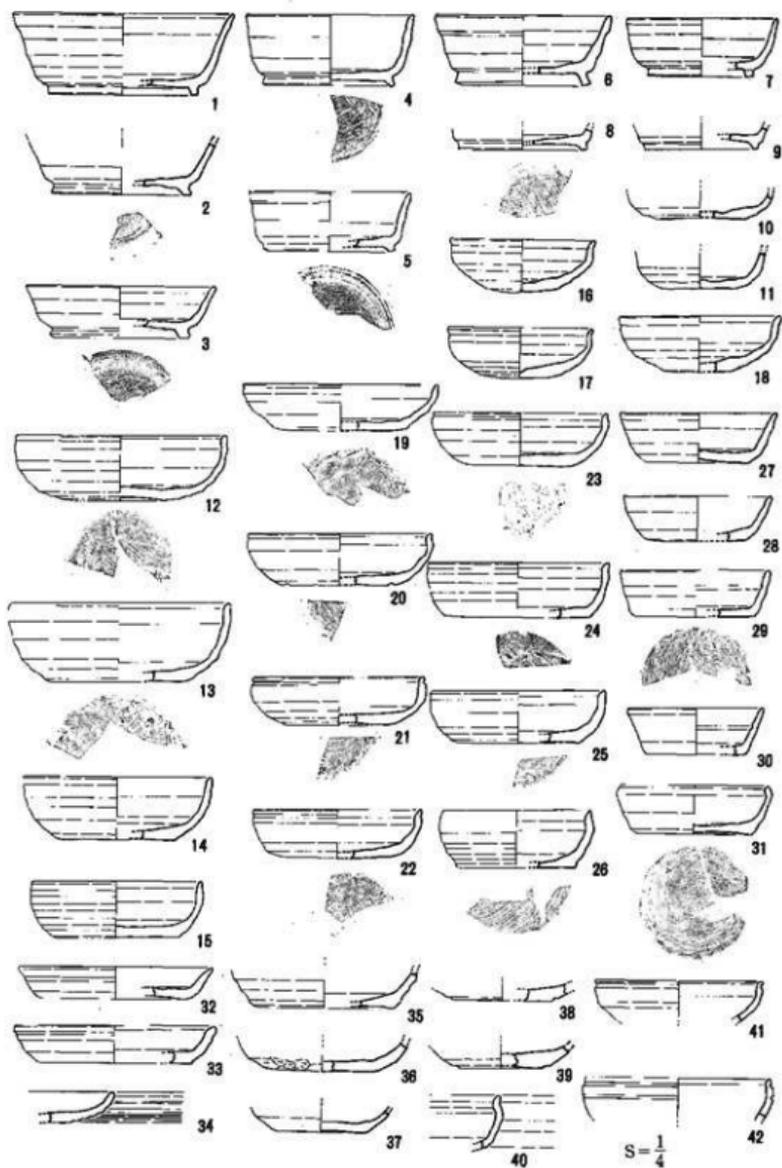


第79圖 S X O I 出土遺物 (須惠器以外)

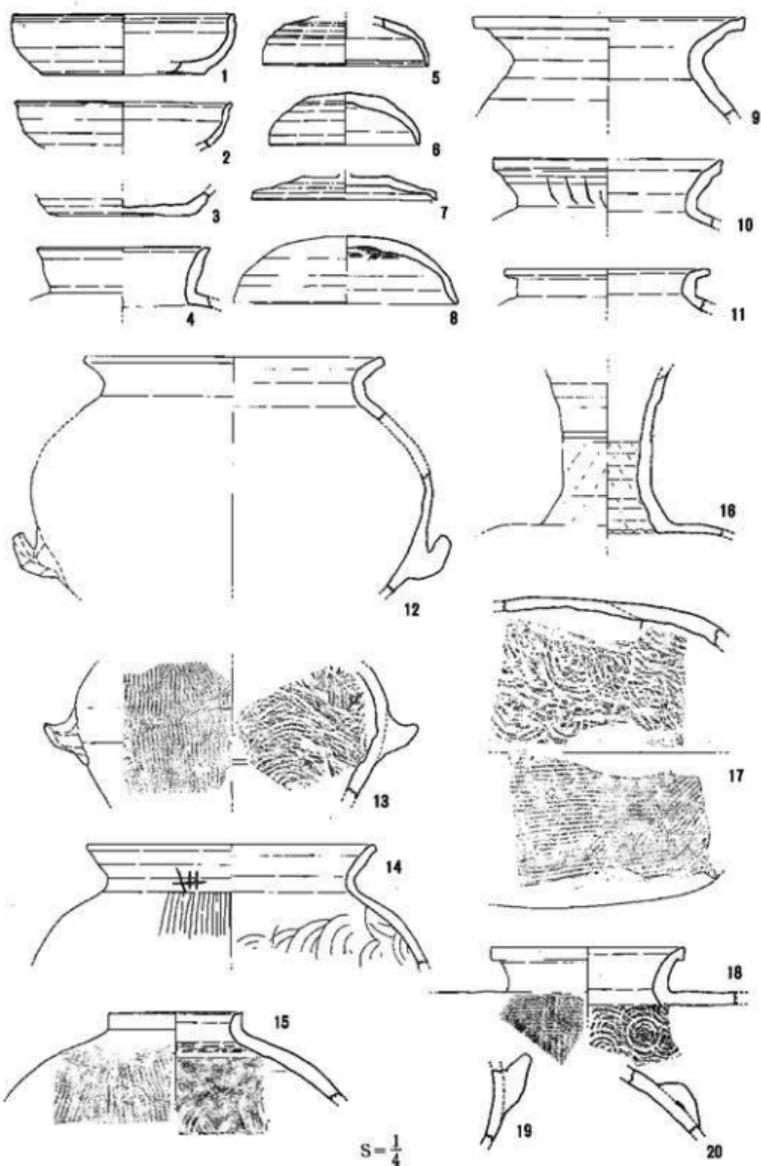


第80图 SX01内出土须惠器

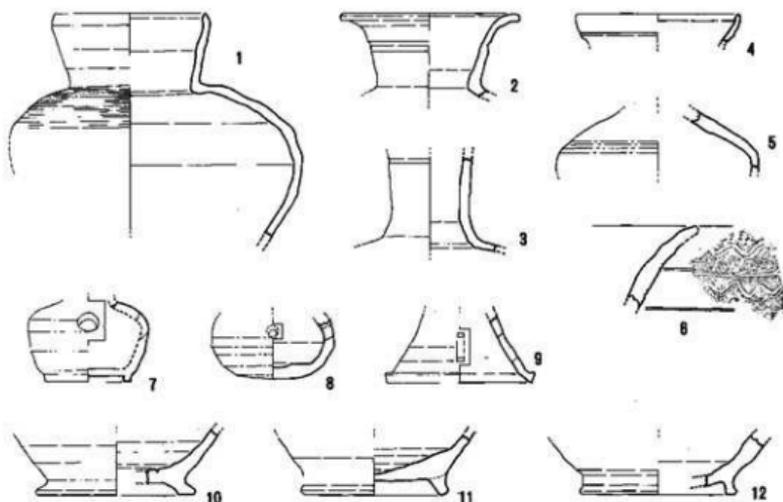
は、口縁部下よりゆっくりと外反して口縁部にいたるもので、ヘラ切りである。16は、体部外面下方をヘラ削り調整する。19～24は、無高台杯である。19～21は大きく内湾気味に開く体部から口縁部下でくびれて短かく外反する口縁部をもつもの、22～24は、体部はあまり開かないが、口縁部下でもびれて口縁部は短かく外反し口縁部内側に稜をつくるもの、25、26は、口縁部下のくびれはないが口縁部内側に稜をつくるものであり、12～24はいずれも回転系切りのままである。柳浦編年4式である。27～30は、体部が外傾して立ち上がる無高台杯で小形である。29は回転系切りのままである。31は体部が短かく外傾して立ち上がり口縁部が短かく内傾するもので回転系切りのままである。32、33は無高台の皿である。34は皿か高杯の坏部か、35～38は坏の底部、39～42は坏の口縁部である。42は、口縁部の下に2条の沈線が入る。第82図1～4は、SX01をとりまくSD01から出土したものである。1～3は無高台杯で1は口縁部下でくびれて短かく外反するもの、4は蓋で、頸部は外傾し口縁上端部は平坦である。5、6、8は蓋杯である。5は天井部周辺にヘラ削り調整するもの、7は蓋で口縁端部が断面三角形のものである。12、13は、把手付きの壺である。14は甕で頸部に「卅」のヘラ記号がある。15は短頸壺、16は長頸壺、17、18は、横瓶である。第83図1は平瓶で体部にカキ目を残す。3は長頸壺の口縁と頸部である。6は壺の口縁で2段に波状文を施す。7、8は壺の体部で外面はヘラ削り調整を施す。9は高杯の脚部で透しは四角である。10～12は高台付きの壺の破片である。第84図1～6、第85図1～7は石器である。1は現長15.3cm、幅6cmの石斧で全面細かく仕上げている。両面から刃部をつける。2は現長14.8cm、幅5.7cmの棒状石斧で全面細かく仕上げる。3は現長16.5cm、幅6cmの石斧で両面粗く仕上げる。刃部は両面とも磨く。1側面に自然面が残る。4は、現長13cm、幅6.5cmの厚さの薄い石斧で裏面は未調整だが表面は使用のためか滑かである。刃部は片面磨く。5は現長14.9cmの石斧で上面下面はそのままで両側面を粗く仕上げる。刃部を広く作り側面の中ほどがやや凹む。両面粗く仕上げる。端部に自然面残す。6は現長16cm、最大幅7.5cmの石斧で上面下面、両側面とも粗く仕上げる。刃部も両面粗く仕上げる。第85図1は現長14.4cm、最大幅6.6cmの石斧で上面下面粗く、両側面はやや細かく仕上げる。刃部は両面とも磨きを入れる。2は現長9cm、幅8cmの扁平な石斧で上面下面そのままで両側面をやや細かく仕上げる。刃部は両側面とも磨く。3は長さ12.5cm、幅5.2cmの片側面を粗く仕上げて刃部にするものである。4は砥石で4箇所ほど使用面があり使用面が半円状に凹む所もある。5～7は石鏃である。5は黒曜石製で丁寧に仕上げられており2辺の長い二等辺三角形をするもの、6、7は、下辺中央がえぐれるものである。第86図の1～16は、すべて丹塗土師器である。1は、口径21.4cmを測る大



第81圖 S X O I 出土須惠器



第82圖 SX 0 1 出土須惠器

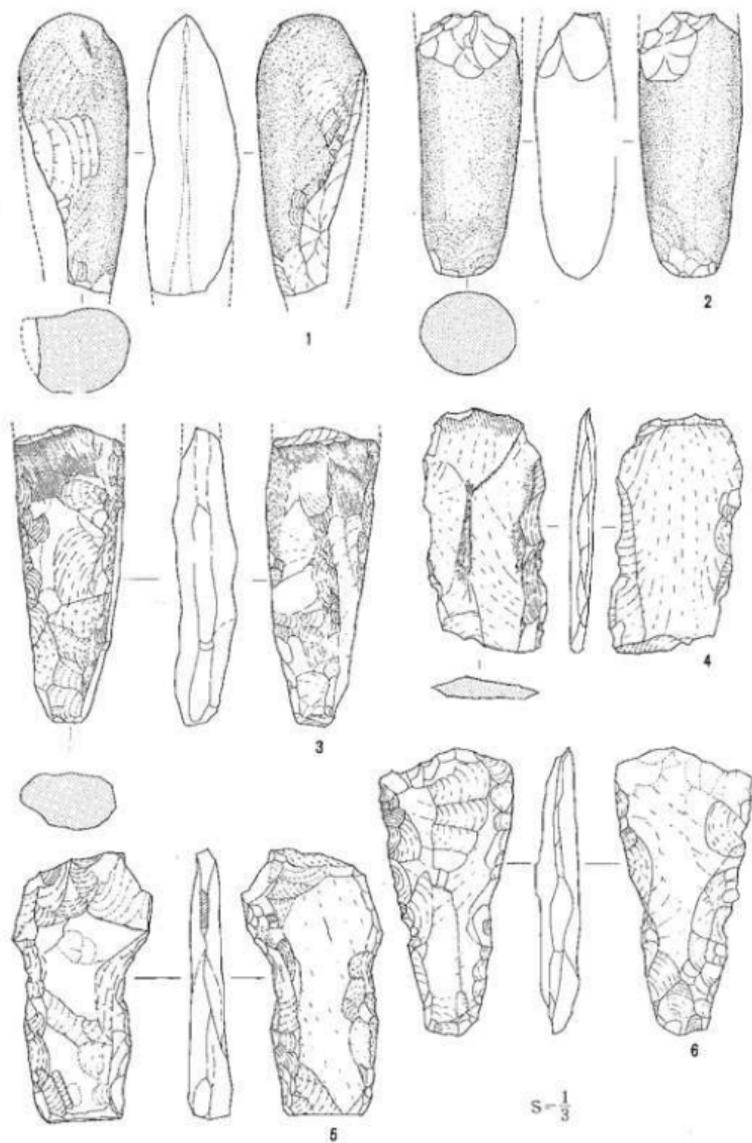


第83図 SX01出土須恵器

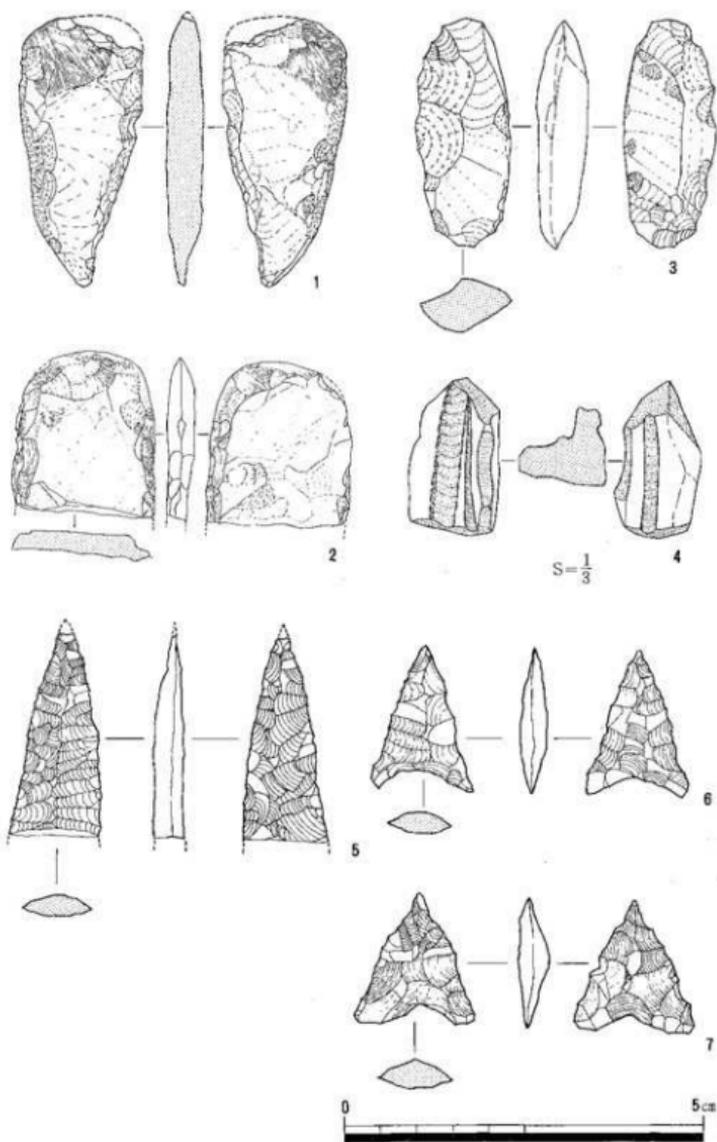
S=1/4

形の環である。内外面ともにヘラ磨きをし暗文は内面に左上がりの放射線文を施す。2は、口縁14cm、器高6.6cm、底径10.5cmを測る。底部は丸味を帯びる。底内面は斜ナデ、口縁部は内外面ともに横ナデ、底外面との境目はヘラ削りをし底外面はヘラ磨きする。内外面とも丹を塗り赤茶色を呈する。3は、器高2.3cmを測り内外面ともに横ナデを施し口縁部に右上がりの放射線文、底部に螺施文をつける。4は皿の底部と口縁部の境目付近で内外面ともに横ナデを施し底部に螺施文を施す。5は皿の底部で螺施文を施す。6、7は、蓋の口縁端部で直立するものである。8は、断面三角形の蓋の口縁端部か杯の口縁部、又は高杯の口縁部の可能性もある。9は、口縁部下から外反するもので横ナデを施す。10は、口縁端部が平坦を呈し、外方向に肥厚する。11は、口径12.8cm、器高2.0cm、底径9.5cmを測る。底内面に斜ナデ、口縁部は内外面共に横ナデ、底部はヘラ削り調整する。12、13は、高台付環である。12は、底部から体部にかけて急角度で屈曲する。内外面ともに丹を塗り、赤茶色を呈する。13は、内外面ともに横ナデで暗文はない。14、15は皿で内湾気味に大きく開く。切り離しは回転糸切りである。16は口縁部が内傾するもので、外面に幅4mmの沈線を施すものである。

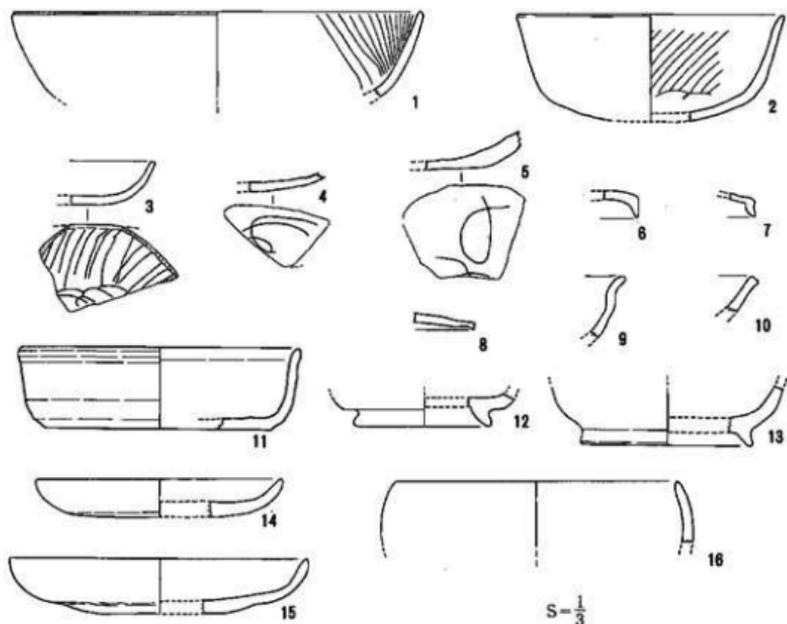
第87図1～11は、すべて墨書土器である。1は、坏底部で回転糸切りのままのものである。外面に「出雲」と墨書されている。2も坏底部の破片で回転糸切りのままである。外



第84图 S X 0 1出土石器(1)

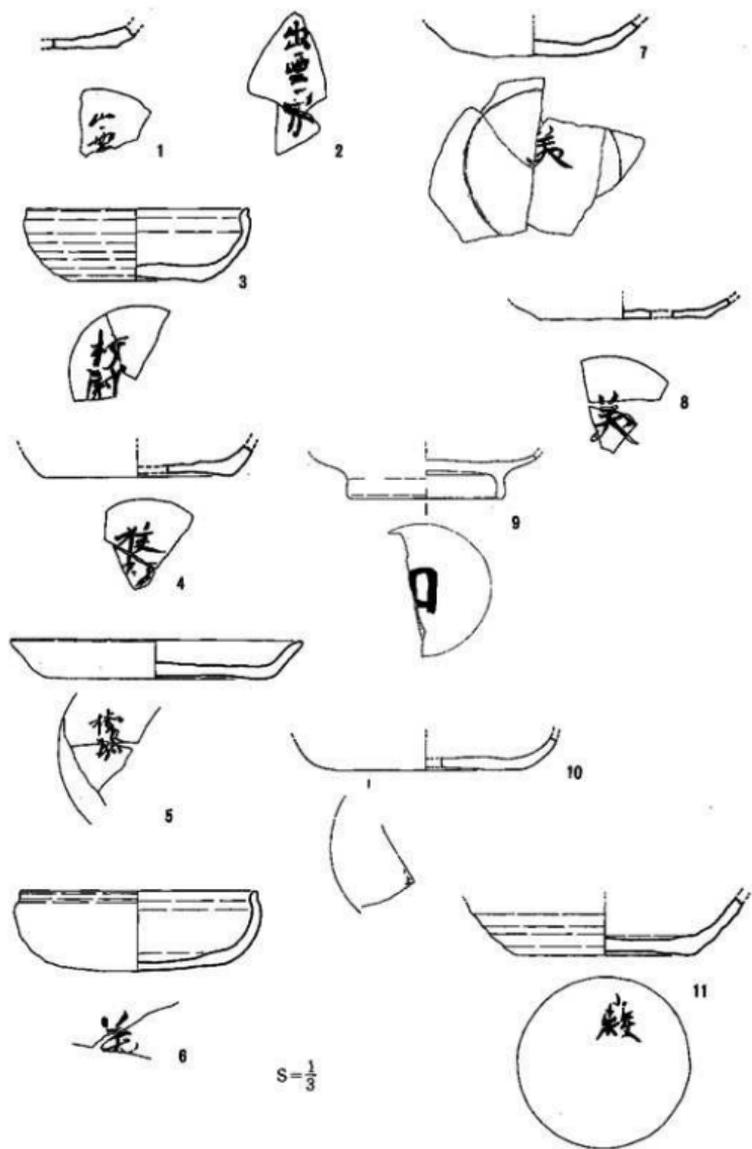


第85图 S X 0 1 出土石器(2)



第86図 S X 0 1 内出土丹塗土師器

面に「出雲家」と墨書されている。3～4は、底外面に「校尉」と墨書されているものである。3は、口縁部下でくびれて短かく外反する環、4は、環の底部、5は、体部が短かく外傾する皿であり、すべて切り離しは回転糸切りである。6～8は、「莢」と墨書されているもので、6は、口縁部下でくびれて外反する環で切り離しは回転糸切りのままのもの、7は、やや丸味をおびる環の底部で糸切りのちへう削り調整をするもの。8は、環の底部で器肉が薄いもので切り離しは回転糸切りのままのものである。9は、高台付環で、切り離しは静止糸切りである。底部外面に「口」と墨書されている。10は、わずかに「上」の字が読みとれるものである。切り離しは回転糸切りのままの環の底部である。11も、切り離しが回転糸切りのままの環の底部である。墨書があるが、今のところ判読できなかった。



第87图 SX01出土黑书土器实测图

(木器について)(第74図, 第88図～95図) 88年度調査において出土した木製品は、総数200点以上を数えるが、その内、図化できたものは63点である。その内訳は、食事具、容器、工具、農耕具、祭祀具などで、それらはSX-01内のものがほとんどで、それ以外では僅かに、掘立柱建物の柱根があるのみである。以下出土層位、位置、材質、木取りについては、別表(第7表)に記すこととして、SX-01出土の木製品の戦略について触れる。

第88図1, 2は第10層出土の木製品である。1は、長さ49.6cm, 幅15.6cm, 厚み1.2cmを計る。長辺片側に端部の丸い突起を有す。また中央と左右に角孔が穿たれ、片方の孔には、角棒とそれを止める為のものか樺皮紐が残っていた。これは、中央の孔に柄棒を通し、左右の孔と突起によって鎌の本体とを固定した泥よけの部分想定できるが、えぶりのようなものになる可能性もある。2は、長さ62.4cm, 直径最大1.4cmを計る。箱形木製品である。先端部はかなり鋭利に削って尖らせてあるが、材質は柔らかく、箸として使用したかは、疑問が残る。これらの木器については、山陰Ⅱ期以前の遺物と伴出しているので、山陰Ⅱ期以前としておきたい。

第88図3, 4, 5は第9層出土の木製品である。3は杓子形木製品で、現存長24.2cm, その内身長13.0cm, 柄長11.2cm, 身幅5.5cmを計る。先縁は半円形で、<sup>註6</sup>木器集成図録の分類によるところのB型式に属す。4は現存長15.0cm, 幅5.1cm, 厚み0.95cmを計る。木製集成図録(以下、木器集成と呼称)によるところの長方形曲物の樺皮紐結合曲物Bに属し、所謂、折敷のようなものの底板か蓋板になると思われる。5は現存長26.7cm, 口径1.9cmを計る柄状木製品である。これらの木製品の時期は伴出須恵器から、山陰Ⅲ期～Ⅳ期頃と思われる。

第88図6, 7, 8は第8層出土の木製品である。6は、現存長13cm, 径1.7cmを計る柄状木製品である。7は、現存長13.9cm, 同幅6.4cm, 厚み2.15cmを計る。杓子形木製品の可能性が考えられる。8は、現存長40.8cm, 現存幅11.8cm, 厚0.9cmを計るもので、用途不明である。平面形は、隅丸長方形を呈し、数箇所に小孔を穿つ。また中央部1箇所に抉りを入れる。第89図9も第8層出土のもの。現存長11cm, 現存厚0.38cm～0.18cmを計る。先端部は削り込んで尖らせ、両面に加工痕を有しているがほぼ平らである。鳥形か馬形になると思われる。もし鳥形だとすれば、<sup>註7</sup>類別として、西川津遺跡出土のものであるのみで、県内では2例目である。

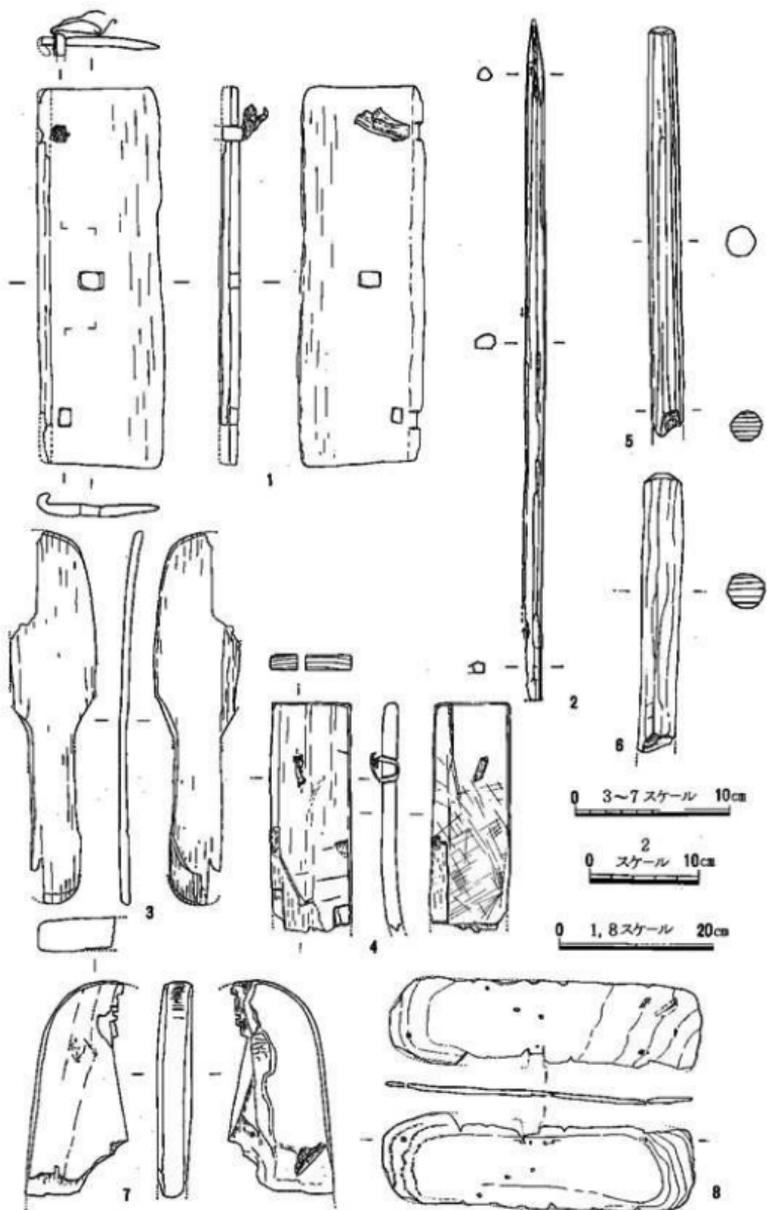
第89図10～12は、第7層出土のもの。10は現存長17.3cm, 径6.7cmを計り、柄径は2.5cm前後になると思われる槓槌である。11, 12は同一個体と思われ、木器集成によるところの楕円形、釘結合曲物の底板になると思われる。長径19.3cm, 短径7～8cm, 厚さ0.7cm

を計る。一般に折敷と呼ばれるもの。13, 14は第6～8層出土木器である。13は、又鎌か  
鋸の歯である。現存長31cm, 歯幅2.5cm, 歯長20.1cmを計る。歯基部横に袢りを入れる。  
14は方形の板である。かどの一箇所に突起をもつもので、用途は不明である。一辺11cm前  
後を計る。第89図15, 90図16は第7層出土の木製品である。15は現存長15cm, 現存幅4.4  
cmを計る。釘穴, 袢皮紐の緩じ穴はないが, 折敷の底板の可能性はある。16は長さ35.8cm,  
幅27.8cm, 高9.6cmを計る。みかん割材を使用するもので, 何かの未製品であろう。

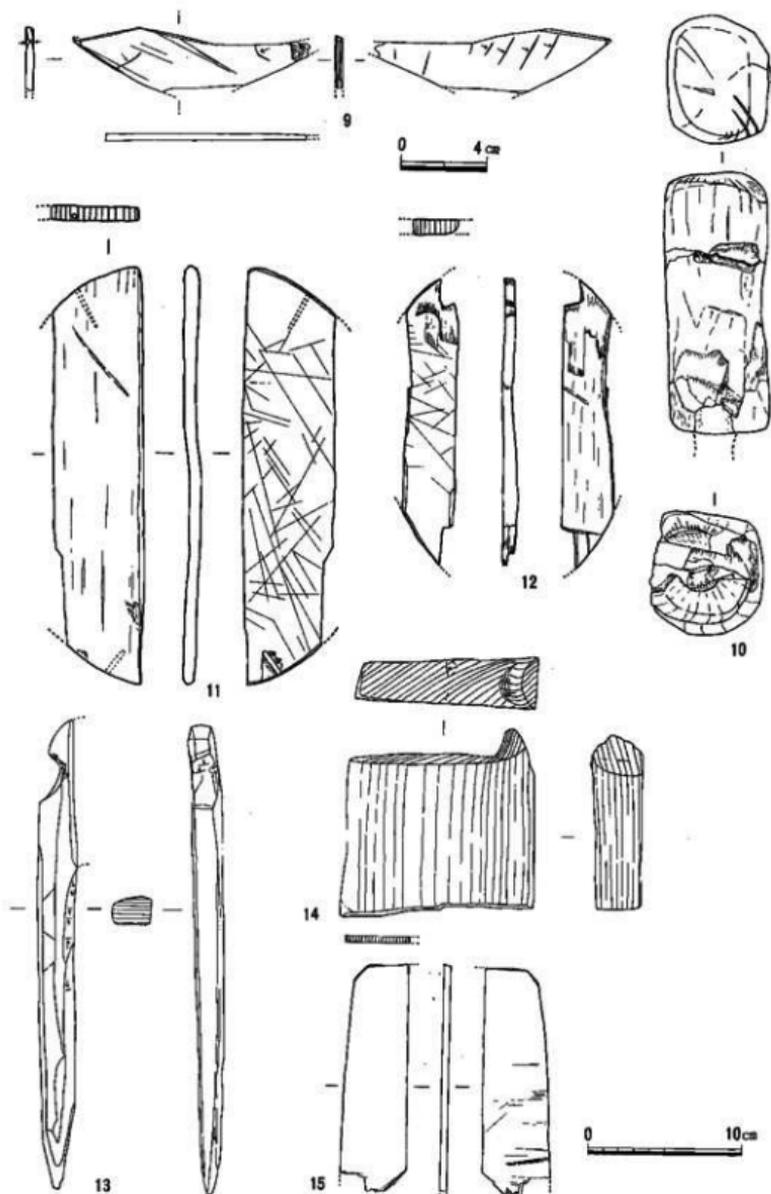
第90図17～21, 第91図, 第92図36, 38～41は第6層出土木製品である。17は火鑊板で,  
現存長24cm, 同幅6cm, 厚み1.7cmを計る。角板の側面の長辺に4, 短辺に1つの切欠き  
を観察することができる。そのうち長辺の1つは, 火鑊白が無く未使用のもの。又1つは  
裏面から使用している。18は, 剝物匙の未製品である。現存長21cm, 身幅7.3cm, 柄幅2.3  
cmを計る。柄と身の境は明瞭でなく, 漸時身に移行するもの。身は先端がやや尖がる。身  
の裏面には加工痕が明瞭で, 整形は粗い。類例として西川津遺跡<sup>註7</sup>からも同様なものが出  
土している。19は, ほぼ完形の杓子形木製品である。全長28cm, 柄長11.6cm, 身長16cm,  
身幅10.8cm, 柄幅3.3cm, 厚み0.65cmを計る。木器集成によるところの身の先端を一直線  
につくるA型式に属す。両側面に使用痕を有し, 両面には使用痕が見られない。伴出遺物か  
ら判断して第88図3より新しいと思われる, 8世紀～9世紀のものと思われる。20, 21は用  
途不明の加工板である。現存長はそれぞれ21.7cm, 20.1cm, 現存幅5.1cm, 7.1cm, 厚さ  
0.7cm, 0.65cmを計る。

第91図22は, 縦木取りした断面平行四辺形の加工材である。一辺24.8cm, 厚み6cmを計  
る。8面のうち7面に加工痕があるが, 未製品なのか何かの使用に供する為の製品なの  
かは不明である。23は, 長方形釘結合曲物の蓋板と思われる。釘痕跡を3箇所に有し, そ  
の内2本の木釘が現存していた。現存長15.4cm, 現存幅5.6cm, 厚さ0.65cmを計る。木釘  
は角釘で, 一辺4mmを計る。蓋板の外表面は滑らかで, 外縁は丸く仕上げてある。内面には,  
8条の刃傷を有す。24, 25は, 24が現存幅8.7～10.1cm, 厚さ0.55cm, 25が現存長28cm,  
幅5.8cmを計るもので, 用途不明の加工材である。26は, 円形曲物の蓋か底板である。現  
存長13.8cm, 幅4cm, 厚さ0.7cmを計る。27は, 現存長9.9cm, 幅4.05cm, 厚さ0.4cmを  
計る不明板材である。

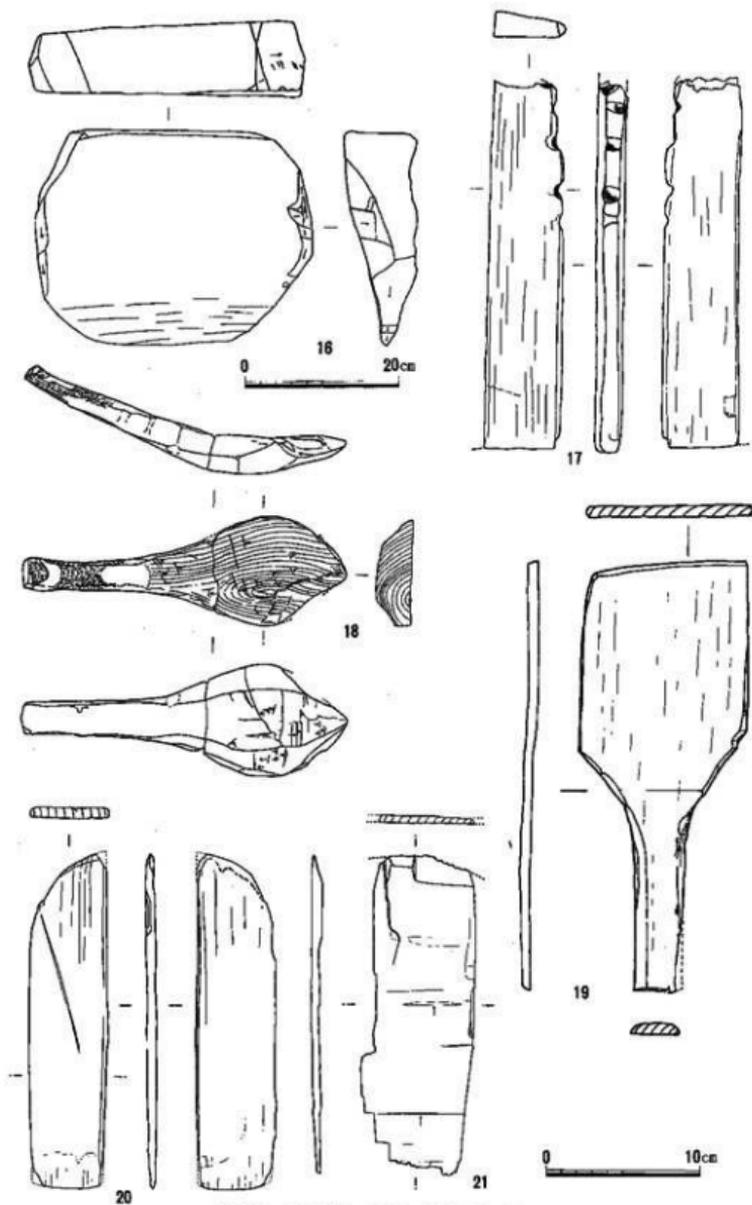
第92図28～37は全て著状木製品である。28, 29は完形で両端を細く削るもの。全長21.6  
cmと21cmを計り, 幅は0.7cmあるが, やや偏平である。30～37は, 一部欠損している。現  
存長はそれぞれ, 21.9cm, 11.5cm, 14.3cm, 12.8cm, 9.8cm, 13cm, 10.6cm, 22.3cmを  
計る。その内, 30と32は未製品で, 33は, 黒い漆状のものが付着しており, 漆を塗ってい



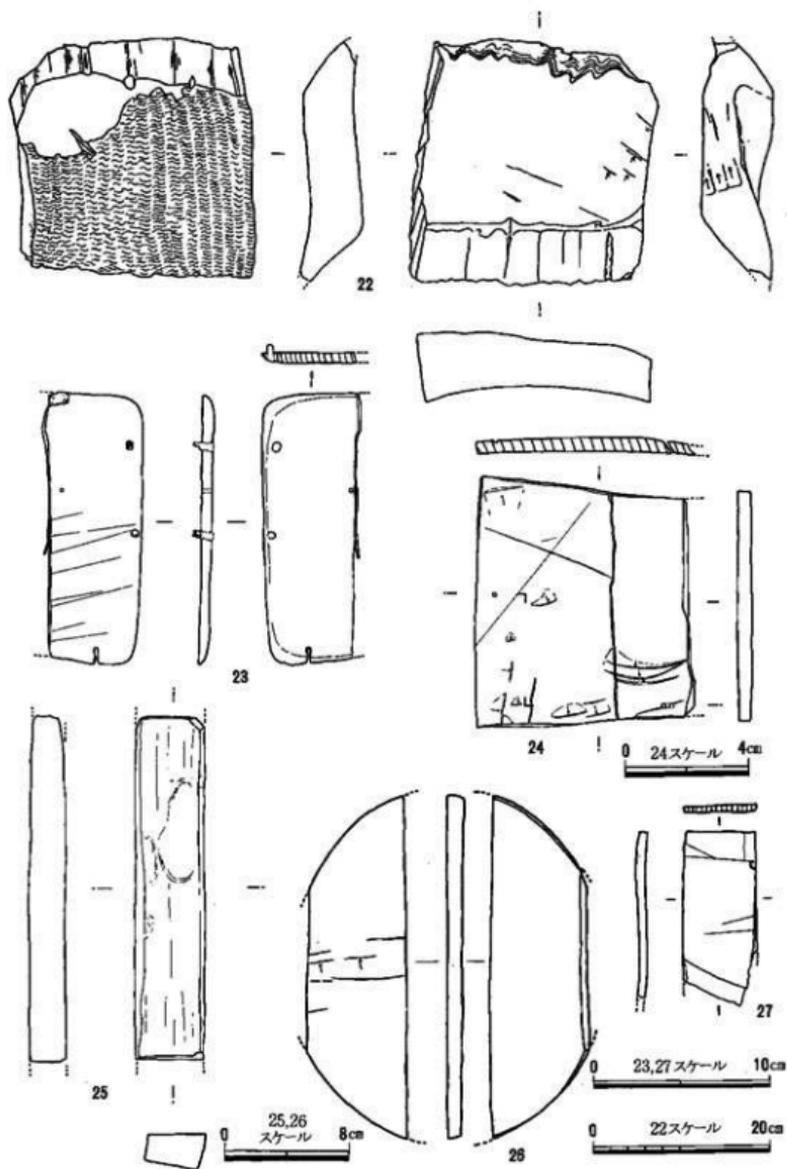
第88図 SX-01 第8層~10層出土土器実測図



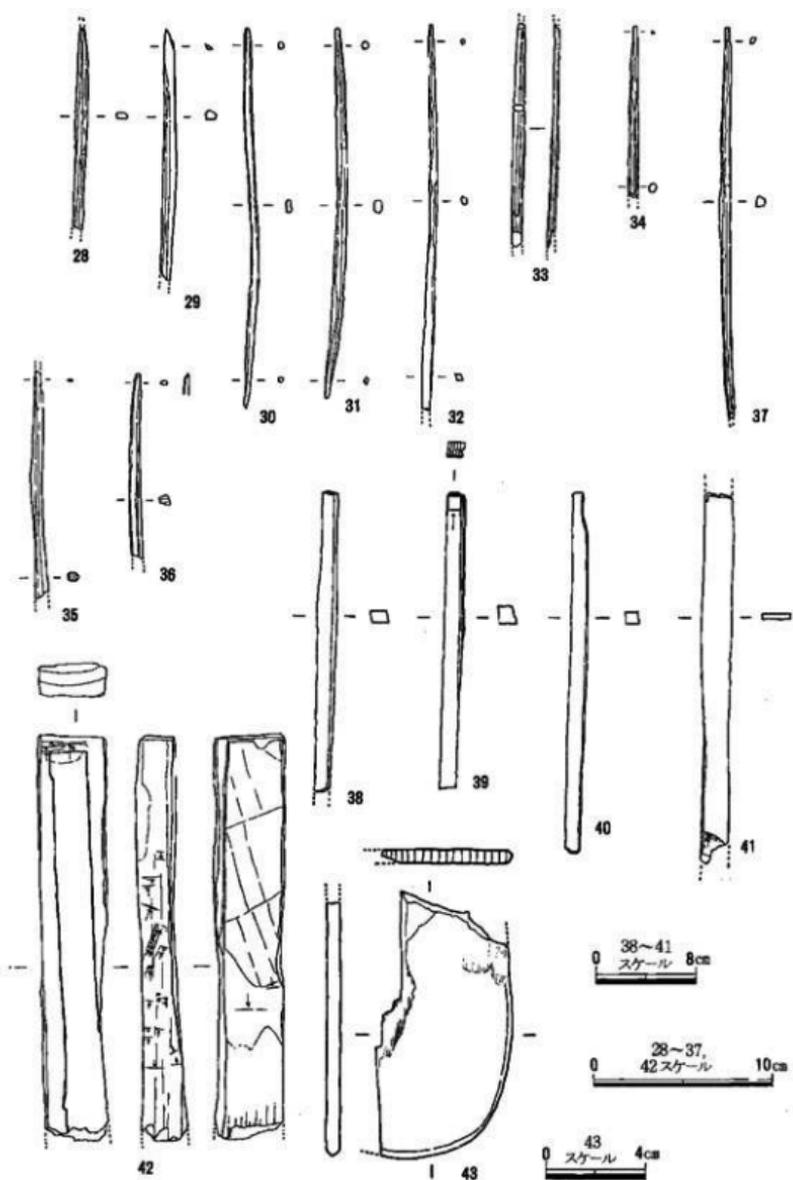
第89图 第7层~8层出土木器实测图



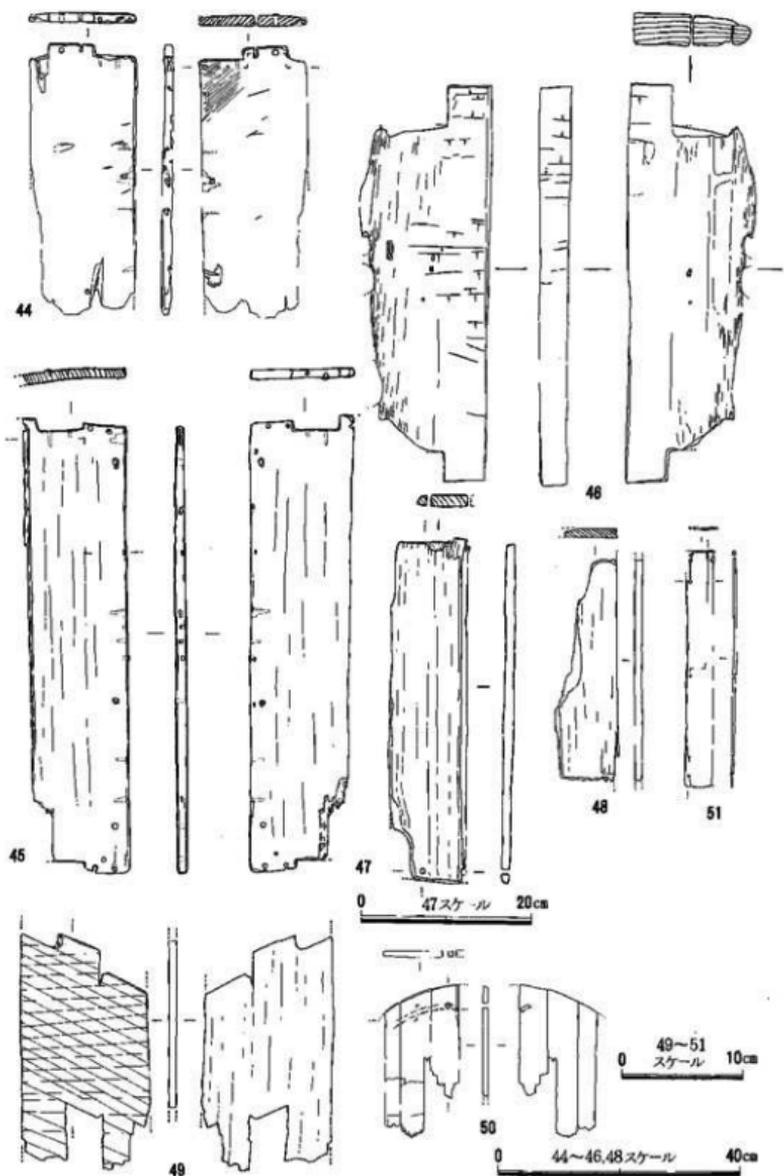
第90图 第6层~7层出土木器实测图



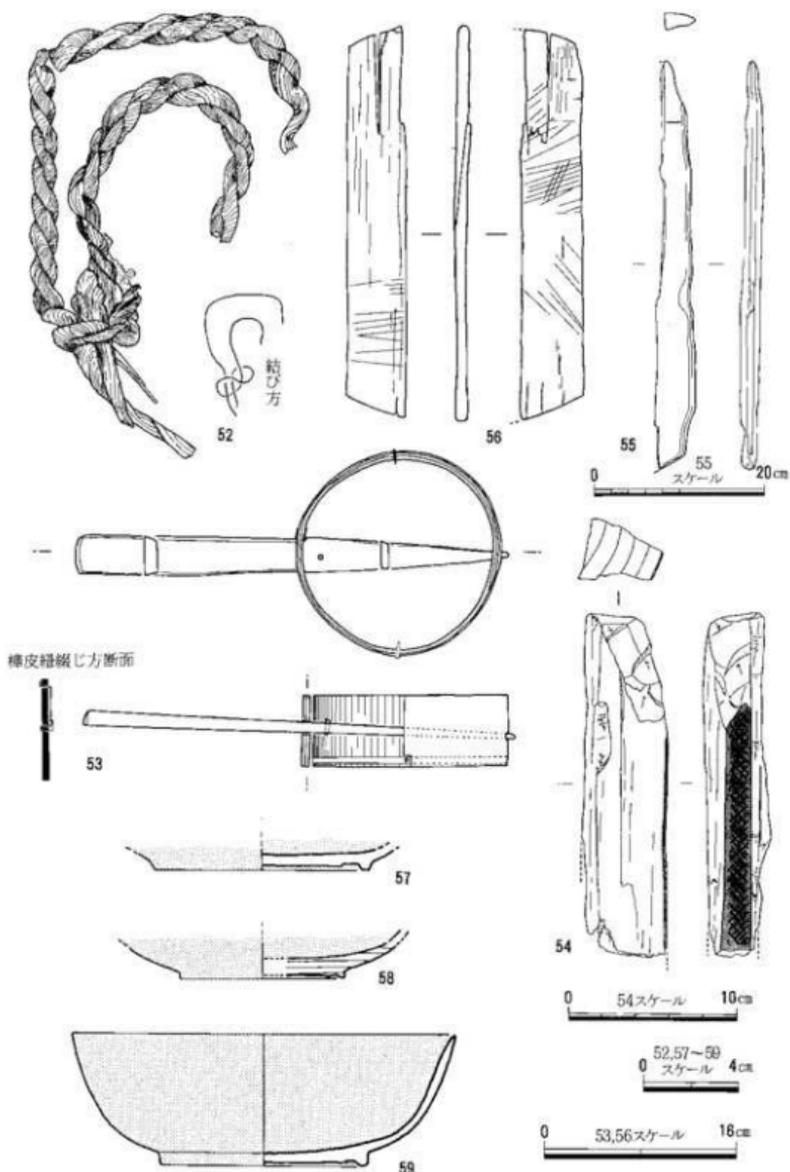
第91図 第6層出土木器実測図



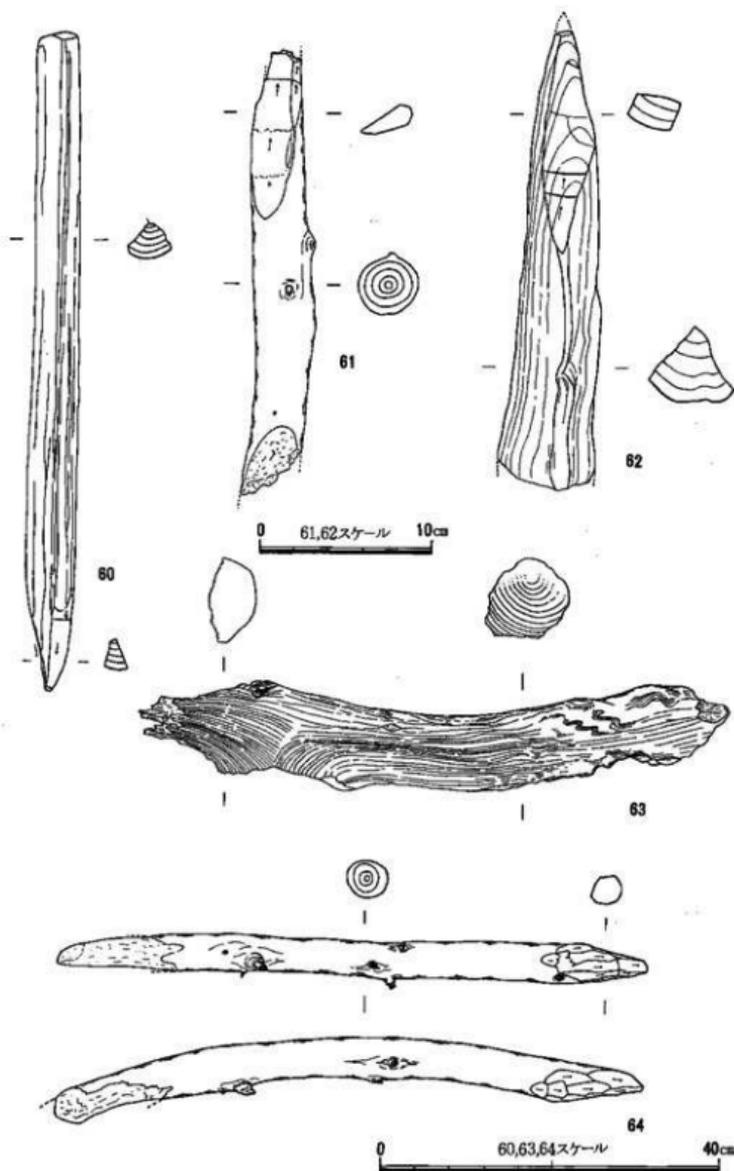
第92図 第6層~8層出土土器実測図



第93図 第6層下S X O 2出土木器群



第94図 第5層～6層出土木器実測図



第95図 木杭，柱根実測図

た可能性を有す。34, 35は先端が焼けている。これらの箸状木製品は、製品としては、粗雑なものが多い。また、使用痕も明瞭には確認できない。従って、平城京址で出土した箸のように芝原遺跡で出土した物も、現代の割箸のように一時的に使用されたのかもしれない。38~40までは、箸状木製品と共に出土しているの、その未製品であると思われる。41は上部に小さな円孔の痕跡を有している。現存長はそれぞれ、12.2cm, 12cm, 14.6cm, 15cmで、38~40は角棒である。また41は扁平の薄い板で、厚み0.25cmを計る。42, 43は、出土層位の明瞭でないものだが、その出土位置と、出土レベルから判断すると、6~7層遺物になると思われる。42は、こまかい加工痕の判然とした角材である。片面に幅1.8cmの薄い挟りが入る。現存長22.8cm, 幅3.9cmのもの。43は、残存長10.6cm, 幅5.2cmで楕円形を呈す。厚みは周縁部以外は扁平で、0.55cmを計る。杓子形木製品の可能性がある。

第93図44~50は、SX-02内出土木器群である。44の端部は、凸状を呈し、片方の側面には、釘孔がある。45は、端部が凹状を呈し、これも片方の側面に釘孔を有す。この44と45は、凸部と凹部が組合わされた状態で検出されている。また、47, 48は44の傍から出土しており、同じく箱材の一部を成す破片だと思われる。また、46は44にもたれかかるように出土している。44は、現存長22cm, 幅8.6cm, 厚み1.7cmを計り、木釘が2箇所残存していた。45は、全長75cm, 現存幅16.2cm, 厚み1.7cmを計り、釘穴が多数観察される。47は、全長39.6cm, 幅8.9cm, 厚み1.4cmを計る。48は現存長35.8cm, 幅10cm, 厚み1.4cmを計る。47, 48は同一個体の可能性もある。46は、最大長64.4cm, 現存幅20.8cm, 厚み5.4cmを計る。用途不明品である。49, 50は、セットになるもので木器集成によるところの円形糠皮結合曲物Bに属す。49は蓋板と考えられるが、内面に側板が載っていた形跡が残る。2孔が穿たれ、糠皮紐によって側板を固定したと思われる。復元径28cm, 厚み0.55cmを計る。50は、内面に斜格子のけびきを有す側板である。現存長13cm, 幅0.5cm, 厚み0.4cmを計る。けびきの単位は0.5~1cm間隔。51は、折数の底板である。現存長39cm, 幅4.25cm, 厚み0.5cmを計る。

以上、第88図6~第93図51までは、第8層~第6層出土木製品で、これらは伴出遺物から柳浦2式~4式に位置づけられるものである。

第94図52~56, 59は第5層出土木製品である。52は縄である。54にからみつくように検出された。縛り目は、94図に図示した通りである。54は、先端に加工痕を有し、中央よりやや上方には、凹状の挟りを入れる。樹皮が片面にそのまま残るもので、用途は不明である。53は、曲物柄杓である。木器集成によるところの二列内二段絞りの釘結合曲物に属す。底板は無いが、2本の木釘によって底板を固定したと思われる。側板内面には、縦方向の

けびきが施される。側板は、樺皮紐によって綴じられ、柄は斜め方向にさし込まれ、抜けないように柄に挟りが入れてあり且つ木釘が打ってあった。柄杓の直径は17cm、器高は6cm、柄長さ36.2cm、柄厚み1.2cm、柄幅は断面台形で、3.4cmを計る。55は、現存長24.2cmを計る用途不明品である。56は、現存長32.6cm、幅5cm、厚み0.8cmを計る。内、外面共に斜め方向の刃傷を有す。曲物の蓋か底板になると思われる。52～56は、伴出遺物より中世～近世にかけての遺物と考えられる。

57～59は、漆器の椀である。57は、底部外面に凹線を入れ、高台を挽き出す擬高台の椀。全体に黒色漆を施す。高台径3.2cm、高台高0.25cmを計る。58は、底部外面に凹線を入れた擬高台の椀で中央を窪めるもの。高台内面以外は黒色漆を施す。高台径3.4cm、高台高0.3cmを計る。59も同様に擬高台を付し、高台内面以外は、黒色漆を施すもの。口径16cm、高台径8.6cm、高台高0.5cmを計る。木器集成にみるこれらの漆器の時期は、中世頃と考えられる。

第95図60～64は、杭と柱根である。60と62は、みかん割材を使用し、先端は片面だけ尖らせるもの。61、64は、細枝をそのまま利用し、片面を加工し尖らせたもの。63は、SB-23のP-10内検出の柱根である。柱根の残るピットは他にも検出されたが、この柱根の長さが最大で現存長34.5cmを計る。

#### (小 結)

88年度検出された遺構を、遺物との両面から概観すると、大まかには3時期に分けられる。それは、SB-21～26の建物の時期が示す、室町～江戸期と、SX-01内のSX-02、03の各遺構の示す、8～9世紀、またSI-01の示す古墳時代初めの時期である。

掘立柱建物群については、更に建物方向や位置から、SB-21～23の時期、25～26の時期と細分化の可能性も考えられるが、建物の規模、掘方、出土遺物などから考察すると、両建物群にそれほどの時期差はないと思われる。またSX-02、03については、伴出遺物の関係から、自然河川の弯曲する場所で、作業場として機能した島根郡家の関連施設と考えることができる。

また、更にSX-01出土の墨書土器が、その出土状態から、流れ込んだ遺物ではなく、そこで廃棄されたことを示していること。木器についても、農耕具が非常に少なく、生活具である杓子、曲物、箸等やその未製品や破損品が出土していること、SX-02、03と同時期の建物群が周囲にないこと、それらからこの作業場付近は、広場の要素をもつ地域で、水洗い、水汲み、廃棄物の捨場などの利用に供した区域ではないかと考えられる。またSX-01の周囲を巡るSD-01が、更に北方へ伸びていることから、88年までの調査

で検出された、奈良～平安期の建物群の中心的な建物は、更に北方が現在集落になっている地域に存在する可能性がある。

S I-01については、出土遺物から古墳時代の初め頃の竪穴住居と判明しているが、S X-01中から弥生式土器、古式土師器、古式の須恵器などが検出されているので、芝原遺跡周辺では、弥生時代から連続と生活が営まれ、集落を形成し、歴史時代或いは、それ以前から掘立柱建物が建設され公的な性格を帯び、中世或いはそれ以前に焼絶して室町、江戸時代に再び、掘立柱建物群が建設されるという経緯を辿るものと考えられる。今回調査した調査区の周辺の小字名が蔵向とか蔵ノ前<sup>註9</sup>と呼ばれるのは、今回検出された遺構とんらかの関係があるのかもしれない。

註1. 松江市教育委員会「松江北東部遺跡分布調査報告書(2)」1985年3月

2. 註1に同じ

3. 松江市土地開発公社、松江市教育委員会「吳福遺跡」昭和61年3月

4. 柳清俊「山雲地方における歴史時代須恵器編年試験」(『松江考古第3号』1980)

5. 山本 清「山陰古墳文化の研究」昭和46年7月25日(山本清先生退官記念論集刊行会)

6. 奈良国立文化財研究所「木器集成図録(近畿古代遺)」昭和60年3月30日

7. 内田律雄「西川津遺跡発掘調査報告書IV(海崎地区2)」昭和63年3月

8. 註6に同じ。

9. 註1に同じ。

## V 遺構の検討

5次にわたる調査で掘立柱建物遺構20棟、総柱造りの建物5棟、櫓列5条、井戸状遺構1、土壌32基、溝14条、その他2が検出された。

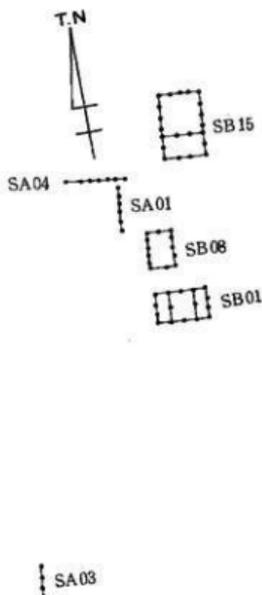
この内、まず建物遺構の特徴とその変遷について考えてみたい。大別して南の一群と北の一群に分かれる。南群は60、61年度に調査したもので掘立柱建物14棟と総柱造りの建物5棟が集中する。北の一群は掘立柱建物6棟からなる。南群と北群の建物の中間にはおよそ70mほどの建物の全くない地域がある。

建物はその方位と建物どうしの間隔、構造の特徴などからA～Eの5期に分類出来た。

**A期** 間仕切り壁をもつSB01、15とSB08がつくられた。建物方位はTN $0^{\circ}30'$ E～TN $5^{\circ}$ E。この時期のものはわずかに3棟しかない。SB15が比較的大きく中心的建物であったと思われる。

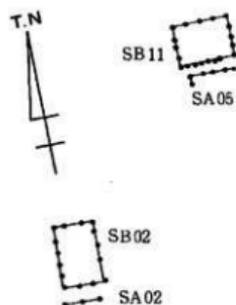
**B期** SB02、11、SA01、02、04、05が該当する。A期の建物の左右に建て替えが行われ櫓列を伴うことが特徴である。建物方位はTN $2^{\circ}30'$ W～TN $3^{\circ}$ W。

**C期** SB03、05、09、10、13、14、16、17、18、19の計10棟がつくられた。建物方位はTN $5^{\circ}$ E～TN $15^{\circ}30'$ E。この時期に最も多く建てられたSB14のように西面廂のつく身舎が3間7間というりっぱな建物があり、これが中心建物となっていたことが知られる。SB03と09はSD01によって後に切られる。又、SB19と05は総柱造りの倉庫と目される建物でこの時期にはじめて出現する。SB16、17のように方形に近い建物とSB03、09、14のように細長い建物、SB19、05のように総柱造りの建物の3種に分かれる。



第96図 A期主要建物配置図

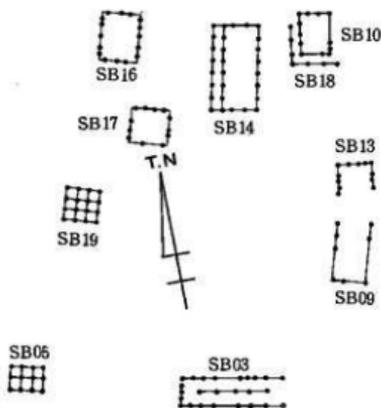
D期 SB04, 06, 07とSD01, SA03がつけられた。この内、SB06は南側身舎内に床束もしくは棚の柱穴があり板張りか土間の物置き様の部屋であったことが知られる。これはやや後出の要素である。このことから考えるとSB05→SB04→SB06という時期の変遷がたどられ倉庫の規模が小規模のものから大規模かつ複雑なものへと変化していった過程が読みとれる。建物方位はTN 8°E～TN 12°12'Eである。ところでこの時期の管理棟的性格を有する建物が見当たらないがC期の建物方位と大差ないでC期に含めた建物群の中にD期のものもあるかも知れない。したがってC期とD期の建物の一部は同時期に存在していた可能性が高い。



第97図 B期主要建物配置図

SD01はC期に建てられたSB03とSB09を切って掘削されており、台地の東縁辺を蛇行しながら南北方向に走っている。調査で確認した部分の総延長はおおよそ287 mに達しても少し南北に延びていたと思われるが川や水田によって切られ消失している。当時としてはかなり大規模な土木工事であったと考えられる。

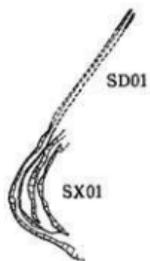
E期 南群ではSB20、北群ではSB21～26までの6棟がある。これらの棟方向はおおむね東西方向で建物相互間の間隔が広い。方位はSB24を除くとTN 10°42'E～TN 1°18'W。SB23やSB21, 24のピット内埋土中から店津焼の皿や碗、土師質土器が出土しており平安時代以降近世頃までの建物であろう。



第98図 C期主要建物配置図

次に各期の時期を考えてみる。ピット内の出土遺物で建物廃絶直後と考えられるものはE期の一部しかない。そこで、SB03, 09の2棟と切り合い関係にあるSD01の出土遺物を検討してみる。SD01では上層から下層底面まで一様に土器が出土しているが、上層から中層では山陰IV期の壺坏もあるが新しいものでは回転糸切り痕を残す坏もあり柳浦編年のIV期に該当するものであるから柳浦IV期以降に埋まったものと思われる。一方、最下層及び溝底出土の遺物を見てみるとやはり山陰IV期の坏身もあるが新しいものは柳浦編年のIV期のものがありSD01の成立直後の時期を示している。したが

SB24



SB26

SB25

SB21

SB22

SB23



SB20



SB04

SB06

SB07

第99圖 遺構配置圖  
(右E期, 左D期)

SB12

ってSD01は柳浦IV期の段階で成立し廃絶したものと考えられる。実年代に比定すると大体8世紀後半頃に成立し9世紀後半に廃絶したことになる。とするとSD01によって切られたSB03とSB09は8世紀中頃までには既に建てていたことになる。

この地に初めて掘立柱建物がつくられたA期の時期については、A期建物群と近い位置にあるSD01の堆積上層や、南方のSD02から山陰IV期の蓋土類がかなりまとまって出土しており、山陰Ⅲ期以前の須恵器が極めてまれであり、一応山陰IV期の時期にあてておきたい。以上の考えからまとめてみると建物群はA期からF期へと変遷がたどれ、その時期は実年代でいうならば断続する部分もあるがおおよそ7世紀前半頃から近世までである。

さらに、B期とC期の間、D期とE期の間にはそれぞれ面期が認められる。第1の面期はC期の頃に大規模な労役作業を伴うSD01や計画的に配置された倉庫群が建てられた段階である。新たに倉庫が付加されたことと建物の数が飛躍的に増加したことはB期までの小規模の館の主人であった段階から福原地区のみならずもう少し広範囲の地域を掌握していった豪族の政治的、経済的勢力の著しく拡大していった過程を物語っている。

第3表 主要遺構計測表

(1) 掘立柱建物計測表

| 番号   | 計測値                   |                       | 面積                             | 方位         | 柱間寸法                           | 備考                    |
|------|-----------------------|-----------------------|--------------------------------|------------|--------------------------------|-----------------------|
|      | 東西(間)                 | 南北(間)                 |                                |            |                                |                       |
| SB01 | 7.2 (4間) <sup>m</sup> | 4.2 (3間) <sup>m</sup> | 30.24 <sup>m<sup>2</sup></sup> | TN 0°30'E  | 東側柱は4.6尺(1.4m)差部、他は不等間         | 棟持柱2本あり               |
| 02   | 5.1 (3間)              | 8.2 (5間)              | 41.82                          | TN 3° W    | 桁行、梁行共に7尺(2.1m)等間              |                       |
| 03   | 13.8 (7間)             | 3.75 (4間)             | 51.75                          | TN 8°36'E  | 桁行5尺(1.5m)<br>梁行3尺(0.9m)       | 棟持柱5本あり               |
| 04   | 6.0 (4間)              | 4.5 (3間)              | 27.0                           | TN 12°12'E | 5尺(1.5m)<br>一部6尺(1.8m)         | 総柱造り                  |
| 05   | 4.5 (3間)              | 3.2 (2間)              | 14.4                           | TN 11°30'E | 桁行5尺(1.5m)等間<br>梁行5.3尺(1.8m)等間 | 総柱造り                  |
| 06   | 12.7 (6間)             | 4.5~4.7 (2間)          | 57.15                          | TN 8° E    | 2.05m~2.6m                     | 北半部総柱造り               |
| 07   | 7.0 (4間)              | 5.75~(2間)             | 40.25                          | TN 8° E    | 1.7m~3.0m                      | 総柱造り<br>東面幅2m         |
| 08   | 3.6 (3間)              | 5.2 (4間)              | 18.72                          | TN 0°30'E  | 桁行3尺(0.9m)~6尺(1.8m)、梁行3尺~5尺    |                       |
| 09   | 4.45 (3間)             | 8.1 (4間)              | 36.04~                         | TN 14°15'E | 1.7m~1.8m                      |                       |
| 10   | 4.1 (3間)              | 5.96 (4間)             | 24.40                          | TN 7° E    | 桁行1.25~1.50m<br>梁行1.0~1.50m    |                       |
| 11   | 7.2 (4間)              | 5.32 (4間)             | 38.30                          | TN 2°30'W  | 桁行1.6~2.0m<br>梁行1.2~1.5m       |                       |
| 12   | 9.15 (4間)             | 2.0 (2間)              | 18.30                          | TN 19°5' E | 桁行2.25~2.3m<br>梁行0.8~1.2m      | 総柱造り                  |
| 13   | 4.63 (3間)             | 3.6 (2間)              | 16.67~                         | TN 5° E    | 桁行1.8m<br>梁行1.5~1.6m           |                       |
| 14   | 4.6 (3間)              | 11.96 (7間)            | 54.97                          | TN 10° E   | 桁行1.6~2.0m<br>梁行1.5~1.7m       | 西面幅<br>幅1.2~1.4m      |
| 15   | 5.5 (4間)              | 9.6 (6間)              | 52.80                          | TN 5° E    | 桁行1.0~1.8m<br>梁行1.2~1.6m       | 南側の梁行は3間、<br>東側に掘立柱切り |
| 16   | 5.1 (4間)              | 6.55 (6間)             | 33.41                          | TN 13°30'E | 桁行0.9~1.5m<br>梁行1.2~1.6m       |                       |
| 17   | 5.4 (5間)              | 4.75 (5間)             | 25.65                          | TN 15°0' E | 桁行1.2~1.5m<br>梁行1.0~1.4m       |                       |

| 番号   | 計測値        |           | 面積                 | 方位                     | 柱間寸法                          | 備考   |
|------|------------|-----------|--------------------|------------------------|-------------------------------|------|
|      | 東西側        | 南北側       |                    |                        |                               |      |
| SB18 | 6.0 (3間)   | 5.3~(3間~) | 31.8~ <sup>m</sup> | TN 7° E                | 桁行 1.4~2.15 m<br>梁行 1.9~2.1 m |      |
| 19   | 4.5 (3間)   | 4.5 (3間)  | 20.25              | TN 15° 30' E           | 桁行 5尺等間<br>梁行 5尺等間            | 総柱造り |
| 20   | 7.45 (3間)  | 4.0 (2間)  | 29.80              | TN 7° 30' E<br>TN 4° E | 桁行 約 2.5 m<br>梁行 2 m          |      |
| 21   | 10.16 (5間) | 4.0 (2間)  | 40.56              | TN 10° E               | 桁行 1.94~2.2 m<br>梁行 1.9~2.1 m |      |
| 22   | 3.96 (2間)  | 3.12 (1間) | 12.41              | TN 10° 42' E           | 桁行 1.9~2.1 m<br>梁行 3.1 m      |      |
| 23   | 8.74 (4間)  | 3.6 (1間)  | 31.46              | TN 6° 12' E            | 桁行 1.5~2.3 m<br>梁行 3.6 m      |      |
| 24   | 4.72 (4間)  | 2.6 (2間)  | 12.27              | TN 31° 6' W            | 桁行 0.65~1.8 m<br>梁行 0.9~1.7 m |      |
| 25   | 10.02 (5間) | 4.0 (1間)  | 40.08              | TN 1° 30' W            | 桁行 2 m 等間<br>梁行 4.0 m         |      |
| 26   | 5.96 (4間)  | 4.0 (2間)  | 23.84              | TN 1° 18' W            | 桁行 0.8~2.1 m<br>梁行 1.8+2.2 m  |      |

## (2) 溝計測表

| 番号   | 断面形 | 計測値                    |                           | 出土遺物等       | 時期                   |             |
|------|-----|------------------------|---------------------------|-------------|----------------------|-------------|
|      |     | 長さ                     | 幅 深さ                      |             |                      |             |
| SD01 | 逆台形 | 300 m以上                | 1.0~1.6 m<br>0.4~0.8 m    | 約 1.0 m     | 須恵器                  |             |
| 02   | 円弧  | 20 m                   | 0.5 m                     | 0.12 m      | 石鏝, 古式土師器, 須恵器, 土製支脚 | 7世紀前半       |
| 03   |     | 10 m 余り                | 0.5 m<br>0.10 m           | 0.10 m      |                      | SD02より新しい   |
| 04   |     | 15 m 余り                | 0.46 m<br>0.28 m          | 0.10 m      |                      |             |
| 05   |     | 16.3 m                 | 0.65 m<br>0.15 m          | 0.15 m      |                      |             |
| 06   |     | 4.7 m                  | 0.36 m<br>0.20 m          | 0.4 m       |                      |             |
| 07   |     | 11.4 m                 | 0.2~0.45 m<br>0.18~0.33 m | 0.19 m      |                      |             |
| 08   |     | 6 m                    | 最大 2.4 m                  | 0.09 m      |                      |             |
| 09   |     | 10.5 m                 | 不明                        | 0.10 m      |                      |             |
| 10   |     | 東西 7.0 m~<br>南北 2.4 m~ | 1.2~1.8 m<br>0.8~0.9 m    |             |                      | 周辺のビート群より古い |
| 11   |     | 5.7 m~                 | 0.18~0.32 m               | 0.12~0.17 m |                      | 不明          |
| 12   |     | 12.7 m~                | 0.7~1.3 m                 | 0.05~0.14 m |                      |             |
| 13   |     | 6.9 m~                 | 1.0~1.5 m                 | 0.02~0.14 m |                      | 不明          |
| 14   |     | 4.8 m                  | 1.7 m                     | 0.5~0.17 m  |                      |             |

## (3) 土壌計測表

| 番号   | 平面形   | 計測値    |        | 出土遺物等     | 時期          |        |
|------|-------|--------|--------|-----------|-------------|--------|
|      |       | 長さ     | 幅 深さ   |           |             |        |
| SK01 | 隅丸長方形 | 0.96 m | 0.55 m | 0.1 m     | 無           |        |
| 02   | 小判形   | 1.1    | 0.58   | 0.2       | 土師質土器 1 個体  | 中世     |
| 03   | 小判形   | 1.08   | 0.67   | 0.26~0.30 |             |        |
| 04   | 小判形   | 1.3    | 0.85   | 0.27      |             |        |
| 05   | 楕円形   | 1.2    | 0.9    | 0.15      |             |        |
| 06   | 隅丸長方形 | 1.20   | 0.80   | 0.35      | 漆器の碗, 土師質土器 | 中世(古墓) |
| 07   | 方形    | 0.87   | 0.77   | 0.3       |             |        |

| 番号   | 平面形           | 計測値    |         |          | 出土遺物等                              | 時期         |
|------|---------------|--------|---------|----------|------------------------------------|------------|
|      |               | 長さ     | 幅       | 深さ       |                                    |            |
| SK08 | 長方形           | 0.82 m | 0.45 m  | 0.25 m   |                                    |            |
| 09   | 長方形           | 0.75   | 0.53    | 0.51     |                                    |            |
| 10   | 隅丸長方形         | 1.38   | 0.52    | 0.4      |                                    |            |
| 11   | 長方形           | 0.8    | 0.5     |          |                                    |            |
| 12   | 隅丸長方形         | 1.5    | 1.1     | 0.12     | 無                                  |            |
| 13   | 隅丸長方形         | 0.95   | 0.55    | 0.33     | 無                                  |            |
| 14   | 隅丸長方形         | 2.70   | 1.40    | 0.50     | 一段削り<br>須磨質の鉄破片<br>短刀1<br>土師質土器3個体 | 中世         |
| 15   | 長方形           | 1.75   | 0.75    | 0.40     |                                    | 中世～近世      |
| 16   | やや不整形<br>隅丸方形 | 1.45   | 1.3     | 0.56     |                                    |            |
| 17   | 不整形           | 1.75   | 1.0～1.4 |          |                                    |            |
| 18   | 長方形           | 1.25   | 0.88    |          |                                    |            |
| 19   | 隅丸長方形         | 0.82   | 0.44    | 0.15     |                                    |            |
| 20   | 円形            | 0.77   | 0.77    |          |                                    |            |
| 21   | 楕円形<br>(小判形?) | 0.89   | 0.75    | 0.35     |                                    |            |
| 22   | 略円形           | 1.0    | 0.8     | 0.8      |                                    |            |
| 23   | 長方形<br>(?)    | 1.87   | 0.7～    | 0.1～0.15 |                                    | SX01よりも新しい |
| 24   | 隅丸方形          | 1.0    | 0.8～1.1 | 0.3      |                                    |            |
| 25   | 隅丸方形          | 0.95   | 0.8     | 0.24     |                                    | SI01よりも新しい |
| 26   | 隅丸方形          | 0.92   | 0.90    | 0.24     |                                    |            |
| 27   | 円形            | 0.63   | 0.61    | 0.32     |                                    |            |
| 28   | 楕円形           | 1.18   | 0.98    | 0.57     |                                    |            |
| 29   | 楕円形           | 0.92   | 0.78    | 0.28     |                                    |            |
| 30   | 不整形円形         | 1.8    | 1.4     | 0.73     |                                    |            |
| 31   | 円形            | 1.24   | 1.15    | 0.96     |                                    |            |
| 32   | 円形            | 0.86   | 0.80    | 0.36     |                                    |            |

(4) 楕列計測表

| 番号   | 計測値     |                      | 方位     | 柱間寸法                 | 備考    |
|------|---------|----------------------|--------|----------------------|-------|
|      | 東西(柱穴)  | 南北(柱穴)               |        |                      |       |
| SA01 | m       | 6.2(6本) <sup>m</sup> |        | 1.2～1.4 m            |       |
| 02   |         | 4.2(3本)              |        | 2.0～2.2              |       |
| 03   |         | 4.0(4本)              |        | 1.2～1.5              |       |
| 04   | 8.6(8本) |                      | 5°30'E | 0.9～2.0              |       |
| 05   | 5.9(5本) | 1.0(2本)              | 1°30'W | 東西 1.2～1.7<br>南北 1.0 | L字形の楕 |
| 06   | 7.9(5本) |                      |        | 1.8～2.1              |       |
| 07   | 5.8(3本) |                      |        | 1.8～4.0              |       |

## VI 遺物の検討

### 1. 須恵器の形態分類について

本調査によって出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、磁器の他、石器、木器、鉄刀、漆器、土錘、古銭などである。その中でも、墨書土器14個体、丹塗土師器、製塩土器、木器・漆器など遺跡の性格を左右する遺物も含まれていた。これらについては、それぞれ項目別に検討することにする。ここでは本遺跡から出土した須恵器で最も多量に出土した蓋坏・坏類について形態分類を行い、遺物から本遺跡の中心時期を検討することにする。

**蓋坏類** 蓋、坏身とも小形のもので坏身の立ち上がりは短かく内傾する。切り離しは、ヘラ切りだが、他は横ナデで調整してあるものである。坏身の口径は10cm以下のものが多い。

**蓋類**は、かえりの有無など口縁端部の形態の違いなどから蓋Ⅰ、蓋Ⅱ（a、bに細分）、蓋Ⅲと分けた。

**蓋Ⅰ類** 口縁部内側にかえりをつけるもの、つまみは乳頭状、擬宝珠状の2種で、本遺跡では輪状のものは認められず大きさも小形のものである。

**蓋Ⅱ a類** 口縁部内側にかえりがかかず、口縁端部が直立するもの。つまみは輪状のものだけであり器高が3cm以上で高い。切り離しはヘラ切りである。

**蓋Ⅱ b類** 蓋Ⅱ aと同じく口縁端部が直立するもの。つまみは輪状のものだけであるが器高が3cm以下と低いものである。中には天井部中央がくぼむものさえある。切り離しは、糸切りであり糸切りをそのまま残すものもある。

**蓋Ⅲ類** 口縁部内側にかえりがかかず、口縁端部が断面三角形か、天井部から単純にそのまま口縁端部に至るものである。

**坏類**は、高台の有無、体部の形態の違い、切り離し調整の違いなどから、坏Ⅰ（a、b、c、dに細分）、坏Ⅱ（a、b、c、dに細分）と分けた。

**坏Ⅰ a類** 高台のつくものうち、体部が内湾して開くもので、高台は「ハ」の字状に開く。切り離しは、静止糸切りのみでナデ調整するものと糸切りのままのものがある。

**坏Ⅰ b類** 高台のつくものうち、体部が外傾して立ち上がるもので高台は低部と体部との境よりにつき、低いものである。切り離しは、すべて回転糸切りそのままである。

**坏Ⅰ c類** 高台のつくもので体部は内湾気味に開くもので高台は断面三角形のものがつく。切り離しはヘラ切りである。底部は丸い。

坏Ⅰd類 高台のつくもので、体部は大きく外傾して開き、口縁端部内側に稜をつくる。切り離しは不明である。

坏Ⅱa類は、高台のつかないもので、口縁部下方から外反するもの、あるいは口縁部ドでくびれて口縁部が外反するもので口縁部内側が肥厚し稜をつくるものである。この中をさらに1, 2, 3と細分する。

坏Ⅱa-1類 口縁部下からゆっくり外反して立ち上がるもので、切り離しはヘラ切りである。体部下方をヘラ削り調整するものもある。

坏Ⅱa-2類 口縁部下でくびれて口縁部は短かく外反し口縁部内側に稜をつくるもので、切り離しはすべて回転系切りそのままである。

坏Ⅱa-3類 口縁部下のくびれがなくなるが、口縁部内側が肥厚し稜をつくるもので切り離しは回転系切りそのままである。

坏Ⅱb類は、高台のつかないもののうち、体部が内湾気味に立ち上がり口縁端部は丸いものである。この中をさらに1, 2, 3と細分する。

坏Ⅱb-1類 わずかに内湾気味に立ち上がるもので切り離しはヘラ切りで、体部下方をヘラ削り調整する。小形品である。

坏Ⅱb-2類 内湾気味に立ち上がるもので、切り離しは糸切り（静止糸切り）だがヘラ削りで周辺が調整してあるものである。

坏Ⅱb-3類 内湾気味に立ち上がるもので、切り離しは回転系切りそのままのものである。大きさは、大形品、やや小形品のものがある。

坏ⅡC類は、高台のつかないもののうち、体部が外傾して立ち上がるものである。この中をさらに1, 2と細分する。

坏Ⅱc-1類 体部が外傾して立ち上がるもので、切り離しはすべて回転系切りそのままである。小形品が多い。

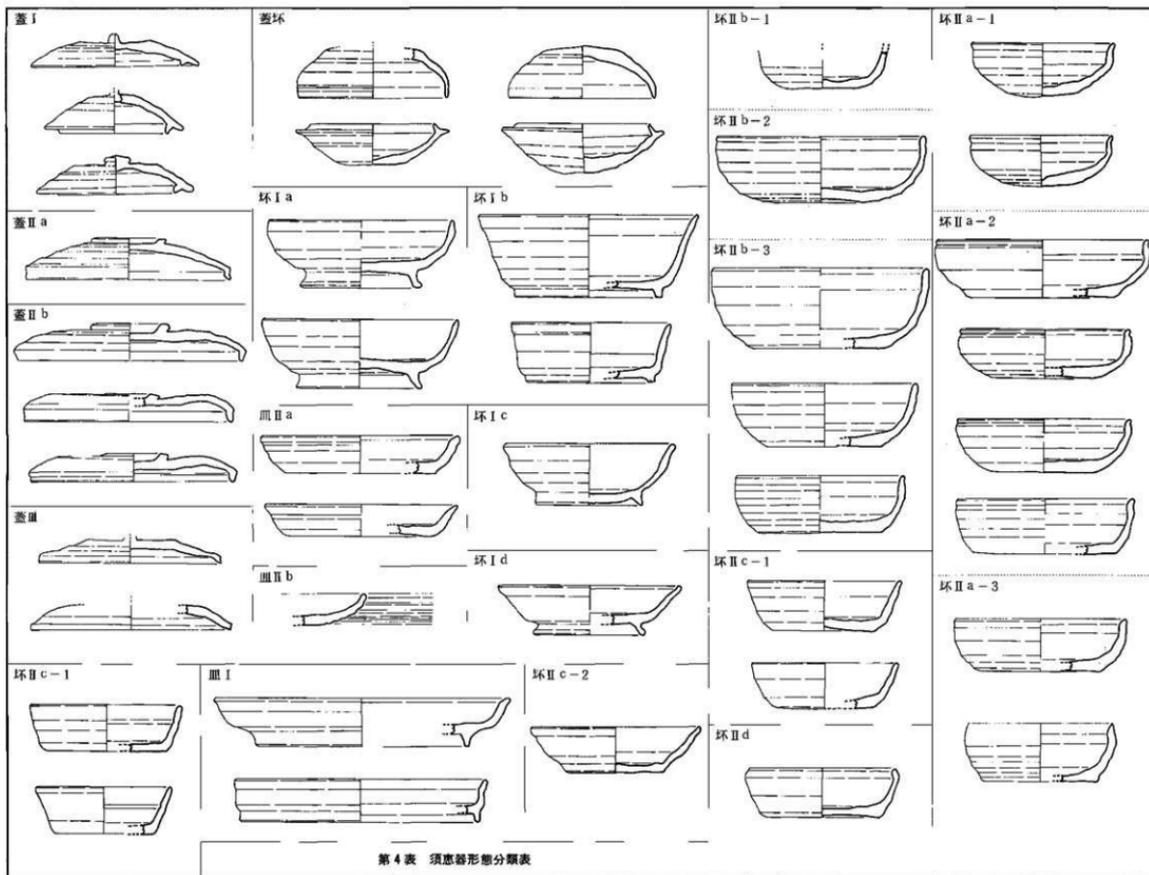
坏Ⅱc-2類 体部は大きく外傾して開くもので切り離しは回転系切りそのままである。器肉は薄い。

坏Ⅱd類 高台のつかないもので体部は外傾して立ち上がり、口縁部は短かく内傾する。口縁端部は丸い。切り離しは回転系切りそのままである。

皿類は、高台の有無、形態の違いから、皿Ⅰ、皿Ⅱ（a, bに細分）と分けた。

皿Ⅰ類 皿のうち高台のつくもので、体部は外傾し、高台がやや内に入った所につくものと、ほぼ垂直に立ち上がるものがある。切り離しは回転系切りそのままである。

皿Ⅱa類 皿のうち高台のつかないもので、体部は短かく外傾するもので切り離しは回



第 4 表 須惠器形態分類表

転糸切りそのままである。

皿Ⅱb類 皿のうち高台のつかないもので体部は短かく内湾して大きく開くもので、切り離しは不明であるが、水引き痕が著しい。これは高環の坏部の可能性があるが、一応ここにしておくことにする。

これまで島根県下で蓋環から奈良・平安時代の坏類の編年を行ったものには、出雲国庁  
(註1) (註2) (註3) (註4)  
跡発掘調査概報、高広遺跡、狐谷遺跡、柳浦編年などがある。

それぞれ特徴のある編年観をもって行われているが、ここではこの時期の坏類が細かく、器種、形態分類がなされ、編年が行われている柳浦編年を参照して行うことにする。

柳浦編年1式(この時期は蓋の口縁部内側にかえりを有し、切り離しはヘラ切りの時期である。)に入るものは、蓋環、蓋Ⅰ、坏Ⅱa-1、坏Ⅱb-1がある。ただ蓋環は柳浦1式に入っていないが、今口蓋環が逆転して蓋Ⅰに変化する見方が再検討されており(陰山遺跡の報告書)蓋環と蓋Ⅰとは別系統のものとして扱われるようになってきている。またこの蓋環は小形化が進んだものであり、山本編年Ⅳ期の最も新しい段階に位置付けられるもので、ここでは柳浦1式の中に入れておくことにする。柳浦2式(この時期は、蓋にかえりをもたず口縁端部が直立し、切り離しはヘラ切りの時期である。)に入るものは蓋Ⅱa、坏Ⅰc、坏Ⅰa-1がある。本遺跡ではこの柳浦2式に入るものはほんのわずかである。柳浦3式(この時期は、蓋の口縁端部が直立し、切り離しは糸切りをナデ又はヘラ削りで調整する時期である。)に入るものは、蓋Ⅱb、蓋Ⅰaの一部、坏Ⅱb-2がある。本遺跡ではこの時期にあたるものもわずかである。柳浦4式に入るものは、蓋Ⅱbの一部、坏Ⅰb、坏Ⅰd、坏Ⅱa-2、坏Ⅱa-3、坏Ⅱb-3、坏Ⅱc、坏Ⅱd、皿Ⅰ、皿Ⅱa、bがある。この時期は、蓋では口縁端部が断面三角形のもの、単純なもので、坏類では糸切りを調整しない時期である。ただ本遺跡では蓋Ⅲが坏Ⅰa、坏Ⅰbの量に見合うほどなく、わずかに5片以下であること、逆に蓋Ⅱbが圧倒的に多いことから、蓋Ⅱbの一部はこの時期まで残っていると考えられるが今後の資料を待ちたい。また、坏Ⅰaは、すべて静止糸切りであり、坏Ⅰbはすべて回転糸切りと分かれる。これが何を意味するか判断する資料が乏しいが、高広遺跡のように静止糸切りが先に行われた可能性も残っている。柳浦4式は、前半、後半に細分されている。一応ここでも後半を設定すれば、坏Ⅱa-3、坏Ⅱc-1くらいが後半に入るようである。柳浦5式は、坏Ⅱc-2がある。本遺跡では、この時期のものもほんのわずかである。

柳浦編年では、1式が7C中葉～後葉、2式が7C末～8C前葉、3式が8C中葉、4式が8C後葉～9C、5式は9C末～10C前葉となっている。

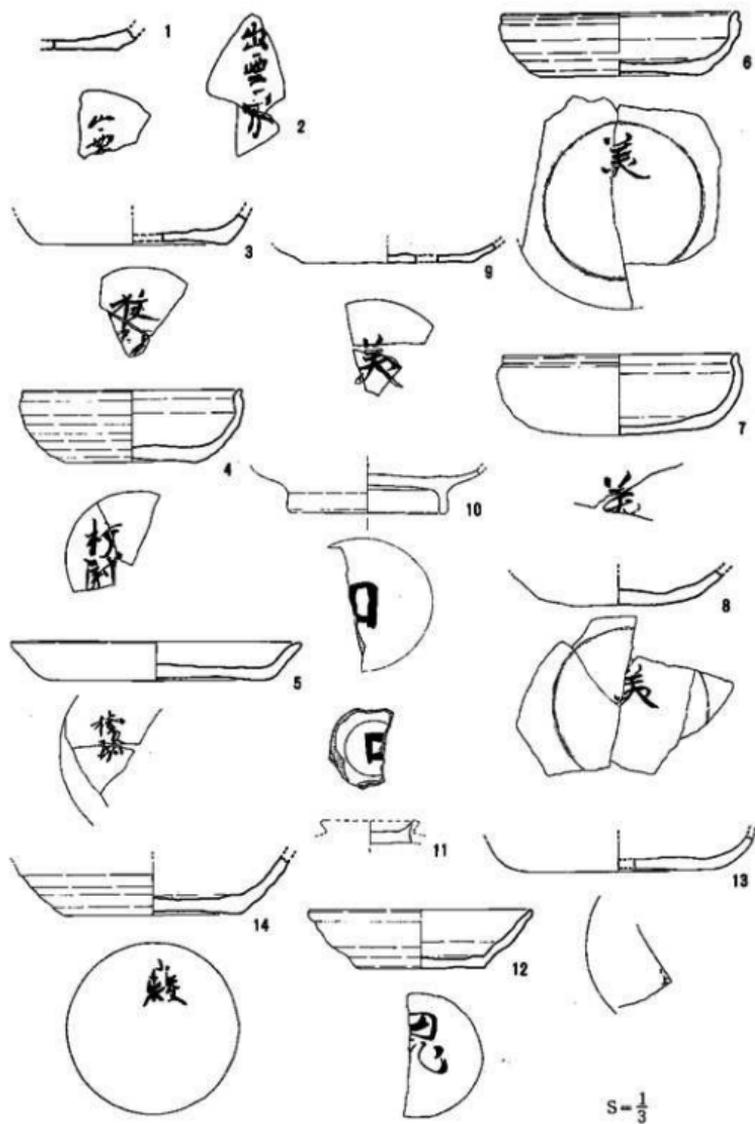
- 註1. 「出雲国庁跡発掘調査概報」松江市教育委員会 1970年
2. 「高広遺跡発掘調査報告書」島根県教育委員会 1984年3月
3. 横山純夫「狐谷横穴群」島根県教育委員会 1977年
4. 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」(松江考古第3号1980年)

## 2 墨書土器について

出土した墨書土器は14点あり、そのほとんどがSX01内から出土した。その内訳は、「出雲」1点、「出雲家」1点、「校尉」3点、「美」4点、「毘」1点、「口」2点、不明2点である。まず「出雲」「出雲家」の土器は、いずれも回転糸切りの坏の底部の破片で焼きの悪いものであり底部外面に墨書がある。「校尉」の土器は、口縁下でくびれて口縁端部が短かく外反するもので、口縁部内側の肥厚する坏と、体部が短かく外傾して開く皿と、坏底部の小片で、すべて回転糸切りのままである。底部外面に墨書する。「美」の土器は口縁部下にくびれをもつ回転糸切りのままの坏2点と、糸切りをナデて消す坏の底部と回転糸切りのままのもので、すべて底部外面に墨書する。「毘」の土器は体部が大きく外傾する坏で、回転糸切りのままのもので底部内面に墨書する。「口」の土器は輪状つまみの蓋で輪状つまみの中に墨書するものと、高台付坏で体部は内湾気味に立ち上がり切り離しが静止糸切りのままのもので底部外面に墨書する。これは口偏かも知れない。「上」のみえる土器、不明の土器はともに回転糸切りのままの坏の底部で底部外面に墨書する。

「出雲」「出雲家」について 「出雲国風土記」に島根郡の郡司として主張無位出雲臣の名があることからこれらはこの出雲臣に関係するものと考えられる。「出雲家」という表現は他県において「五十戸家」(平城宮跡)、「上総家」(千葉高田権現)、「矢作家」(茨城鹿の子C)、「麻積家」(藤原宮跡)、「米家」(難波京跡)、「祝家」(茨城・神野向遺跡)などがある。この他に例えば「少毅殿」(静岡、御子ヶ谷)、「山口館」(千葉・山田水呑)のように「殿」「館」があるが身分的差なり公的施設に所属するものによって表現が異なっているように思える。「家」は比較的身分の低いものの呼称に使用されていたのかもしれない。ただ居館そのものだけを指したのか、その附属施設をも含めたものを指したのかよくわからない。

「校尉」について 校尉は軍団の長の官職名であり、「軍防令」に「凡そ、軍団の大毅は千人領せよ。少毅は副うて領せよ。校尉は二百人。旅師は百人。隊正は五十人。」とあるように兵士200人の長を表わした。意字郡、島根郡、秋鹿郡を管区とする意字軍団は、兵士千人以上の大軍団であり校尉が5人置かれていたことになる。島根郡の中には、「出雲国風土記」にあるように、<sup>ふじきみ とぶひ</sup>布目積美の峰があり、<sup>とのえのせき</sup>戸江剗があり、隠岐国との海上航



第 100 图 墨書土器实例图

ちくみ うまや せびきのまもり た こしほ  
路の起点千鶴の駅があり、瀬崎成があり、さらに鯨崎島（今の大根島）には「牧」が置かれていた。牧は、兵部省に属して軍団で使用される馬や牛を飼育した官宮のものである。こうした軍団に関連する仕事のために鳥根郡に校尉が常駐していた可能性が高い。また校尉の任用について「軍防令」に「凡そ、軍団の大較小較には通ひて部内の數位、勲位、及び庶人の武芸称すべき者を取りて充てよ。其れ校尉以下には、庶人の弓場に便ならむ者を取りて為よ。」とあるように官位、勲位のない者を校尉に任用するようだ。とすれば在地豪族の者がそのまま校尉に任用された可能性も強い。

「美」について 岐阜県老洞古窯跡出土の刻印土器に美濃岡の「美」を「美」と表したものがあって「美」とも読めるが、この「美」が人名なのかそれとも地名その他を表したものか不明である。また「美」は「美」（あつもの）の略字とするものもある。今のところどちらかに決定できない。

「毘」について 実際には字の「部」を欠くが「毘」の文字だと思われる。この「毘」は環の底部内面に書かれていて他のものと趣きを異にする。他地域では鹿島町の名分塚田遺跡出土の環で底部外面に「呂」とあり、内面に円のような記号が書かれているものがある。これは、日常生活の中で使用するものというより、祭祀に関係するものと考えられる。鈴木伸秋氏は、集落址出土墨書土器についてであるが「A 古米信仰（神）イ、信仰の対象を表わすもの ロ、祈願を表わすもの、B 今米信仰（仏教）ハ、供献物を表わすもの ニ、使用を表わすもの ホ、祭祀日を表わすもの」<sup>(註1)</sup>に分類されたが、「毘」がいかなる使用目的で墨書されたのか今のところ不明である。

「口」について 輪状つまみの中の「口」は、カタカナの「口」とも読めるが、出雲地方には例がなく他県でも片仮名は極めて少数である。一応漢字の「くち」と読むべきか。高台付環の「口」は、縦長で1字ではきゅうくつなもので、口偏だろう。

今回出土の墨書土器は、出土地がほぼS X 0 1内ということもあるが「出雲・出雲家」校尉 3、「美」4と同じ文字にかたよりつつ、まとまりをもって出土している。これは、この建物の1群が雑多な寄り合い世帯でなく、あるいは寄り合いによって管理されていたのではなく、1つのまとまりをもった小さな集団によって営まれ、管理されていたことを示しているのではないだろうか。そのまとまりをもった小さな集団が、ここに登場する出雲臣や校尉ではなかっただろうか。きわめてこじんまりとしたものが考えられる。

さて、これまで出雲地方では墨書土器を出した遺跡は14カ所である(第5表)。そのいずれもが、国庁、郡家、郷庁、寺院などの公的施設に推定されている遺跡からの出土がほとんどである。本遺跡もまたそうした遺跡である可能性が高い。また本遺跡出土の墨書土

第5表 出雲国出土墨書土器一覧表

(古代史サマーセミナー研究報告資料より抜粋)

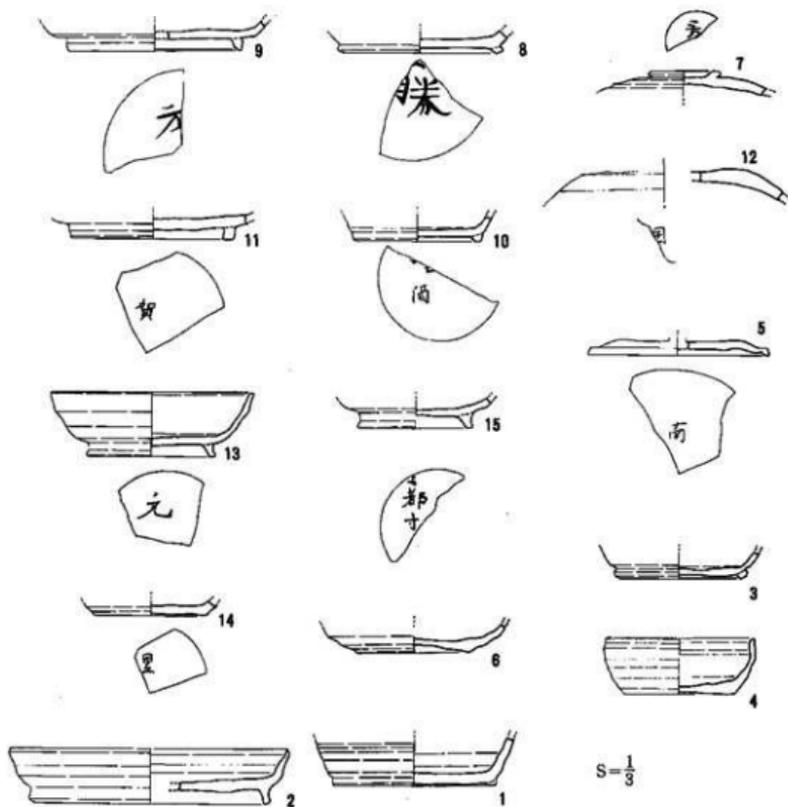
| 遺跡名         | 所在地 | 文字資料                                       | 種類    | 備考        |
|-------------|-----|--|-------|-----------|
| 1 芝原遺跡      | 松江市 | 出雲・出雲家・校尉・美・毘・口など                          | 須恵器   | 島根郡家?     |
| 2 出雲国庁跡     | "   | 酒環・少日・大下・玉女・寶・元・国・里・空勝・南・厨・空酒・大団・石・得・草・私など | "     | 国庁        |
| 3 出雲国分尼寺跡   | "   | 東室・子刀日・泰館・室東・空厨・方団                         | "     | 国分尼寺      |
| 4 中竹矢道跡     | "   | 寺  | "     | ?         |
| 5 タテチャウ遺跡   | "   | 驛  | "     | 郷家関係      |
| 6 丁ヶ坪遺跡     | "   | 館  | "     | ?         |
| 7 平ノ前廃寺遺跡   | "   | 大  | "     | 新造院関係     |
| 8 才ノ峰遺跡     | "   | 井  | 土師器   | ?         |
| 9 名分塚田遺跡    | 鹿島町 | 呂・内面に記号あり                                  | 須恵器   | 生馬郷庁関係    |
| 10 中村遺跡     | 平江市 | 中・草・少・人                                    | "     | 出雲郡美談郷庁関係 |
| 11 天神遺跡     | 出雲市 | 早天   | 丹波土師器 | 神門郡家      |
| 12 カネツキメン遺跡 | 仁多町 | 大、上備・大、少・伴・団氏                              | 須恵器   | 仁多郡家      |
| 13 八代長福寺遺跡  | 仁多郡 | 廣・大  | "     | 仁多郡布勢郷庁   |
| 14 沢遺跡      | 安来市 | 寺  | "     | 新造院関係     |

器は、「毘」のものを除けば、ほぼ柳浦編年の3式～4式前半にあたるものである。つまり、8C中頃～9C前半くらいになるだろう。また出雲国庁跡出土の墨書土器(第101図)をみると、これもすべて回転糸切りのままのもので柳浦編年の4式になるものである。ただ高台付環で、高台が底部と休部との境につくものがあり、本遺跡のものより、新しい要素がみられる。8C後葉から9C後半くらいになると思われる。また出雲国分尼寺跡出土墨書土器も回転糸切りのままのものであることから、8C後葉以降のものである。他の遺跡の墨書土器もおおむね回転糸切りのものであることから、出雲地方においては、8Cの中葉ないし後葉から墨書土器が出現してきたといえるだろう。中には、鹿島町出土墨書土器のように本遺跡の「毘」の土器と同じ形態のもので柳浦編年の5式に入るものもある。出雲国庁跡出土の「里」の墨書土器も柳浦編年の5式ではないかと思われる。9C末～10C初め頃のものである。

このように、8C中葉ないし後葉から急激に墨書土器が出現してくる背景には、出雲地方における畿内の律令制の浸透がうかがえる。出雲国庁の周辺に国分寺・国分尼寺が建てられ、各郡家、郷庁が整備され、拡張され、附属施設が置かれていく時期にあたると思われる。今のところ「評制」下の土器、つまり出雲国庁の2型式、柳浦編年の2式の土器に

は墨書土器が発見されていない。

しかし、出雲地方の各地では9C前半頃から、出雲国庁では9C後半以降になると墨書土器は激減していく。これは畿内の律令制が当地出雲地方においても崩壊していくことと関連しているのではないだろうか。そして新たな政治体制—例えば「私営田経営支配を主軸として在地の郡司・富豪層が、独自に班田農民の再編成を実施していく」もの<sup>(註2)</sup>に移行していったと考えられるのではないだろうか。こうした墨書土器研究は始まったばかりである。鳥根県下出土の墨書土器の年代を把える中で出雲地方における律令制の浸透・発展・崩壊の過程を照射していくのは今後の課題であろうと思われる。



第101図 出雲国庁跡出土墨書土器実測図  
(鳥根県立「風土記の丘資料館」所蔵)

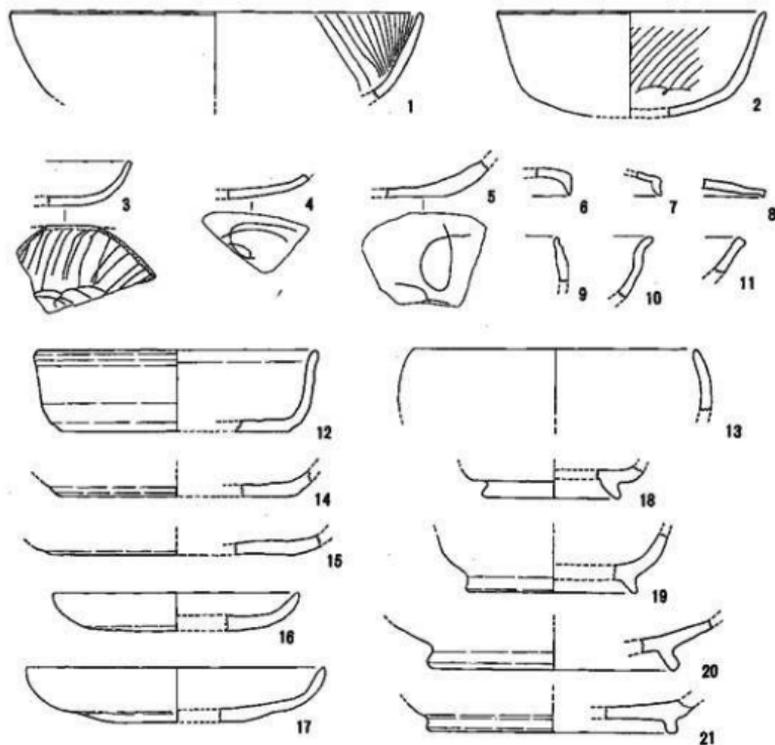
## 参考文献

季刊「考古学」第18号（雄山閣）

- 註1. 鈴木仲秋「房総における墨書土器の一考察」史館5, 1975
2. 長谷川厚「古代における文字資料の一試論」史館104, 1981

### 3. 丹塗土師器について

62年度及び63年度の調査で大量に出土した。62年度の出土地点であるU3, V3, X2, X3区は土地所有者の話によればSX01の北に続く旧福原川の床土を運んで水田の客土にしたものであることがわかっている。63年度調査においては全てSX01内の堆積土から出土している。SX01は、旧福原川にもぐり込む形で東, 南, 北の三方向へまだ続い



第102図 丹塗土師器実測図

S =  $\frac{1}{3}$

ているので62年度調査で出土した遺物も全てSX01の堆積土からの出土とみなしてよい。

正確な個体数は不明だが500片以上あり大量かつ集中的に出土したことが注意される。

そこで器種分類をしてみるとA類環とB類皿に大別出来る。A類環は、口径12~14cm前後のもので無高台のもの(1, 2, 12)と高台の付くもの(18~21)に分かれる。又、口縁を観察すると端部が丸味を帯びるもの(1, 2, 12)平坦面を形成するもの(11)口縁直下が内反する(9, 13), 外反するもの(10)があるがほとんどは底部から口縁部にかけて外傾するものである。

B類皿は口径13~16cm前後, 器高2~3cm前後のもので底部の厚みは7~8mmと分厚いものがみられる(16, 17)。その他器種は不明だが厚み9~9.5mmで内面を一部へう削り調整を施し, 内外面共に丹塗を施したものが数片見受けられた。蓋は口縁部が垂直に下がるもの(6), やや外反するもの(7), 殆んど形骸化したもの(8)がある。次に暗文の種類をみると, 全て内面に施され, 口縁部に右上がり又は左上がり方向の放射線文を, 底部に螺旋文を施す(1~5)。調整をみてみると, 口縁部から底部までへう磨きをし, 中にはその境い目をへう削り調整したもの(1~4)と底部に糸切痕をとどめクロク削りとクロクロナデの手法を用いたもの(5, 12~21)に分かれる。

これらを出雲国庁跡で分類されたものと比較してみると土師器の第1型式とされる暗文のみを施したものは全く見当たらない。第2型式は丹塗を施し, かつ暗文をいれるものだが, これは5点(1~5)ある。他にも破片があるが全体からすると少ない。第3型式は丹塗を施し, 暗文を欠くもので大半の破片が該当する。このように出雲国庁第1型式のものは全くなく, 全て第2と第3型式の範ちゅうに含まれるものである。しかし, 大多数の破片は磨減が著しく判別出来ないものが多い。年代は出雲国庁出土例から考えるとおおむね8世紀前半頃から末までの奈良時代に属するものと思われる。

ところでこうした丹塗土師器は島根県下では松江市・出雲国庁跡をはじめ同大井町・イガラビ遺跡(無高台の環, 皿, 蓋, 甌), 同大井町・池ノ奥A遺跡(無高台の環, 高台付皿), 安来市・高広遺跡で出土しているのみで極めて稀有なものである。勿論, 古墳時代にも横穴, 集落跡などで知られているが, 本例は前代のものとは性格が異なるものと思われる。歴史時代の出土例は平城宮跡をはじめとする官衙跡で多量に出土しており官衙において執り行われた各種の祭儀に用いられたと考えられ, 本遺跡が官衙跡であることの一つの傍証となりうるものであろう。

#### 4. 製塩土器について

##### (1) はじめに

芝原遺跡出土の製塩土器は合計27片を確認した。それらの多くは、SX01内において墨書須臾器や木製品等と供伴していたものである。いずれの資料も細片となっており全様を知りうるものはないが、同型塩の運搬用製塩土器と考えられる。このうち、図示可能な7点を第103図に示した。

##### (2) 資料の特徴

- ① 27片の資料のうち、2片に内面に布目痕の残るものが存在する(第103図7)。他は内外面とも指頭圧痕がみられる。
- ② 多くは二次焼成を受け、淡赤褐色を呈し、内外面に炭酸石灰と考えられる白色物質の付着したものがある。
- ③ 内外面に細い粘土紐の痕跡がみられる例がある。

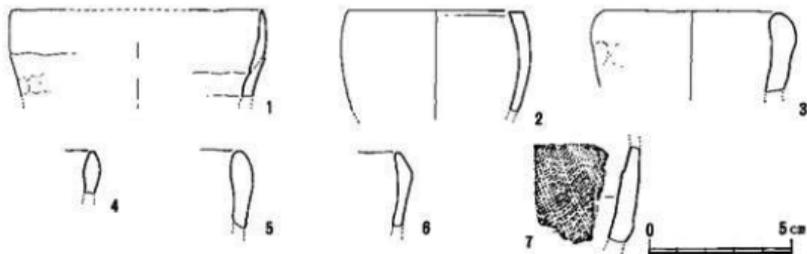
##### (3) 資料の分類

いずれの資料も小破片となっており詳しい観察はできにくい。口唇部の形態で次の、a類、b類、c類に分類を試みた。

- a類 — 器壁が薄く、口唇部断面が尖る。第103図1がこれにあたる。
- b類 — 口唇部をヘラ状工具によって、横方向に水平にカットする調整がみられるもの。胴部は球状となり長くはならないと考えられる(第103図2)。
- c類 — 口唇部が丸く肥厚し、胴部が長くなると考えられるもの(第103図3~6)。

##### (4) 製塩土器の年代観

これまで知られている出雲地方の製塩土器は、郷の坪式(5~6世紀)→伊原谷式(7世紀)→鹿蔵山式(8世紀前半頃)→小原谷式(8世紀後半以降~)という編年が考えられる。<sup>(註1)</sup>芝原遺跡出土資料は、概ね鹿蔵山式~小原谷式の範囲を考えることができるが、そ



第103図 製塩土器実測図

れは、供伴する須恵器の年代観とも矛盾しない。

すなわち、a類はほぼ鹿蔵山式、b類、c類は小屋谷式に対比させることができよう。<sup>(註2)</sup>  
特に、b類とc類は、いずれも律令制下において同じ島根郡内であった島根町小屋谷遺跡<sup>(註2)</sup>  
や美保関町七類浜出土資料に酷似していることが注意される。

#### (5) 製塩土器からみた遺跡の性格

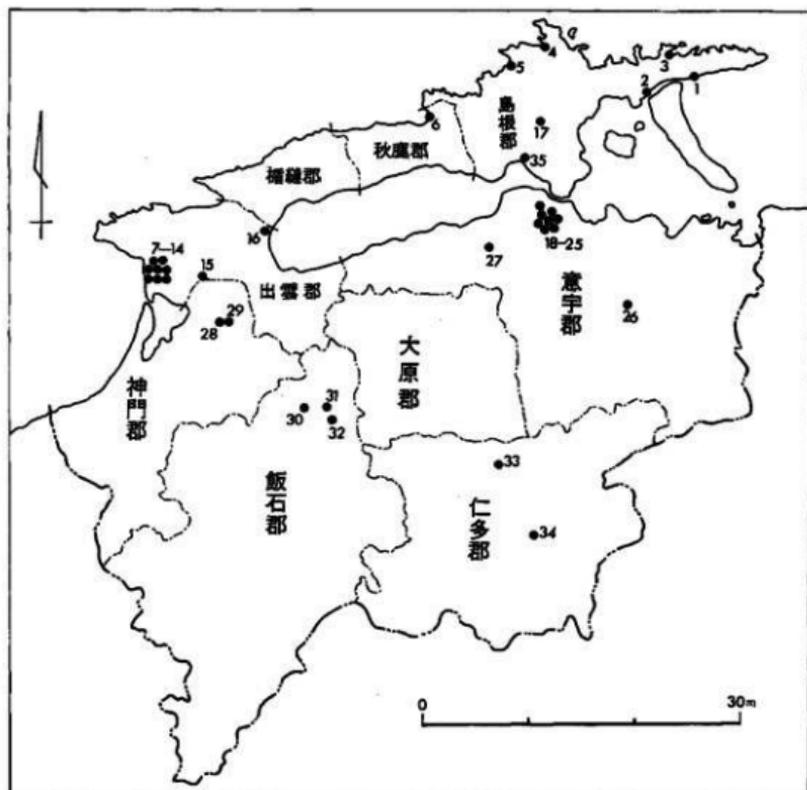
第6表には奈良・平安時代の出雲国内出土の製塩土器出土遺跡一覧を、第104図にはその分布図を示してある。これらの遺跡は、海浜部にある生産遺跡と、平原部・山間部にある消費遺跡とに大別される。

海浜部にある生産遺跡の中には、『出雲国風土記』に、「濱・浦」として記載のみえる<sup>(註3)</sup>  
漁村と一致するものも少なくない。海浜部にあるこれらの漁村から、平原部や山間部へ供給されたことが考えられる。

一方、平原部や山間部の製塩土器出土遺跡の推定される性格をみると、この時代の一般集落遺跡ではなく、官衙・寺社といった公的施設に係る遺跡に出土しているという傾向が指摘できる。「延喜式」や宮殿出土木簡では出雲国は塩の貢納国とはなっておらず、出雲国内での需要と供給の関係が主体であったと考えられるが、それは地方官衙や有力社寺(地方豪族)と海浜部の漁村(百姓)との関係を示していると思われる。<sup>(註4)</sup>

ところで、製塩土器に関連して注目すべき資料がある。SX01で供伴している墨書須恵器の一群である。この中に「罽」と読まれる墨書土器が4点存在する(第100図6, 7, 8, 9)。「正倉院文書」の中の「東寺写経所解案」(天平宝字2年)、「後一切経料雑物納帳」(天平宝字4年)、「東大寺奉写大般若経所解案」(天平宝47年)等には、麦焼・罽坏・片盤・罽坏・水埵・片埵・塩坏といった須恵器の食器名がみえ、これらのいくつかが組合って一つのセットとなっていたことが知られる。このようにみると、芝原遺跡出土の製塩土器と墨書土器群との深い関係が浮かび上がってくるのである。<sup>(註5)</sup>  
<sup>(註6)</sup>

芝原遺跡はその規画性のある掘立柱建物跡群の発見によって、『出雲国風土記』記載の島根郡家の有力な候補地となっている。郡家には「政庁、館、厨家、正倉」などが<sup>(註7)</sup>  
芝原遺跡で検出された掘立柱建物跡群のうち、総柱倉庫跡群は正倉に、西廂付建物跡群は館に比定できよう(第31図)。この西廂付建物跡群と墨書須恵器の中の「出雲家」(第100図2)との関係も無視できないものがあるが、芝原遺跡でこれまでに発見された掘立柱建物跡群の構造やその配置は、例えば、播磨国明石郡衙に比定される吉田南遺跡や、駿河国志太郡衙に比定される御子ヶ谷遺跡と同様であり、<sup>(註8)</sup>  
「罽」と墨書された須恵器坏や製塩土器の出土は、SX01付近に厨家の施設が存在することを推定させるのに充分である。



第104図 奈良・平安時代の製塩土器出土遺跡分布図

このように、27片の製塩土器の出土は、芝原遺跡が島根郡家を構成していた一部であることを間接的に物語っているといえよう。

- 註1. 内田律雄「出雲の製塩遺跡」『ふい〜とど〜の〜』No.7 昭和60年7月  
 2. 内田律雄「島根県八束郡島根町・小原谷遺跡出土資料について」『風土記研究』4 昭和62年  
 3. 内田律雄「『出雲国風土記』と考古学」『出雲古代史の諸問題』昭和62年12月  
 4. 内田律雄「出雲地方における奈良・平安時代の塩の流通」『島根史学会々報』第11・12号 昭和62年3月  
 5. 『大日本古文書』13, 14, 16巻  
 6. 田辺昭三「食物と服飾」『古代史発掘』10. 昭和 年, 西弘海「奈良時代の食器類の器名とその用途」『土器様式の成立とその背景』昭和61年5月

7. 竹内理三「郡家の構造」『史淵』 昭和26年

8. 山中敏史・佐藤興治「古代の役所」『古代日本を発掘する5』 昭和60年6月

第6表 奈良・平安時代の製塩土器出土遺跡一覧

(番号は分布図に対応)

| 番号 | 遺跡名  | 所在地    | 遺跡の性格等  | 番号 | 遺跡名   | 所在地     | 遺跡の性格等   |
|----|------|--------|---------|----|-------|---------|----------|
| 1  | 田尻   | 八束郡美保町 | 塩道濱     | 19 | 国庁後方  | 松江市大草町  | 山雲国庁関係   |
| 2  | 池尻   | " "    | " "     | 20 | 神田    | " 竹矢町   | " "      |
| 3  | (七類) | " "    | 賀留比浦    | 21 | 上小紋   | " "     | " "      |
| 4  | 小屋谷  | " 島根町  | 野浪濱     | 22 | 国分僧寺  | " "     | 山雲国分寺    |
| 5  | (加賀) | " "    | 川來門大濱   | 23 | 国分尼寺  | " "     | " "      |
| 6  | 古浦   | " 鹿島町  | 惠懸濱     | 24 | 山代郡正倉 | " 山代町   | 山代郡正倉    |
| 7  | 稲佐   | 船川郡大社町 | " "     | 25 | 石台    | " 東津田町  | 山代郡新造院関係 |
| 8  | 黒田   | " "    | " "     | 26 | 惣連場   | 能義郡広瀬町  | 意宇郡飯梨郷家  |
| 9  | 中分員塚 | " "    | " "     | 27 | 玉神谷   | 松江市忌部町  | 忌部神戸     |
| 10 | 鹿籠山  | " "    | " "     | 28 | 天神    | 出雲市天神町  | 神門郡家     |
| 11 | 光女院東 | " "    | " "     | 29 | 神門寺   | " 塩冶町   | 朝山郡新造院   |
| 12 | 原山   | " "    | " "     | 30 | 沃     | 飯石郡三刀屋町 | 寺院関係?    |
| 13 | 修理免  | " "    | " "     | 31 | 栗谷    | " "     | (栗谷社)    |
| 14 | 南原   | " "    | " "     | 32 | 京田    | " "     | " "      |
| 15 | 矢野   | " "    | " "     | 33 | カネツキ免 | 仁多郡 郡   | 仁多郡家     |
| 16 | 中村   | 平田市国富町 | 出雲郡英談郷家 | 34 | 上方林   | " 川西    | 仁多郡横田郷家  |
| 17 | 芝原   | 松江市福原町 | 島根郡家    | 35 | タテチョウ | 松江市西川津町 | 寺院・官衙関係  |
| 18 | 出雲国庁 | " 大草町  | 出雲国庁    |    |       |         |          |

## 5. 木器について

芝原遺跡出土の木製品は、総数200点を数えるがその内のほとんどの木製品はSX-01から出土しており、それ以外のものは各建物の柱痕のみである。

SX-01出土の木製品の内関化可能なものは、農具3点、工具1点、食器21点(内箸状木製品10、木製品3)、曲物12点、箱板4点、漆器椀3点、祭祀具1点、漁具1点、その他14点、用途不明品10点、杭4点を数える。

農具 全体的に見て出土数は少ない。第88図1, 8, 第89図13が農具と考えられるが、1は古式土師器や弥生式土器と併出している、鍍の泥よけと思われるものである。中央に柄を通す角孔を穿ち両側にも同様の孔を穿つが、片側の角孔には、角棒とそれを固定したと

思われる糠皮紐が残存していた。長辺の片側には、突起が作り出しており、この部分に鎌の本体をはめ込んでいたと考えられる。突起部の反対側、つまり先端部はやや尖っており、この部分が使用箇所と思われる。しかし、この木製品は、突起と柄の挿入方向などから考えると、えぶりの使用法又は広鎌の本体としての用途も考えられ、泥よけだと断定するには多少疑問が残る。8は、中央に抉りのあるもので、農具の可能性が高いが、用途不明品である。13は鎌か鋤の歯と考えられるが、フォーク状の農具の可能性もある。

これらの農具と考えられる木製品の内、墨書土器の時代と同時期のものは8、13がある。

**工 具** 僅か1点出土するのみである。第89図10は横槌である。心持丸木材から作るが柄は残存していない。やや大型の横槌になると思われ、残存部から判断すると、身と柄とは明瞭にわかれていたと思われる。身の側面に使用痕を有す。

**食事具** 杓子形、刳物匙、箸形、漆器が出土している。

◦杓子形木製品 4点出土している(第88図3、7、90図19、92図43) 3、19は現代にも見られる飯杓子状のもので、身、柄共に残存していた。全長は同じ位のものだが、形態別には差がある。7、43は身の一部しか残存していない。43は薄手であるが、7は厚み2cmあり攪拌用のものになる可能性がある。

◦漆器 3点出土している(第94図57～59)。いずれも黒色漆を塗布した轆轤挽きの高台付、碗である。57は全体に黒色漆を塗るものだが、高台内面は全体をわずかに轆轤挽きして削り外縁のみを凹状にほり窪めた瓶高台である。60も同様の作りをしているが、高台内面に漆は塗られていない。58は低い高台を付すもので端部は丸い。高台内面の仕上げは粗く、漆は塗られていない。木取りは57、58が横木取で、59が縦木取である。奈良・平安時代の漆器は、高台の付くものとそうでないもの、黒色漆を塗布するもの、赤色漆を塗布するもの、内外面で塗り分けるもの、と様々であるが芝原遺跡出土のものは、みな黒色漆のみで塗られ、全てに高台を付す。また木取りについては、縦木取と横木取の両方のものが出土しているが、数としては縦木取のものより横木取のものの方が多い。これらの漆器碗の時期については、伴出遺物より57、58が7世紀～9世紀代、59が9世紀～中世までと幅広い時期にわたる。

◦刳物匙 1点出土するのみである(第90図18)。刳物匙とは柄を水平につけるものと、斜め上方につけるもの、身の上面基部のみを削って曲面を作るもの、身全体に曲面を作るもの、曲面の浅いものや深いものと種々様々な形態をなすが、本遺跡出土のものは、斜め上方に柄をつけ、身全体に曲面をつけるものの木製品であろう。この遺物の時期は、伴出遺物より7世紀～9世紀代である。

○箸状木製品（第92図28～41） 未製品のものを含めて13点が出土している。伴出遺物から7世紀～9世紀代と思われるものがほとんどである。箸状木製品としているが、用途は箸だけでは限定できない。その理由として、弥生時代の木製品で、漁具の「箸」<sup>註1</sup>として使用されたものの中に、同じような長さで似たような形のものがあったり、狩猟具の「木鎌」<sup>註2</sup>として使用されたものが似ていたり、歴史時代に入ると披り物を罾に留める木針<sup>註3</sup>があったりするからである。しかし本遺跡出土のものは、伴出木器などから考えて箸としての用途の可能性が最も高いと思われる。また平城京出土の箸は全長22～17cmのものがほとんどらしく、製品も粗製なものが多らしい<sup>註4</sup>。これらの点も本遺跡のもの共通するところである。

○器 16点出土している。出土層位は各層にわたっているが、山陰Ⅲ期以前に遡るものはない。

○曲物柄杓（第94図53） 二列内二段縦じの釘結合曲物である。底板は2箇所の本釘によって身に固定されている。柄には本釘が残存しており、この本釘は柄の脱落を防止する為のものと考えられることから、この柄杓の直径は15cm前後と判断できる。本遺跡出土のもののように、底板が欠ける以外、全体を観察することができるものは大変少なく、好資料である。9世紀～中世のものと考えられる。

○円形曲物 楕円形になるものもあると思われるが、この中に含む（第89図11, 12, 91図26, 93図49, 50, 94図56）。11, 12は同一個体となるもので、樺皮紐を用いない釘結合曲物と考えられ、底板の可能性が高い。内面と外面に分かれ、外面には無数の刃傷を有す。26は、曲物の蓋か底板と考えられるもの。49は側板と考えられるもので、斜格子のケビキを有す。50は樺皮結合曲物B<sup>註5</sup>に属すもの。側板の痕跡を有し、樺皮紐が残存していた。蓋板の可能性が高い。56は両面に刃傷を有すが、樺皮紐痕跡も、釘痕跡も確認できず、蓋板になるのか底板になるのか不明である。

これらの円形曲物は、所謂折敷のようなものになると考えられる。

○長方形曲物 第88図4, 89図15, 91図23, 93図51は全て長方形曲物の底板である。一般に折敷と呼ばれるもので、樺皮紐が残り、それによって底板と側板を結合させていたことがわかるもの4がある。51は樺皮紐を通す孔のみが残存していた。23は、釘結合曲物であるが、板の一面は周縁が整えてあるので蓋板になる可能性もある。これらの木製品の時期は、4が6世紀～8世紀中頃、15, 23, 51が7世紀初～9世紀後半頃と考えられる。

○箱 第93図44, 45, 47, 48は、同一の箱の側板である。出土状況から考えると転用品と考えられるが、側辺を一方は凹状に、また一方は凸状に加工し、それを組み合わせて木釘

によって結合させたもの。遺物にみるこの箱板の時期は8世紀後半～9世紀後半頃と考えられる。

**祭祀具** 1点出土している(第89図9)。鳥形になるか、馬形になるか完形でないのわからない。鳥形は近くの遺跡では、西川津遺跡<sup>註6</sup>から出土しているが、これは弥生時代中期の遺物とされており、本遺跡出土のものが7世紀初～9世紀後半と考えられるので、時期的には大きなひらきがある。また、米子市の池ノ内遺跡からも鳥形の可能性のあるものが出土しているが、これも弥生時代後期に位置づけられている。

鳥は魂を他界に運ぶ役割があり、馬形もそれと同じ機能をもっていたと考えられるが、これらの祭祀具は単独で出土することは少なく、他の祭祀遺物を伴うことが多い。<sup>註7</sup>

#### 雑 具

○火鑽板(第90図17) 切欠きが5箇所あるが、その内の4箇所に火鑽穴のあるもの。伴出遺物より7世紀初～9世紀後半頃の遺物と考えられる。火鑽板に関しては出土遺跡は比較的<sup>註8</sup>多い。

○縄(第94図52) 太さ1cm前後を計り長さは不明である。2本のコヨリを組み合わせて撚ったもの。54と絡むように出土している。

#### その他

○歯 板片から細い歯を挽き出し、表面を平滑に研ぎあげた横櫛である。平面形は長方形で、肩部に丸味を帯びる。歯数は3cm当り29本を数える。木器集成図録によると、こういう形態の横櫛は7世紀には出現していないらしい。全長は不明だが、幅4.2cm、厚さ0.85cmを計る。(写真図版22)

○用途不明品(第90図16, 91図22) 16は広楕の未製品かと考えられたが、全面に加工がしてあることから考えると、製品である可能性もある。22も同様であるが、片面が腐食している。未製品の可能性が強いが、製品として使用した可能性も捨てきれない。SX02との関連で、作業場の座椅子とは考え難いであろうか。

#### 小 結

SX-01内出土の木器は、以上見てきたように農工具が少なく、食器とか容器といった日常生活用品が主である。これはSX-01の周囲での生活の在り方が、農耕が主でなく生活が主であることを物語っている。つまり換言すれば、生産地としての性格よりも消費地としての性格を顕著に有しているということである。またそれは、SX-01内出土土器にも言えることで墨書土器を含む多量の須恵器、出雲国庁<sup>註9</sup>と並行する時期の丹墾土師器や製塩土器の出土は、出土木器との検討と相まって芝原遺跡の官衙的性格をより濃厚なもの

とした。ただ88年度の最終調査で検出された建物群6棟については、SX-01の出土遺物やSX-02の遺構状況や位置関係から判断して、厨的な建物の可能性が考えられたが、柱穴中の出土遺物から奈良～平安期の建物でなく中世～近世にかけての建物であることが判明しており、両側の建物群中に厨があったとすれば、距離関係から若干の不自然さを残す結果となった。

- 註1. 和田晴吾「弥生文化の研究5. 道具と技術I」(編集:金岡怒, 佐原真)雄山閣1985年10月5日  
 2. 米子市教育委員会「日久見遺跡」1986年3月  
 3. 奈良国立文化財研究所「木器集成図録, 近畿古代篇」昭和60年3月  
 4. 註3に同じ  
 5. 註3に同じ  
 6. 鳥根県教育委員会「西川津遺跡発掘調査報告書IV(海橋地区2)」昭和63年3月  
 7. 金子裕之「平城京と祭場」(「国立歴史民俗博物館研究報告 第7集 共同研究「古代の祭祀と信仰」本論」)昭和63年3月  
 8. 西川津遺跡より出土(註6参照), 別所遺跡山土「薮沢A・B, 別所遺跡」松江市教育委員会1988年3月  
 9. 本報告書「丹塗土師器について」の項参照

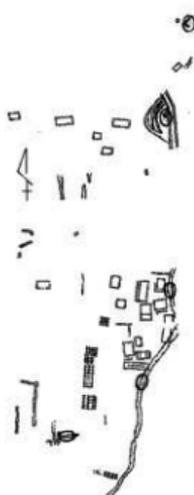
第7表 芝原遺跡出土木器一覧表

| 整理番号 | 出土地点       | 層位                       | 形態        | 木取    | 材質 | 備考          |
|------|------------|--------------------------|-----------|-------|----|-------------|
| 1    | H-3, G-3界  | 暗灰砂質土第10層 L=34.33        | 糞泥よけ?     |       | か  | し 板皮紐, 弥生か? |
| 2    | F-6        | 暗褐色砂層第10層 L=34.506       | 筒形木製品     |       |    |             |
| 3    | E-8        | 黒褐色シルト第9層 L=34.947       | 杓子形木製品    | 征     | 目  |             |
| 4    | I-9        | 黒褐色シルト第9層 L=34.36        | 棒皮つき板材    | 板     | 目  | 針葉樹         |
| 5    | I-8, 9     | 黒褐色シルト第9層 L=34.463       | 碇伏木製品     |       |    |             |
| 6    | H, I-7区界   | 黒褐色シルト第9層 L=34.47        | 碇伏木製品     |       |    | 針葉樹         |
| 7    | H-3, 4     | 暗灰色シルト第8層 L=34.535       | 不明        |       |    |             |
| 8    | F-4, 5界    | 地山直上 L=34.30             |           | 板     | 目  |             |
| 9    | E-5        | 暗灰シルト第8層 L=34.69         | 鳥形, 馬形木製品 |       |    | 針葉樹         |
| 10   | H-III, IV区 | 褐色粘質土第7層 L=34.8          | 横礎        | 心持材   |    | 広葉樹         |
| 11   | G-III, IV  | 暗黄灰シルト質粘土 L=34.605       | 曲物        | 征     | 目  |             |
| 12   | G-III, IV  | 暗黄灰シルト質粘土 L=34.606       | 底板        | 征     | 目  |             |
| 13   | G-3        | 暗褐色シルト第8層8, 7層界 L=34.577 | 楕, 鋤歯     | 板     | 目  | 針葉樹         |
| 14   | E-6        | 不明 L=34.808              | 加工板材      | 征     | 目  | 針葉樹         |
| 15   | C-IV       | 暗灰色粘質土第7層 L=35.19        | 板         | 征     | 目  |             |
| 16   | H-4        | 暗灰色砂層第7層 L=34.27         |           | ろかん者材 | か  | し 農耕具未製品    |
| 17   | H-4        | 暗灰褐色シルト第6層 L=34.81       | 火鑽板       | 征     | 目  |             |
| 18   | B-2, 3区    | 暗褐色シルト第6層 L=35.08        | 匙形木製品     | 心材, 征 | 目  | 広葉樹 未製品     |
| 19   | H-5        | 暗灰褐色シルト第6層 L=34.887      | 杓子形木製品    | 征     | 目  |             |

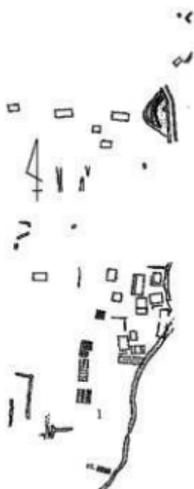
| 整理番号 | 出土地点       | 層位                 | 形態       | 木取    | 材質  | 備考      |
|------|------------|--------------------|----------|-------|-----|---------|
| 20   | J-11       | 暗褐色シルト第6層 L=34.695 | 半円形板材    | 征目    |     |         |
| 21   | F-6        | 暗褐色シルト第6層 L=34.63  | 板        | 征目    |     |         |
| 22   | C-4        | 暗灰色砂層第6層 L=34.80   | 不明       | 縦木取   | マツ  |         |
| 23   | H-I        | 暗褐色シルト第6層 L=35.357 | 蓋板       | 征目    | 針葉樹 |         |
| 24   | F-7, 8区    | 暗褐色シルト第6層 L=34.98  | 板        | 征目    | 針葉樹 |         |
| 25   | B-2, 3     | 暗褐色シルト第6層 L=35.09  | 角材       | 板目    | 針葉樹 |         |
| 26   | H-IV       | 暗褐色シルト第6層 L=35.007 | 蓋状木製品    | 板目    |     |         |
| 27   | G-III      | 暗褐色シルト第6層 L=35.156 | 板        | 征目    | 針葉樹 |         |
| 28   | B-1, 2, 3区 | 黒褐色粘性土第6層 L=35.08  | 箸状木製品    |       |     |         |
| 29   | B-1, 2, 3区 | 黒褐色粘性土第6層 L=35.08  | 箸状木製品    |       |     |         |
| 30   | B-1, 2, 3区 | 黒褐色粘性土第6層 L=35.08  | 箸状木製品    |       |     |         |
| 31   | B-1, 2, 3区 | 黒褐色粘性土第6層 L=35.08  | 箸状木製品    |       |     |         |
| 32   | B-1, 2, 3区 | 黒褐色粘性土第6層 L=35.08  | 箸状木製品    |       |     |         |
| 33   | 不明         | 〃                  | 箸状木製品    |       |     |         |
| 34   | G-6        | 黒褐色シルト第6層 L=34.855 | 箸状木製品    |       |     |         |
| 35   | G-6        | 第6層                |          |       |     |         |
| 36   | F-9        | 暗灰色シルト L=34.945    | 箸状木製品    |       |     |         |
| 37   | C-7        | 不明 L=35.048        | 箸状木製品    |       |     |         |
| 38   | B-1, 2, 3区 | 黒褐色粘性土第6層 L=35.08  | 細角材      |       |     |         |
| 39   | B-1, 2, 3区 | 黒褐色粘性土第6層 L=35.08  | 細角材      |       |     |         |
| 40   | B-1, 2, 3区 | 黒褐色粘性土第6層 L=35.08  | 細角材      |       |     |         |
| 41   | B-1, 2, 3区 | 黒褐色粘性土第6層 L=35.08  | 曲物       |       |     |         |
| 42   | C-1        | 不明                 | 角材       |       |     |         |
| 43   | D-4        | 灰色粘土 L=35.077      | 楕円形加工板   | 征目    |     |         |
| 44   | C-4        | 地山直上の礫上            | 削板       | 征目    | 針葉樹 | 組合せ箱物   |
| 45   | C-4        | 暗灰色シルト L=34.945    | 削板       | 征目    |     |         |
| 46   | C-4        | 暗灰色シルト L=34.945    | 加工板材     | 板目    |     |         |
| 47   | B, C-4, 5区 | 地山直上の礫上            | 箱材       | 征目    |     |         |
| 48   | C-4        | 暗灰色シルト L=34.945    | 加工板材     | 征目    |     |         |
| 49   | B, C-4, 5区 | 地山直上の礫上            | 削板       |       |     | けびき有    |
| 50   | B, C-4, 5区 | 地山直上の礫上            | 曲物蓋板     |       |     |         |
| 51   | C-4        | 暗灰色シルト L=34.945    | 折敷底板     | 征目    |     |         |
| 52   | B-4        | 暗褐色砂礫層第5層 L=35.05  | 縄        |       |     |         |
| 53   | F-9        | 暗灰色砂礫層第5層 L=35.00  | 曲物柄杓     |       |     | 漆皮結合曲物B |
| 54   | B-4        | 暗褐色砂礫層第5層 L=34.948 | 角材       |       |     |         |
| 55   | H-4        | 暗灰シルト第7層 L=34.66   | 曲物蓋 or 底 | 板目    | 針葉樹 |         |
| 56   | E-5        | 暗褐色砂礫層第5層 L=34.88  | 不明       | 板目    | 針葉樹 |         |
| 57   | G-I        | 暗褐色シルト L=35.311    | 挽物漆椀     | 横木取   |     | 漆器      |
| 58   | G-III      | 暗褐色シルト L=35.145    | 挽物漆椀     | 横木取   |     | 漆器      |
| 59   | F-9        | 暗灰色砂礫層第5層 L=35.10  | 挽物漆椀     | 縦木取   |     | 漆器      |
| 60   | G-7        | 暗褐色シルト第6層 L=34.64  | 杭        | みかん割材 |     |         |
| 61   | 不明         | 〃                  | 木杭       |       |     |         |
| 62   | 〃          | 〃                  | 木杭       |       |     |         |
| 63   | C-7区       | 黄灰色シルト層            | 木杭       |       |     |         |
| 64   | SP10       | ピット中               | 柱根       | 心持材   |     |         |

## 6. 遺物の分布状況について

本遺跡から出土した遺物を年代別に分類し、その分布状況を検討してみたい。



第105図  
I期遺物出土状況



第106図  
II期遺物出土状況

① I期（弥生期から山本編年IV期新-柳浦編年1式までとする。）

本遺跡では、頸部から口縁部が朝顔状に大きく開く弥生中期後葉の土器や頸部に指圧文状の突帯をネクタイ状にめぐらす弥生中期後葉の土器が、SX01内の中央の凹みから出土している。弥生期はこの頃から始まるが量は多くない。朝酌川下流域のタテチョウ遺跡西川津遺跡と比較すると量的にも雲泥の差がある。本遺跡では打製・磨製の石斧やスクレイパーなどが20点以上出土しているが、縄文土器や弥生前期の土器は全く発見できなかった。これもタテチョウ遺跡や西川津遺跡とは趣きを異にする。おそらく朝酌川流域の中心は、タテチョウ遺跡などの下流域にあって弥生中期頃より上流域に生活基盤が拡大されていったのだろう。そしてSI01の古式土師器の時期がくる。この時期の土器はSD01、SD02などの埋土中からもわずかに出土している。この時期の土器も量は多くない。さらに山本編年のII期の蓋が1点、III期の蓋が1、2点出土している。本遺跡の隣の坂本町には薄井原古墳（前方後方墳）が山本編年III期に築造されており、この上流域の開発をうかがわせるが、本遺跡周辺まで至っていないのであろうか。福原町には横穴式石室をもつ山根古墳、流田横穴群が分布しているが、実態がよくつかめない。しかし、山本編年IV期（古）ほどから出土量が多くなってくる。SX01内の中央の凹みの土層からは山本編年IV期新-柳浦編年1式が出土している。おそらくこの時期にはSX01内の水面はSX03の下ほどまでであったろう。またSD01、SD02などの埋土中にIV期のものがみられる。本遺跡の建物群の初現が、この山本編年IV期、あるいは柳浦編年1式あたりではないかと思われる。

② II期（柳浦編年2式～4式）

この時期の遺物が最も多量に出土した。特に柳浦4式前半の時期、つまり8.C後半～9.C前半頃に集中している。SX01内ではSX02あたりまで一面にこの時期の遺物が出土している。柳浦編年4式頃にはSX01内の水面はSX02あたりまで上がっていたと思



第107図  
Ⅲ期遺物出土状況

われる。SX01内からの出土はこれらとともに墨書土器、丹塗土師器、製塩土器、木器、漆器などが出土している。同じ時期のものであろうか。またSD01の底面からこの時期のものが出土している。このことからSD01もこの時期頃までに作られたものであろう。遺構の面でも建物の建て替え、拡張期または中心時期をこの時期にあてることができよう。

朝酌川下流域では、川津地区に条里制遺構が残っており、タテヨウ遺跡からは「驛」の墨書土器が出土している。下流域では連絡と遺跡は見受けられる。また東隣りの本庄地区においても条里制遺構が残存している。本遺構でもこの時期がこれまでの時期に比べれば飛躍的な転換期であり、下流域にまさるともおとらない質と量が備わってくる。在地の有力豪族級、ないし官衙に通常認められる出土遺物はおおよそこの時期のものと思われる。

#### Ⅲ期（柳浦編年5式以降、近世までの時期）

この時期の遺物は、「昆」と墨書された坏の他、須恵質土器、土師質土器、陶器、輸入品の磁器、国産の磁器、瓦質土器の他、鉄刀や古銭がある。SX01内からも陶器、磁器、鉄刀が、Ⅱ期層に混入して出土した。SX01以外では、点々と土壌中から土師質土器の小皿、鉄刀が出土し、調査区の上層から須恵質土器、陶器、磁器が出土している。しかし、趣きを異にするのが北方の東西棟群の周辺である。この地区からは中世～近世の陶器、磁器が比較的多く出土しており、Ⅲ期の中心的位置をなしている。

本遺跡の北方の山の中腹には、布目瓦を出土する坊庵寺、往生院庵寺などの寺院が建立されており、Ⅱ期とは違った様を示している。

以上、遺物の分布状況を周辺の遺跡と合せて検討してきた。それで本遺跡の中心時期がⅢ期にあり、それが8.C後半～9.C前半頃にあること。また出土遺物なども朝酌川流域においてこの時期においては、質的にも量的にも勝っているし、その出土遺物が官衙跡に通常認められるものを多く含んでいることなどから、官衙の一部であった可能性が高いと思われる。これは、墨書土器の「出雲」、「出雲家」、「校尉」からみてもほぼ間違いないと思われる。ただ「政庁」の遺構を欠いていることや、墨書の内容にかたよりが認められるなどから、郡家に所属する施設の一部ではないかと推定される。郡家の全容を解明するには、「出雲国風土記」の文献のさらなる検討とともに、本遺跡の北方、西方、さらには朝酌川流域における発掘調査の新しい成果を待たざるを得ない。

## Ⅶ 島根郡家所在地の問題

### 1. 緒 言

『出雲国風土記』に記載されている島根郡の郡家は、今の何処にあったかという問題は、天和3年(1683)の自序のある岸崎左久次時照の『出雲風土記抄』以来諸説があり、なお定説が確立していない。

然るところ、近年の園場整備計画に伴い、松江市教育委員会は、その島根郡家の有力な候補地として論考の対象となっていた松江市福原町の発掘調査を、ここ5年次にわたり実施したところ、およそ奈良・平安時代を中心とする一般民衆の住居跡とは異なる遺構や遺物を検出するに至った。風土記に基づく島根郡家の所在地を、改めて検討することが必要となったのである。

ここに、島根郡家の位置の推定に関する論考の主要なものを取り上げ、それぞれの問題点を顧ることにした。

第8表

| 水 |   | 大 |   | 女 |   | 美 |   | 地 | 風 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 水 | 水 | 倉 | 毛 | 岳 | 高 | 布 |   |   |   |   |   |   |   |
| 水 | 鳴 | 鳴 | 山 | 志 | 山 | 山 | 山 | 物 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 源 | 源 | 源 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 方 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 川 | 川 | 川 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 角 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 毛 | 毛 | 東 | 正 | 正 | 正 | 正 | 正 | 方 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 志 | 志 | 北 | 北 | 南 | 南 | 南 | 南 | 角 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 山 | 山 | 北 | 北 | 南 | 南 | 南 | 南 |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 北 | 北 | 北 | 北 | 南 | 南 | 南 | 南 | 距 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   | 離 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 六 | 三 | 一 | 九 | 一 | 二 | 二 | 二 |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 〇 | 八 | 八 | 八 | 〇 | 三 | 三 | 七 |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 歩 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 里 | 歩 | 歩 | 里 | 里 | 歩 | 歩 | 里 |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 福 | 枕 | 澄 | 萬 | 岸 | 野 | 後 | 朝 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 原 | 木 | 水 | 山 | 崎 | 津 | 藤 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 |   | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 福 | 枕 | 澄 | 萬 | 野 | 後 | 朝 | 加 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 原 | 木 | 水 | 山 | 津 | 藤 | 山 | 藤 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 |   | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 | 水 | 山 | 山 | 藤 | 山 | 田 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 谷 | 別 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   | 所 |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 納 | 坂 | 枕 | 澄 | 萬 | 朝 | 加 | 朝 | 内 | 土 | 器 | の | 記 | 載 |   |
| 巖 | 本 | 木 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

解し、したがって風土記の一里は後世の約六町とする立場で論じた。

これに対し後藤は、三百歩＝後世の約五町を一里とする立場を原則として考えた。その後の風土記の論者は五町を一里とする立場をとっている。

ところで、「日本歴史大辞典」(河出書房)の「里」の項では「律令制では、五尺を一步、三百歩を一里としたが(雑令)、この尺は今の太尺であるから一步の長さは後世の一間(約1,818メートル)にあたり、したがって一里は五町にあたる。しかし、これと同時に三百六十歩、すなわち六町を一里とする法も古代では行われた。……(関見)」としている。

一里で一町の相違は、島根郡家の位置を推定するには場合によっては大きな障害となるが、「出雲国風土記」の記載は、すべて三百歩＝一里の規準によるものとしてよいであろう。それは全巻を通じ、およそ260カ所距離を記載した中に、歩の単位で三百歩以上の記載例は一つもないからである。

### 3. 島根郡家所在地に関する主な論考

まず主な論考を列挙すると第8表のようである。これについて、各要点を紹介検討する。

① 岸崎説 島根郡の郡名の由来の項で「以郡中諸方之所経之路程<sup>リ</sup>權考<sup>リ</sup>之此郡家<sup>ト</sup>相當<sup>ス</sup>于今本庄新庄両村之中間<sup>ニ</sup>。」としている。その路程の単位たる「里」については、「毛志山」の項で、「一里ハ今ノ六町」と明記するが、郡家を「本庄新庄両村之中間」とすると毛志山までは少なくとも三～四里、朝酌渡へは一里以上、佐太橋へは二里以上あり、記載と合わない。嵩山の東北方の支峰は今も「めだけ」と呼ぶ由であるから、岸崎氏はその東北方の山裾の北方「二百四十歩」を郡家の位置推定の発想の原点としたかと思われる。

② 野津説 これは端的に「毛志山、郡家北一里」「女岳山、郡家正南二百卅歩」を論拠とし、福原部落の「シヤシキ」を郡家の位置と推定した。路程の単位は六町を一里としたが、それでも朝酌渡へは一里・五里、佐太橋へは一九～二一里ばかりで実状とは合わない。

③ 後藤説 これも郡家推定の拠りどころを、端的に「女嵩山<sup>のだけやま</sup>の正北二百三十歩、毛志山<sup>もし</sup>の正南一里といふ古の里程によりて推せば、今の持田村の福原の長慶寺の辺であらう。」とした。ところが、後藤氏は一里＝五町説であるが、朝酌渡までは実地は一五里ばかりで合わない。この問題につき後藤氏は『出雲国風土記考證』で、「島根郡家から朝酌渡の北岸まで、十一里一百四十歩である。然るに、直線に計っても六十二町許りあるから、処處の一里は今の六町とせねば、里程が合はぬことを知る。」とし、六町を一里とする単位も混用されているとした。

第 9 表

| 7F | 7E | 7D | 7C | 7B | 7A   | 6     | 5     | 4    | 3B | 3A     | 2       | 1   |
|----|----|----|----|----|------|-------|-------|------|----|--------|---------|---|
| 同  | 同  | 同  | 同  | 同  | 福原   | 坂本    | 納佐    | 納佐   | 同  | 福原     | 福原      | 中本庄・新庄の間                                    |
| 同  | 同  | 同  | 同  | 同  | 服部 且 | 内田 律雄 | 加藤 義成 | 朝山 皓 | 同  | 後藤 藏四郎 | 野津 左馬之助 | 岸崎 時照                                       |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 都家比定地                                       |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 著者  |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『名』・『論題』（所収書名・雑誌名）（発行年・月）                   |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『山雲風土記抄』（天和三年五月自序・写本）                       |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『島根県史 五国司政治時代』（大正一五・六）                      |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『出雲國風土記考證』（大正一五・二一）                         |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『出雲風土記註解』（昭和二一・二二）                          |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『出雲國風土記に於ける地理上の諸問題』（『出雲國風土記の研究』）（昭和二八・七）    |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『出雲風土記考證一』（昭和二三・一〇初版）改訂版も同説                 |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『手塗郷からみた島根郡家とその位置』（八巻立つ風土記の丘二四号）（昭和五二・五）    |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『山陰史談二二号』（昭和六〇・三）                           |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『通過の復元と納佐説の再検討を通して』（『横田健一先生古稀記念日本書紀の研究二五』）  |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『通過の復元を手がかりとして』（『大妻女子大文学部紀要一九号』（昭和六二・三）     |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『古道の復元を手がかりとして』（『大妻女子大文学部紀要一九号』（昭和六二・三）     |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『旧三論文の補正』（同）（二〇号）（昭和六二・三）                   |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『水原川の水二つの復元を手がかりとして』（『大妻国文一九号』（昭和六三・三）      |
|    |    |    |    |    |      |       |       |      |    |        |         | 『正南七里二百一十歩』を手がかりとして』（『大妻女子大文学部紀要二二号』（平成元・二） |

④ 朝山説 朝山氏のこの論文は、出雲国の国庁の位置を『島根県史』が出雲郡内の字「夫敷」としたのに対し、風土記記載の方角、距離等を再検討し、大草地内とする新説を提示し、発掘によりそれが確認されたことでも注目された論文であるが、島根郡家の位置についても新説を提起したのである。

さて、朝山氏は五町＝一里説をとるが、後藤氏が五町＝一里説をとりながら、島根郡家と朝酌渡の距離の場合は六町一里の単位を用いたという矛盾を重要視し、それは郡家は福原とする発想に固執したため生じた矛盾と考え、朝酌渡から十一里百四十歩であり、佐太橋から十五里八十歩の条件をみたす地点を郡家に想定すればこの矛盾は解消すると考え、この条件を満たす地点として、下東川津の納佐付近を郡家の位置と想定し、たまたまそこに「コシヨベ」という門名の家があり、島根郡大領「社部臣」との関連の可能性も示唆するものとして注意した。なお、千酌駅家へは、長海から忠山の西のマミ谷を越す道を通して十七里百八十歩で達し得るとした。(郡家から千酌駅家への経路について『島根県史』も「郡家より本庄・長海を過ぎ、忠山の西麓を通ずる古道……」と、大体同じ経路を想定している。

郡家を納佐に比定すると、岸崎・野津・後藤の三者とも最も重要な拠りどころとしたとみえる「女岳山」が、今日「めだけ」と呼ぶ山では合わない。そこで朝山氏は嵩山の南に並立する「和久羅山」に比定し、「郡家正南二百卅歩」は「〇里」の脱漏とした。

⑤ 加藤説 概略朝山説を踏襲し納佐説であり、女岳山也和久羅山にあてがうが、その距離の数字は脱漏とせず、納佐南方の丘陵をその山麓とする。

⑥ 内田説 主に古墳の様相などから手染郷の中心を長海神社付近に想定し「手染郷、郡家正東一十里二百六十四歩」とあることから、郡家を坂本下に比定し、そこには顕著な後期古墳のあることにも注目した。

⑦ 服部説 大妻女子大学の服部氏は、島根郡家の位置問題を主題として、昭和59年以来綿密な現地踏査による研究を続け、すでに6篇の論文を発表し、「福原説」とられている。その調査は、あり得る古道経路をすべて踏査し、巻尺で実測する方法で、昭和59年には松江に居住して調査に専従したほどである。

初年度には、千酌駅家の湊と駅館の位置を検討し、そこから忠山の西を越え長海を経て福原に至る道程が風土記の「一十七里一百八十歩」に合致することを確めた。また「瀬崎成」の位置を検討し、「瀬崎成、島根郡家東北一十九里一百八十歩」の「一十九里」を「二十九里」の誤と考え、これもまた郡家が福原であることを裏付け、一方「水草川」の2つの水源をも検討して、これも矛盾のないことを認めた。さらに「布自積美」との距離も、上

川津の通常の参道登山口までとして矛盾がないことを確かめた。

#### 4. 結 語

服部氏の無類の精力的研究は、島根郡家福原所在説をほとんど確立するかの印象を与える。しかし風土記の記載を論拠とする限り、朝山氏の「納佐説」の出発点となった、郡家と朝酌渡、郡家と佐太橋との道程との矛盾を、どう解決するかという最大の難問の克服が必要である。両者とも「誤写」として片付けることは、文献学としては至難であろう。

一方、発掘により検出される遺構と遺物が、その判定を基礎づける可能性は極めて大きいとも思われるのである。

もし遺跡に徴して、福原に郡家のあったことが確実になるならば、「通秋鹿郡<sup>・</sup>堺佐太橋<sup>・</sup>二十五里八十歩」は、諸本に異なるものはないけれども、本来は「二十五里八十歩」であった可能性が大であろう。法吉郷までが「一十四里二百卅歩」であるのに、佐太橋までは、それより僅々百五十歩だけ違いはあり得ないからである。



第108図 仮定島根郡家と佐太橋・朝酌渡との経跡試案

(A又はA' 佐太橋, B 朝酌渡,  
C(福原)又はD(納佐) 郡家)

## Ⅷ 総 括

遺構の検討によって掘立柱建物をA期からE期の5段階に分けることが出来、C期の段階とE期の段階にそれぞれ画期が認められることを指摘した。

第1の画期について考えてみるとSB05, 19のように倉庫とみなされる総柱づくりの建物がはじめて出現する。

倉庫は収穫物、ことに剰余生産物収納の場として認識されており、この時期に収穫機能が一段と強化されたことの証左となる。<sup>註1</sup>

又、その他の掘立柱建物もこの時期に急増している。SB14を中心建物としてその左右に2, 3棟ずつ配置しているが南側はSB03まで40mの区間建物はなく広場となっている。恐らく農業集落から脱皮した豪族の邸館ではなかっただろうか。建物の増加と倉庫の新設されたことは支配構造の強化がなされたことを示し、それまでの福原地区規模の農地からさらに周辺地域をも加えた広い範囲に領域が拡大したことが考えられる。

次のD期には、倉庫がさらに追加新造され一段と収穫機能が進んだことが分かる。又、SD01もこの時期に形成されている。このSD01は溝底出土の土器が柳浦IV期のもので一定しておりその構造、形態から総合判断するとある目的をもって一度に掘られたものであるといえる。こうした溝の例は兵庫県神戸市古田南遺跡など官衙推定地に多い。<sup>註2</sup> SD01は長さ300m近くになる大規模なものでかなりの政治的、経済的に強大な力がないと出来ないのではないと思われる。土壕のつくる溝にしては規模が広すぎる。むしろ官衙跡によくみられることから木遺跡もD期の段階で官衙の一部に含まれていたものと考えられる。

C期、D期の建物はあくまでも豪族の邸館の形態に留まっており、官衙的性格がうすい。こうした状況をどう理解すればよいであろうか。そこでSX01について考えてみたい。

SX01は、古墳時代までに比べるとさらに台地の側に浸蝕が進み河川数ではあるが時にはよどみであったり時には川筋となったりして、水洗場、水汲場として利用されSX02が造られている。出土遺物の多くは流されてきたものというよりは投棄されたものようである。それは比較的狭い範囲で同一區体の破片の分布が認められることや土器が殆んど磨滅していないことからうなずける。

SX01の出土遺物をみても、墨書土器、製塩土器、丹塗土師器が認められ、特に墨書土器の中には「出雲家」のように出雲某氏の邸館又は、管理施設が近隣の地にあることをほのめかすものや「校尉」のように軍団の職階を明確に表現するものもあり、製塩土

器や丹塗土師器にしても、当地方では出雲国府跡をはじめとする官衙跡で出土するのが大半であり、総合的に判断すると本遺跡が官衙跡であるとほぼ断定して間違いない。

官衙の中心はこのSX01に近い台地上に求められるが、これまでの調査ではSX01の西、北側台地上では奈良期の建物等は確認されていないので、中心施設は未調査区である西方丘陵寄りの現存の集落部分か、少し離れた北方水田下ではないかと考えられる。

南部の建物群はSD01によって東方水田地と区画され、一応官衙域の内側に組み込まれているのだが建物配置に一環した企画的、対称性が認められない。ただ倉庫群と屋敷群に区別されているだけである。

これらのことから考えると、南部の建物群は豪族の居館から発展しD期の頃に同じ台地に設置された官衙の一部に組み込まれたが、依然として居館であり続けたのではないだろうか。

それではこの居館の主は一体誰であったのか。又、同じ台地に設置された官衙とはいかなる性格を有するものだったのだろうか。

ひるがえって、この地一帯の古墳時代後期の古墳の動向をみると、6世紀中頃に坂本町では全長50mの前方後方墳である「薄井原古墳」が築造される<sup>註4</sup>。又、下東川津町には大田古墳群の内、1、2号墳が意宇勢力と密接な関係を保ちながら築造される。その後、引き続いて3～5号墳も7世紀前後から7世紀前半にかけて築造されている。石棺式石室を主体とするまとまりのある古墳群で、後に「山口郷」となる地域を掌握していた首長墓群と考えられている<sup>註5</sup>。

一方、現在の木庄地区を中心とした「手染郷」中の古墳はほとんど中ノ海沿いに集中しており時代的には後期古墳は少ないのではないと思われる。

今仮に風土記所載の島根郡の郡司がそのまま郡内の政治勢力の分布を反映しているものとみなされるなら、まず薄井原古墳→大田古墳群へと続いていく意宇群と関係を深く結んでいく地元の上豪大領社部臣・麻呂及び少領社部石臣の根拠地ではないかと考えられる。

主政後朝臣の出自についてはよく分からない。主張出雲臣についても不明というしかないが、今回SX01から出土した墨書土器の中に「出雲家」とあるのは出雲某氏の居館又は管理施設があったと考えており、主張出雲臣氏と深い関係にあるのではないだろうか。そうであれば7世紀に入ってから社部臣あるいは社部石臣をけん制する意味で勢力の手薄な福原の地に出雲氏が派遣されたことが十分考えられる。

官衙の性格であるが、別稿でも風土記から論じられているが、毛志山(澄水山)、布自枳美高山(嵩山)、女岳山など近くの山の方位、里程から、島根郡家はほぼ今の福原町の平野

の一角に考えられる。とすればこの芝原遺跡は島根郡家域に含まれていた可能性が強いものと考えられる。

- 註1. 広瀬和雄「古墳時代の集落類型—西日本を中心として」(考古学研究第25巻第1号 考古学研究会 1978年6月 所収)
2. 山中敏史・佐藤興治「古代の役所」岩波書店 1985年6月
3. 松江市教育委員会「山雲国庁跡発掘調査概報」
4. 島根県教育委員会「薄井原古墳調査報告」1962
5. 出雲考古学研究会「石棺式石室の研究 出雲地方を中心とする切石造り横穴式石室の検討—」1987年10月

## IX 遺物観察表

86年度

| 図版番号  | 種類     | 法量                                   | 手法・形態の特徴   | 出土地点                | 備考  |
|-------|--------|--------------------------------------|--|---------------------|---|
| 45-1  | 須恵環    | 口径 8.4 cm                            | 摩めつのため、調整不明  | Y-11区 SD01内         | 色調胎土<br>地成<br>内面灰色 外面灰色<br>やや密 1~2.0mmの砂粒を含む<br>不良      |
| 45-2  | 須恵高杯   |                                      | 杯底部内面不定方向のナデ<br>削部 外面横ナデ                             | Y-12区 SD01内         | 色調胎土<br>地成<br>内面灰色 外面暗灰青色<br>密 1mmの砂粒を含む<br>良好          |
| 45-3  | 須恵蓋    |                                      | 天井部外面 横ナデ<br>内面不定方向のナデ、他横ナデ<br>かえりがつく、つまみ不明          | Y-10区 SD01内<br>ビット  | 色調胎土<br>地成<br>内面青灰色 外面黄青色<br>密 1mmの砂粒を含む<br>良好          |
| 45-4  | 土師貫明   | 口径 12.0 cm<br>器高 2.5 cm<br>底径 5.4 cm | 全面ナデ調整<br>口縁部は外反して開く<br>体部は大きく外傾する。                  | Y-9区 SD01内<br>ビット   | 色調胎土<br>地成<br>内面暗灰青色 外面灰黄色<br>やや密 1~2mmの砂粒を含む<br>不良     |
| 45-5  | 弥生底郎   |                                      | 調整不明<br>中央にかん孔あり                                     | X-12区 SB11          | 色調胎土<br>地成<br>内面灰黄色 外面暗灰黄色<br>やや密 1mmの砂粒を含む<br>やや不良     |
| 46-1  | 土師貫明   | 口径 13.2 cm<br>器高 2.2 cm<br>底径 9.5 cm | 調整不明<br>体部は、大きく外傾する。                                 | X-12区 SK6<br>木棺埋納土壌 | 色調胎土<br>地成<br>内面灰褐色 外面暗色<br>密 1mmの砂粒を含む<br>不良           |
| 46-2  | 高台付甕   |                                      | 調整不明<br>高台は「18」の字状に開く。                               | T-10区               | 色調胎土<br>地成<br>内面黄褐色 外面灰黄色~褐色<br>やや密 1~2.0mmの砂粒を含む<br>不良 |
| 46-3  | 土師把手   |                                      | 外面の一部にスス付着   | Y-10区               | 色調胎土<br>地成<br>内面 外面黄褐色<br>やや密 1~2.0mmの砂粒を含む<br>やや不良     |
| 46-4  | 須恵環身   | 口径 11.9 cm<br>器高 4.1 cm              | 底部内面 不定方向のナデ、へう切り<br>後ナデ、他 横ナデ<br>立ち上がりは短く、内傾する。     | T-10区               | 色調胎土<br>地成<br>内面灰色<br>やや密 1mmの砂粒を含む<br>良好               |
| 46-5  | 須恵環身   |                                      | 底部外面 へう切り後ナデ<br>内面 横ナデ、他 横ナデ<br>立ち上がりは、短く、内傾する。      | T-10区               | 色調胎土<br>地成<br>内面灰色 外面暗灰色<br>密 良好                        |
| 46-6  | 須恵環蓋   |                                      | 口縁部付近内外面 横ナデ<br>口縁部内側にアクセントあり。                       | T-10区               | 色調胎土<br>地成<br>内面灰色 外面暗灰色<br>密 良好                        |
| 46-7  | 須恵環蓋   |                                      | 口縁部付近内外面 横ナデ<br>口縁部内面 沈線あり                           | T-10区               | 色調胎土<br>地成<br>内面暗灰色 外面暗灰色<br>密 1.0mmの砂粒を含む<br>良好        |
| 46-8  | 須恵蓋    | 口径 11.5 cm                           | 天井部外面へう切り、へう削り<br>内面 横ナデ、他 横ナデ<br>かえりがつく。宝珠状つまみがつく。  |                     | 色調胎土<br>地成<br>内面灰褐色 外面暗灰黄色<br>密 1mmの砂粒を含む<br>良好         |
| 46-9  | 須恵高台付甕 | 高台径 9.4 cm                           | 体底部外面 停止糸切り後ナデ<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部は内湾気味に開く。 |                     | 色調胎土<br>地成<br>内面暗灰黄色 外面黄青色<br>やや密 1mmの砂粒を含む<br>良好       |
| 46-10 | 須恵高杯   | 口径 16.6 cm                           | 体部内外面 横ナデ<br>体部はやや内湾気味に大きく開く。                        | Y-11区               | 色調胎土<br>地成<br>内面青灰色 外面灰青色<br>密 1mmの砂粒を含む<br>良好          |

| 図版番号  | 種類   | 法量         | 手法・形態の特徴              | 出土地点  | 備考  |
|-------|------|------------|-----------------------|-------|---|
| 46-11 | 須恵高坏 | 胴底径 6.4 cm | 胴内外面 横ナデ<br>適しあり、形は不明 | W-11区 | 色調<br>粘土<br>焼成<br>内面灰青色 外面黄灰色<br>密<br>良好          |
| 46-12 | 陶器碗  |            | 口縁部近くでやや外反する。         |       |   |
| 46-13 | すり鉢  |            | 7条の本線文が1単位            | 表探    | 色調<br>粘土<br>焼成<br>内面灰青色 外面<br>やや密 1mmの砂粒を含む<br>良好 |
| 46-14 | 磁器碗  | 口径 6 cm    | 歯め付け、伊万里系             | 表探    | 粘土<br>焼成<br>密<br>良好                               |
| 46-15 | 古銭   |            | 「寛永通宝」裏面無紋            | V-9区  |   |

### 87年度

| 図版番号 | 種類   | 法量                                  | 手法・形態の特徴  | 出土地点       | 備考  |
|------|------|-------------------------------------|---|------------|---|
| 51-1 | 短刀   |                                     | 呑口式短刀   | W-3区 SK-15 |   |
| 51-2 | 土師質皿 | 底径 4.7 cm<br>器高 2.2 cm              | 底外面 回転糸切り、底内面 不明<br>他 横ナデ<br>体部内湾して開く。底部と体部の間に<br>段あり。                        | W-3区       | 色調<br>粘土<br>焼成<br>内面灰色 外面灰褐色<br>密<br>良好                           |
| 51-3 | 土師質皿 | 口径 8.0 cm<br>器高 2.0 cm<br>底径 4.0 cm | 調整不明<br>底面の底部と体部の間に段あり。   | W-3区       | 色調<br>粘土<br>焼成<br>内面黄赤褐色 外面暗黄褐<br>色 0.2~1.0mmの白色の<br>砂粒を含む<br>良好  |
| 51-4 | 土師質皿 | 底径 4.4 cm                           | 底外面 回転糸切り<br>他 不明   | W-3区       | 色調<br>粘土<br>焼成<br>内面黄灰色 外面黄灰色<br>密<br>良好                          |
| 54-1 | 須恵壺  | 口径 11.0 cm<br>器高 2.6 cm             | 天井部外面 ヘラ削りのちナデ、内面<br>不定方向のナデ、他 横ナデ、切り難<br>し、ヘラ削り、稜状つままりがつき、<br>口縁部内部にかえりがつく。  | U-3-X-3区   | 色調<br>粘土<br>焼成<br>内面灰色 外面灰青色<br>0.5mmの白色砂粒をはんの<br>わずかに含む<br>良好    |
| 54-2 | 須恵壺  | 口径 12.0 cm<br>器高 2.4 cm             | 天井部外面 ヘラ削りのちナデ、内面<br>不定方向のナデ、他 横ナデ、切り難<br>し、ヘラ削り、乳歯状つままりがつき、<br>口縁部内部にかえりがつく。 | U-3-X-3区   | 色調<br>粘土<br>焼成<br>内面青灰色 外面暗青灰色<br>0.5~1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>良好 |
| 54-3 | 須恵壺  | 口径 12.8 cm                          | ヘラ削り、天井部外面、ヘラ削りのち<br>ナデ、内面不定方向のナデ、かえりが<br>つき、稜状つままりをもつ。                       | U-3-X-3区   | 色調<br>粘土<br>焼成<br>内面灰青色 外面暗黒灰<br>色<br>密<br>良好                     |
| 54-4 | 須恵壺  | 口径 14.5 cm                          | 天井部外面 ヘラ削りのちナデ、内面<br>不定方向のナデ、他 横ナデ<br>口縁部は直立する。                               | U-3-X-3区   | 色調<br>粘土<br>焼成<br>内面暗茶褐色 外面暗青灰<br>色<br>1mmの砂粒をわずかに含む<br>良好        |
| 54-5 | 須恵壺  | 口径 14.6 cm<br>器高 2.0 cm             | 天井部外面 ヘラ削りのちナデ、内面<br>不定方向のナデ、他 横ナデ<br>切り難し、不明、<br>輪状つままりがつき、口縁部は直立する。         | U-3-X-3区   | 色調<br>粘土<br>焼成<br>内面青灰色 外面白青灰色<br>密<br>良好                         |
| 54-6 | 須恵壺  | 口径 15.0 cm<br>器高 2.0 cm             | 天井部外面 ヘラ削りのちナデ、内面<br>不定方向のナデ、他 横ナデ<br>切り難し、不明<br>輪状つままりがつき、口縁部は直立する。          | U-3-X-3区   | 色調<br>粘土<br>焼成<br>内面暗灰色 外面青灰色<br>1.0mmの白色砂粒をはんの<br>わずかに含む<br>良好   |

| 図版番号  | 種 類          | 法 量                                   | 手法・形態の特徴  | 出 上 地 点 | 備 考  |
|-------|--------------|---------------------------------------|---|---------|--|
| 54-7  | 須 恵 重        |                                       | 天井部外面 ヘラ削りのちナデ<br>内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>輪状つまみがつく。                       | U-3-X-3 | 色調 内面灰色 外面灰色<br>胎土 密<br>焼成 良好                            |
| 54-8  | 須 恵 重        |                                       | 空球状つまみ  | U-3-X-3 | 色調 内面淡青灰色 外面淡青灰色<br>胎土 密 1mmの砂粒を含む<br>焼成 良好              |
| 54-9  | 須恵環身         | 口径 9.5 cm<br>器高 3.6 cm                | 底部外面 ヘラ削りのちナデ<br>内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>立ち上がりは短く、内縁                      | U-3-X-3 | 色調 内面黄灰色 外面暗青灰色<br>胎土 1.0~0.5mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好 |
| 54-10 | 須恵環身         | 口径 11.0 cm<br>器高 4.8 cm<br>底径 6.4 cm  | 底部外面 ヘラ削り、内面 静止ナデ、<br>体部内外面 横ナデ<br>立ち上がりは内縁して端部は丸い。<br>受け部はやや外上らびる。   | U-3-X-3 | 色調 内面暗青灰色 外面暗灰色<br>胎土 粗<br>焼成 不良                         |
| 54-11 | 須恵環蓋         | 口径 9.5 cm<br>器高 4.0 cm                | 天井部外面 ヘラ削りのまま<br>内面 静止ナデ、その他 横ナデ<br>内面気味に立ち上り、内縁部は直立する。<br>端部は丸い。     | U-3-X-3 | 色調 内面淡灰色 外面灰色<br>胎土 密 1mmの砂粒を含む<br>ややくらい                 |
| 54-12 | 須 恵<br>高台付杯  | 高台径 9.2 cm                            | 体部外面下部 ヘラ削りのち横ナデ<br>内面 横ナデ、他 不明<br>体部 外縁して立ち上る。                       | U-3-X-3 | 色調 内面淡青灰色 外面淡青灰色<br>胎土 1mmの白色砂粒をほんのわ<br>ずかに含む<br>焼成 良好   |
| 54-13 | 須 恵<br>高台付杯  | 口径 13.1 cm<br>器高 3.6 cm<br>高台径 7.8 cm | 体底部外面 切り離し不明のちナデ<br>内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>体部 大きく外縁し、内縁部内面に設<br>けあり。     | U-3-X-3 | 色調 内面黄灰色 外面暗灰色<br>胎土 2.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好              |
| 54-14 | 須 恵<br>高台付杯  | 口径 14.0 cm<br>器高 5.4 cm<br>底径 8.3 cm  | 体底部外面 静止糸切り器。<br>内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>体底部外面に1つ竹管文あり。<br>体部 内縁して立ち立する。  | U-3-X-3 | 色調 内面暗灰色 外面暗灰色<br>胎土 1.0mmの白色砂粒をわずかに<br>含む<br>焼成 良好      |
| 54-15 | 須 恵<br>高台付杯  | 口径 9.9 cm<br>器高 3.2 cm<br>高台径 5.9 cm  | 体部外面 横ナデ、他 不明<br>体部 内縁して開く。   | U-3-X-3 | 色調 内面暗灰色 外面暗灰色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をほんの<br>わずかに含む<br>焼成 良好   |
| 54-16 | 須 恵<br>高台付杯  | 高台径 8.1 cm                            | 「八」の字状に開く高台をもつ。体部<br>は内面気味に大きく開く。ナデ<br>体部内面 横ナデ<br>体部底面内面 不定方向のナデ     | U-3-X-3 | 色調 内面青灰色 外面灰色<br>胎土 密<br>焼成 良好                           |
| 54-17 | 須 恵 環        | 口径 15.2 cm<br>器高 4.2 cm<br>底径 10.2 cm | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>口縁部にくびれてわずかに外反する。<br>口縁部内面は肥厚し、稜あり。 | U-3-X-3 | 色調 内面暗青灰色 外面暗灰色<br>胎土 1.0~2.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好 |
| 54-18 | 須 恵 環        | 口径 14.4 cm<br>器高 3.9 cm               | 底部外面 静止糸切り<br>内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>口縁内面は肥厚し、稜あり。                       | U-3-X-3 | 色調 内面灰色 外面灰黄色<br>胎土 密<br>焼成 良好                           |
| 54-19 | 須 恵 環        | 口径 11.8 cm                            | 体部内外面上部 横ナデ<br>外面下部 ヘラ削り、他 不明<br>口縁部の下にくびれがある。                        | U-3-X-3 | 色調 内面白灰色 外面白灰色<br>胎土 1mmの白色砂粒をほんのわ<br>ずかに含む<br>焼成 良好     |
| 54-20 | 須恵高杯         | 器高 5.4 cm<br>底径 9.4 cm                | 脚外面 横ナデ、脚内面上部 不定方<br>向のナデ、下部 横ナデ<br>強い面に2の透しは丸い。透しの形<br>は不明           | U-3-X-3 | 色調 内面淡青灰色 外面暗青灰色<br>胎土 1.0mmの白色砂粒をほんの<br>わずかに含む<br>焼成 良好 |
| 54-21 | 須 恵 帯        |                                       | 体下部外面 タタキ目<br>内面 えて貝類<br>内面 下部以上 横ナデ<br>面取りした脚がはりつけてある。               | U-3-X-3 | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>胎土 0.3mmの白色砂粒をわずかに<br>含む<br>焼成 良好      |
| 54-22 | 土 器<br>底 舞 杯 | 口径 7.3 cm                             | 調整不明  | U-3-X-3 | 色調 内面淡黄灰色 外面淡黄灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒を<br>含む<br>焼成 良好    |

| 図版番号  | 器 類   | 法 量         | 手法・形態の特徴  | 出 土 地 点 | 備 考  |
|-------|---|-------------|---|---------|--|
| 54-23 | 土師器<br>鼓形高台<br>胴部                           |             | 短かい筒部のもの  | U-3-X-3 | 色調<br>胎土<br>焼成<br>内面淡黄褐色 外面黄褐色<br>0.5~1.0mmの白色の砂粒を含む<br>やや不良 |
| 54-24 | 土師器<br>甕口縁部                                 |             | 「く」の字におれ曲る腰部に指汗文状の突起がめぐる。<br>口縁部部に斜めの筋めが入る。                   | U-3-X-3 | 色調<br>胎土<br>内面黄灰色 外面灰褐色<br>0.3~1.0mmの白色の砂粒を含む                |
| 54-25 | 赤土器<br>底径 7.6 cm                            |             | 底部外面 ヘリ磨き<br>しっかりした底部より体部は外傾して立ち上がる。                          | U-3-X-3 | 色調<br>胎土<br>焼成<br>内面暗赤褐色 外面黒色<br>0.5~1mmの白色の砂粒を多量に含む<br>良好   |
| 54-26 | 土師器<br>甕口縁部                                 | 口径 15.7 cm  | 頸部以下の内面 ヘリ磨り、外面 ハケ目調整<br>肩のぼらない体部がゆるく「く」の字に曲がる。「縁部部は良い。       | U-3-X-3 | 色調<br>胎土<br>焼成<br>内面暗赤灰色 外面灰褐色<br>0.3mmの白色の砂粒を含む<br>良好       |
| 54-27 | 土師器<br>高台付杯                                 | 高台径 12.7 cm | 底部 糸切り<br>内外面とも赤色塗彩あり。  | U-3-X-3 | 色調<br>胎土<br>焼成<br>内面淡黄灰色 外面淡黄灰色<br>0.5mmの白色の砂粒をわずかに含む<br>良好  |
| 54-28 | 土師器<br>高台付杯                                 | 高台径 13.0 cm | 底部 静止糸切り<br>内外面とも赤色塗彩あり。                                      | U-3-X-3 | 色調<br>胎土<br>焼成<br>内面淡黄灰色 外面淡黄灰色<br>砂粒をほんのわずかに含む<br>良好        |
| 54-29 | 土師器<br>底径 12.4 cm                           |             | 底部 回転糸切り<br>内外面とも赤色塗彩あり                                       | U-3-X-3 | 色調<br>胎土<br>焼成<br>内面淡黄灰色 外面淡黄灰色<br>良好                        |
| 54-30 | 土師器<br>底径 12.2 cm                           |             |   | U-3-X-3 |  |
| 54-31 | 土師器<br>底径 12.2 cm                           |             | 底部外面 静止糸切り<br>内面 不定方向のナゲ<br>他 横ナゲ<br>内外面とも赤色塗彩あり。             | U-3-X-3 | 胎土<br>焼成<br>密<br>良好  |
| 54-32 | 土師器<br>底径 12.2 cm                           |             |   | U-3-X-3 |  |
| 54-33 | 土師器<br>底径 12.2 cm                           |             | 内外面とも横ナゲ<br>口縁部は内傾する。<br>内外面とも赤色塗彩あり。                         | U-3-X-3 | 胎土<br>焼成<br>1mm以下の砂粒をわずかに含む<br>良好                            |
| 55-1  | 磁器<br>口径 13.6 cm<br>器高 4.3 cm<br>高台径 7.1 cm |             | 削り出しの高台がつく。<br>体部は内傾気味に開き、わずかに外反して口縁部に至る。<br>染め付け 伊万堂系18C~19C | U-3-X-3 |  |
| 55-2  | 陶器<br>高台径 10.1 cm                           |             | 削り出し高台 全体に淡白棕色の釉を施す。<br>細いかん人がはいる。型ね焼き痕あり。                    | U-3-X-3 | 色調<br>胎土<br>断面淡白灰色<br>密                                      |
| 55-3  | 青磁<br>高台径 10.1 cm                           |             | 削り出しの高台<br>底部内面に花紋あり。<br>中層製 14C前後。                           | U-3-X-3 |  |
| 55-4  | 磁器<br>高台径 4.0 cm                            |             | 削り出し高台<br>染め付け 伊万堂系   | U-3-X-3 | 色調<br>胎土<br>断面淡白色<br>密                                       |
| 55-5  | 陶器<br>高台径 4.7 cm                            |             | 削り出し高台<br>内外面とも黄灰色の釉を施す。中に褐色の釉もあり。                            | U-3-X-3 | 色調<br>胎土<br>断面淡黄白色<br>密                                      |

| 図版番号  | 種類           | 法量                                  | 手法・形態の特徴  | 出土地点       | 備考   |
|-------|--------------|-------------------------------------|---|------------|--|
| 55-6  | 磁器調          | 底径 6.0 cm                           | 削り出しの高台。体部は内湾気味に開く。<br>遼弁文 中国製  | U-3-X-3    |  |
| 55-7  | 陶器調          | 高台径 5.6 cm                          | 削り出し高台、高台底部に回転糸切り痕残る。<br>底部内面に重ね織き時の砂痕あり。<br>内面 赤茶色、緑灰                | U-3-X-3    | 色調 断面上部灰色<br>断面下部暗褐色                                   |
| 55-8  | 陶器調          |                                     | 石弁、半磨製  | U-3-X-3    |  |
| 55-9  | 石器           |                                     | 石弁、刃部 りがき出す。  | U-3-X-3    |  |
| 55-10 | 石器           |                                     | 石弁 磨製   | U-3-X-3    |  |
| 55-11 | 石器           |                                     | スクレーパー 玉ずい製   | U-3-X-3    |  |
| 55-12 | 石器           |                                     | スクレーパー  | U-3-X-3    |  |
| 57-1  | 須恵器類         | 口径 24.5 cm                          | 口縁部内外面 横ナデ、体部内面 全て貝裏あり。<br>体部外面 はけ目痕とタタキ目痕あり。<br>ヘラ記号あり。              | X-4        | 色調 内面暗青灰色 外面暗青灰色<br>胎土 1.0 mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好  |
| 57-2  | 須恵器類         | 口径 11.3 cm                          | 口縁部内外面 横ナデ<br>体部内面 全て貝裏あり。  | X-3        | 色調 内面暗青灰色 外面暗青灰色<br>胎土 0.5 mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好  |
| 57-3  | 須恵器類<br>環身   | 口径 8.8 cm<br>器高 3.3 cm              | 底部外面 ヘラ切りのちナデ、内面 不定方向のナデ、肩辺部の一部 ヘラ切りのちナデ、他 横ナデ<br>立ち上がりは短く内傾。         | X-5        | 色調 内面青灰色 外面暗青灰色<br>胎土 0.5 mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好   |
| 57-4  | 須恵器類<br>高台付環 | 口径 14.1 cm<br>器高 5 cm<br>高台径 9.0 cm | 体底部外面 横ナデ、内面 不定方向のナデ<br>高台一体部 ヘラ切りのちナデ<br>他 横ナデ                       | X-2        | 色調 内面暗青灰色 外面暗青灰色<br>胎土 0.5 mmの白色の砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好 |
| 57-5  | 須恵器類<br>壺底部  | 底径 14.8 cm                          | 底部外面 半調整、内面 不定方向のナデ<br>体部外面 カキ目痕、内面 横ナデ                               | X-7        | 色調 内面暗青灰色 外面青灰色<br>胎土 密<br>焼成 良好                       |
| 57-6  | 須恵器類         | 口径 16.7 cm                          | 口縁部 体上密 横ナデ、内面 不明<br>口縁底部に平拍面をもち、断面逆台形に肥厚し、口縁下に段をもつ。<br>内面にねずみ色の輪を施す。 | S-7区 SK 14 | 色調 内面ねずみ色 外面暗青灰色<br>胎土 密<br>焼成 良好                      |
| 57-7  | 土師質<br>小皿    | 底径 6.2 cm                           | 底部 回転糸切り<br>内面 回転ナデ、他 不明  | C-3 第4層中   | 色調 内面黄灰色 外面黄褐色を含む<br>胎土 密 0.2 mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好      |
| 57-8  | 須恵器類         | 底径 7.9 cm                           | 底部外面 回転糸切り、他不明<br>底部と体部の間に段あり。  | X-8        | 色調 内面暗青灰色 外面黄灰色<br>胎土 0.5 mmの砂粒を含む<br>焼成 やや不良          |
| 57-9  | 土師質調         | 高台径 7.8 cm                          | 調整 不明   | X-7        | 色調 内面黒色・暗赤褐色<br>胎土 密<br>焼成 やや不良                        |

| 図版番号  | 種類        | 法量                                    | 手法・形態の特徴  | 出土地点     | 備考                                   |
|-------|-----------|---------------------------------------|---|----------|--------------------------------------|
| 57-10 | 陶器<br>すり鉢 | 口径 21.0 cm                            | 口縁部・体外面 横ナデ<br>口縁部はほぼ垂直か、やや内傾して環形に歪る。3条の条線が一つの単位となる。横溝系   | Y・X-4・5区 | 色調 内面白灰色 外面黄灰色<br>胎土 2.0～4.0mmの砂粒を含む |
| 57-11 | 青磁甗       |                                       |   | S-8      |                                      |
| 57-12 | 陶器甗       | 口径 10.6 cm<br>甗高 2.5 cm<br>高口径 5.1 cm | 体外面 水引直線<br>削り出しの高台がつく。内外面に細いかん入あり。<br>透明感のある淡緑色の釉を施す。横溝系 | T-4      | 色調 断面淡黄灰色～淡褐色<br>胎土 密<br>焼成 良好       |
| 57-13 | 瓦器甗       | 口径 13.2 cm                            | 体外外面 足は磨き、体内面 横ナデ<br>足は3足                                 |          | 色調 内面黒灰色 外面黄灰色<br>胎土 密<br>焼成 良好      |
| 57-14 | 石器        |                                       | 乳棒状石斧 磨製  | X-2      |                                      |
| 57-15 | 石器        |                                       | 石斧 打製   | X-2      |                                      |

### 88年度

| 図版番号 | 種類          | 法量                      | 手法・形態の特徴  | 出土地点                       | 備考  |
|------|-------------|-------------------------|---|----------------------------|---|
| 78-1 | 弥生甗         | 口径 18.8 cm              | 調整不明<br>くり上げ口縁、口縁外面に3条の凹線入る。                                | S I-01                     | 色調 内面淡黄色 外面黄灰色<br>胎土 密<br>焼成 良好                 |
| 78-2 | 古式土師<br>小形甗 |                         | 調整不明<br>横合口縁  | S I-01 床面付近                | 色調 内面淡黄色 外面黄灰色<br>胎土 青<br>焼成 やや軟                |
| 78-3 | 土師甗         | 底径 5.6 cm               | 底部外面 回転糸切り<br>筋、横ナデ<br>2次焼成を受ける。                            | II区 (Z-94)<br>S I-01 そば土坑内 | 色調 内面黒色 外面褐色～黒色<br>胎土 密<br>ほとんど含まない<br>焼成 良好    |
| 78-4 | 須恵<br>高台付環  | 高台径 8.4 cm              | 体底部内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ                                      | 基北1区<br>落ち込み中              | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>胎土 2.0mmまでの白色砂粒を含む<br>焼成 良好   |
| 78-5 | 須恵<br>高台付環  |                         | 体底部内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部は内周気味に開く。                       | 基北1区<br>落ち込み中              | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>胎土 0.2～0.8mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好 |
| 78-6 | 須恵高環        |                         | 環底部内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>2方向に通しが入る。形は不明<br>脚部中央ほどに1条の化粧あり。 | S B-22                     | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>胎土 密<br>ほとんど含まない<br>焼成 良好     |
| 78-7 | 陶器甗         | 口径 11.3 cm<br>甗高 5.6 cm | 削り出しの高台<br>他 横ナデ<br>体部はやや内周気味に開いて立つ。<br>灰釉を施す。              | U-2区 ビット埋土中                | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>胎土 2.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好     |
| 78-8 | 陶器甗         | 高台径 5.8 cm              | 削り出しの高台<br>他 横ナデ<br>煮ね巻きの痕跡あり。横溝系                           | U-2区 S B 23<br>S P 11 城上中  | 色調 内面赤褐色<br>胎土 1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好    |
| 78-9 | 陶器甗         | 口径 11.5 cm<br>甗高 2.9 cm | 削り出しの高台、他 横ナデ<br>内外面に暗茶褐色、伏茶色釉を施す。<br>煮ね巻きの痕跡あり。横溝系 16C     | O-0区 S K 16<br>第2層         | 胎土 青<br>焼成 良好                                   |

| 図版番号  | 種類    | 法量                      | 手法・形態の特徴   | 出土地点                         | 備考   |
|-------|-------|-------------------------|--|------------------------------|--|
| 78-10 | 磁器瓶   | 口径 13.6 cm              | 体部は内湾気味に開き、器曲して口縁部に至る。<br>青磁 (4個型 16C)   | X-0区 地山付近                    |  |
| 78-11 | 陶器皿   | 口径 11.6 cm<br>器高 2.6 cm | 削り出しの高台、横ナデ<br>体部は大きく開き、口縁部内側に段を有する。内面 淡緑色～黄緑色釉<br>外面 淡緑色～黄緑色釉を施す。<br>黄緑色の痕跡あり。(所澤系) | O-0区 SK 16<br>第2層            | 胎土 密<br>焼成 良好  |
| 78-12 | 陶器すり鉢 |                         | 外縁する体部からやや内傾して立ち上がって口縁部に至る。<br>6～7条の黄緑が1単位   | Y-4区 埋土中<br>SP 01            | 色調 内面淡青灰色 外面黄灰色<br>胎土 1.0～3.0mmの砂粒を含む<br>焼成 良好                 |
| 78-13 | 磁器皿   |                         | 削りのあけ底、体部は大きく開く。<br>染め付サ (16C)   |                              | 胎土 ち密<br>焼成 良好   |
| 78-14 | 陶製頂   | 高台径 4.2 cm              | 削り出しの高台、体部外凸 横ナデ<br>(所澤系)  | 表様                           | 胎土 ち密<br>焼成 良好   |
| 78-15 | 土師質皿  | 口径 8 cm<br>器高 1.7 cm    | 底部外面 円転糸切り、内面 不明<br>他 横ナデ<br>体部は大きく外傾する。器内は厚い。                                       | J-0区 SB 21<br>ビット検出面より10cm下層 | 色調 内面灰色 外面灰色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好                      |
| 78-16 | 上 罎   |                         |  | W-0 地上直上                     |  |
| 78-17 | 上 甕   |                         |  | T-1 地山直上                     | 色調 内面黄灰色<br>外面灰色～黄灰色   |
| 78-18 | 占 坑   |                         | 東海道安   | 落ち込み                         |  |
| 79-1  | 赤生壺   |                         | 調整不明<br>前期状に開く口縁部、口縁部外面に3段に削りあり。   | SX-01                        | 色調 内面暗褐色 外面灰褐色<br>胎土 やや粗 1.0～2.0mmの砂粒を多量に含む<br>焼成 やや不良         |
| 79-2  | 赤生鉢   | 口径φ28.0 cm              | 調整不明<br>口縁部平頂面に文様あり。また、穴が通る。   | SX-01、G-8                    | 色調 内面黄褐色 外面暗褐色<br>胎土 0.1～0.5mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好            |
| 79-3  | 赤生壺   |                         | 頸部外面 横ナデ、他 不明<br>頸部に突帯をもつ。   | SX-01                        | 色調 内面灰褐色 外面暗褐色<br>胎土 灰褐色<br>胎土 粗 0.3～1.0mmの白色砂粒を多量に含む<br>焼成 良好 |
| 79-4  | 赤生壺   |                         | 調整不明<br>頸部に指圧痕突帯<br>口縁部端に刻目あり。   | SX-01                        | 色調 内面赤灰色 外面黄褐色<br>胎土 やや粗 0.5～1.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好            |
| 79-5  | 赤丸壺   |                         | 調整不明<br>頸部に指圧痕の突帯あり<br>口縁部部に刻目あり。  | SX-01                        | 色調 内面灰褐色 外面黄褐色<br>胎土 粗 1～2mmの白色砂粒を多量に含む<br>焼成 良好               |
| 79-6  | 赤生壺   | 口径φ18.1 cm              | 調整不明<br>頸部に帯状の突帯<br>内傾する口縁部外面に3条の凹線入る。   | SX-01                        | 色調 内面赤褐色～黄灰色<br>胎土 やや粗 0.5～1.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好              |
| 79-7  | 赤生壺   | 口径φ10.1 cm              | 頸部外面 たて方向と横方向のナデ<br>内面 横ナデ<br>頸部に1条の凹線   | SX-01、E-4                    | 色調 内面灰褐色 外面黄褐色<br>胎土 やや粗 0.5～1.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好            |

| 図版番号  | 種 類         | 法 量        | 手法・形態の特徴  | 出 七 地 点                   | 備 考   |
|-------|-------------|------------|---|---------------------------|---|
| 79-8  | 赤生壺         | 口径 11.8 cm | 口縁部内外面 磨きと横ナデ<br>頸部内面以下 ナデ<br>口縁部外反する。                      | SX-01                     | 色調 内面暗黄褐色 外面暗黄褐色<br>胎土 やや粗 1.0mmの砂粒を多量に含む<br>焼成 良好        |
| 79-9  | 赤生壺         | 口径 19.8 cm | 口縁部内外面 磨き又はナデ<br>頸部はするどく「く」の字状に屈曲する。                        | SX-01                     | 色調 内面黄褐色～灰褐色 外面黄褐色<br>胎土 粗 0.3～1.0mmの白色砂粒を多量に含む<br>焼成 良好  |
| 79-10 | 土師赤甕        | 口径 22.4 cm | 調査不明<br>口縁部はやや外反する。口縁部部はとがり気味。                              | SX-01                     | 色調 内面暗灰褐色 外面灰褐色<br>胎土 やや粗 0.2～1.0mmの砂粒を含む<br>焼成 良好        |
| 79-11 | 七師窯<br>鼓形器台 |            | 内面 不明、外面 横ナデ<br>筒部から大きく開く。表面に「赤色」<br>捺彩を施す。                 | SX-01                     | 色調 内面淡黄白色 外面淡黄褐色<br>胎土 0.3～1.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好         |
| 79-12 | 土師窯<br>鼓形器台 |            | 外面 横ナデ、筒部より上 磨き、下<br>へう割り                                   | SX-01                     | 色調 内面暗黄褐色 外面黄褐色<br>胎土 やや粗 0.5～1.0mmの砂粒を含む<br>焼成 良好        |
| 79-13 | 土師赤甕        |            | 口縁部内外面 横ナデ<br>口縁部外面に沈線あり。                                   | SX-01                     | 色調 内面淡灰褐色 外面淡黄褐色<br>胎土 やや粗 0.5～1.0mmの砂粒を含む<br>焼成 良好       |
| 79-14 | 土師赤甕        |            | 口縁部内面 横ナデ、他 不明<br>口縁部 やや外反して立ち上がり、端部は平坦。                    | SX-01                     | 色調 内面黄褐色 外面赤褐色<br>胎土 やや粗 0.5～1.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好       |
| 79-15 | 七師赤甕        |            | 調査不明<br>口縁部は外傾して高くのびる。                                      | SX-01                     | 色調 内面暗黄褐色 外面黄褐色<br>胎土 やや粗 0.5～1.0mmの砂粒を含む<br>焼成 良好        |
| 79-16 | 土師窯<br>低脚付杯 | 脚底径 6.1 cm | 体底部内面 ナデ<br>筒内面 へう割りのちナデ、他 横ナデ<br>子、「八」の字状に開き、口縁部でさらに大きく開く。 | SX-01 E-5<br>SX 05 (地山道上) | 色調 内面淡黄褐色 外面淡黄褐色<br>胎土 0.3～1.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好         |
| 79-17 | 七師窯<br>高台付杯 | 高台径 9.1 cm | 体底部外面 へう切り、内面 横ナデ<br>他 横ナデ<br>「八」の字状に開く高台をつける。              | SX-01                     | 色調 内面淡褐色 外面褐色<br>胎土 0.5mmの砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好 (スエの……不貞) |
| 79-18 | 土師赤甕        |            | 口縁部内外面 横ナデ<br>口縁部中央に段を有する。                                  | SX-01                     | 色調 内面淡黄褐色 外面暗灰褐色<br>胎土 0.2～1.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好         |
| 79-19 | 七師赤甕        | 口径 22.3 cm | 口縁部内外面 横ナデ<br>頸部以下外面 ナデ、内面 へう割り                             | SX-01                     | 色調 内面淡黄褐色 外面灰褐色<br>胎土 0.5～2.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好          |
| 79-20 | 赤生壺         | 口径 16.1 cm | 口縁部内外面 横ナデ<br>体部外面 へう割目、内面 へう割り                             | SX-01                     | 色調 内面灰褐色 外面暗黄褐色<br>胎土 0.1～0.5mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好          |
| 79-21 | 赤生壺         |            | 口縁部内面 ろがき、外面 横ナデ<br>他 不明<br>口縁部端部は丸く肥厚する。                   | SX-01                     | 色調 内面灰褐色 外面黄褐色<br>胎土 粗 1.0～2.0mmの白色砂粒を多量に含む<br>焼成 良好      |
| 79-22 | 赤生底部        | 底径 5.2 cm  | 調査不明<br>あげ底   | SX-01                     | 色調 内面黒色 外面淡黄褐色<br>胎土 やや粗 0.5～1.0mmの白色砂粒を多量に含む<br>焼成 良好    |
| 79-23 | 赤生底部        | 底径 8.7 cm  | 調査不明<br>体部は外反して開く。  | SX-01                     | 色調 内面黒色 外面淡黄褐色<br>胎土 粗 1.0mmの白色砂粒を多量に含む<br>焼成 良好          |

| 図版番号  | 種別          | 注量                      | 手法・形態の特徴   | 出土地点   | 備考   |
|-------|-------------|-------------------------|--|--------|--|
| 79-24 | 弥生土器<br>底杯  | 底径 6.0 cm               | 体部外面 磨き、内面 磨きかナデ   | S X-01 | 色調 内面暗茶灰色 外面淡茶灰色<br>胎土 やや粗 0.5~1.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好      |
| 79-25 | 土師器<br>高杯   |                         | 調整不明<br>胎部と体部にひねり痕、体部大きく開く。  | S X-01 | 色調 内面褐色 外面暗黄褐色<br>胎土 やや粗 0.5~1.0mmの砂粒を含む<br>焼成 良好          |
| 79-26 | 土師器<br>土製支脚 |                         |  | S X-01 | 色調 内面灰褐色<br>胎土 粗 0.5~2.0mmの砂粒を多量に含む<br>焼成 良好               |
| 79-27 | 陶器<br>すり鉢   | 底径 16.0 cm              | 底部外面 ヘラ削り(凹凸がはげしい)<br>体部内面 ヘラ削りのちナデ、他 横ナデ、7条の条線が1単位、体部は大きく外傾する。(兼前掲) | S X-01 | 色調 内面黄灰色 外面暗灰色<br>胎土 滑 1.0~3.0mmの砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好        |
| 79-28 | 磁器皿         | 口径 11.1 cm              | 体部は途中より大きく外反する。<br>うぐいす色の釉を施す。                                       | S X-01 | 胎土 密<br>焼成 良好  |
| 79-29 | 磁器皿         | 口径 9.4 cm               | 体部は大きく外傾し、口縁部でさらに外反する。<br>灰緑色釉を施す。                                   | S X-01 | 胎土 ち密<br>焼成 良好   |
| 79-30 | 鉄刀          |                         |  | S X-01 |  |
| 80-1  | 須恵器<br>杯    | 口径 14.1 cm<br>器高 5.4 cm | 天井部外面 ヘラ削り、内面 横ナデ<br>天井部以下1/2までヘラ削り、他 横ナデ、7条の条線が1単位を施す。口縁部内側ののみ刃状    | S X-01 | 色調 内面青灰色~黄灰色 外面青灰色<br>胎土 0.2~1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好 |
| 80-2  | 須恵器<br>杯    | 口径 13.3 cm<br>器高 4.1 cm | 天井部外面 ヘラ削りのち不定方向のナデ、内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ、上下を削り出して突帯をあらわす。「X」ヘラ記号あり。   | S X-01 | 色調 内面青灰色 外面暗黄褐色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好    |
| 80-3  | 須恵器<br>杯    | 口径 11.3 cm<br>器高 4.1 cm | 天井部外面 ヘラ削りのち不定方向のナデ、内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>天井部~口縁部は内傾気味に下る。          | S X-01 | 色調 内面灰色 外面黄灰色~淡青灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好    |
| 80-4  | 須恵器<br>杯    | 口径 10.8 cm              | 天井部外面 ヘラ削り、内面 不明<br>他 横ナデ<br>口縁部付近に1条の凹線あり。                          | S X-01 | 色調 内面黄灰色 外面青灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好       |
| 80-5  | 須恵器<br>杯    | 口径 10.4 cm<br>器高 3.8 cm | 天井部外面 ヘラ削り、内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>天井部~口縁部は内傾して開き、口縁部はやや内傾する。            | S X-01 | 色調 内面灰色 外面灰褐色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好         |
| 80-6  | 須恵器<br>杯    | 口径 9.8 cm<br>器高 3.4 cm  | 天井部外面 ヘラ削り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ                                    | S X-01 | 色調 内面灰色 外面灰色~黄灰色<br>胎土 1.0~2.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好   |
| 80-7  | 須恵器<br>杯    | 口径 9.6 cm<br>器高 3.8 cm  | 天井部外面 ヘラ削り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>口縁部上にアクセントあり。                   | S X-01 | 色調 内面灰色 外面青灰色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好          |
| 80-8  | 須恵器<br>杯    | 口径 11.1 cm              | 口縁部内外面 横ナデ、他 不明<br>立ち上がりは短く、内傾する。                                    | S X-01 | 色調 内面黄灰色 外面灰色<br>胎土 0.4mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好          |
| 80-9  | 須恵器<br>杯    | 口径 10.0 cm<br>器高 3.2 cm | 底部外面 ヘラ削り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>立ち上がりは短く、内傾する。                   | S X-01 | 色調 内面黄灰色 外面黄灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 やや不良   |

| 図版番号  | 種類   | 法量                    | 手法・形態の特徴  | 出土地点           | 備考   |
|-------|------|-----------------------|---|----------------|--|
| 80-10 | 須恵坏身 | 口径 9.7cm              | 底部外面 ヘラ削り、内面 不定方向のナデ、体部外面 半分ヘラ削りのち横ナデ、他 横ナデ       | SX-01          | 色調 内面青灰色 外面黄灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好    |
|       |      | 器高 3.4cm              | 立ち上がりは短く、大きく内傾する。                                 |                |  |
| 80-11 | 須恵坏身 | 口径 9.3cm              | 底部外面 ヘラ削り、内面 不定方向のナデ、底部ヘラ削部の下部 ヘラ削りの横ナデ、他 横ナデ     | SX-01          | 色調 内面黄灰色 外面灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好     |
|       |      | 器高 3.5cm              | 立ち上がりは短く内傾する。器内深い。                                |                |  |
| 80-12 | 須恵坏身 | 口径 9.4cm              | 底部内面 不定方向のナデ、外面 不明、他 横ナデ                          | SX-01          | 色調 内面灰色 外面黄灰色<br>胎土 1.0mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好         |
| 80-13 | 須恵坏身 | 口径 8.6cm              | 底部外面 ヘラ削り   | SX-01          | 色調 内面黄灰色 外面黄灰色<br>胎土 0.5～2.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好 |
|       |      | 器高 3.2cm              | 内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>立ち上がりは短く、内傾する。             |                |  |
| 80-14 | 須恵坏身 | 口径 8.6cm              | 底部内外面 調整不明<br>他 横ナデ                               | SX-01          | 色調 内面黄灰色 外面黄灰色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好     |
| 80-15 | 須恵坏身 | 口径 11.0cm             | 底部外面 ヘラ削りのちナデ、内面 不定方向のナデ、他 横ナデ                    | SX-01          | 色調 内面暗灰色 外面暗灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好 |
|       |      |                       | 立ち上がりは短く、大きく内傾する。内面に「-」ヘラ記号あり。                    |                |  |
| 80-16 | 須恵坏身 | 口径 8.9cm              | 底部外面 ヘラ削り、内面 不定方向のナデ、体部外面上部 ヘラ削りのち横ナデ、他 横ナデ       | SX-01          | 色調 内面暗灰色 外面灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好  |
|       |      | 器高 3.0cm              | 立ち上がりは短く、内傾する。「×」ヘラ記号あり。                          |                |  |
| 80-17 | 須恵蓋  | 口径 8.0cm<br>器高 2.6cm  | 天井部外面 ヘラ削りのちナデ、内面 不定方向のナデ、天井部ヘラ削部一部ヘラ削りのちナデ、他 横ナデ | SX-01          | 色調 内面暗灰色 外面暗灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好 |
| 80-18 | 須恵蓋  | 口径 7.6cm              | 天井部外面 ヘラ削り、内面 不定方向のナデ、天井部高辺部外面 ヘラ削り、他 横ナデ         | SX-01          | 色調 内面青灰色 外面暗灰色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好     |
| 80-19 | 須恵蓋  | 口径 11.2cm<br>器高 2.8cm | 天井部外面 ヘラ削りのちナデ、内面 不定方向のナデ、天井部ヘラ削部 ヘラ削りのちナデ、他 横ナデ  | SX-01          | 色調 内面暗灰色 外面黒灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好 |
| 80-20 | 須恵蓋  | 口径 8.1cm<br>器高 3cm    | 天井部外面 ヘラ削り、内面 不定方向のナデ、他 横ナデ                       | SX-01          | 色調 内面灰色 外面黄灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 やや不良       |
| 80-21 | 須恵蓋  | 口径 11.0cm             | 天井部外面 不明、内面 不定方向のナデ、天井部高辺部外面 ヘラ削りのちナデ、他 横ナデ       | SX-01          | 色調 内面暗灰色 外面灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好         |
| 80-22 | 須恵蓋  | 口径 15.0cm<br>器高 3.1cm | 切り履し 不明、天井部ヘラ削部の大半 ヘラ削りとのち横ナデ                     | SX-01          | 色調 内面暗灰色 外面暗灰色<br>胎土 0.5～2.0mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好    |
| 80-23 | 須恵蓋  | 口径 14.3cm<br>器高 3.2cm | 天井部外面 ヘラ削り、内面 不定方向のナデ、他 横ナデ                       | SX-01          | 色調 内面灰色 外面灰色<br>胎土 0.5～2.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好   |
| 80-24 | 須恵蓋  | 口径 16.1cm<br>器高 2.7cm | 天井部外面 静止糸切り、内面 不定方向のナデ、天井部ヘラ削部の半分ヘラ削りのち横ナデ、他 横ナデ  | SX-01          | 色調 内面黄灰色 外面灰色<br>胎土 0.5～2.0mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好     |
| 80-25 | 須恵蓋  | 口径 15.0cm<br>器高 3.1cm | 天井部外面 糸切り、内面 不定方向のナデ、天井部高辺部外面 ヘラ削りのちナデ、他 横ナデ      | SX-01 横 旧河川排土中 | 色調 内面暗灰色 外面暗灰色<br>胎土 1mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 やや不良        |

| 図版番号  | 種類         | 法 量                                 | 手 法・形 態 の 特 徴   | 出 土 地 点 | 備 考  |
|-------|------------|-------------------------------------|---|---------|--|
| 80-26 | 須恵墓        | 口径 15.2cm                           | 天井部内外面 不明、他 横ナゲ<br>口縁部 直立する。<br>輪状つまみ付き   | SX-01   | 色調 内面暗青灰色 外面暗灰<br>色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好    |
| 80-27 | 須恵墓        | 口径 15.4cm                           | 天井部外面 高切り、内面 不定方向<br>のナゲ、天井部外面直辺部<br>へう削りのちナゲ、他 横ナゲ<br>口縁部は直立する。器高は低く、輪状<br>つまみをつける。                      | SX-01   | 色調 内面灰色 外面青灰色<br>胎土 0.5～2.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好         |
| 80-28 | 須恵墓        | 口径 14.0cm                           | 天井部外面 不明、内面 不定方向の<br>ナゲ、天井部外面直辺部<br>へう削りのちナゲ、他 横ナゲ<br>口縁部は直立する。   | SX-01   | 色調 内面青灰色 外面暗灰色～<br>暗灰色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好 |
| 80-29 | 須恵墓        |                                     | 内外面 横ナゲ<br>口縁部はやや外側に傾く。   | SX-01   | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>胎土 0.5mmの砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好           |
| 80-30 | 須恵墓        | 口径 14.0cm                           | 切り磨し 不明、天井部内面 不定方向<br>のナゲ<br>天井部～口縁部の一部<br>へう削りのち<br>ナゲ、他 横ナゲ<br>口縁部は直立する。                                | SX-01   | 色調 内面灰色 外面白灰色<br>胎土 0.5mmの砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好            |
| 80-31 | 須恵墓        | 口径 14.5cm                           | 天井部内面 不定方向のナゲ<br>天井部外面直辺部<br>へう削りのちナゲ<br>他 横ナゲ<br>口縁部は単純  | SX-01   | 色調 内面赤褐色 外面青灰色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好         |
| 80-32 | 須恵<br>高台付環 | 口径 12.3cm<br>器高 4.5cm<br>高台径 7.8cm  | 体底部外面 へう切り、内面 不定方<br>向のナゲ、他 横ナゲ<br>体部は、内湾気味に開く。   | SX-01   | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好        |
| 80-33 | 須恵<br>高台付環 | 口径 13.4cm<br>器高 4.7cm<br>高台径 8.1cm  | 体底部外面 不明、内面 不定方向の<br>ナゲ、体部 高台の場に磨り<br>他 横ナゲ、体部はやや内湾気味に開<br>く、高台断面 三角形                                     | SX-01   | 色調 内面暗青灰色 外面暗灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>ほんのわずかに含む<br>焼成 良好    |
| 80-34 | 須恵<br>高台付環 | 口径 18.7cm<br>器高 6.2cm<br>底径 10.1cm  | 体底部外面 静止糸切り<br>内面 不定方向のナゲ<br>体下部 へう削りのちナゲ<br>他 横ナゲ  | SX-01   | 色調 内面暗灰色 外面黄灰色<br>胎土 1.0～2.0mmの白色砂粒を<br>ほんのわずかに含む<br>焼成 良好     |
| 80-35 | 須恵<br>高台付環 | 口径 13.4cm<br>器高 4.8cm<br>高台径 8.9cm  | 体底部外面 静止糸切り<br>内面 不定方向のナゲ<br>他 横ナゲ<br>体部は、内湾気味に開く。  | SX-01   | 色調 内面暗灰色 外面灰色<br>胎土 0.3～1.0mmの白色砂粒を<br>ほんのわずかに含む<br>焼成 良好      |
| 80-36 | 須恵<br>高台付環 | 口径 13.5cm<br>器高 5.0cm<br>底径 8.1cm   | 体底部外面 静止糸切りのちナゲ<br>内面 不定方向のナゲ<br>他 横ナゲ<br>体部 内湾気味に開く。   | SX-01   | 色調 内面赤褐色 外面暗灰色<br>胎土 0.3～0.5mmの白色砂粒を<br>ほんのわずかに含む<br>焼成 良好     |
| 80-37 | 須恵<br>高台付環 | 口径 19.1cm<br>器高 3.6cm<br>高台径 13.1cm | 体底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナゲ<br>体下部 へう削りのちナゲ、他横ナゲ<br>体部は大きく開く。   | SX-01   | 色調 内面暗褐色 外面褐色～暗<br>褐色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 不良 |
| 80-38 | 須恵<br>高台付環 | 口径 21.6cm<br>器高 3.5cm               | 切り磨し 不明<br>体底部内面 不定方向のナゲ<br>他 横ナゲ<br>体部は大きく開く。  | SX-01   | 色調 内面灰色 外面灰色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好           |
| 80-39 | 須恵<br>高台付環 | 口径 18.2cm<br>器高 3.1cm<br>高台径 17.5cm | 体底部内外面 不明 他 横ナゲ<br>体部は直立気味に立ち、口縁部はやや<br>外に開く。   | SX-01   | 色調 内面暗灰色 外面暗青灰色<br>胎土 1.0mmの白色砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好        |
| 80-40 | 須恵環身       | 口径 8.8cm<br>器高 3.4cm                | 底部外面 へう切り、内面 不定方向<br>のナゲ、体部外面下半分<br>へう削りのち<br>ナゲ、他 横ナゲ、立ち上りは短く、<br>大きく内傾する。底部外面 1X のへう<br>削りあり、内面にうろしが付着。 | SX-01   | 色調 内面青灰色 外面灰色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好          |
| 81-1  | 須恵<br>高台付環 | 口径 15.8cm<br>器高 6.0cm<br>高台径 10.6cm | 体底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナゲ<br>他 横ナゲ<br>体部は外傾する。  | SX-01   | 色調 内面暗褐色 外面暗青灰<br>色<br>胎土 0.5～2.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好   |

| 図番番号  | 種類         | 法量                                    | 手法・形態の特徴  | 出土地点  | 備考   |
|-------|------------|---------------------------------------|---|-------|--|
| 81-2  | 須恵<br>高台付環 | 高台径 9.0 cm                            | 体底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部 外縁する。                          | SX-01 | 色調 内面暗青灰色 外面淡青灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好 |
| 81-3  | 須恵<br>高台付環 | 口径 13.5 cm<br>器高 3.6 cm<br>高台径 9.7 cm | 体底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部はやや内湾気味に開く。                     | SX-01 | 色調 内面暗青灰色 外面淡青灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好 |
| 81-4  | 須恵<br>高台付環 | 口径 11.9 cm<br>器高 5.1 cm<br>高台径 9.2 cm | 体底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>体部はやや外縁する。<br>「八」のへら記号あり。            | SX-01 | 色調 内面灰色 外面灰色<br>胎土 0.2~1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好     |
| 81-5  | 須恵<br>高台付環 | 口径 11.6 cm<br>器高 4.4 cm<br>高台径 9.5 cm | 体底部外面 回転糸切り、内面 削りのち不定方向のナデ、他 横ナデ<br>体部はわずかに外縁する。<br>高台は低い。              | SX-01 | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>胎土 0.3~1.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好          |
| 81-6  | 須恵<br>高台付環 | 口径 12.4 cm<br>器高 5.1 cm<br>高台径 8.5 cm | 体底部外面 回転糸切り。<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部は、やや外縁する。                      | SX-01 | 色調 内面褐色 外面茶褐色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 不良       |
| 81-7  | 須恵<br>高台付環 | 口径 10.7 cm<br>器高 4.2 cm<br>高台径 7.6 cm | 切り直し、不明<br>体底部内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ、一部 削りのちナデ                             | SX-01 | 色調 内面青灰色 外面暗青灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好     |
| 81-8  | 須恵<br>高台付環 | 高台径 9.1 cm                            | 体底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部は外縁して立ち上がる。                     | SX-01 | 色調 内面暗青灰色 外面暗青灰色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好        |
| 81-9  | 須恵<br>高台付環 | 高台径 8.4 cm                            | 体底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部は外縁する。                          | SX-01 | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好   |
| 81-10 | 須恵環        |                                       | 底部外面 ヘラ切り<br>内面 不定方向のナデ<br>底部~周辺部外面 ヘラ削りのちナデ<br>他 横ナデ                   | SX-01 | 色調 内面淡青灰色 外面青灰色<br>胎土 0.2mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好      |
| 81-11 | 須恵環        | 底径 5.0 cm                             | 底部外面 ヘラ削りのちナデ<br>内面 不定方向のナデ<br>体部下外面 ヘラ削りのちナデ<br>他 横ナデ                  | SX-01 | 色調 内面淡青灰色 外面淡青灰色<br>胎土 1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好     |
| 81-12 | 須恵環        | 口径 14.9 cm<br>器高 4.8 cm               | 底部外面 静止糸切りが残る。外周外半分~体下部 ヘラ削りのちナデ<br>底部内面 変形横ナデ、他 横ナデ<br>体部は、内湾気味に立ち上がる。 | SX-01 | 色調 内面灰色~茶色 外面淡灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好    |
| 81-13 | 須恵環        | 口径 15.5 cm<br>器高 5.8 cm<br>底径 9.6 cm  | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部は内湾して立ち上がる。                      | SX-01 | 色調 内面暗灰色 外面暗灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好     |
| 81-14 | 須恵環        | 口径 13.4 cm<br>器高 4.7 cm<br>底径 8.3 cm  | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部は内湾気味に開く。                        | SX-01 | 色調 内面暗灰色 外面暗灰色<br>胎土 0.2~1.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 やや不良        |
| 81-15 | 須恵環        | 口径 12.1 cm<br>器高 4.2 cm<br>底径 9 cm    | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ                                       | SX-01 | 色調 内面暗褐色~暗灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 やや不良      |
| 81-16 | 須恵環        | 口径 10.2 cm<br>器高 3.9 cm               | 底部外面 ヘラ削りのちナデ、内面 不定方向のナデ、体部外面半分 ヘラ削りのち横ナデ、他 横ナデ<br>口縁部は、短かく外反する。        | SX-01 | 色調 内面暗灰色 外面灰色<br>胎土 0.5~1.5mmの砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好      |
| 81-17 | 須恵環        | 口径 10.2 cm<br>器高 3.7 cm               | 底部外面 ヘラ切り、内面 不定方向のナデ、体部外面下部 ヘラ削りのちナデ、他 横ナデ、底部丸い、体部内湾して開き、口縁部は短く外反する。    | SX-01 | 色調 内面灰色 外面灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好     |

| 図版番号  | 種類  | 法量                                    | 手法・形態の特徴   | 出土地点   | 備考  |
|-------|-----|---------------------------------------|--|--------|---|
| 81-18 | 須恵環 | 口径 11.6 cm<br>器高 4.1 cm<br>底径 5 cm    | 底部外面 ヘラ削りのち横ナデ<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>口縁部 わずかに外反する。                   | S X-01 | 色調 内面青灰色～灰色<br>外面暗赤色～灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>はんのわずかに含む<br>焼成 良好 |
| 81-19 | 須恵環 | 口径 14.0 cm<br>器高 3.4 cm<br>底径 9.4 cm  | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>口縁部下でくびれてわずかに外反する。                  | S X-01 | 色調 内面暗灰色～赤色<br>外面暗灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>はんのわずかに含む<br>焼成 良好    |
| 81-20 | 須恵環 | 口径 13.1 cm<br>器高 3.0 cm<br>底径 7.6 cm  | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>口縁部下でくびれてわずかに外反する。                  | S X-01 | 色調 内面暗青灰色<br>外面暗灰色～暗灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>はんのわずかに含む<br>焼成 良好  |
| 81-21 | 須恵環 | 口径 12.2 cm<br>器高 3.5 cm<br>底径 7.1 cm  | 底部外面 回転糸切り、内面 不明<br>他 横ナデ<br>体部は内湾気味に開く<br>口縁部は反く外反する。                   | S X-01 | 色調 内面暗青灰色 外面青灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>はんのわずかに含む<br>焼成 良好         |
| 81-22 | 須恵環 | 口径 11.9 cm<br>器高 3.6 cm<br>底径 7.9 cm  | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>口縁部下に1条の凹線が入る。<br>口縁内側は肥厚して壁をもつ。       | S X-01 | 色調 内面暗青灰色 外面青灰色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をはんの<br>わずかに含む<br>焼成 良好             |
| 81-23 | 須恵環 | 口径 12.5 cm<br>器高 3.9 cm<br>底径 7.7 cm  | 底部外面 回転糸切り、外側 ナデ<br>内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>口縁部下でくびれて、反く、外反する。               | S X-01 | 色調 内面暗灰色 外面暗灰色<br>胎土 0.5～1.5mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好             |
| 81-24 | 須恵環 | 口径 12.7 cm<br>器高 4.1 cm<br>底径 10.5 cm | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>体部は内湾して立ち、口縁部下でややく<br>びれて口縁部はやや外反する。   | S X-01 | 色調 内面暗青灰色<br>外面暗灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好         |
| 81-25 | 須恵環 | 口径 12.4 cm<br>器高 3.8 cm<br>底径 8.6 cm  | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>口縁部内側に肥厚し、壁をつくる。                    | S X-01 | 色調 内面暗灰色 外面灰色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をはんの<br>わずかに含む<br>焼成 良好               |
| 81-26 | 須恵環 | 口径 10.5 cm<br>器高 4.2 cm<br>底径 8.4 cm  | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>体部はやや内湾気味に立ち、内縁して口<br>縁部に至る。内縁内側に壁をもつ。 | S X-01 | 色調 内面暗灰色 外面灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好              |
| 81-27 | 須恵環 | 口径 11.1 cm<br>器高 3.6 cm<br>底径 7.4 cm  | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部は外傾して開く。                          | S X-01 | 色調 内面暗青灰色<br>外面暗灰色～灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好      |
| 81-28 | 須恵環 | 口径 7.3 cm                             | 底部外面 不明、内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部は外傾して開く。                                | S X-01 | 色調 内面暗灰色～暗赤灰色<br>外面暗灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好     |
| 81-29 | 須恵環 | 口径 10.7 cm<br>器高 3.4 cm<br>底径 8.7 cm  | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ、他 横ナデ<br>体部は外傾する。<br>体部内側に1条凹線入る。               | S X-01 | 色調 内面暗青灰色 外生暗灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>含む<br>焼成 良好                |
| 81-30 | 須恵環 | 口径 9.7 cm<br>器高 3.4 cm                | 底部外面 糸切り、内面 不明<br>他 横ナデ<br>体部は外傾する。                                      | S X-01 | 色調 内面青灰色 外面暗青灰色<br>胎土 0.1～0.2mmの砂粒をはん<br>のわずかに含む                    |
| 81-31 | 須恵環 | 口径 10.6 cm<br>器高 3.5 cm<br>底径 8.4 cm  | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>口縁部は内傾する。                           | S X-01 | 色調 内面暗灰色 外面暗黄灰色<br>胎土 0.5～1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 やや不良          |
| 81-32 | 須恵環 | 口径 13.9 cm<br>器高 2.4 cm<br>底径 10.5 cm | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ  | S X-01 | 色調 内面暗赤灰色～暗灰色<br>外面暗灰色～暗青灰色<br>胎土 0.5～2.0mmの砂粒を含む<br>焼成 良好          |
| 81-33 | 須恵環 | 口径 14.4 cm<br>器高 2.7 cm<br>底径 11.0 cm | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部はやや内湾気味に開く。                       | S X-01 | 色調 内面暗灰色 外面黄灰色<br>胎土 0.2～0.5mmの白色砂粒を<br>はんのわずかに含む<br>焼成 良好          |

| 図版番号  | 種類   | 法量                                 | 手法・形態の特徴  | 出土地点          | 備考   |
|-------|------|------------------------------------|---|---------------|--|
| 81-34 | 須恵瓦  |                                    | 底部内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部外面 凹凸がいちじるしい。                                    | SX-01         | 色調 内面暗灰色 外面暗灰色<br>粘土 0.5~1.0mmの白色砂粒を<br>はんのわずかに含む<br>焼成 良好   |
| 81-35 | 須恵環  | 底径 10.0cm                          | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>体部は内湾気味に立ち上がる。                         | SX-01         | 色調 内面灰色 外面灰色<br>粘土 0.5~1.0mmの白色砂粒を<br>含む<br>焼成 良好            |
| 81-36 | 須恵環  | 底径 8.0cm                           | 底部外面 ヘラ切りのちヘラ削り<br>内面 不定方向のナデ<br>体部下外面 ヘラ削り<br>他 横ナデ                        | SX-01         | 色調 内面青灰色 外面淡灰色<br>粘土 0.1~1.0mmの白色砂粒を<br>含む<br>焼成 良好          |
| 81-37 | 須恵環  |                                    | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ   | SX-01         | 粘土 0.1~3.0mmの白色砂粒を<br>含む<br>焼成 良好                            |
| 81-38 | 須恵環  | 底径 7.0cm                           | 底部外面 静止糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ   | SX-01         | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>粘土 0.5~1.0mmの砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好     |
| 81-39 | 須恵環  | 底径 6.0cm                           | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ<br>底部~体部の間に段あり。                           | SX-01         | 色調 内面青灰色 外面淡青灰色<br>粘土 0.5~1mmの白色砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好    |
| 81-40 | 須恵環  |                                    | 体部~口縁部内外面 横ナデ<br>口縁部下でくびれて、わずかに外反する。  | SX-01         | 色調 内面黄灰色 外面黄灰色<br>粘土 0.5~1.0mmの砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好     |
| 81-41 | 須恵環  |                                    | 体部内外面 横ナデ<br>体部は内湾して開き、口縁部下でくび<br>れて外反する。                                   | SX-01         | 色調 内面暗灰色 外面暗灰色<br>粘土 0.5~1mmの白色砂粒をわ<br>ずかに含む<br>焼成 良好        |
| 81-42 | 須恵環  | 口径 13.4cm                          | 外内面 横ナデ<br>口縁部内側に縦あり。   | SX-01         | 色調 内面灰色~黄灰色<br>外面暗灰色<br>粘土 0.5mmの白色砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好 |
| 82-1  | 須恵環  | 口径 15.6cm<br>器高 4.4cm<br>底径 11.1cm | 底部内外面 不明<br>他 横ナデ<br>口縁部下の沈積でくびれを洩す。<br>内側はやや肥厚する。                          | SX-01外 S D 01 | 色調 内面暗黄灰色<br>外面暗黄灰色<br>粘土 0.3~1.5mmの白色砂粒を<br>含む<br>やや軟       |
| 82-2  | 須恵環  | 口径 15.4cm                          | 体部内外面 横ナデ、他 不明<br>口縁部は、短く外反する。<br>内側はやや肥厚する。                                | SX-01外 S D 01 | 色調 内面褐色 外面暗赤褐色~<br>暗灰褐色<br>粘土 0.3~1.0mmの白色砂粒を<br>はんのわずかに含む   |
| 82-3  | 須恵環  | 底径 10cm                            | 底部外面 回転糸切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ   | SX-01外 S D 01 | 色調 内面暗赤褐色 外面暗褐色<br>粘土 0.3~1.0mmの白色砂粒に<br>はんのわずかに含む<br>焼成 良好  |
| 82-4  | 須恵壺  | 口径 12.4cm                          | 口縁部内外面 横ナデ、他 不明<br>口縁部端部は平坦<br>口縁部はやや外反する。                                  | S D 01        | 色調 内面灰色 外面灰色<br>粘土 0.2~2.0mmの白色砂粒を<br>含む<br>焼成 良好            |
| 82-5  | 須恵环蓋 | 口径 11.7cm                          | 天井部内面 不定方向のナデ、外面<br>不明、天井部周辺部 ヘラ削り<br>他 横ナデ<br>口縁部内側はのみ刃状になる。               | U-3区 跡上中      | 色調 内面青灰色 外面淡灰色<br>粘土 0.5~1.0mmの白色砂粒を<br>はんのわずかに含む<br>焼成 良好   |
| 82-6  | 須恵环蓋 | 口径 10.7cm<br>器高 3.7cm              | 天井部外面 ヘラ切り、内面 不定方<br>向のナデ、天井部周辺 横ナデと不定<br>方向のナデ、他 横ナデ<br>全体にすんぐりしている。       | U-3区 跡上中      | 色調 内面淡青灰色 外面青灰色<br>粘土 0.5~2.0mmの白色砂粒を<br>含む<br>焼成 良好         |
| 82-7  | 須恵蓋  | 口径 13.2cm                          | 天井部外面 横ナデ、内面 不定方向<br>のナデ、天井部周辺部 ヘラ削り<br>他 横ナデ、口縁部は鋭角3角形にな<br>り、器高は低い。つまみ 不明 | U-3区 跡上中      | 色調 内面暗灰色 外面暗青灰色<br>粘土 0.5~1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好     |

| 図版番号  | 種類         | 法量                    | 手法・形態の特徴  | 出土地点         | 備考   |
|-------|------------|-----------------------|---|--------------|--|
| 82-8  | 須恵環壺       | 口径 16.0cm<br>器高 4.9cm | 天井部外面 ヘラ削り<br>内面 不定方向のナデ<br>袖 横ナデ<br>丸い、体部は内筒気味に大きく開く。                | SX-01        | 色調 内面灰褐色 外面灰褐色<br>胎土 1~2mmの白色砂粒を含む<br>焼成 やや不良                    |
| 82-9  | 須恵甕        | 口径 19.5cm             | 口縁部内外面 横ナデ<br>頸部以下外面 タタキ目<br>頸部以下内面 あて具痕                              | SX-01        | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好          |
| 82-10 | 須恵壺        | 口径 16.3cm             | 口縁部内外面 横ナデ<br>体部外面 タタキ<br>体部内面 あて具痕<br>頸部に4本沈線あり。                     | SX-01        | 色調 内面灰褐色 外面暗灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒を<br>ほんのわずかに含む<br>焼成 良好       |
| 82-11 | 須恵壺        | 口径 14.5cm             | 口縁部~頸部内外面 横ナデ<br>体部外面 タタキ<br>内面 あて具痕を消すがわずかに残る。<br>頸部は直立するが口縁部は大きく開く。 | SX-01        | 色調 内面灰褐色 外面青灰色<br>胎土 1mmの白色砂粒をほんの<br>わずかに含む<br>焼成 良好             |
| 82-12 | 須恵壺        | 口径 21.2cm             | 体部外面 タタキ<br>内面 あて具痕あり<br>体部半分下に2対の把手あり。                               | SX-01        | 色調 内面黒色 外面青灰色~黒色<br>胎土 ほとんど含まず<br>焼成 良好                          |
| 82-13 | 須恵<br>把手付壺 |                       | 外面 タタキ<br>内面 あて具痕   | SX-01        | 色調 内面灰褐色 外面黒灰色   |
| 82-14 | 須恵壺        | 口径 20.6cm             | 口縁部内外面 横ナデ<br>体部外面 タタキ目<br>内面 あて具痕<br>「山」のヘラ記号                        | SX-01        | 色調 内面青灰色 外面暗灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒を<br>ほんのわずかに含む<br>焼成 良好       |
| 82-15 | 須恵<br>短頸壺  | 口径 9.5cm              | 口縁部~頸部内外面 横ナデ、他 外面<br>タタキ、内面 あて具痕（ナデか<br>なり消えている）<br>短く直立する口縁部をもつ。    | SX-01        | 色調 内面灰褐色 外面暗灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好          |
| 82-16 | 須恵<br>長頸壺  |                       | 頸部内外面 横ナデ<br>体部内面 横ナデ   | SX-01        | 色調 内面暗灰色 外面暗灰色<br>胎土 0.5~2.0mmの砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好         |
| 82-17 | 須恵横瓶       |                       | 外面 タタキ<br>内面 あて具痕   | SX-01        | 色調 内面灰色 外面灰褐色<br>胎土 0.5mmの白色砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好            |
| 82-18 | 須恵横瓶       | 口径 14.0cm             | 口縁部内外面 横ナデ<br>頸部以下 外面タタキ、内面 あて具<br>痕                                  | SX-01        | 色調 内面灰色 外面暗灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒を<br>ほんのわずかに含む<br>焼成 良好        |
| 82-19 | 須恵把手       |                       | 内面 あて具痕あり   | SX-01        | 色調 内面黒色 外面灰褐色<br>胎土 0.3~1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好           |
| 82-20 | 須恵<br>壺か壺  |                       | 体部外面 タタキ<br>内面 あて具痕<br>耳がつく   | SX-01 水洗塔外壁中 | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>胎土 0.2~1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好          |
| 83-1  | 須恵平瓶       | 口径 $\phi$ 10.4cm      | 口縁部内外面 横ナデ<br>体部上部 カキ目痕<br>他 横ナデ                                      | SX-01        | 色調 内面淡青灰色 外面白灰色<br>胎土 0.5~1.0mmの白色砂粒を<br>ほんのわずかに含む<br>焼成 良好      |
| 83-2  | 須恵壺        | 口径 12.5cm             | 内外面 横ナデ<br>外縁して立ち上がり、口縁部で大きく<br>開く。<br>1条の凹線が入る。                      | SX-01        | 色調 内面淡灰色~黒灰色<br>胎土 1.0mmの白色砂粒をほん<br>のわずかに含む<br>焼成 良好             |
| 83-3  | 須恵<br>長頸壺  |                       | 頸部内外面 横ナデ<br>頸部中央に沈線あり。   | SX-01 水洗塔外壁中 | 色調 内面暗青灰色<br>胎土 外縁部灰褐色~暗灰色<br>0.3~1.0mmの白色砂粒を<br>わずかに含む<br>焼成 良好 |

| 図版番号  | 種類     | 法量          | 手法・形態の特徴   | 出土地点          | 備考   |
|-------|--------|-------------|--|---------------|--|
| 83-4  | 須恵罎    | 口径 5.7 cm   | 口縁部内外面 横ナデ   | X-1 D-8       | 色調 内面淡青灰色<br>外面淡青灰色<br>胎土 0.1~0.3mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好       |
| 83-5  | 須恵壺    |             | 胴部外面 ヘラ削りのちナデ<br>他 横ナデ                                       | S X-01 水洗場外面中 | 色調 内面青灰色 外面青灰色<br>胎土 0.3mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好         |
| 83-6  | 須恵罎    |             | 横ナデ<br>口縁部 外反して開く<br>外面に2段の波状文あり                             | S X-01        | 色調 内面淡黄緑色 外面黒褐色<br>胎土 0.5~1mmの砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好        |
| 83-7  | 須恵罎    | 高台径 5.9 cm  | 体底部外面 ヘラ切り、内面 不明<br>底面~胴部外面 ヘラ削りのちナデ<br>他 横ナデ<br>底部外面にヘラ記号あり | S X-01        | 色調 内面内灰色 外面暗青灰色<br>胎土 1~2.0mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好             |
| 83-8  | 須恵罎    |             | 底部外面 不明、内面 横ナデ<br>体部下半 ヘラ削りのちナデ<br>底部はずんぐりして、あまり肩は強くない。      | S X-01        | 色調 内面暗灰色<br>胎土 外淡青灰色~黄灰色<br>0.3~1.0mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好 |
| 83-9  | 須恵高坏   | 脚底径 10.0 cm | 内外面 横ナデ<br>四角形の通しあり  | S X-01        | 色調 内面淡青灰色 外面暗灰褐色<br>胎土 0.5 mmの白色砂粒をほんのわずかに含む<br>焼成 良好      |
| 83-10 | 須恵高台付壺 | 高台径 10.7 cm | 体底部外面 ヘラ切り<br>体部下半分外面 ヘラ削りのちナデ<br>他 横ナデ                      | S X-01        | 色調 内面白灰色 外面白灰色<br>胎土 0.3mmの白色砂粒を含む<br>焼成 良好                |
| 83-11 | 須恵高台付壺 | 高台径 9.4 cm  | 体底部外面 ヘラ切り<br>内面 不定方向のナデ<br>他 横ナデ                            | S X-01        | 色調 内面淡灰色 外面淡灰色<br>胎土 0.5~1.0 mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好       |
| 83-12 | 須恵高台付壺 | 高台径 10.6 cm | 体底部内面 不定方向のナデ<br>外面 不明<br>体部外面 タクキ、他 横ナデ                     | S X-01        | 色調 内面暗灰色 外面暗青灰色<br>胎土 1mmの白色砂粒をわずかに含む<br>焼成 良好             |
| 84-1  | 石 斧    |             | 磨製に近い  | S X-01        |  |
| 84-2  | 石 斧    |             | 磨製に近い、棒状石斧   | S X-01        |  |
| 84-3  | 石 斧    |             | 刃部 磨き  | S X-01        |  |
| 84-4  | 石 斧    |             | 刃部 一部磨き  | S X-01        |  |
| 84-5  | 石 斧    |             | 打製 偏平<br>中央部をくびれます。  | S X-01        |  |
| 84-6  | 石 斧    |             |  | S X-01        |  |
| 85-1  | 石 斧    |             | 刃部 磨き、偏平に近い。   | S X-01        |  |

| 図版番号 | 種類  | 法 量 | 手法・形態の特徴           | 出 土 地 点 | 備 考 |
|------|-----|-----|--------------------|---------|-----|
| 85-2 | 石 芥 |     | 刃部 磨き              | SX-01   |     |
| 85-3 | 不 明 |     | 大きな打かいによって刃部をつくる。  | SX-01   |     |
| 85-4 | 砥 石 |     | 4面使用面あり、「U」字状にくぼむ。 | SX-01   |     |
| 85-5 | 石 鏝 |     |                    | SX-01   |     |
| 85-6 | 石 鏝 |     |                    | SX-01   |     |
| 85-7 | 石 鏝 |     |                    | SX-01   |     |

図版 1



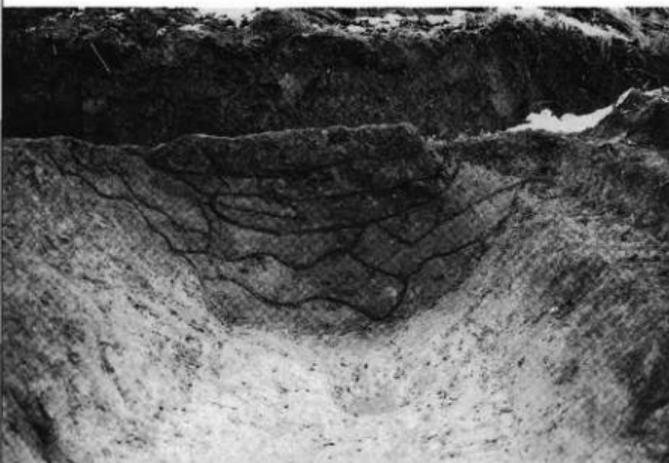
右：布自积美高山  
左：女岳山



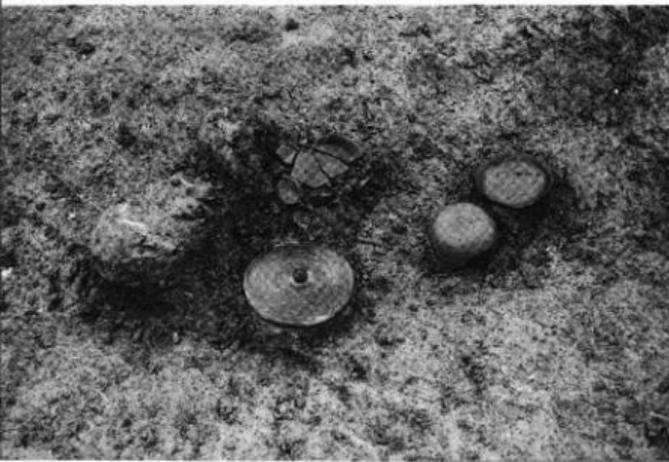
SD01



SD01

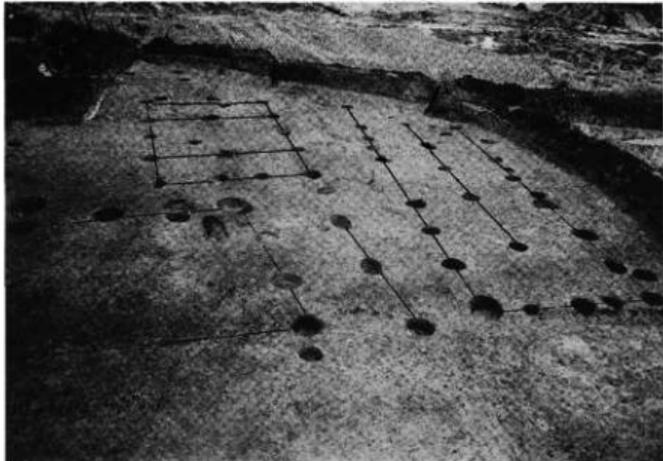


SD01の堆積土層断面



SD01溝底出土の須恵器

東群の掘立柱建物跡

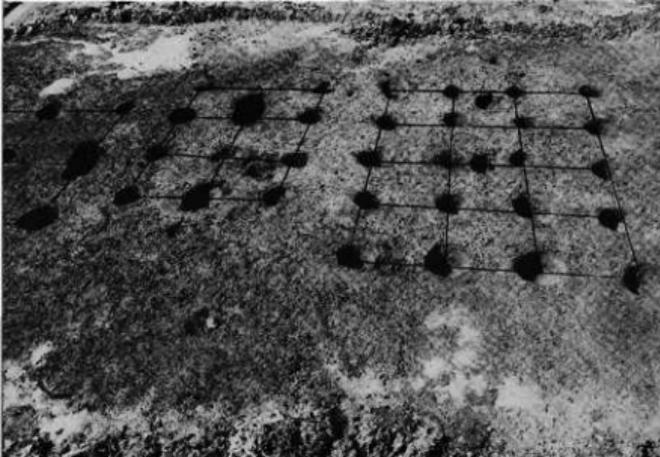


SB01



西群の掘立柱建物群跡  
手前SB07

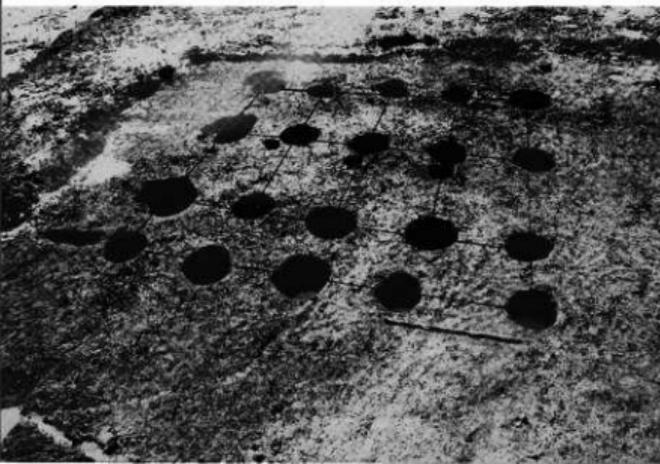




右：SB04，左SB05

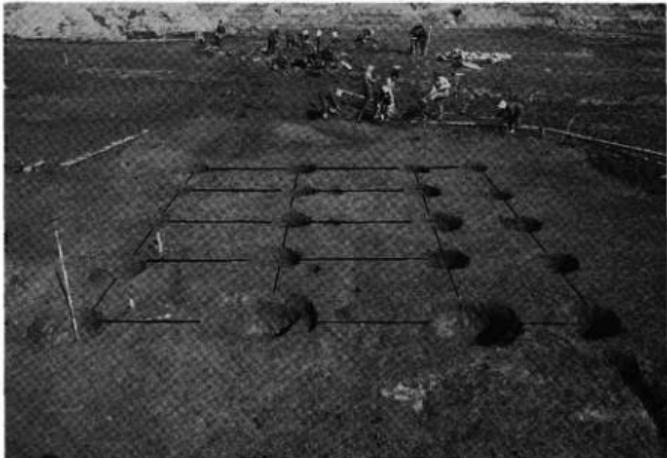


SB06

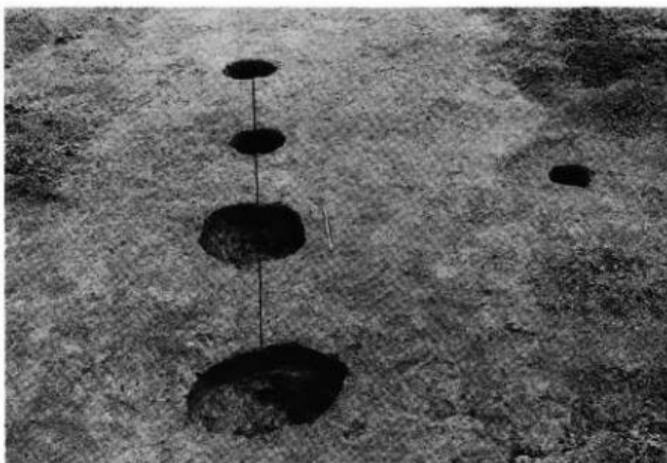


SB07

SB07



SA03



SD02

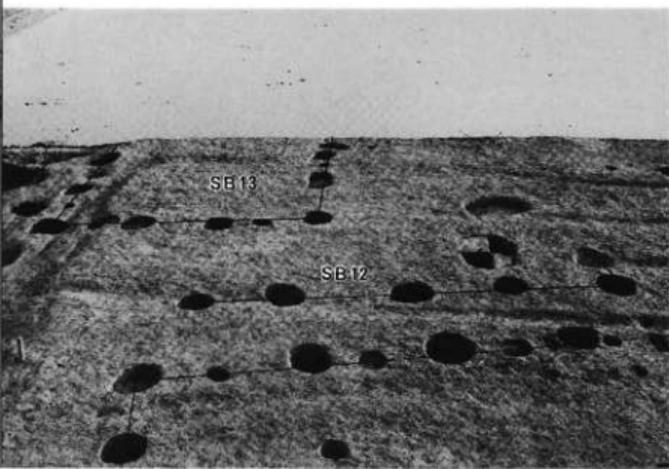




SB 10, 18  
(西 → 東を見る)

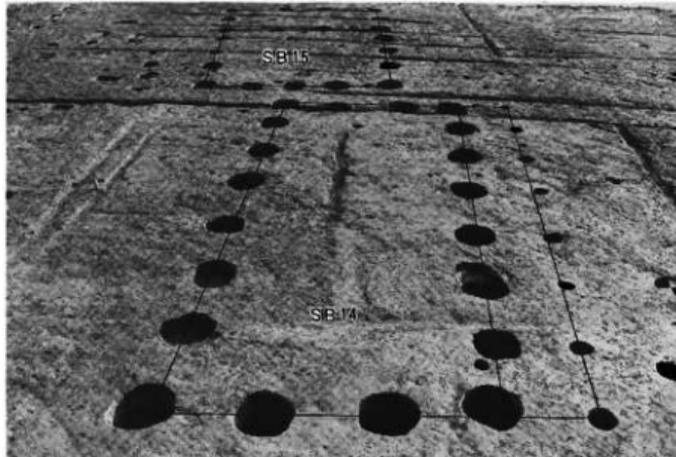


SB 11, 12  
(北 → 南を見る)



SB 12, 13  
(北 → 南を見る)

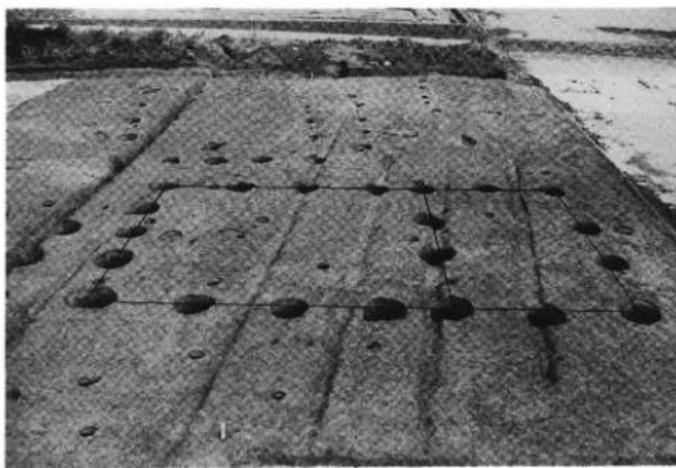
SB 14  
(北 → 南を見る)

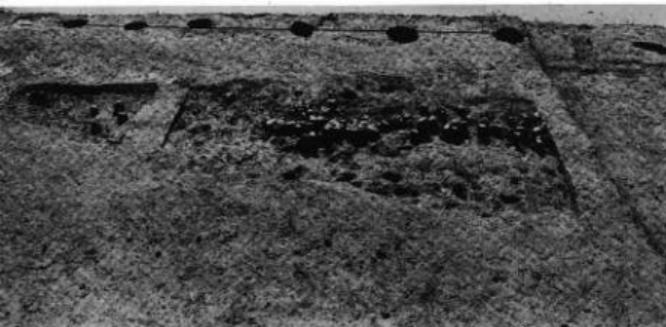


SB 15  
(北 → 南を見る)



SB 15  
(西 → 東を見る)

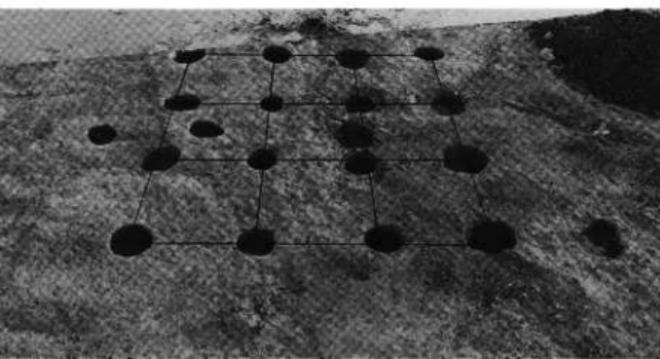




SA04, SD08 検出状況  
(北 → 南を見る)

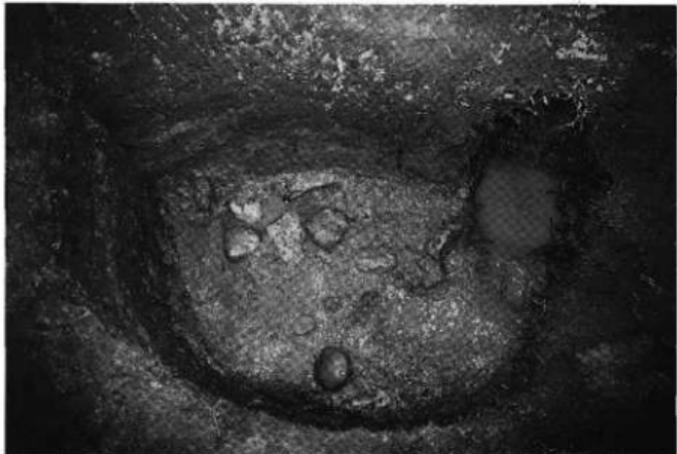


SD01 完掘後  
(北 → 南を見る)



SB19  
(北 → 南を見る)

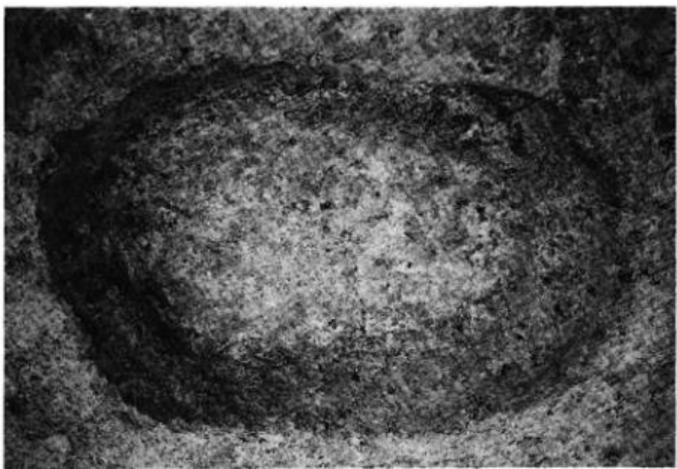
SE01完掘後

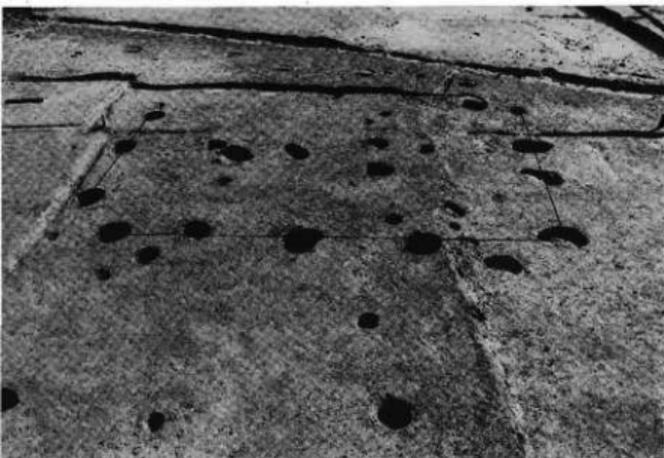


SK06木棺検出状況

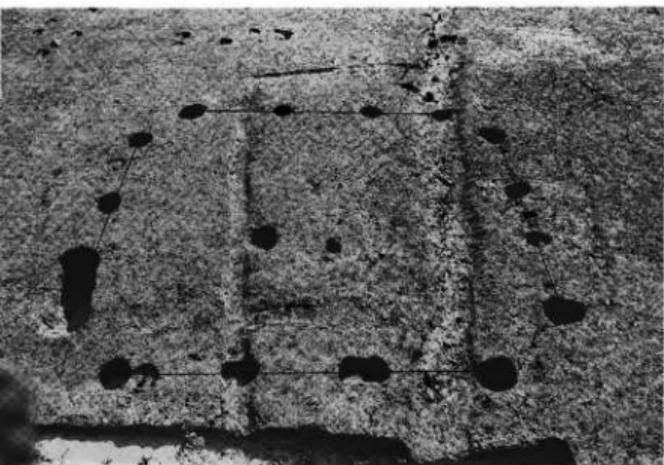


SK06完掘後

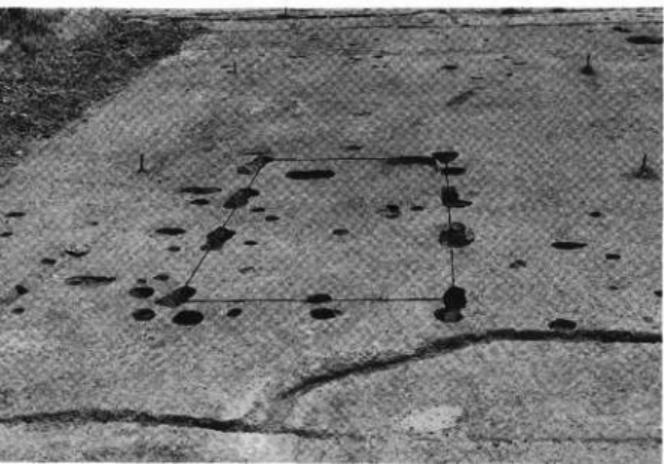




SB 16  
(西 → 東を見る)



SB 17  
(北 → 南を見る)



SB 20  
(西 → 東を見る)



SK14  
(西 → 東を見る)



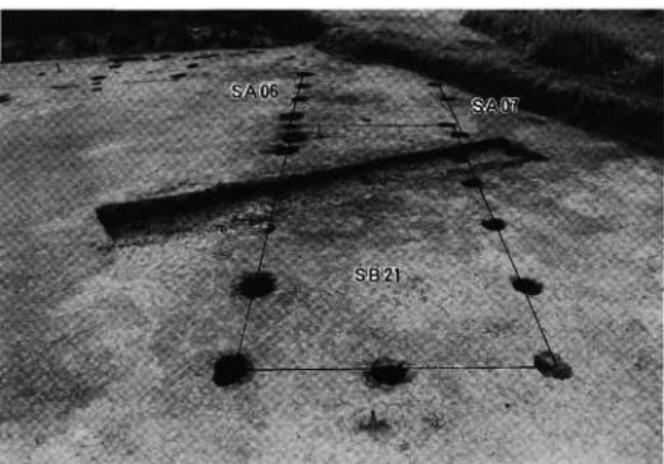
SK15  
(西 → 東を見る)



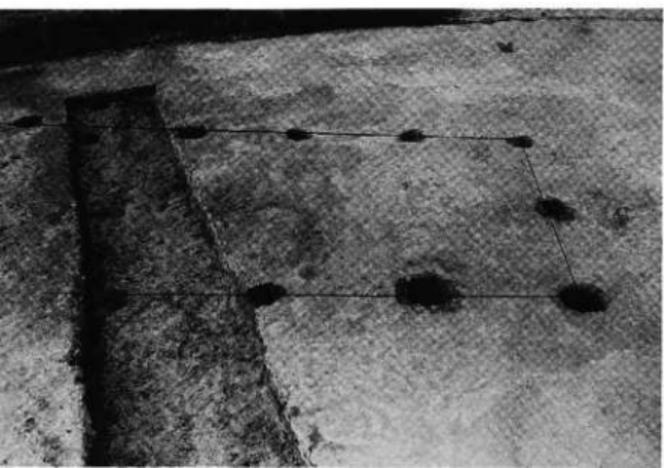
SK15 遺物出土状況



X-7区ピット中出土遺物

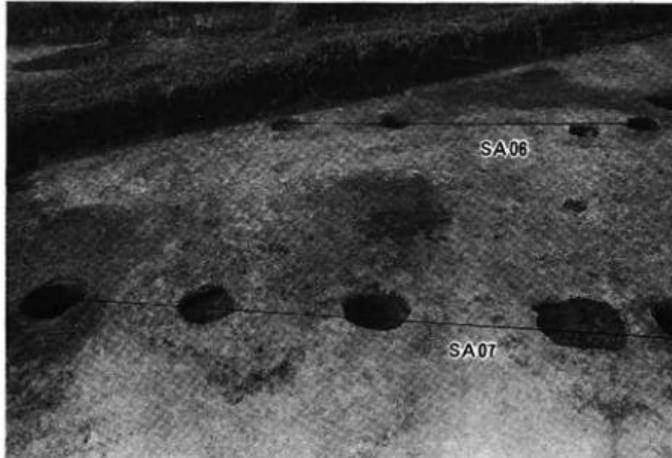


SB21  
(東 → 西を見る)

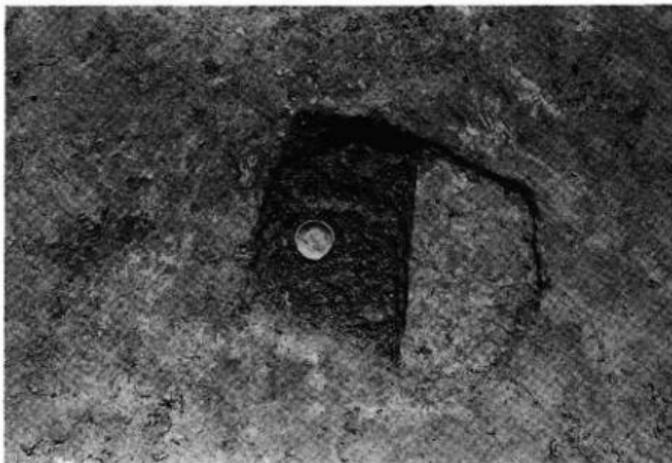


SB21  
(南 → 北を見る)

SA 06, 07  
(南 → 北を見る)

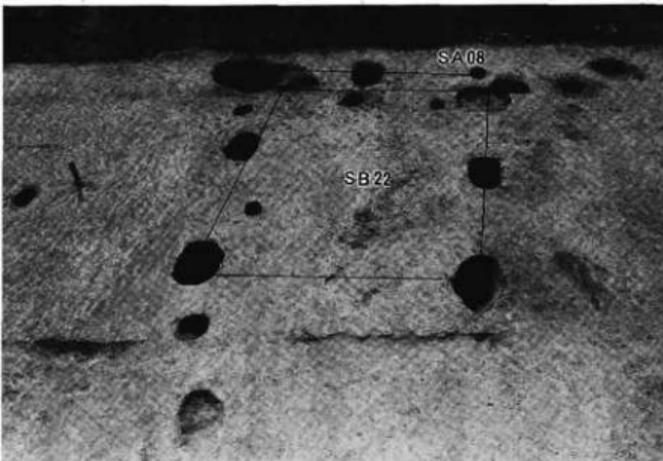


SB 21, P-10  
遺物出土状況  
(南 → 北を見る)

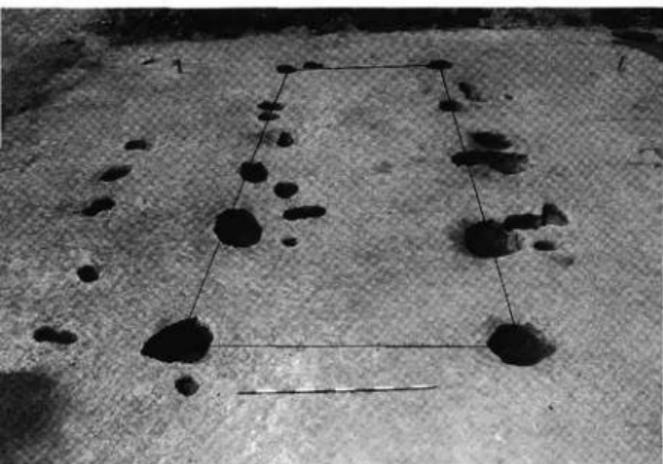


SB 21, P-14  
柱礎出土状況

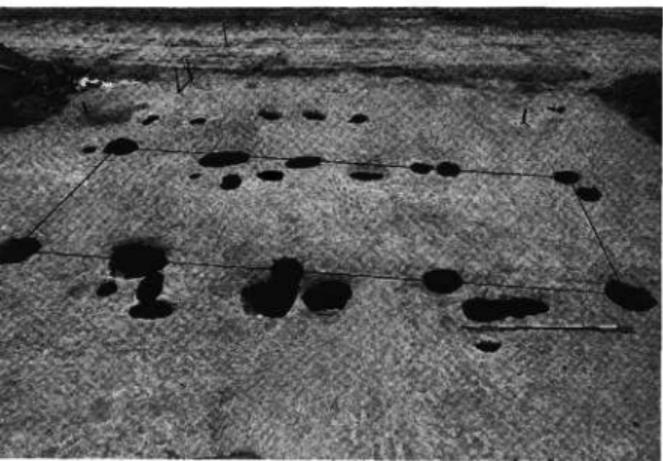




SB22, SA08  
(東 → 西を見る)



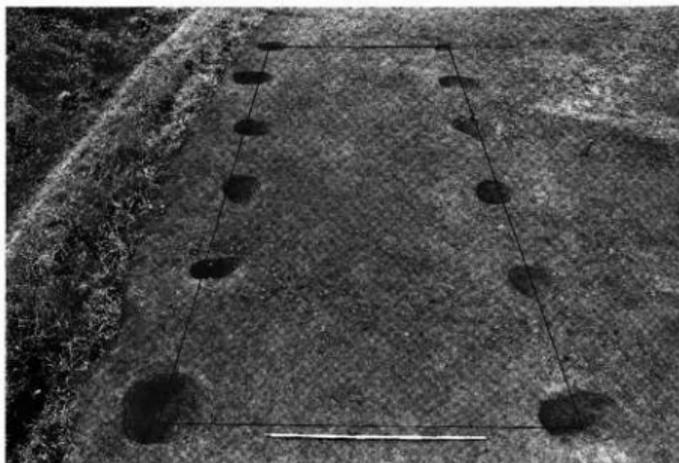
SB23  
(東 → 西を見る)



SB23  
(北 → 南を見る)



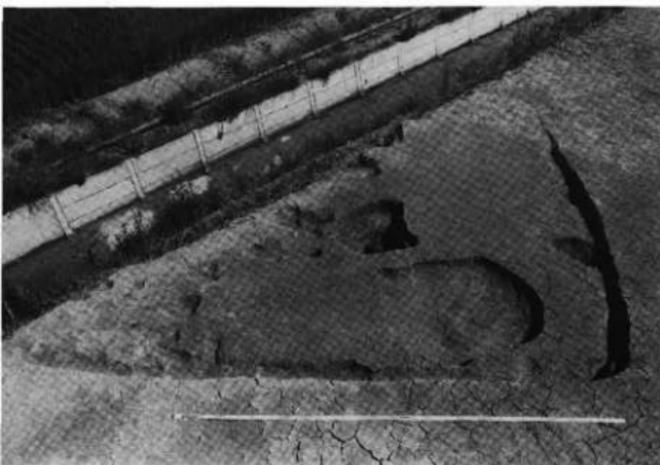
SB 24  
(東 → 西を見る)



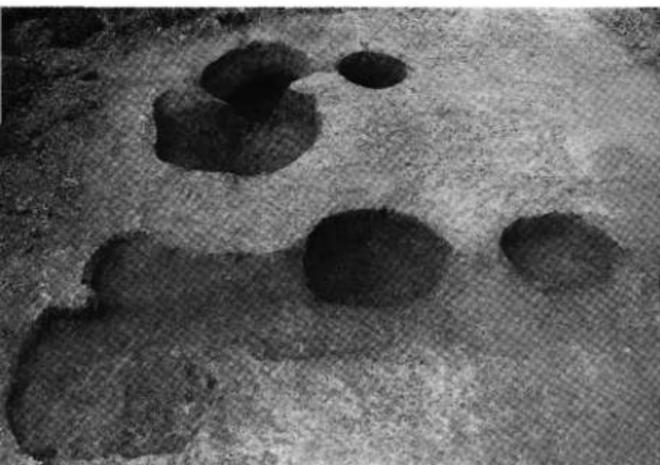
SB 25  
(東 → 西を見る)



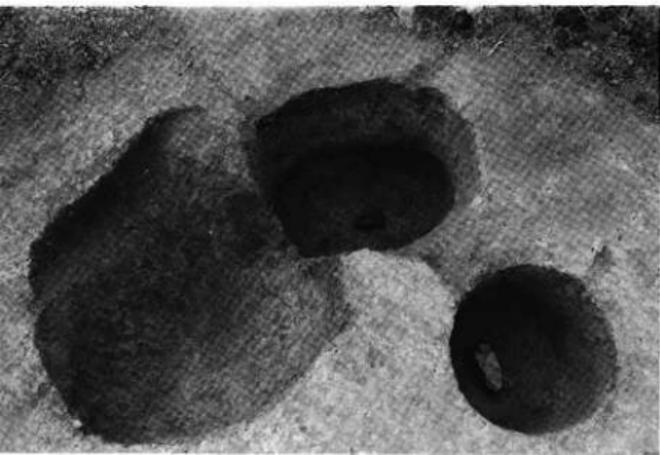
SB 26  
(東 → 西を見る)



S101, SK25完掘後  
(北 → 南を見る)



SK28~32  
(南 → 北を見る)



SK30~32  
(南 → 北を見る)

SK 30 土層断面



SK 30. 31 切合



SD 01 完掘後  
(北 → 南を見る)

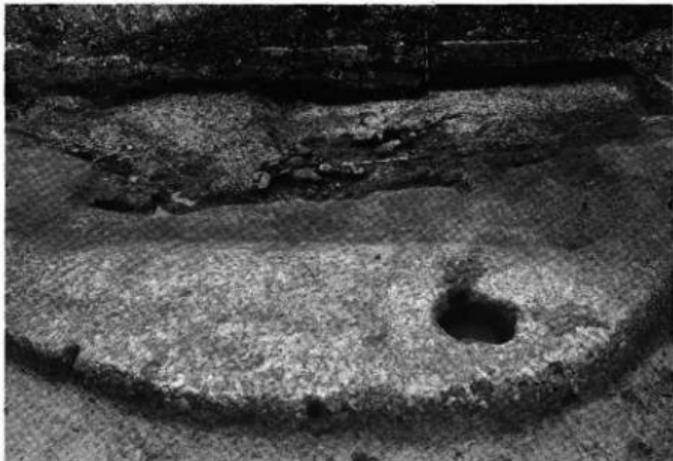




SX01, SD01 完掘後



SX02 検出状況



SX02, 03, SK22 遠景



SX01 杭列



SD01 完掘  
SK01 検出後



SD 01 土層断面



SX 02, 03 近景



SX 01 土層断面  
東西及び南北



SX 0 2 遺物出土状況



SX 0 2 付近掘出土状況



SX 0 1  
曲物柄杓、漆器出土状況



S X 0 1 掘出土状況



O, P, Q-3区ビット及び土壌完掘後

